## 第２章　　陸上作戦から見た湾岸戦争

### １　湾岸戦争までのアメリカ陸軍――ベトナム戦争後の戦い方の改革

> ヴェトナム戦争は我が将兵の士気を阻喪させたばかりか、アメリカ民衆の軍に対する信用を崩壊させ、しかも陸軍予算の大部を吸いとってしまった。一方、我が兵器は旧式の廃品と化し、基地や施設は手入れもせず放置され、ヴェトナム以外の世界の他地域での戦闘能力は、依然として陸軍の最大使命であるワルシャワ条約軍相手のそれでさえ、深刻な低下を見せている[1]。　　ノーマン・シュワルツコフ（H. Norman Schwarzkopf）

平時における軍の役割は次の戦争に備えることと言われており[2]、このために軍は自らの改革を行い、次の戦争において如何に戦うかを決定する。湾岸戦争で陸上作戦を遂行したアメリカ陸軍と海兵隊も、ベトナム戦争後の 1970 年代から 1980 年代の終わりまでの期間をかけて欧州におけるワルシャワ条約機構軍との対決を想定の中心とした軍の改革を行い、この中で戦い方を刷新した[3]。そして、冷戦構造が徐々に解消されていた 1990 年 8 月、イラク軍がクウェートに侵攻した。

アメリカ陸軍及び海兵隊が実施した軍の改革と湾岸戦争における陸上作戦の結果との関係は、冷静かつ注意深く議論する必要がある。この関係を述べた主張は軍の改革に対する無批判や過大評価を含むことがあるからだ。アメリカの軍人、中でも特に若年期にベトナム戦争を経験し、その後の軍務を軍の改革に捧げた世代は、軍の改革によって赫々たる勝利を収めたという自画像を抱いている[4]。アメリカの軍人ではなくても、鎧袖一触の勝利に魅了されて軍の改革は正鵠を得ていたと評価することがある。しかし、軍の改革、例えば構想した戦い方、あるいはこれに基づく訓練や教育が作戦中における将兵の決断や行動に対してどの程度の影響を及ぼしたかを評価することはそもそも容易ではない。また、確かに、アメリカ陸軍は改革の中でイラク軍を凌駕する高性能兵器を開発したけれども、対手よりも優れ

---

[1] H・ノーマン・シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録――少年時代・ヴェトナム最前線・湾岸戦争』沼沢洽治訳（新潮社、1994 年）205 頁。引用元で使用されている「ヴェトナム」、「ワルシャワ条約軍」の表記を使用した。

[2] Headquarters, Department of the Army, *ADP1: The Army* (Washington, D.C.: GPO, 2019), p. 1-1; Department of the Navy, Headquarters United States Marine Corps, *MDCP1 Warfighting* (Washington, D.C.: GPO, 1997), pp. 67-68.

[3] 1970 年代から 1980 年代までの改革で、陸軍は合計三回、海兵隊は一回、戦い方を記した公式文書を改訂した。Headquarters, Department of the Army, *FM100-5 Operations* (Washington, D.C.: GPO, 1976); Headquarters, Department of the Army, *FM100-5 Operations* (Washington, D.C.: GPO, 1982); Headquarters, Department of the Army, *FM100-5 Operations* (Washington, D.C.: GPO, 1986); Department of the Navy, Headquarters United States Marine Corps, *FMFM1 Warfighting* (Washington, D.C.: GPO, 1989).

[4] 代表例として、湾岸戦争後の 1991 年 5 月 9 日に開催された上院軍事委員会における第 24 歩兵師団長マカフリー（Barry McCaffrey）少将の証言が挙がる。僅か 100 時間で勝利できた要因を問われたマカフリーは「この戦争に勝利するために必要だった時間は 100 時間ではない。15 年の歳月を費やしたのだ」と証言した。Robert H. Scales Jr., *Certain Victory: United States Army in the Gulf War* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Staff United States Army, 1993), p. 35.

た性能の兵器を装備していることは陸上作戦の成功を必ずしも保証しない。

しかし、冷静に議論してもなお、陸上作戦の結果に対して軍の改革が及ぼした影響は否定できない。中でも特にアメリカ陸軍と海兵隊が次の戦争で如何に戦うかについて研究を積み重ねたことは注目に値する。アメリカ陸軍と海兵隊は戦いの歴史を紐解くことや戦いそのものについて思索すること、あるいは公開された場で活発な議論を交わすことを通じて戦い方を刷新した。ハンチントン（Samuel P. Huntington）は将校の軍事専門職としての専門技能は軍を指揮することであり、この専門技能はその歴史に関する知識を基礎とした総合的な研究を通じて獲得することができる極めて高度な知的技能であると主張している[5]。ハンチントンの主張を軍の改革の性質を測定する物差しとすれば、ベトナム戦争後から湾岸戦争までの期間をかけたアメリカ陸軍と海兵隊の軍の改革は、高度な軍事的専門的知識と技能を持つ将校の育成を目指していたと言える。

実際、改革の期間中、アメリカ陸軍が直面した試練は戦い方に関する知的研究を刺激した。この試練は、それまで常套としてきた戦い方、すなわち物量や軍事テクノロジーに依存した戦い方を見直す必要に迫られたことだった。

改革を開始した当時、アメリカ陸軍は国防予算の削減[6]や軍に対する信頼の低下といった国内の逆風に晒され、定員削減や募集難、装備品の充足率低下と不稼働に苦しんでいた[7]。また、1973 年には徴兵制が廃止され、アメリカ陸軍は志願制の軍隊となった。一方、欧州では、伝統的に数的優勢を誇っていたワルシャワ条約機構軍が 1970 年代初頭から戦力をさらに増強していた[8]。兵士や軍需品を国内で大量に動員し、その後、遅れがちになるけれども敵を上回る大規模な戦力を戦場に投入するというアメリカ陸軍の伝統的な戦い方はもはや実現不可能だった。

同時に、軍事テクノロジーによって作戦上の問題を解決しようとする、技術志向的アプローチによる戦い方が通用しないことが明らかになった。アメリカ陸軍では兵器開発と装備調達のための予算の削減によって、兵器の近代化が事実上止まっていた[9]。これとは対照的に、ソ連製兵器の性能がアメリカ陸軍と同等、もしくはそれ以上の水準まで向上していることが第四次中東戦争で明らかになった[10]。

---

[5] サミュエル・ハンチントン『軍人と国家（上）』市川良一訳（原書房、1978 年）9-10、12-15 頁。

[6] 国防予算はベトナム戦争中の 1968 年にピークを迎え、この年の連邦支出に国防予算が占める割合は 44.1%だった。しかし、1977 年の国防予算は 1968 年比でマイナス 34.5%、連邦支出に占める割合は 24.2%だった。U.S. Bureau of the Census, *Statistical Abstract of the United States: 1978 (99th edition)* (Washington, D.C.: GPO, 1978), p. 370.

[7] 松岡完『ベトナム症候群――超大国を苛む「勝利」への脅迫観念』（中央公論社、2003 年）29-31 頁。

[8] ワルシャワ条約機構軍が欧州正面に配置した戦車の総数は 1968 年には 15,800 台だったが、1971 年には 21,700 台、1979 年には 27,200 台に増加した。The Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 1968-1969* (London: The Institute for Strategic Studies, 1968), p. 53; The International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 1971-1972* (London: The International Institute for Strategic Studies, 1971), p. 78; The International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 1979-1980* (London: The International Institute for Strategic Studies, 1979), p. 110.

[9] 松岡『ベトナム症候群』30 頁。

[10] Frank N. Schubert and Theresa L. Kraus eds., *The Whirlwind War: The United States Army in Operations Desert Shield and Desert Storm* (Washington, D.C.: GPO, 1995), pp. 25-26.

では、戦い方の改革はどのように行われたのだろうか。中でも特に湾岸戦争の陸上作戦において中心的な役割を担うことになるアメリカ陸軍では、ベトナム戦争後の 1970 年代から 1980 年代の終わりまでの戦い方の改革において改革者たちは何を考え、どのように戦い方を変えていったのだろうか。そこで本節は同期間にアメリカ陸軍が実施した戦い方の改革について、その目に見えない側面を中心としながら概観する[11]。

### （1） 最も新しい戦争から創り出した新しい戦い方

1970 年代から 1980 年代までを俯瞰すると、当初、アメリカ陸軍は戦術次元において戦い方を改革し、その後、これに作戦次元の改革を追加して戦い方を刷新したと言える[12]。期間を通じて、戦い方の改革における最大の関心は数的優勢を誇り、かつ兵器性能を向上させたワルシャワ条約機構軍との戦いに勝利することだった。こうした中、当初、アメリカ陸軍の改革者たちは、特定の戦場での戦いにおいて敵を効率的に撃破するための戦法や部隊運用要領を研究した。その後、1970 年代末頃から改革者たちは、戦場を観る視点を時間的及び空間的に拡大させ、場所と時間が異なるそれぞれの戦いに全体としてのまとまりを持たせることにより作戦全体を最終的な成功に向かって牽引していく戦い方を研究した。

また、期間を通じて戦い方の改革の推進役となったのは、1973 年 7 月に新設した訓練ドクトリンコマンド（Training and Doctrine Command: TRADOC）だった。アメリカ陸軍は合計三回のドクトリン[13]改訂を行ったが、初代 TRADOC 司令官デピュイ（William E. DePuy）大将[14]、第 2 代スターリー（Donn A. Starry）大将[15]、第 3 代オーティス（Glenn

---

11 アメリカ陸軍と海兵隊が同期間中に実施した戦い方の改革について、その内面や知的側面を捉えた代表的な先行研究は次のとおり。B.J.C. McKercher and Michael A. Hennessy, *The Operational Art: Developments in the Theories of War* (London: Praeger, 1996); John Andreas Olsen and Martin van Cleveld eds., *The Evolution of Operational Art: From Napoleon to the Present* (New York: Oxford University Press, 2011); 齋藤大介「AirLand Battle 再考――軍事思想の観点から」航空自衛隊幹部学校幹部会『鵬友』第 37 号、第 6 号（2012 年）; Fideleon Damian, "The Road to FMFM1: The United States Marine Corps and Maneuver Warfare Doctrine, 1979-1989," (Kans.: Kansas State University, 2008); 阿部亮子『いかにアメリカ海兵隊は世界最強となったのか――「軍の頭脳」の誕生とその改革者たち』（作品社、2020 年）。

12 1986 年刊行の『FM100-5 Operations』は、戦争という国家的活動は内部に戦略（military strategy）、作戦術（operational art）及び戦術（tactics）という相関する三つの次元の活動を含むと定義した。戦術次元の活動は、軍団以下の指揮官が手持ちの軍事力を使用して会戦（battle）や交戦（engagement）を勝利に導く術と定義された。作戦次元の活動は、戦役（campaign）もしくは大規模作戦（major operation）の遂行を通じて戦略目的を達成するために軍事力を運用する術と定義された。詳細は Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1986), pp. 9-10 を参照。

13 本章は次の文献に依拠し、ドクトリンを「軍当局が編纂し、公認し、出版した軍事行動や戦いの進め方に関する指針」と定義する。John L. Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle: The Development of Army Doctrine 1973-1982* (Fort Monroe, Va.: United States Army Training and Doctrine Command, 1984), p. 88; 片岡徹也『軍事の事典』（東京堂出版、2009 年）121-122 頁。

14 1941 年に予備役将校訓練課程（ROTC）を経て少尉に任官。第二次世界大戦終戦時には在欧第 90 歩兵師団の作戦参謀。ベトナム戦争では第 1 歩兵師団長。1970 年代初頭から陸軍改革を牽引し、TRADOC 創設の立役者となった。1973 年 7 月の TRADOC 新設から 1977 年 6 月の退役まで TRADOC 司令官。

15 1948 年に陸軍士官学校を卒業。ベトナム戦争では第 11 騎兵連隊長。1973 年 7 月から機甲センター長。1976 年 2 月から在ドイツ第 5 軍団長。1977 年 7 月から 1981 年 7 月まで TRADOC 司令官。1983

K. Otis）大将[16]、第 4 代リチャードソン（William R. Richardson）大将[17]がそれぞれの改訂において中心的な役割を担った。

TRADOC 設立の目的は「次の戦争で戦い、かつ勝利を収める準備を陸軍に確実に整えさせる」[18]ことにあった。アメリカ陸軍は「断固たる再編（Steadfast Reorganization）」と銘打つ組織改編を行い、それまで複数の組織で分割していた戦い方の改革に関する任務及びこれとの関連性が高い任務を新設の TRADOC に集約した[19]。TRADOC は新しい戦い方の開発、これを実行する将兵や部隊の訓練の充実、戦術部隊の編制の決定及び新兵器に要求する性能の決定の四つの任務を統合し、同時にそれぞれの任務を方向づける組織として誕生した。アメリカ陸軍は、新しい戦い方を効率的かつ迅速に陸軍内に普及する体制を整えた。

TRADOC の設立は新しい戦い方の普及だけではなく、戦い方の開発そのものの知的水準を向上することを狙っていた。組織改編の結果、指揮参謀大学（Command and General Staff College: CGSC）や兵科学校などの教育機関、中でも特にその教授陣（faculty）が教育と研究を通じて蓄積していた、敵と自軍の現在の戦い方やその変遷あるいは背景となる思想といった戦いに関する専門的知識を TRADOC が実施する戦い方の開発に取り込むことが可能になったのである[20]。組織改編の前、新しい戦い方の開発、新装備の開発及び編制の決定に関する任務を担っていたのは戦闘開発コマンド（Combat Development Command: CDC）だった。戦闘開発コマンドは新装備の開発や編制の設計を得意としていた[21]。一方、教育機関は、アメリカ国内の陸軍部隊を監督する大陸陸軍コマンド（Continental Army Command: CONARC）の隷下に置かれていた。組織改編により戦闘開発コマンドと大陸陸軍コマンドは廃止され、教育機関は TRADOC の隷下となり、兵科学校は戦闘法の開発に関する任務を担った。組織改編は、専門的知識の中心地を、新設した戦い方の改革の中枢と一致させた[22]。デピュイはこの時の組織改編に辣腕をふるった人物であり、TRADOC が新設されると初代司令官に就任した。

次の戦いに勝利するための準備を整えるという大役を双肩に担ったデピュイは、平時の訓練によって兵器を操作する兵士と兵器を運用する第一線の指揮官を鍛え上げ、兵器の威力を最大限に発揮することに大きな関心を持っていた[23]。デピュイは、個々人や部隊を対象とした訓練の改革及び戦闘法の開発のそれぞれを方向づけて力強く推進し、1980 年代にお

---

年に退役。

[16] 1953 年に陸軍士官学校を卒業。ベトナム戦争に参加。1979 年から 1981 年まで陸軍作戦担当参謀次長。1981 年 8 月から 1983 年 3 月まで TRADOC 司令官。1988 年に退役。

[17] 1951 年に陸軍士官学校を卒業。朝鮮戦争及びベトナム戦争に参加。1979 年から指揮参謀大学校長。1981 年から陸軍作戦担当参謀次長。1983 年 3 月から 1986 年 6 月の退役まで TRADOC 司令官。

[18] トム・クランシー、フレッド・フランクス Jr.『トム・クランシー 熱砂の進軍（上）』白幡憲之訳（原書房、1998 年）161 頁。

[19] John L. Romjue, Susan Canedy and Anne W. Chapman, *Prepare the Army for War: A Historical Overview of the Army Training and Doctrine Command, 1973-1993* (Honolulu, Ha.: University Press of the Pacific, 2002), p. 7.

[20] *Ibid.*

[21] Donn A. Starry, "To Change an Army," *Military Review*, Vol. 63, No. 3 (March 1983), p. 25.

[22] Romjue, *Prepare the Army for War*, p. 7.

[23] *Ibid.*, p. 23.

ける訓練の充実に先鞭をつけた[24]。

デピュイの訓練重視の姿勢は、国内での逆風や欧州での脅威の増大、あるいは国防戦略を前提としながら、次の戦いに勝利するためには何が必要かについて彼自身で熟慮を続けた結果だった。TRADOC 設立前、デピュイは、次の戦いは数的な劣勢を強いられる戦いとなるだけではなく、核戦争へのエスカレーションを防止するという戦略上の要請によって短期戦となると予測した[25]。その後、第四次中東戦争を目の当たりにしたデピュイは、兵器性能の飛躍的向上により次の戦場では先例がないほどの破壊と殺傷が起こるだろうという教訓を導き出した[26]。この結果、デピュイは、兵器の威力、特に火力を発揮して数的な不利を克服すること及び開戦劈頭の第一会戦（first battle）で勝利することが肝心であり、このためには平時の訓練によってコンパクトだけれども訓練が行き届いた即応性が高い軍へと陸軍を作り替えなければならないという結論に帰結したのだった。

厳しい情勢への対応が求められる中、デピュイが 1976 年 7 月に完成させた新ドクトリン『野外教範 100-5：作戦（*Field Manual 100-5: Operations*）』（以下、「1976 年版 FM100-

---

[24] 1975 年、デピュイは部隊訓練の基準として陸軍訓練評価プログラム（Army Training and Evaluation Program: ARTEP）を制定した。あわせてデピュイは兵士個々人が習熟しなければならない事項を定めた手引き書（Soldiers' Manuals）を刊行し、1977 には戦技評価試験（Skill Qualification Test）を開始した。詳細は *Ibid.*, pp. 23-26; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 12; Walter E. Kretchik, *U.S. Army Doctrine: From the American Revolution to the War on Terror* (Kans.: University press of Kansas, 2011), p. 201; クランシー『熱砂の進軍（上）』166 頁を参照。この他、デピュイはより実戦的で効果が高い訓練を実現するため、先端科学技術を活用した訓練装置の開発に取り組んだ。デピュイの TRADOC 司令官在任間、小銃や戦車砲の火力をレーザー光線で代用するシミュレーターが完成した。また、1976 年、デピュイはこのシミュレーターを大規模に活用し、ワルシャワ条約機構軍を想定した訓練を行う戦闘訓練センターの設立計画を発表した。この計画は国防予算が制限された 1970 年代には構想止まりだったが、国防予算が増加した 1980 年代に実現した。1982 年 1 月、カルフォルニア州フォート・アーウィンの国立訓練センター（National Training Center: NTC）においてシミュレーターを用いた対抗方式の部隊訓練が初めて実施された。この訓練では陸軍の重装備部隊がワルシャワ条約機構軍を忠実に再現した常設の専任部隊を相手に訓練を行った。また、戦闘結果に関するデータの収集や分析が可能であり、収集されたデータは訓練部隊が実施する反省会だけではなく TRADOC が実施する戦闘開発やドクトリン研究に活用された。詳細は Romjue, *Prepare the Army for War*, pp. 32-33, 35-36; Schubert, *The Whirlwind War*, p. 40; クランシー『熱砂の進軍（上）』170-173 頁を参照。湾岸戦争の帰還兵は、実際の戦場は NTC の訓練よりも楽だったと述べた。詳細は George Packer, "The Lessons of Tal Afar: Is it too late for the Administration to Correct its Course in Iraq?," *The New Yorker*, April 10, 2006 Issue. <http://www.newyorker.com/magazine/2006/04/10/the-lesson-of-tal-afar>（2017 年 2 月 1 日アクセス）を参照。

[25] Saul Bronfeld, "Fighting Outnumbered: The Impact of the Yom Kippur War on the U.S. Army," *The Journal of Military History*, Vol. 71, No. 2 (April 2007), p. 471.

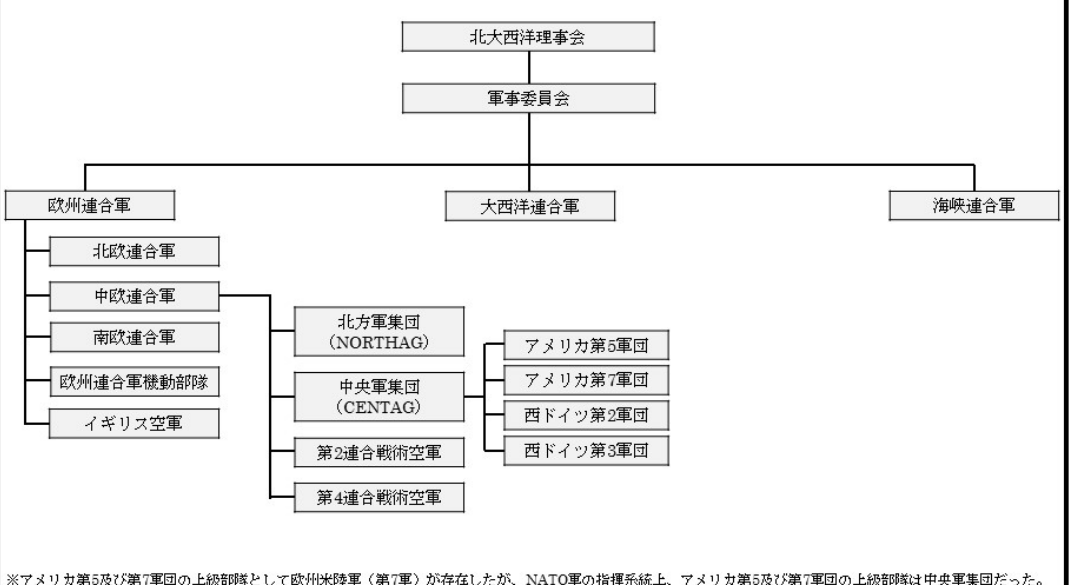
[26] デピュイが導き出した第四次中東戦争の教訓は、①次の戦いの様相に関する分析、②戦術部隊の運用に関する指針、③訓練の重要性の三つに大別される。①は兵器性能の向上により戦場の致死性（lethality）が増大し、あわせて空軍の協力を受けることができない状況下での戦いが生起する蓋然性が増大するという内容だった。②は空軍との連携を強化することが重要、敵火から隠掩蔽した経路を移動して敵対戦車火器に大量の制圧火力を発揮することが重要、諸兵科協同部隊のチームワークを向上することが重要という内容だった。③は訓練への熟練度が戦闘結果を左右するという内容だった。この教訓は、1976 年版 FM100-5 を開発する際の基礎資料となった。詳細は Ibid., pp. 475-479; 北川敬三『軍事組織の知的イノベーション――ドクトリンと作戦術の創造力』（勁草書房、2020 年）145-146 頁を参照。デピュイが導き出した教訓は過度に戦術的で視野狭窄だという批判がある。ブロンフェルドは、可能な限り速やかにアメリカ陸軍を再建することがデピュイの任務だったと主張し、デピュイを弁護している。詳細は Bronfeld, "Fighting Outnumbered," pp. 479-482 を参照。

5」と表記する）は、次の戦いにおいて第一線の将兵が如何に戦わなければならないかを特に詳しく説明したものとなった。デピュイは、新ドクトリンが戦術と訓練に関する教科書となること、つまり、如何に戦い、如何に平時の訓練を行うべきかをこれを読む兵士や指揮官に理解させることを目指していた[27]。

ドクトリン開発の過程でデピュイが特に重視したのは、第四次中東戦争の教訓を反映することだった[28]。デピュイは 1976 年版 FM100-5 に「現代の戦場における最新兵器（Modern Weapons on the Modern Battlefield）」と題する章を設け、図表やイラストを多用しながら最新兵器の殺傷力をありのままに包み隠さず記述した[29]。また、大隊以下の部隊の戦い方にまで焦点が置かれ、現下の戦場における「かくすべし」や「かくすべからず」が細部にわたり具体的に記述された。こうした記述の様式は、抽象的に書かれた従来のドクトリンに馴染んできた軍人たちを驚かせた[30]。デピュイは、ドクトリン開発を学者の仕事と見做すことに懐疑的であり、多くの将兵が理解できるような平易かつ明瞭な表現を好んだ[31]。

一方、1976 年版 FM100-5 における想定の中心は西欧の防衛、すなわちアメリカ第 5 軍団と第 7 軍団が展開する西ドイツ国境線沿いの防御だった。デピュイは、新ドクトリンの中でワルシャワ条約機構軍と如何に戦い、如何に勝利するかを描き出した。（図 1、図 2 を参照）

図1　北大西洋条約機構（NATO）軍事組織図（1980年）

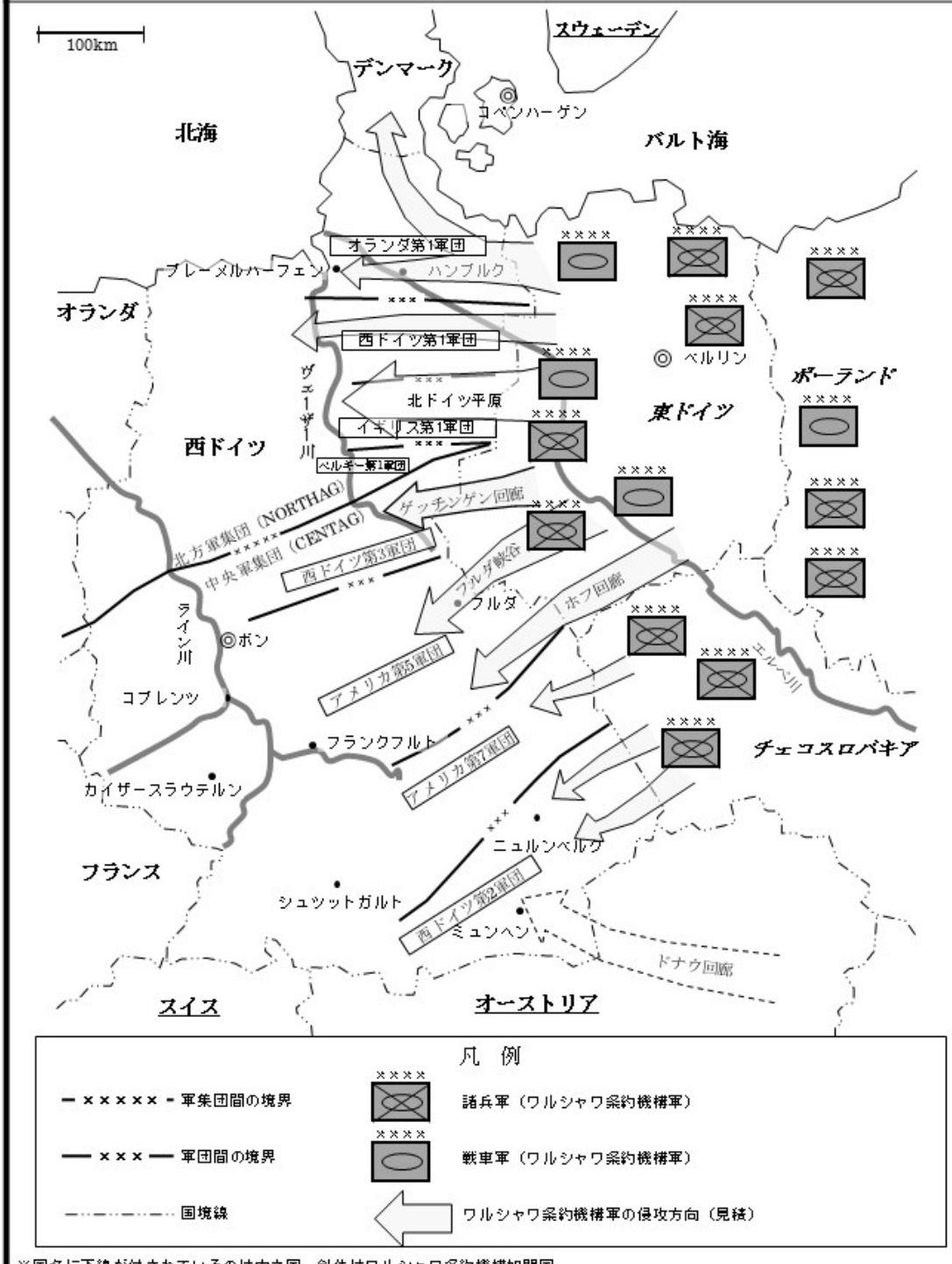



※アメリカ第5及び第7軍団の上級部隊として欧州米陸軍（第7軍）が存在したが、NATO軍の指揮系統上、アメリカ第5及び第7軍団の上級部隊は中央軍集団だった。

出典：西郷従吾『アメリカと西欧防衛』（読売新聞社、1981年）73-74頁；金子譲『NATO北大西洋条約機構の研究――米欧安全保障関係の軌跡』（彩流社、2008年）145-147頁；クランシー『熱砂の進軍（上）』239-240頁。

[27] Romjue, *Prepare the Army for War*, p. 51.
[28] *Ibid.*, pp. 51-52.
[29] Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1976), pp. 2-1 to 2-32.
[30] McKercher, *The Operational Art*, p. 151.
[31] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 12.

図2　西欧の防衛態勢（1980年頃）及びワルシャワ条約機構軍の侵攻方向（見積もり）

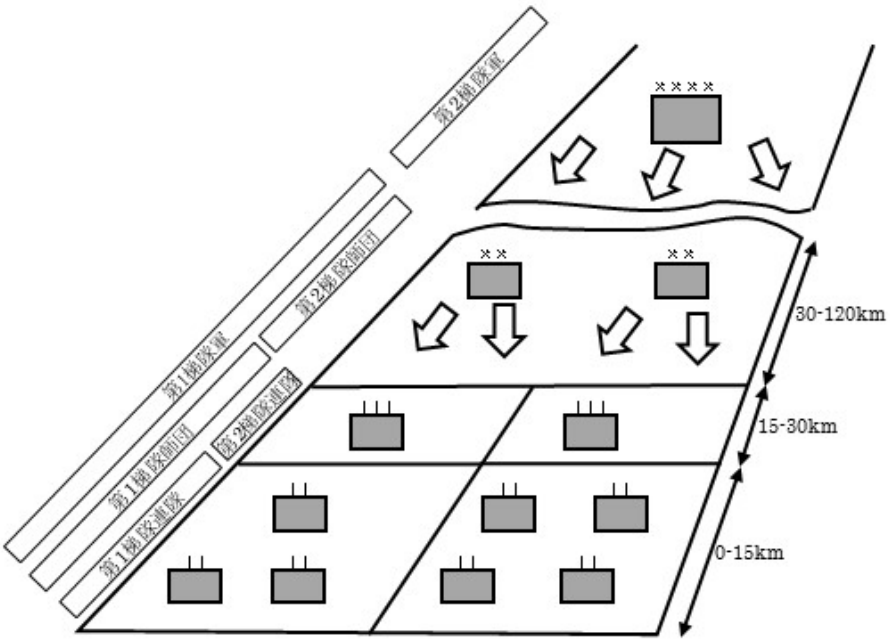



※国名に下線が付されているのは中立国、斜体はワルシャワ条約機構加盟国

出典：William J. Lewis, *The Warsaw Pact: Arms, Doctrine, and Strategy* (New York: McGraw-Hill Publications Co., 1982), pp. 288-291; 金子譲『NATO 北大西洋条約機構の研究――米欧安全保障関係の軌跡』（彩流社、2008年）145-148頁。

当時、西欧の防衛には、非常に脆い、殆ど一線の防御線で強大なワルシャワ条約機構軍の数次にわたる突進を如何に阻止するかという問題があった。兵力が隔絶していたため、第 5 及び第 7 軍団には防勢作戦以外の選択肢はなかった。また、西ドイツへの政治的配慮の結果、第一防御線の後方の地域に第二、第三の防御線を設ける計画はなかった[32]。他方、ワルシャワ条約機構軍は敵の陣地や領土を蚕食しながら攻撃するのではなく、大規模な戦力を数次の梯隊(ていたい)に区分し、敵の陣地に対して矢継ぎ早に貫通攻撃を行い、西欧諸国領内の奥深くまで一挙に突進すると予想されていた。貫通攻撃は軍（Army）[33]級の大部隊を運用単位として行われ、主要な侵攻経路上では第一梯隊軍が防御線に突破口を切り開き、この突破口から第二梯隊軍が防御線の後方の地域に突進すると予想されていた。（図 3 を参照）

図3　ソ連軍の梯隊攻撃




出典： Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 47.

第四次中東戦争の教訓から着想を得たデピュイは、脆い防御線でワルシャワ条約機構軍の貫通攻撃を阻止する要領の全体像、すなわち大部隊による戦いの進め方を創り出した[34]。

[32] 西ドイツ国境線付近には多くの人口密集地が存在した。このため、西ドイツ国内を戦場にすることを想定した計画は作成されなかった。
[33] 部隊規模を表す用語としての「軍」は、指揮階層上、軍団（Corps）の直上、軍集団（Army Group）の直下に位置する。軍は複数の軍団を運用して作戦を遂行する。
[34] McKercher, *The Operational Art*, p. 151.

その特徴は二つあった。第一の特徴は、最終決戦と見做すほど、第一会戦に勝利することの重要性を強調したという特徴だった。1976 年版 FM100-5 は、その一ページ目で、次の戦いでは兵器威力の向上により第一会戦で交戦者双方が疲弊し尽くし、同時に国際的な圧力により早期停戦が実現するため、第一会戦が戦争の結果を決定すると説明した[35]。第一会戦となるのは、防御線一帯における第一梯隊との戦いだった。デピュイは、この第一梯隊との戦いを、戦力が劣勢なアメリカ陸軍が何よりも重視して準備しなければならない戦いと位置づけた。

第二の特徴は、大部隊の戦い方において戦力の集中、中でも特に火力の集中発揮を最も重要な事項と位置づけたという特徴だった[36]。戦力を集中しなければならない時期と場所は、ワルシャワ条約機構軍の第一梯隊が防御線の突破を図る時期と場所だった。また、兵器の性能や数量に関する計算に基づきながら、戦力の集中に関する基準が計数的に説明された。例えば、師団が行う防御における戦力の集中は次のとおりだった[37]。

① 師団長は強力な掩護部隊を配置する。掩護部隊の主要な任務は、粘り強く戦うことにより敵の主攻撃の兵力と攻撃方向を解明し、あわせて防御部隊〔防御線上の陣地に配置された部隊〕が敵の突破地点に戦力を集中するための時間を獲得することである。
② 師団長は、敵が戦力を集中する地点をつきとめたら、主会戦地域（Main Battle Area: MBA）〔防御線上の陣地〕に配置した装甲化部隊及び機械化部隊を、敵が突破を図る経路上の陣地に移動させなければならない。あわせて師団長は、敵が突破を図る地点に対して砲兵の火力を集中しなければならない。
③ 敵は第一波から第三波までの連続した梯隊により攻撃することができる。第一梯隊は、600 両に及ぶ戦車から成る 20 乃至 25 個の大隊により突進するだろう。師団長は敵の突進を阻止するため積極的に火力を集中し、また、6 乃至 8 個の大隊を自身が担当する正面のうちの五分の一の地域に集中しなければならない。
④ 師団長は、戦力を集中するためには陣地両翼でリスクを許容しなければならない。師団長は、残りの地域〔戦力を集中した担当正面のうちの五分の一の地域以外の地域〕を空軍、騎兵、残った地上部隊及び攻撃ヘリコプターで防御しなければならない。

戦い方に関する従来の考え方を覆すような二つの新しい考え方が 1976 年版 FM100-5 の中に表現された。その第一は、第一防御線の一帯だけで戦うことを想定し、従来有利と考え

---

[35] Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1976), p. 1-1.
[36] *Ibid.*, p. 3-5. 1976 年版 FM100-5 は、大部隊を指揮する将軍が果たす最大の責任を、特定の時期と場所に戦力を集中し、彼我の戦闘力の比率を望ましい値にすることと定義した。加えて 1976 年版 FM100-5 は、あらゆる戦力の中で火力が最も重要であると説明した。
[37] *Ibid.*, pp. 3-5 to 3-6, 5-3.

られていた縦深の防御、すなわち防御線の後方に広がる地域に幾重にも防御線を設け、そこで敵の突進力を漸減させていく防御の要領を放棄するという考え方だった。1976 年版 FM100-5 の草稿では、後方の地域を活用すればするほど防御は容易になるという記述から明らかなとおり、縦深の防御が推奨されていた[38]。しかし、完成した 1976 年版 FM100-5 では、縦深の防御を推奨した記述は前方の地域を活用すればするほど戦いは容易になると書き換えられた[39]。

第二は、部隊を予備隊として温存することよりも、第一線に配置して火力を発揮させることを優先するという考え方だった[40]。伝統的な防御の方式、すなわち手持ち兵力の三分の二を防御線上の陣地に配置し、残りの三分の一を予備隊として防御線から離れた後方の地域に配置する方式は、事実上放棄された[41]。この結果、防御において戦力を集中する要領は、防御線上の陣地に配置していた部隊を、防御線に沿って側方から、敵の突破地点に投入する方式となった。この新しい防御の戦い方は、機動力を発揮して兵器の火力や部隊を集中することから「アクティブ・ディフェンス（Active Defense）」と呼ばれた。

### （２） 戦い方に関する専門的な論争

1976 年版 FM100-5 は、戦い方をさらに発展させる上で重要な役割を果たした論争の出発点となった[42]。1976 年版 FM100-5 は、発表直後から陸軍内外から高い評価と厳しい批判を同時に受け、陸軍史上において最も活発に戦い方について議論されたドクトリンとなった[43]。1976 年版 FM100-5 は欧州重視へと回帰した当時の国防戦略と合致し、同時に兵器性能の向上によって様相を変えた現下の戦場でワルシャワ条約機構軍と如何に戦うかについて明解に記述した。さらに、その戦い方は従来の考え方を覆すような内容だった。このため 1976 年版 FM100-5 は、軍人は勿論のこと、政治家や研究者にとって関心の的となり、かつ議論の出発点となったのである。

また、デピュイの真摯な態度が活発な論争を促進した。デピュイは時には苛立たしい、厳しい批判にも正面から向き合い、率直な意見を求め続けた。デピュイは、第一線の将兵や部隊が採るべき行動を規範的に記述することを好んだのとは対照的に、ドクトリンは議論を通じて発展するものと考えており、1976 年版 FM100-5 が戦い方に関する継続的な議論の始まりとなることを願っていた[44]。デピュイはドクトリン開発のための特別チームを TRADOC 司令部内に編成し、このチームが起草した草稿を題材として陸軍内の主要な部隊、研究機関及び教育機関との会議を繰り返し、草稿への批判に耳を傾け続けた。1976 年版

---

[38] William S. Lind, “Some Doctrinal Questions for the United States Army,” *Military Review*, Vol. 59, No. 3 (March 1977), p. 64.
[39] Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1976), p. 5-13.
[40] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 16.
[41] Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1976), p. 5-3.
[42] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, pp. 13-14.
[43] McKercher, *The Operational Art*, p. 151.
[44] *Ibid.*, p. 150; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 13.

FM100-5 の発表後、指揮参謀大学の学生、さらには軍人ではない軍事アナリストや議員あるいは学者が批判の声を上げた時も、デピュイは苦労を惜しまなかった。戦い方に関する専門的な議論が、TRADOC からの公式な回答を交えながら、公開された雑誌上や討論会の場で論理的に進められた[45]。

論争の焦点は、1976 年版 FM100-5 でデピュイが描き出した全体的な戦いの進め方及び大部隊による防御の戦い方だった[46]。1976 年版 FM100-5 の防御の戦い方ではアメリカ陸軍の軍団やその隷下の師団はワルシャワ条約機構軍の突進に対抗できないのではないかという疑問や批判が陸軍内外から起こったのである。

リンド（William S. Lind）[47]が 1977 年 3 月に『ミリタリー・レビュー（*Military Review*）』誌に投稿した論文は、批判の典型だった。リンドの批判は二つに大別できる。第一は、第一会戦を過剰に重視していることに対する批判だった。リンドは三つの理由を挙げて、第一会戦を過剰に重視することを見直し、第二、第三の会戦にも注意を払わなければならないと警鐘を鳴らした。第一の理由は、第一会戦に勝利しても第二会戦は不可避であるという内容であり、第二の理由は、第一会戦を戦った部隊が第二会戦で敵の第二梯隊を迎え撃つことができるという前提は疑わしいという内容だった。第三の理由は、ソ連軍のドクトリンが第一会戦よりも、むしろ第二、第三の会戦に勝利することを強調しているという内容だった[48]。アメリカ陸軍は防御線一帯で戦う第一会戦において敵の第一梯隊に勝利することができたとしても、第二梯隊の突進を許して最終的に包囲殲滅されるか、あるいは指揮中枢を破壊されて敗北するとリンドは鋭く指摘した[49]。

第一会戦の重視を擁護する意見はあった。しかし、ワルシャワ条約機構軍の後続部隊に対応できないのではないかという疑念は解消されなかった。軍事アナリストのカーバー（Philip A. Karber）[50]は『アームド・フォーシーズ・ジャーナル（*Armed Forces Journal*）』誌上で、第一会戦の勝利は戦力が劣勢なアメリカ陸軍にとって必須の条件であり、第一会戦に勝たなければ後続部隊にも対抗できないと主張した[51]。カーバーは、ワルシャワ条約機構軍は第二、第三の会戦においても第一会戦と同様に多大な損耗を強いられるだろうと主張した。しかし、カーバーの主張は、第一会戦を戦った防御部隊が敵の第二梯隊が攻撃を開始

---

[45] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, pp. 14-21.
[46] *Ibid.*, p. 19.
[47] プリンストン大学で歴史学修士を取得。1973 年から 1976 年までタフト（Robert Taft Jr.）上院議員のもとで、また、1977 年から 1986 年までハート（Gary Hart）上院議員のもとで法律補佐官を務めた。軍事に関しても造詣が深く、主著は次のとおり。William S. Lind and Gregory A. Thiele, *4th Generation Warfare Handbook* (Kouvola, Finland: Castalia House, 2015); Willam S. Lind, *Maneuver Warfare Handbook* (Boulder, Colo.: Westview Press, 1985).
[48] Lind, "Some Doctrinal Questions," p. 57.
[49] このリンドの見解と同様、現役将校として 1976 年版 FM100-5 に基づく訓練を経験したクレーン（Conrad C. Crane）は第一梯隊との戦いで戦力を消尽し、第二梯隊への対抗策は核攻撃しか残っていなかったと回顧している。コンラッド・C・クレーン「歴史から見た米国の陸上戦力」防衛省防衛研究所編『平成 30 年度国際シンポジウム 新しい戦略環境と陸上防衛力の役割』（防衛研究所、2019 年）20 頁。
[50] TRADOC 設立後、デピュイのもとでスターリーと協力しつつ第四次中東戦争の教訓について研究した。その後、ワインバーガー（Caspar Weinberger）国防長官の戦略アドバイザーを務めた。
[51] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 15.

するよりも先に防御線を立て直すことができるという前提に基づいていた。リンドが疑わしいと指摘したのは、この前提だった。

リンドによる批判の第二は、敵の突破地点に対して戦力を集中する要領に対する批判だった。リンドは 1976 年版 FM100-5 に記された戦力集中の要領を、まるで綿密に振り付けられた一連の舞踊のようだと形容し、現実の戦場ではこのような行動は実現不可能だと指摘した[52]。この理由としてリンドは敵の電波妨害により指揮通信網が混乱し、かつ敵の陽動や欺騙により判断が遅れるため、敵が実際に突破を開始する前にアメリカ陸軍が敵の突破地点を解明し、戦力を集中する地点を決定することはできないと主張した。加えてリンドは、敵が突破を開始する前にアメリカ陸軍が敵の突破地点を解明できたとしても、敵は航空攻撃や地上部隊により突破地点以外に対する攻撃を継続するため、防御線に配置していた部隊を敵の突破地点に対して自由に移動させることは不可能だと論じた。

戦力集中の要領に対する疑念がさらに拡大する端緒となったのは、1977 年末にカーバーが『ミリタリー・レビュー』誌に投稿した論文だった。カーバーは、アメリカ陸軍と同様、ソ連軍も第四次中東戦争と最新兵器を注視しており、その戦い方を刷新したことは間違いないと指摘した。さらにカーバーは、ソ連軍の新しい戦い方にあわせて西側諸国は防衛計画を修正しなければならないと警告した。当時の西側諸国の防衛計画では、ワルシャワ条約機構軍が大規模な動員を開始してから攻撃開始位置に所要の部隊と軍需品を輸送して攻撃準備を完了するまでの時間を活用して、自軍の動員と防御線の強化を行うことが計画されていた。あわせて防衛計画では、ワルシャワ条約機構軍の突進経路がいくつかの方向に集約するという前提のもと、戦術核による報復攻撃が計画されていた。

カーバーが描き出したソ連軍の新しい戦い方は、戦力の集中よりも、むしろ時間の要素を重視する戦い方だった。対抗策を講じる時間を対手に与えないことを狙いとして、ソ連軍は多大な時間を必要とする大規模な動員や兵力の展開を行わず、貫通攻撃の運用単位を軍から連隊に変更し、かつ複数の連隊が平時駐留している基地から攻撃を開始するとカーバーは説明した。カーバーはこの戦い方を、奇襲と攻撃の進展速度の高速化によって対手の対抗策を無効化することを狙いとすることから、「先制攻撃（Preemptive Attack）」と名付けた[53]。

同様、カーバーが説明したソ連軍の貫通攻撃の新しい要領は、時間の要素を重視していた。防御側を混乱に陥れて防御を立て直す時間を与えないことを狙いとして、複数の第一線連隊が多方向から防御線の全正面に攻撃して防御線の弱点を見つけ出し、発見した弱点から速やかに第一線もしくは後続の連隊が防御線の奥深くに突進するとカーバーは説明した。カーバーは、ソ連軍の新しい貫通攻撃の要領を「大胆かつ多方向からの全正面攻撃（Bold, Multiple-Pronged Attacks）」と表現した[54]。（図 4 を参照）

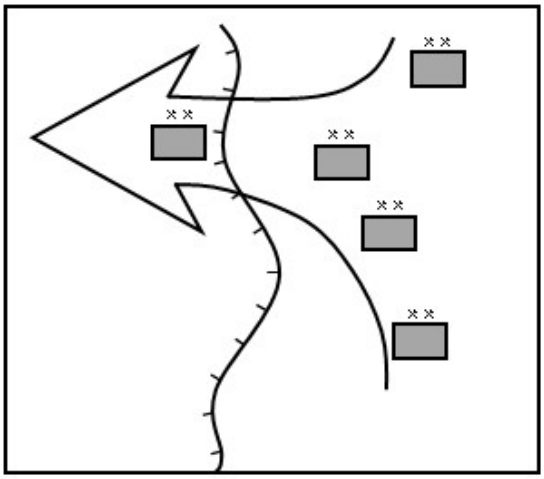
---

[52] Lind, “Some Doctrinal Questions,” pp. 62-64.
[53] Pillip A. Karber, “The Tactical Revolution in Soviet Military Doctrine,” *Military Review*, Vol. 59, No. 11 (Nov. 1977), pp. 83-85.
[54] Ibid., pp. 84-85.

図4　ソ連軍の貫通攻撃の要領

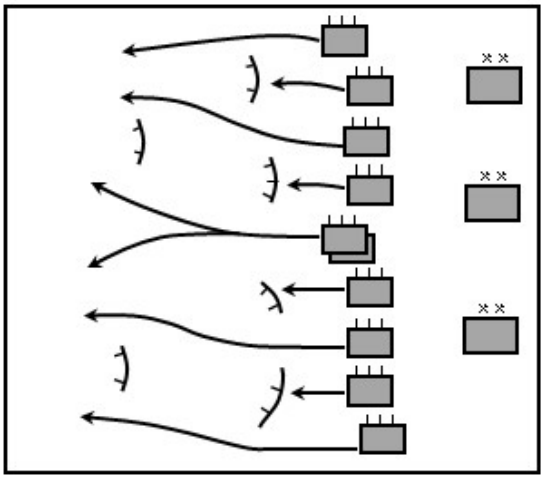
**古典的な貫通攻撃**

- 周到に準備された防御線
- 攻撃部隊を集中
- 火力を集中
- 師団から軍のレベル



**大胆かつ多方向からの全正面攻撃**

- 拠点により構成される防御
- 臨機応変に戦闘
- 多方向から攻撃、臨機応変に攻撃方向を変更
- 連隊レベル



出典： Karber, "The Tactical Revolution in Soviet Military Doctrine," p. 84.

リンドとカーバーの論文が広く読まれた結果、1976 年版 FM100-5 に記された戦力集中の要領の実行可能性に対する疑念は、殆ど解消が困難になった。防御線の全正面で殆ど同時に次々と打ち出される貫通攻撃に晒されたアメリカ陸軍の軍団や師団が敵の突破地点に戦力を集中することは不可能だという意見が溢れた。大尉や少佐といった陸軍の若年将校でさえ、陸軍の機関誌上で公然と、敵はこちらの予想通りに一か所の突破地点に戦力を集中するのか、陣地の両翼は空軍や僅かな地上部隊で防御できるのか、指揮官による誤った推察が

致命的な結果を招くだろうと鋭く指摘した[55]。

しかし、多くの批判を受けたけれども、デピュイと 1976 年版 FM100-5 の功績は見落とされてはならない。陸軍参謀長メイヤー（Edward C. Meyer）大将が指摘したとおり、デピュイが 1976 年版 FM100-5 において従来とは異なる新しい戦い方を描き出して論争を掻き立てた結果、多くの人々が戦い方の改革を求めて思考し、発言するようになった[56]。また、戦うという純軍事的な分野に関する専門的で知的水準が高い議論が陸軍内外に広がった。

また、批判に真摯に向き合うデピュイの態度は継承された。デピュイが退役し、新 TRADOC 司令官スターリー大将が就任した後も、如何に戦うかに関する議論は陸軍の内外や階級の上下を問わず、公開された場で継続した。また、スターリーが開始した 1976 年版 FM100-5 の戦い方をさらに発展させるための研究では、カーバーが主張したソ連軍の貫通攻撃の新たな要領が採用されていた。

1976 年版 FM100-5 に対する典型的な批判は、全体的な戦いの進め方及び大部隊による戦い方において、戦場を観る視点を絞り込んだことに向けられていたと言える。1976 年版 FM100-5 はワルシャワ条約機構軍との戦いで想定される全ての期間と地域を考慮に入れていたが、その内容に濃淡があった。デピュイは兵器性能の向上を論拠として第一会戦に注目し、また、戦力の隔絶と西ドイツへの配慮から国境線沿いの防御線一帯に注目した。さらに、単一の攻撃軸による貫通攻撃を想定し、この攻撃に自軍の戦力を集中することを主眼としたため、関心が集中した時期と場所は、敵が防御線上に突破口を切り開く時期と場所だった。これら以外の時期と場所での戦いは、閑却されたわけではなかったが、小さく扱われた。一方、リンドやカーバーは、第二、第三の会戦に注意を払わなければならない、敵の突破地点の解明はできない、あるいは敵の貫通攻撃は多方向から防御線の全正面に行われるという主張から伺えるとおり、特定の時期と場所に過剰なほどの関心を集中させることや戦場を見る視点を絞り込むことに批判的だったと言える。

戦場を観る視点を絞り込むことは、戦い方を改革する上での桎梏となっていた可能性がある。スターリーが開始した研究で戦い方はさらに発展し、「エアランド・バトル（AirLand Batte）」と銘打つ戦い方が誕生した。この研究の冒頭、スターリーは戦場を観る視点を変更した。

### （3） 戦場を観る視点の変化

1976 年版 FM100-5 の戦い方に関する論争が続いていた 1977 年 7 月に第 2 代 TRADOC 司令官に就任した時、すでにスターリーは、1976 年版 FM100-5 の戦い方には重大な欠陥があると考えていた。TRADOC 司令官に就任する前、スターリーは欧州の最前線に展開する第 5 軍団長だった。ワルシャワ条約機構軍の脅威を間近に感じる任務に就く中、軍団と

[55] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, pp. 16-17.
[56] McKercher, *The Operational Art*, pp. 156-157.

しての戦い方に思いを巡らせたスターリーは、敵の後続部隊の攻撃を遅らせ、同時にその戦力を弱めることが必要であるという結論に達していた。

スターリーは、戦い方を大きく発展させた研究の火付け役となった[57]。スターリーは強烈な個性の持ち主であり、戦い方の発展のために必要と判断したことを自分自身で精力的に推進する人物だった。実際、TRADOC が設立された 1973 年 7 月、TRADOC 隷下の研究機関の所長となったスターリーはデピュイの腹心の部下となり、1976 年版 FM100-5 の起草に関する責任の殆どを担った[58]。その後、1976 年版 FM100-5 が発表される直前の 1976 年 2 月、スターリーは第 5 軍団長に赴任した。第 5 軍団長にはドクトリン開発に関する責任はなかったにも拘わらず、スターリーは戦史を紐解いて戦車部隊の戦い方について自ら研究し、1976 年版 FM100-5 が想定した地域でその戦い方を検証し、さらには戦い方について西ドイツの将校と議論を重ねた[59]。

戦い方の研究におけるスターリーの特徴は、戦場を観る視点を変えたことにあった。視点の変化は、戦場を観る視点の拡大及び戦場を総合する視点の導入の二つに要約できる。スターリーは、第一会戦と防御線一帯に注目した 1976 年版 FM100-5 の視点を視野狭窄と見做していた。スターリーは戦場を観る視点を変えて、軍団隷下の部隊や火力をどのように運用して戦うかに関する研究を進めた[60]。

スターリーが注目したのは敵側、すなわち防御線の向こう側に広がる空間と時間だった。最終的にスターリーは、防御線の向こう側の遠く離れた地域から防御線一帯までの地域及びワルシャワ条約機構軍が防御線に到着するまでの時間を活用して積極的に戦う「エアランド・バトル」構想を開発した。また、この新しい戦い方は、より広い地域とより長い時間の範囲の中で起こるそれぞれの戦いに全体としてのまとまりを持たせることにより最終的な勝利を獲得しようとする、大局的かつ長期的な視点に基づく戦い方だった。

「エアランド・バトル」構想という新しい戦い方の開発において、戦場を観る視点を変更したことの影響は決して小さくなかった。一方、アメリカ陸軍が「エアランド・バトル」構想を開発できた理由は、高性能の兵器や敵に勝る兵力を持っていたためではなかった。1977 年の後半から研究を開始したスターリーは 1980 年の末頃までに「エアランド・バトル」構想の原型を確立したが、研究を開始した時、新兵器の開発は国防予算の削減により計画止まりだった。湾岸戦争で注目された新兵器の装備化が進み始めたのは、国防予算が回復した 1980 年以降である[61]。また、「エアランド・バトル」構想の開発に繋がった研究は数的な優勢を誇るワルシャワ条約機構軍と戦うことを前提としており、アメリカ陸軍が敵に勝る兵力を持っているという前提ではなかった。

TRADOC 司令官就任の直後にスターリーが開始した軍団の戦い方に関する再検討は、戦

---

[57] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 14.
[58] McKercher, *The Operational Art*, p. 157.
[59] *Ibid.*, p. 153.
[60] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 25.
[61] 松岡『ベトナム症候群』36-37 頁。

場を観る視点を拡大した研究の端緒となった。この研究の目的は軍団の役割とその隷下部隊の役割を峻別し、戦いにおいて軍団が果たすべき第一の役割を明らかにすることだった[62]。この研究の冒頭、スターリーは、1976 年版 FM100-5 に内在した、第一会戦と防御線一帯に注目する視点を取り払った。このことは、スターリーが導入した「中心会戦（Central Battle）」という、彼が構想する軍団による戦い方もしくは戦力の発揮を重視する場所を表す概念に表れていた。「すべての火力と機動を総合して決定的な成果を得る戦場の某地域」[63]あるいは「戦闘組織と戦闘支援組織の全てが相互に作用する場所」[64]という「中心会戦」の定義から伺えるとおり、スターリーは戦力の発揮を重視する時期と場所を第一会戦や防御線一帯に限定していなかった。

説明的かつ開放的な「中心会戦」という概念を使用したことにより、戦場全体をより長い時間と広い地域の範囲で捉え直すことが可能になった。第一会戦や防御線一帯への注目は緩和され、防御線の向こう側の遠く離れた地域での戦いへの関心が高まった。スターリーが開始した軍団の戦い方に関する研究は第一会戦や防御線一帯で戦うことだけではなく、防御線に到着する前の敵と、防御線の向こう側の遠く離れた地域において戦うことを含んでいた。また、スターリーは敵と自軍が保有するすべての兵器の性能、敵の前進隊形や前進速度、戦場内の地形、さらには情報収集や兵站支援などの能力を数値化した詳細なシミュレーションを行い、空軍や軍団隷下のそれぞれの部隊がいつ、どこで、どの目標に火力を発揮するかを整序した[65]。この結果、防御線の向こう側の遠く離れた地域で敵の後続部隊をタイミングよく発見し、この敵に火力を発揮することが研究における重要な課題となった。

同時にスターリーは、防御線の向こう側の地域での戦いが場当たりとならないよう、戦いに全体としてのまとまりを持たせることに注意を払った。敵の後続部隊を可能な限り遠くから攻撃することへの関心が高まったことを受けて、1977 年 12 月にスターリーは「戦力造成（Force Generation）」研究を開始した。この研究の目標は、防御線の向こう側の地域において敵の後続部隊を撃破または遅滞（以下、「敵の後続部隊の阻止」と表記する）するために必要な能力のうち、軍団以上の部隊が保有しなければならない能力を明らかにすることだった。敵の後続部隊の阻止が目的としていたのは、防御線一帯での戦いを有利にすることだった[66]。

1979 年 7 月にスターリーに対して 1976 年版 FM100-5 の改訂を提案した陸軍参謀長メイヤー大将も、1976 年版 FM100-5 の戦場を観る視点を問題視していた。メイヤーはスターリーに宛てた書簡の中で、戦域全体を考慮した戦い方及び軍団による戦い方を改訂版 FM100-5 に含めることを要望した。1976 年版 FM100-5 についてメイヤーは、防御線一帯における最前線の部隊の戦い方をまるで切り出したかのように具体的かつ重点的に記述す

---

[62] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 23.
[63] *Ibid.*, p. 23.
[64] *Ibid.*, p. 24.
[65] *Ibid.*, pp. 23-24.
[66] *Ibid.*, pp. 25-27.

る一方、より広い地域と長い時間の中で大部隊がどのように戦うかを十分に描き出していないと評価していた[67]。

メイヤーの後押しを受けてスターリーは、防御線から遠く離れた地域で敵の後続部隊を阻止する戦い方をさらに具体化した。1979 年 10 月、陸軍と空軍が連携して敵の後続部隊を阻止する戦い方に関する検討が陸軍と空軍の両参謀長、戦術空軍（Tactical Air Command: TAC）司令官及びスターリーの間で始まった。同様、砲兵学校（Artillery School）では、陸軍部隊の火力により敵の後続部隊を阻止する戦い方に関する研究が進んだ。1979 年 12 月、砲兵学校は戦術核を含めた利用可能なすべての戦力を防御線の向こう側の地域において総合し、敵の後続部隊を阻止する戦い方の構想を発表した[68]。1980 年 7 月、スターリーはこの構想をその後の戦い方に関する研究に取り込むことを決定した[69]。

砲兵学校が考案した敵の後続部隊の阻止に関する戦い方の構想には、戦場を観る視点に関する二つの特徴があった。第一の特徴は、防御線の向こう側の地域での戦いと防御線一帯での戦いを関連づけること、すなわち戦いに全体としてのまとまりを持たせることに対して一層の注意を払っていたことである。砲兵学校の研究者らはそれぞれの戦場を一つにまとめ上げることを「結合された戦場（Integrated Battlefield）」（以下、「結合戦場」と表記する）という概念で表現し、同時にその戦い方を具体化した。

戦いに全体としてのまとまりを持たせるため「結合戦場」構想は、距離と時間の概念を使いながら、敵の後続部隊の阻止に関する責任地域を各級指揮官に割り当てていた。軍団長には、防御線の遠方 150km から防御線までの地域、もしくは 72 時間以内に防御線に到着する敵部隊に対して火力を発揮する地域という、阻止の責任地域に関する距離と時間の基準が与えられた。同様、師団長の責任地域の基準は 30km 以内もしくは 24 時間以内であり、旅団長の責任地域の基準は 15km 以内もしくは 12 時間以内だった。

阻止に関する責任地域を各級指揮官に割り当てたことにより、防御線の向こう側の地域での戦いは防御線一帯での戦いを有利にするという目的に向かって体系化された。各級指揮官には、それぞれの責任地域内において防御線の向こう側で敵の後続部隊を阻止する戦いと防御線一帯での戦いを関連づけることが求められた。軍団長が行う阻止の目的は師団以下の戦いにとって有利な条件を作り出すことであり、師団長や旅団長が行う阻止の目的は自らが実施する防御線一帯の戦いにとって有利な条件を作り出すことであった[70]。

第二の特徴は、防御線の向こう側の地域で敵の後続部隊を阻止する戦いの重要性を一層強調したことである。このことは、敵の後続部隊の阻止を行わなければ防御線一帯の自軍はたとえ第一梯隊を撃破できたとしても戦力を消尽し、優勢な第二梯隊の前に結局は敗れ去るだろうという説明から伺える[71]。

---

[67] McKercher, *The Operational Art*, p. 156.
[68] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, pp. 32-33.
[69] *Ibid.*, p. 39.
[70] *Ibid.*, pp. 34-36.
[71] *Ibid.*, p. 36.

防御線の向こう側の地域は、より積極的に戦うことが必要な場所へと変化し始めた。従来、防御線の向こう側の地域での戦い方は、敵の後続部隊を待ち受けて火力を発揮することを基調としていた。しかし、「結合戦場」構想では防御線の向こう側の地域で攻勢に転じることが選択肢の一つとなっていた[72]。また、「結合戦場」構想では戦術核の使用が防御線の向こう側の地域での戦いにおける有力な選択肢となっていた。この当時、目標発見率の向上や即時通信あるいは火器の長射程化の分野における技術の進歩への期待が高まっていた[73]。

その後、阻止に関する戦い方の構想はさらに発展したが、戦場を観る視点が大局的かつ長期的なものに発展する上で重要な役割を果たしたのは、軍団による戦い方を具体化することを目標とした「軍団 86（Corps86）」研究だった。1978 年以来、スターリーは、近い将来、すなわち 1980 年代中旬における師団から軍までの各級部隊の戦い方を具体化することを目標とする、いくつかの実証的な研究を継続していた。これらの研究の目的は、具体化した各級部隊の戦い方を編制の見直しや新装備の開発あるいは訓練の充実など、戦いに関連する分野の改革に反映することだった[74]。スターリーは、これらの研究の中でも特に「軍団 86」研究に「結合戦場」構想を取り込み、軍団が防御線の向こう側の地域で敵の後続部隊を阻止するための戦い方を具体化した。1980 年 10 月、「軍団 86」研究から着想を得たスターリーは、さらに積極的に敵の後続部隊を阻止する「拡大された戦場（Extended Battlefield）」（以下、「拡大戦場」と表記する）の概念をまとめ上げた。

「軍団 86」研究が特に強調したことは、軍団長以下の各級指揮官がより長い距離と時間の基準を使って戦場を観ることの重要性だった。各級指揮官の戦場を観る視点を拡げるため、「軍団 86」研究は「結合戦場」構想と同様に距離と時間の概念を使いながら、敵の後続部隊の阻止における各級指揮官の責任地域を整序し直した。「結合戦場」構想で設定された各級指揮官の阻止の責任地域は、各級指揮官が手持ちの情報収集手段と火力を使って即時に敵に影響を与える地域と定義され、「影響力行使地域（Area of Influence）」と名付けられた。一方、その距離と時間の基準は変更されなかった[75]。

各級指揮官の戦場を観る視点を拡げたのは、「影響力行使地域」よりもさらに遠方に設定された「関心地域（Area of Interest）」であった。この「関心地域」は情報収集を行う地域を意味しており、将来の戦いに脅威を及ぼす敵を発見する地域と定義された。各級指揮官に求められていたのは、早期に「関心地域」で敵の後続部隊に関する情報を収集して阻止の準備を開始し、敵の後続部隊が「影響力行使地域」に進入したら直ちに阻止を開始することだった。軍団長には防御線の向こう側の遠方 300km から防御線までの地域、もしくは 96 時間以内に防御線に到着する後続部隊の情報を収集する地域という、「関心地域」に関する距離と時間の基準が与えられた。同様、師団長の「関心地域」の基準は 150km 以内もしくは

---

[72] *Ibid.*, pp. 33-35.
[73] *Ibid.*, pp. 33-34.
[74] Starry, “To Change an Army,” p. 26.
[75] Headquarters, United States Army Training and Doctrine Command, *TRADOC Pamphlet No. 525-5: Operational Concept for the AirLand Battle and Corps Operations-1986* (Fort Monroe, Va.: United States Army Training and Doctrine Command, 1981), pp. 26, 40.

72 時間以内であり、旅団長の「関心地域」の基準は 70km 以内もしくは 24 時間以内であった。

一方、実際には各級指揮官はこれほど遠方で情報を収集できる手段を保有しておらず、各級指揮官は「関心地域」での情報収集の殆どすべてを上位の部隊に依頼しなければならなかった。しかし、情報収集能力がなかったにも拘わらず「軍団 86」研究は、防御線一帯に到着する前に敵の後続部隊を打ち負かすという目的のためには、各級指揮官がこの目的に見合った距離と時間の範囲で戦場を観ることが必要だと結論づけていた[76]。

また、この「軍団 86」研究から着想を得て作り出した「拡大戦場」の概念においてスターリーが特に強調したことは「影響力行使地域」を一つの戦場として捉え、この戦場内におけるそれぞれの戦いを一つにまとめ上げることの重要性であった[77]。同時に「影響力行使地域」を一つの戦場として捉えることは、第一会戦や防御線一帯に注目した 1976 年版 FM100-5 の視点を事実上放棄することを意味していた。このことは、「これまで我々陸軍は、主会戦地域〔防御線上の陣地〕での勝利に訓練の努力の殆どすべてを集中していた。しかし今や、軍団や師団が『影響力行使地域』の全域において同時に敵の部隊と戦うという、新次元の戦いの時代が到来したのだ」というスターリーの説明から伺える[78]。一方、防御線の向こう側の地域における戦いと防御線一帯における戦いは同一の戦いの中の二つの構成要素に分類され、それぞれ「防御線の向こう側の地域の奥深くでの会戦（Deep Battle）」及び「至近距離の会戦（Close-in Battle）」と名付けられた。

「影響力行使地域」での戦いに全体としてのまとまりを持たせる上で必要不可欠かつ重要だったのは、さらに積極的に戦うことによって主導権を握り、かつ自らの力で将来の戦いのための有利な条件を作り出すことにより、最終的な勝利に向かって戦い全体を牽引することだった。従来の阻止において将来の戦いのための有利な条件を作り出すことが容易だったのは防御側ではなく、防御線に向かって攻撃する側だった。従来の阻止において防御側は敵の後続部隊を待ち受けて、すなわち敵の出方に応じながら火力を発揮することを基調とした。一方、攻撃側は攻撃の目標や方向あるいは攻撃開始時刻を自由に変更することが可能であり、いつ、どこで次の戦いを戦うか、あるいは戦わないかを決定する主導権を握っていた。より望ましい時期や場所あるいは態勢で次の戦いを戦い、そして戦いに全体としてのまとまりを持たせるためには、敵から主導権をもぎ取り、かつ奪い取った主導権を維持し続けることが可能な、「結合戦場」構想よりもさらに積極的な戦い方が必要だった。

明らかに「拡大戦場」の戦い方はさらに積極的に戦うことによって主導権を敵から奪い、最終的に主導権を保持し続けることを目指していた。スターリーは、これまで防御線の向こう側の地域で敵の後続部隊を撃破または遅滞することを意味していた「阻止（Interdiction）」という用語を「攻撃（Attack）」に置き換え、さらには「防御線の向こう側の地域の奥深くでの攻撃（Deep Attack）」（以下、「縦深攻撃」と表記する）という概念を「拡大戦場」

[76] *Ibid.*, pp. 26-27, 41-44.
[77] Donn A. Starry, "Extending the Battlefield," *Military Review*, Vol. 61, No. 3 (March 1981), p. 39.
[78] Ibid., p. 47.

の概念の中心に据えた[79]。「縦深攻撃」の目的は敵の後続部隊を撃破または混乱させることによって敵から行動の自由を奪い、最終的に防御線の向こう側の地域で攻勢に転じる機会を作り出すことだった[80]。また、「縦深攻撃」の手段には従来の阻止における主な手段であった火力に加えて、地上部隊による攻撃が含まれていた。さらに、スターリーは「政治目標の追求ために政治権力者が一度軍隊を投入したならば、軍は何物かを勝ち取らなければならない。……軍の作戦の目的はただ単に敗北を回避することではない」と説明し、勝利を獲得するためにはより積極的に戦って主導権を掴み、攻勢に出ることが重要であると主張した[81]。

「縦深攻撃」は戦いに全体としてのまとまりを持たせるための主要な手段であった。このことは「縦深攻撃」に関する二つの説明から伺える。その第一は、将来の戦いにとって望ましい状況を創り出すためには「影響力行使地域」内のどこで、いつ、敵をどのような態勢に陥らせることが必要なのかを念頭に置きながら「縦深攻撃」を行うことを各級指揮官に要求したことである[82]。「縦深攻撃」が目指していたのは断片的な敵の撃破や妨害ではなく、各級指揮官が自ら望む方向に戦いを牽引することだった[83]。「拡大戦場」の戦い方では情報収集が重視され、各級部隊の情報将校には自軍の「縦深攻撃」よって敵がどのような態勢に陥るのか及びその時にはどのような選択肢が敵に残っているかを継続的に予測することが要求されていた。

第二は、第一梯隊と第二梯隊の両方に対して同時に「縦深攻撃」を行うことを各級指揮官に要求したことである。この目的は一人の指揮官のもとで第一梯隊と第二梯隊の両方に対する「縦深攻撃」を計画かつ遂行することにより、二つの戦いを強固に繋ぎ合わせて戦いの当初の段階から敵の主導権を奪い、最終的に攻勢に転じる機会を作り出することだった[84]。スターリーはこの二つの戦いを分担することを戒めていた。軍団長に求められていたことは第一梯隊軍を「影響力行使地域」において攻撃すると同時に、第二梯隊軍を「関心地域」において監視して「影響力行使地域」に入った直後に攻撃することだった。同様、師団長には第一梯隊師団を「影響力行使地域」において攻撃すると同時に、第二梯隊師団を「関心地域」において監視して「影響力行使地域」に入った直後に攻撃することが求められていた[85]。

スターリーは、公式の戦い方として、同時に陸軍改革を導く指針として「軍団 86」研究と「拡大戦場」の概念を陸軍内に普及した。スターリーは、空地におけるあらゆる機動と火力を相互作用させるという趣旨を明瞭に表現するため「拡大戦場」の概念を「エアランド・バトル」と改称した[86]。1981 年 3 月、スターリーは「エアランド・バトル」の概念と「軍団 86」研究を綴じ合わせた『TRADOC パンフレット 525-5：作戦概念「エアランド・バト

[79] Ibid., pp. 32-36; Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 44.
[80] Starry, "Extending the Battlefield," pp. 34-38.
[81] Ibid., pp. 32-36.
[82] Ibid., pp. 38, 46.
[83] Ibid., pp. 32, 38.
[84] Ibid., pp. 34, 36, 38-39.
[85] Ibid., pp. 36-37.
[86] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 44.

ル及び軍団 86」（*TRADOC Pamphlet 525-5: U.S. Army Operational Concepts The AirLand Battle and Corps86* ）』（以下、「TRADOC パンフレット」と表記する）を刊行した。この巻頭でスターリーは、TRADOC パンフレットの目的は作戦概念を普及することにあり、作戦概念は戦闘間におけるすべての部隊の行動を描き出し、同時に訓練や編制、ドクトリンあるいは装備開発といった分野における軍の改革及び実際に部隊が行う訓練や作戦準備にとっての指針であると説明した[87]。

この他、「軍団 86」研究と「拡大戦場」の概念は陸軍と空軍との連携を強化した。陸軍には「影響力行使地域」で敵の後続部隊を攻撃することが可能な長射程火力が限られていた。陸軍の限られた「縦深攻撃」の能力を補うため、空軍が行う対地攻撃の中に「戦場航空阻止（Battlefield Air Interdiction: BAI）」の区分が新たに追加された。「戦場航空阻止」の目的は陸軍の部隊指揮官の要求に基づき「影響力行使地域」において敵の後続部隊を攻撃し、行動の自由を敵から奪い取ることだった。「戦場航空阻止」は「縦深攻撃」の主要な手段となった[88]。

戦場を観る視点を変えたことは、1976 版 FM100-5 の桎梏から解放された新しい戦い方を誕生させた。第一会戦や防御線一帯といった特定の時期と場所での戦いを重視する戦い方は TRADOC パンフレットから取り払われていた。同様、敵の攻撃を待ち構えながら戦力を一点に集中することを重視する戦い方は後退した。代わって重視されるようになった戦い方は、空間的及び時間的に拡大した戦場の中でそれぞれの戦いの効果を総合することによって戦いに全体としてのまとまりを持たせるという戦い方であり、積極的な攻撃によって敵を混乱させて戦いの早い段階から主導権を獲得する戦い方であった[89]。

注目に値するのは、TRADOC パンフレットにおいて「縦深攻撃」の重要性は防御だけに限ったものではなく、むしろ攻撃においては「縦深攻撃」は一段と必要不可欠であると強調されていたことである[90]。戦場を観る視点を拡大した研究の中で誕生し、戦いに全体としてのまとまりを持たせるための主要な手段であった「縦深攻撃」の概念は、これとの親和性が高い戦場を観る視点や概念とともに、広く通じる一般化された概念としてドクトリンに取り込まれていった。

### （4） 「戦役」の概念の導入

広い地域と長い時間の範囲の中で起こるそれぞれの戦いに全体としてのまとまりを持たせることにより最終的な勝利の獲得を目指すという戦い方は、1982 年 8 月に改訂された『野外教範 100-5：作戦』（以下、「1982 年版 FM100-5」と表記する）において具体化さ

---

87 TRADOC, *TRADOC Pamphlet No. 525-5*, p. i.
88 *Ibid.*, p. 10; Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1982), pp. 7-11 to 7-12; Richard Davis, *The 31 Initiatives: A Study in Air Force-Army Cooperation* (Washington, D.C.: Office of Air Force History, 1987), pp. 58-59.
89 TRADOC, *TRADOC Pamphlet No. 525-5*, p. 2.
90 *Ibid.*, p. 11.

れ、その後、1986 年 5 月に再改訂された『野外教範 100-5：作戦』（以下、「1986 年版 FM100-5」と表記する）において完成した。1982 年の改訂はスターリーが先鞭をつけ、第 3 代 TRADOC 司令官オーティス大将が引き継いだ。また、第 4 代 TRADOC 司令官リチャードソン大将は 1986 年の改訂を主導した。

大局的かつ長期的な視点に基づき戦いに全体としてのまとまりを持たせることの重要性及び個々の戦闘（engagement）や会戦（battle）に勝利することはそのままでは戦争目的の達成に貢献しないという戒めを明瞭に表現することが、1982 年及び 1986 年の二回に及ぶ野外教範の改訂において特に重視された事項だった[91]。これらが重視されていたことは、「戦役（Campaign）」の概念及びこれと直接関係する「作戦術（Operational Art）」などの諸概念が 1982 年版 FM100-5 において初めて導入され、1986 年版 FM100-5 に再定義されたことから伺える。

1982 年版 FM100-5 において「戦役」は、「特定の空間と時間において同時かつ連続的に起こる諸会戦の中で敵部隊を撃破することを目指す、持続的な複数の作戦」[92]と定義された。その後、「戦役」は 1986 年版 FM100-5 において「戦域の中で戦略目標を達成することに向かって設計された、統合による一連の諸行動」[93]と再定義された。また、「作戦術」は「複数の戦役や大規模作戦の設計、組織化及び遂行を通じて、戦域もしくは作戦域の中で戦略目標を達成するために軍隊を運用する術」[94]と定義された。一方、戦争の準備から遂行までに含まれる諸活動が、階層構造を成す、相互に連関する独立した三つの次元に区分された。最上位となる次元は、軍事力の直接的及び間接的行使を通じて政治的目標を達成することを目的とし、このために戦域や作戦域の中において達成すべき目標を設定する「軍事戦略（Military Strategy）」の次元だった。階層構造の基礎となる次元は、戦闘や会戦の勝利を獲得するために保有する戦闘力を行使する「戦術（Tactics）」の次元だった。「作戦術」は「軍事戦略」と「戦術」を繋ぐ次元とされ、「軍事戦略」が設定する目標を効果的な戦役に変換し、かつ「戦術」の結果を戦役に反映する次元と定義された。1986 年版 FM100-5 はこれらの三つの次元を明瞭に区分しながら記述され、同時に三つの次元の活動を総合することの重要性を強調していた[95]。

「戦役」の概念及びこれと直接関係する諸概念をドクトリンに導入したことには、ドクトリンを読んだ将校の知識を増加させたこと以上の重要性があった。戦闘や会戦の勝利を獲得する能力と戦争の勝利を獲得する能力は別物だということに気づいていた将校は少なくなかったけれども、殆どのアメリカ陸軍の将校にとって戦いに全体としてのまとまりを持たせて戦争の勝利に繋げていくという行為は、それまでの軍務や経験を通じて学習した事項の枠外だった。ベトナム戦争後のアメリカ陸軍における戦い方の改革の知的側面を捉え

---

91 Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 61; McKercher, *The Operational Art*, p. 163.
92 Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1982), p. 2-3.
93 Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1986), p. 10.
94 *Ibid.*
95 *Ibid.*, pp. 9-10.

た「欠落を埋める：作戦術とアメリカ陸軍（“Filling the Void: The Operational Art and the U.S. Army”）」と題する論文を執筆したスウェイン（Richard M. Swain）は、「戦役」の概念を導入したことが最も重要だったと評価している。スウェインは、概念は人間の思考を整理し、同時に概念は人間の行動に影響を及ぼすと説明した上で、「戦役」の概念及びこれと直接関係する概念群が導入された陸軍のドクトリンは将校が目の前で起こった事象を解釈することを容易にし、彼らの行動に指針を与えるものになったと評価している[96]。

「戦役」の概念及びこれと直接関係する諸概念に対する理解が陸軍内に広がっていく過程において重要な役割を果たしたのは、陸軍の内外や階級の上下を問わずに公開された場所で戦い方に関する専門的な論争を継続していたことだった。1981 年、防衛問題の評論家ルトワック（Edward N. Luttwak）は『国際安全保障（*International Security*）』誌上に「戦争の作戦次元（“The Operational Level of War”）」と題する論文を発表した。この論文の中でルトワックは、英語圏には戦略目標の達成に向かって戦術的な諸活動を意識的に使用する際に指針となる概念が存在しないと主張した[97]。ルトワックの主張は戦術次元の活動、すなわち個々の戦闘や会戦あるいはその結果を一つの枠組みの中でまとめ上げることの重要性を示唆していた。その後も戦い方の改革は、大隊級までのすべての陸軍部隊、陸軍内の教育や研究の機関、ルトワックやリンドなどの陸軍外部の研究者、さらには政府や議会の有力者からの意見を聴取しながら進んだ[98]。

同様、陸軍の高等教育機関である戦争大学（Army War College）が重要な役割を果たした。1976 年版 FM100-5 の改訂作業が行われていた 1981 年 8 月に TRADOC 司令官に就任したオーティスは、戦略次元と戦術次元とを繋げる「戦争の作戦次元」の概念を新しい FM100-5 に追加することを決定した。この追加事項は、前 TRADOC 司令官のスターリーが改訂作業中の FM100-5 の草稿を全陸軍に照会した際、戦争大学が強く要望した内容だった[99]。この他、戦争大学で教鞭をとっていたサマーズ（Harry G. Summers）大佐は 1982 年に『戦略論（*On Strategy*）』[100]を出版した。この研究はクラウゼヴィッツ（Carl von Clausewitz）の「戦略」の概念、すなわち「戦争目的を達成するために戦闘を使用する」[101]という概念を下敷きとして、対ゲリラ戦では戦術的な勝利を収めたけれども戦争に敗北したベトナム戦争の敗因を分析するという内容だった。クラウゼヴィッツの『戦争論（*On War*）』は、ベトナム戦争の失敗を二度と繰り返さないと決意するアメリカ軍人に大きな手がかりを与えた[102]。

---

[96] McKercher, *The Operational Art*, pp. 147, 160, 166.
[97] *Ibid.*, p. 161; Edward N. Luttwak, “The Operational Level of War,” *International Security*, Vol. 5, No. 3 (Winter 1980-1981), pp. 61-62.
[98] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, pp. 57-58, 65-66.
[99] *Ibid.*, p. 61; George F. Hofmann and Donn A. Starry ed., *Camp Colt to Desert Storm: The History of U.S. Armored Forces* (Ken.: The University Press of Kentucky, 1999), pp. 386-388.
[100] Harry G. Summers, *On Strategy: A Critical Analysis of the Vietnam War* (Novato, Ca.: Presidio Press, 1982).
[101] クラウゼヴィッツ『戦争論（上）』篠田秀雄訳（岩波文庫、1968 年）142-143 頁。
[102] 片岡『軍事の事典』146-148 頁。1976 年にハワード（Michael Howard）とパレット（Peter Paret）が翻訳したクラウゼヴィッツの『戦争論』は英語圏で広く読まれた。片岡は、ベトナム戦争後にアメリカ

さらに指揮参謀大学は、「戦役」の概念及びこれと直接関係する諸概念の発展、並びにこれらの諸概念のドクトリンへの導入を牽引する、アメリカ陸軍における戦い方の改革の知的中枢となった。TRADOC 司令官を離任する直前の 1981 年 7 月、スターリーは、それまで TRADOC 司令部内に編成した特別チームが実施していたドクトリン開発の任務を指揮参謀大学に移管した[103]。スターリーは、指揮参謀大学の教授陣が戦い方に関する知的研究と思索を繰り返して新しいドクトリンを執筆しなければ、学生に新しいドクトリンを適切に説明することはできず、この結果、学生は新しいドクトリンを十分に理解しないまま卒業してしまうことになると判断した。スターリーは、各学校は陸軍の思考様式を変える原動力であると信じていた[104]。

指揮参謀大学における「戦役」に関係する諸概念の発展及びドクトリンの開発、さらには次の世代を担う将校の育成を監督した人物はリチャードソンだった。リチャードソンは 1979 年 10 月から指揮参謀大学の校長を務めた。その後、リチャードソンは 1981 年 8 月からは指揮参謀大学の監督責任を持つアメリカ陸軍作戦担当参謀次長（Deputy Chief of Staff for Operations and Plans: DCSOPS）、さらに 1983 年 3 月から 1986 年 6 月に退役するまで指揮参謀大学を直接監督する TRADOC 司令官を務めた。リチャードソンは指揮参謀大学の校長に就任してから合計 7 年間にわたり、指揮参謀大学における知的研究と思索、陸軍のドクトリン開発及びこれに関する教育プログラムの改革にリーダーシップを発揮した。リチャードソンは礼儀正しく物静かに指揮参謀大学の発展を見守った[105]。

1976 年版 FM100-5 の改訂が始まった 1980 年の初頭、リチャードソンは指揮参謀大学戦術部で教鞭をとっていた三人の中佐をドクトリン改訂の責任者に指名した。この三人の責任者のうちセーゲ（Huba Wass de Czege）[106]中佐とホルダー（Leonard D. Holder Jr.）[107]中佐は、1984 年に 1982 年版 FM100-5 の改訂が始まった時もリチャードソンからの指名を受けて、再び改訂の責任者になった。

戦争の様相の変化の速度及び戦場内における作戦の進展速度が増大していると判断していたリチャードソンとセーゲは、「かくすべし」や「かくすべからず」といった規範的な表現を多用しながら戦い方を説明していた 1976 年版 FM100-5 の記述様式を見直し、1982 年

---

陸軍がクラウゼヴィッツに傾倒したことを「クラウゼヴィッツ・ルネサンス」と称している。

[103] Romjue, *From Active Defense to AirLand Battle*, p. 61.

[104] McKercher, *The Operational Art*, p. 158.

[105] *Ibid.*, pp. 157-158.

[106] 1964 年に陸軍士官学校卒業。ベトナム戦争に二度参加。ハーバード大学において修士号（行政学）を取得。指揮参謀大学卒業後に将校教育改革プロジェクトに従事。1980 年からは指揮参謀大学戦術部ドクトリン課主任として 1982 年版 FM100-5 の編纂に従事。1982 年からはアメリカ陸軍作戦担当参謀次長リチャードソン中将の監督のもと、米陸軍戦略大学フェローとして指揮参謀大学改革に従事。1983 年からは高等軍事研究校（SAMS）初代校長。1985 年に退役。退役時、准将。

[107] 1966 年にテキサス A&M 大学卒業。騎兵将校としてベトナム戦争に参加。ハーバード大学で修士号取得（歴史学）。セーゲとともに 1982 年版 FM100-5 の開発に従事。1984 年から SAMS の教授育成プログラムに参加。1987 年から 1989 年まで第三代 SAMS 校長。湾岸戦争では第 2 装甲騎兵連隊長。1995 年から 1997 年まで指揮参謀大学校長。1997 年に退役。退役時、中将。

版 FM100-5 では概念的で説明的な記述様式を採用した[108]。また、1986 年版 FM100-5 では「作戦術」の概念が再定義され、「戦役」に関連する諸概念が明瞭に体系化された[109]。リチャードソンとセーゲは、戦争の様相の変化及び戦場内における作戦の進展に関する速度が増大しているため、定められた方法を遵守するような戦い方はもはや不適切であり、戦場の状況に応じてドクトリンに記述された抽象的な概念を創造的に適用しながら戦うこと及び創造的にドクトリンを適用できる将校を育成することが重要だと判断する点で一致していた[110]。

ドクトリンを創造的に適用できる将校を育成するためにリチャードソンとセーゲは、指揮参謀大学内に高等軍事研究校（School of Advanced Military Studies: SAMS）を設立した[111]。リチャードソンとセーゲが高等軍事研究校の教育の中心に据えたものは、戦術次元と作戦次元に関する知的研究と思索（science）及び適用術（art）に関する教育だった。知的研究と思索は、変化に適応する上で必要な軍事的判断力を強化するためには不可欠なものと位置づけられていた。一方、適用術は、知的研究と思索を通じて強化した軍事的判断力をもって実際の状況に適した解決策を創造する能力であり、実務家（practitioner）にとって必要不可欠な能力として位置づけられていた[112]。高等軍事研究校の学生は、教育の初期にクラウゼヴィッツなどの古典を使って「戦役」に関係する諸概念について理解を深め、その後、これらの諸概念を下敷きとしながら大規模な戦いや戦車部隊の戦いについて研究した。また、高等軍事研究校の教育を修了した学生は、師団や軍団の作戦参謀として配置された[113]。

## 2　湾岸危機と「砂漠の盾」作戦――サウジアラビアの防衛

アメリカは冷戦期から湾岸地域に関心を持ち、戦力を展開する準備を進めていたにも拘わらず、湾岸危機への対応は遅れた。また、中央軍司令官シュワルツコフ大将はイラク軍との戦いを想定した指揮所演習「インターナル・ルック 90（Internal Look 90）」を実施していたにも拘わらず、陸上作戦の準備は事実上進まなかった。

イラクによるサウジアラビア侵攻の可能性が切迫し、サウジアラビアがアメリカ軍の受け入れを表明した後、湾岸地域へのアメリカ軍の派遣が始まった。しかし、陸軍の派遣に関

---

108 McKercher, *The Operational Art*, p. 159.
109 Department of the Army, *FM100-5 Operations* (1986), p. 10; Schubert, *The Whirlwind War*, p. 27; 齋藤「AirLand Battle 再考」90-93 頁。
110 Huba Wass de Czege, "The School of Advanced Military Studies: An Accident of History," *Military Review*, Vol. 89, No. 4 (July-Aug. 2009), pp. 102-103; Interviewed by Lieutenant Colonel Michael W. Ackerman, *Senior Officer Oral History Program, Project 1987-18, General William R. Richardson, U.S. Army, retired* (Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 1987), pp. 310-311.
111 Ackerman, *Richardson Oral History*, p.335. リチャードソンは、SAMS の新設はセーゲとリチャードソンの二人で考案したと述べている。
112 Huba Wass de Czege, "How to Change an Army," *Military Review*, Vol. 64, No. 11 (Nov. 1984), pp. 45-46.
113 McKercher, *The Operational Art*, pp. 160-161; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 27-28; 北川『軍事組織の知的イノベーション』154-155 頁。

してシュワルツコフが戦闘部隊の派遣を優先した結果、兵站部隊の展開は遅れ、陸上作戦の準備は難航した。アメリカ軍の陸上作戦準備が整っていないうちにサウジアラビアを攻撃した場合、イラク軍は、アメリカ軍が陸上戦力を湾岸地域に展開するために必要だったサウジアラビアの港湾や飛行場を確保できる可能性があった。一方、即応部隊として整備されたアメリカ海兵隊は、戦力は限定的だったけれども、陸軍よりも早く戦力を発揮できる態勢を整えた。

イラク軍によるクウェート侵攻から2か月後の1990年10月、「砂漠の盾（Desert Shield）」が完成した。サウジアラビアの防衛態勢を確立した中央軍は、陸上攻勢作戦の検討を開始した。しかし、陸上攻勢作戦の計画は、ブッシュ（George H. W. Bush）大統領が陸上戦力の増派を決定するまで紆余曲折した。クウェートとサウジアラビアの国境から遠く離れた西部の砂漠から第7軍団と第18空挺軍団が攻撃するという計画をシュワルツコフが具体化したのは、1個軍団の増派が明らかになった1990年11月以降だった。

### （1） 湾岸危機前のアメリカ軍

#### ア 中央軍の創設

1983年1月、中央軍が創設された。中央軍はすべての軍種を統合した戦域軍であり、中東から西アジアを担任した。中央軍の母体となったのは、1980年3月に創設された緊急展開統合軍（Rapid Deployment Joint Task Force: RDJTF）だった。1979年末、中東ではイラン革命、アメリカ大使館人質事件及びソ連によるアフガニスタン侵攻が起こった。ペルシャ湾岸の地域を死活的な国益と見做したアメリカ政府は、プレゼンスを強化するため、緊急展開統合軍を設立した[114]。

中央軍はソ連によるイラン侵攻を想定していたにも拘わらず、担任地域内に大規模な陸軍部隊を駐留させていなかった。陸軍の部隊を湾岸地域に派遣することが、イランにソ連軍が侵攻した場合における対処の基本方針だった。中でも特に重要だったのは、即応部隊を速やかに湾岸地域に派遣し、陸軍の主力部隊が到着するまでの時間を稼ぐことだった。中央軍の作戦計画「1002-90」は、当初、派遣された即応部隊がザグロス山脈においてソ連軍を阻止している間に大規模な戦力を湾岸地域に輸送し、戦力を十分に蓄えた後にソ連軍に対して反撃するという内容だった[115]。

中央軍司令部は、フロリダ州タンパのマクディール空軍基地に設置された。また、担任地域内のアラブ諸国軍との関係構築は低調だった[116]。

---

[114] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 42; 佐々木卓也編『戦後アメリカ外交史（新版）』（有斐閣、2009年）160-161頁。
[115] Schubert, *The Whirlwind War*, p. 43.
[116] *Ibid.*, pp. 12-14; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 42.

イ　イラクの脅威を警戒した新中央軍司令官シュワルツコフ

1988 年 11 月、陸軍参謀本部の作戦計画部長を務めていたシュワルツコフが中央軍司令官に就任した。就任直後からシュワルツコフはアラブ諸国との関係強化を図った。シュワルツコフはサウジアラビア、エジプト及びパキスタンを訪問し、政府や軍の高官あるいは王族との関係を構築した。また、シュワルツコフはアラブ諸国との安全保障協力を担任する部署を中央軍司令部内に設置し、共同訓練や人道支援を実施した[117]。

シュワルツコフは、ソ連だけではなく、イラン・イラク戦争によって陸上戦力を膨張させたイラクを脅威と見做した。一方、国防総省内では、イラン・イラク戦争で疲弊したイラクは脅威ではないという意見が少なくなかった。

イラクに関する見解の相違は、ソ連の脅威が後退すると顕在化した。統合参謀本部議長クロウ（William J. Crowe）大将は、湾岸地域で危機が起こった際に派遣する戦力を削減すべきだと主張した。一方、シュワルツコフはクロウの主張に反対した。クロウの後任として統合参謀本部議長に就任したパウエル（Colin L. Powell）大将は、シュワルツコフを支持した。一方、パウエルもシュワルツコフも、ソ連軍と戦う見込みが少なくなった以上、中央軍の編制や装備を見直さなければならないと考えていた。シュワルツコフは、イラン・イラク戦争後も軍備を縮小していないイラクを警戒しながら、作戦計画の見直しを進めた[118]。

ウ　インターナル・ルック 90

1990 年 7 月、シュワルツコフは、統合参謀本部から正式な承認を得ていなかったにも拘わらず、指揮所演習「インターナル・ルック 90」において、イラクを想定した作戦計画の検証を実施した[119]。「インターナル・ルック」は中央軍が毎年行っていた演習だったが、1990 年まではソ連軍による侵攻を想定していた。「インターナル・ルック 90」はイラク軍による侵攻を想定した初めての演習だった。

「インターナル・ルック 90」の想定は、サウジアラビアに侵攻したイラク軍の重師団を中央軍が阻止するという内容だった。中央軍が運用する主要な部隊は、3 個師団基幹の第 18 空挺軍団及び第 5 海兵遠征旅団（5th Marine Expeditionary Brigade: 5MEB）だった[120]。

「インターナル・ルック 90」から得た教訓のうち、中でも特に重要だったのは、中央軍の現有兵力ではイラク軍を阻止することは困難という教訓だった[121]。演習間、イラク軍の機

117 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』289-298 頁；ロジャー・コーエン、クラウディオ・ガッティ『シュワルツコフ正伝 PART-2――砂漠の嵐』鈴木主税訳（ダイヤモンド社、1991 年）45 頁。
118 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』282、302-306 頁。
119 同上、305-306 頁。
120 MEB は 1 個海兵連隊及び海兵航空群を基幹とする海兵空地任務部隊（Marine Air Ground Task Force: MAGTF）である。
121 Charles Lane Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm: From Planning to Victory* (Central Point, Oreg.: Hellgate Press, 2004), pp. 11-15; Ronald J. Brown, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With Marine Forces Afloat in Desert Shield and Storm* (Washington, D.C.: History and

甲部隊は、アメリカ軍の航空機やヘリコプターによって損害を受けたにも拘わらず、サウジアラビア領内 200km の地点まで侵入した。演習が終了した時、第 18 空挺軍団隷下の第 101 空挺師団（空中強襲）は、戦力を約 50%まで低下させ、ダーラン（Dhahran）、ダンマーム（Dammam）及びアブカイク（Abqaiq）を辛うじて確保しているという状況だった。この他、中央軍は、アメリカ軍が湾岸地域に展開するためにはサウジアラビアの協力が必要不可欠であるという教訓を得た。

湾岸危機が起こる直前に実施された「インターナル・ルック 90」が、湾岸危機への対応においてどの程度役に立ったかを評価することは困難であるが、役に立った点と役に立たなかった点の両方があると言える。「インターナル・ルック 90」の想定は、湾岸危機においてイラク軍が実際に行ったことを予見しており、中央軍が演習において使用したサウジアラビア防衛計画は「砂漠の盾」作戦の基礎となった。しかしながら、「インターナル・ルック 90」で関心を集めていたのは戦闘部隊の所要兵力であった。「インターナル・ルック 90」では殆ど閑却された兵站支援に関する問題及びアラブ諸国との協力に関する問題は、実際の湾岸危機への対応において顕在化した[122]。

### （2） イラクのクウェート侵攻とアメリカの対応

#### ア イラク軍のクウェート侵攻

1988 年 8 月、イラン・イラク戦争は停戦となった。しかし、8 年にわたる戦争を通じて殆ど何も得ることができなかったイラクは 800 億ドルの借款を抱えることになった。一方、イラクは中東地域最大の陸上戦力保有国となった。イラン・イラク戦争後、イラク陸軍は 60 乃至 65 個師団を保有していた[123]。また、イラク陸軍とは別の指揮系統にあった共和国防衛隊（Republican Guard Forces Command: RGFC）は、最新式の戦車 T-72 を装備していた。（以下、イラク陸軍と RGFC を合わせて「イラク軍」と表記する）

1990 年 7 月 17 日、フセイン（Saddam Hussein）大統領はクウェートを非難し、武力行使を示唆した。非難の理由は、石油輸出国機構の要請を無視した石油の増産により、イラクに間接的な経済的被害を与えたというものだった。同じ頃、RGFC 司令官アルラウィ（Ayad Futayih al-Rawi）中将は、フセイン大統領の指示を受け、短期間でクウェートを占領する

---

Museum Divison, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1998), p. 222; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 43-44.

122 Richard M. Swain, *"Lucky War": Third Army in Desert Storm* (Fort Leavenworth, Kans.: U.S. Army Command and General Staff College Press, 1994), p. 35.

123 Kevin M. Woods, *The Mother of All Battles: Saddam Hussein's Strategic Plan for the Gulf War* (Annapolis, Md.: Naval Institute Press, 2008), p. 61. イラク軍の総兵力は第 1 章を参照。イラク軍の総兵力を 10 個軍団、67 個師団、戦車 5,800 両、装甲車 5,100 両及び火砲 3,850 門とする資料もある。詳細は Ibrahim Al-Marashi and Sammy Salama, *Iraq's Armed Forces* (New York: Routledge, 2008), p. 176; United States Department of Defense*, Conduct of the Persian Gulf War: Final Report to Congress* (Washington, D.C.: GPO, 1992), pp. 9-16 を参照。

ことを狙いとする侵攻作戦の準備を開始した[124]。作戦計画を作成したのは RGFC であり、イラク陸軍を統括する参謀本部は関与しなかった[125]。

7 月 21 日、クウェートとイラクの国境線付近に RGFC の 1 個師団が展開し、その 2 週間後には多くの地上部隊が集結した。7 月 25 日、フセイン大統領はグラスピー（April Glaspie）駐イラクアメリカ大使に対して、イラク側の立場を説明し、同時にクウェートとの外交交渉が決裂した場合には戦争も辞さないという決意を表明した。グラスピーは、アラブ人同士の争いには干渉しないと発言する一方、イラク軍が国境線付近に展開していることに対する懸念を表明した。後日、上院軍事委員会において、グラスピーがフセイン大統領に対して平和的な解決を求めたが、クウェート侵攻時にはアメリカが軍事介入するという警告を発しなかったことが明らかになった[126]。回顧録においてパウエルは、ブッシュ大統領がアラブ内の揉め事への関与に消極的だったと指摘している[127]。

8 月 1 日までに RGFC 隷下の 8 個師団がイラクとクウェートの国境線の北側に展開した[128]。同日、イラクとクウェートの間の外交交渉は決裂し、8 月 2 日未明、ハムラビ機甲師団、メディナ機甲師団及びタワカルナ機械化師団の 3 個師団がクウェートに侵攻した[129]。8 月 2 日 0500 までに RGFC はクウェート市に到達し、特殊部隊はクウェート陸軍の退路を遮断した。8 月 2 日の夕方までに RGFC はクウェート市の殆どを占領した。その後、アルラウィ中将は、サウジアラビアに所在する湾岸諸国会議（Gulf Cooperation Council: GCC）の半島防衛旅団の干渉を防ぐため、メディナ機甲師団をクウェート市の西側の地域に配置した[130]。

8 月 3 日、フセイン大統領はクウェート併合を宣言した。しかし、フセイン大統領は、短期決着のために必要だと考えていたクウェート政府要人の捕獲に失敗した。クウェートのジャービル（Jaber Al-Ahmad Al-Sabah）首長とその閣僚は、サウジアラビアに避難した。この他、クウェート陸軍の 2 個旅団が脱出に成功した。この部隊は、後日、アラブ合同軍の一翼を担い、陸上攻勢作戦に参加した。

イ　アメリカ政府及び中央軍の対応

一方、中央軍司令部は「インターナル・ルック 90」を実施しながらイラク軍の動向を注

---

124 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 44.
125 Ibrahim, *Iraq's Armed Forces*, p. 176.
126 ボブ・ウッドワード『司令官たち――湾岸戦争突入にいたる“決断”のプロセス』石山鈴子、染田屋茂訳（文藝春秋、1991 年）253-255 頁。
127 コリン・パウエル、ジョセフ・E・パーシコ『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』鈴木主税訳（角川文庫、2001 年）105 頁。
128 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 8. 展開した 8 個師団は、ハムラビ機甲師団、メディナ機甲師団、タワカルナ機械化師団、アル・ファウ歩兵師団、バグダッド機械化師団、ネブカドネザル歩兵師団、アドナン自動車化歩兵師団及び特殊部隊師団だった。
129 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 45. RGFC 隷下の 4 個師団がクウェートに侵攻したという主張がある。詳細は Ibrahim, *Iraq's Armed Forces*, p. 176 を参照。
130 *Ibid.*, p. 45.

視していた。当初、中央軍司令部は、イラク軍がクウェートとイラクの国境線付近に展開したことを単なる軍事演習と見做した。しかし、7 月下旬以降、中央軍司令部はクウェートへの侵攻の可能性が高いと判断するようになった。この他、アラブ首長国連邦が、それまでアメリカ軍から協力を受けることに消極的だったにも拘わらず、空中給油機の派遣を要請するという新たな動きが起こった[131]。

国防総省も偵察衛星などによりイラク軍の動向を把握していた。国防情報局（Defense Intelligence Agency: DIA）は、7 月 16 日にハムラビ機甲師団隷下の 1 個旅団が国境線付近に展開したこと及び 7 月 19 日にハムラビ機甲師団、メディナ機甲師団及びタワカルナ機械化師団の 3 個師団が国境線から 16 乃至 48km の地域に展開したことを確認した。7 月 24 日（アメリカ東部標準時）、パウエルは、フロリダ州タンパの中央軍司令部でイラク軍の状況を注視していたシュワルツコフに意見を求めた。シュワルツコフは、イラク軍は範囲を限定した攻撃を加える意思があるようだと回答した。パウエルはシュワルツコフに対して、イラク軍が国境線付近で小競り合いを起こした場合と本格的にクウェートに侵攻した場合の二つを想定し、それぞれの場合における対応策を準備するように指示した[132]。

7 月 25 日（アメリカ東部標準時）、グラスピーとフセイン大統領との会談結果を確認したパウエルは、外交交渉の余地が残っていると判断した。あわせて、国境線付近に展開中のイラク軍が陸上作戦に必要な砲兵部隊や兵站部隊を伴っていないという情報を知ったパウエルは、平和的な解決への期待を強めた。7 月 27 日（アメリカ東部標準時）、駐米サウジアラビア大使バンダル（Bandar bin Sultan Al Saud）王子はパウエルに対して、フセイン大統領がサウジアラビアのファハド（Fahd bin Abdulaziz Al Saud）国王にクウェートを侵略しないことを約束したと伝えた。他方、国防総省内では、より強い警告をイラクに伝えるべきだという意見が台頭した。ペルシャ湾に向かっていた空母に加え、インド洋のディエゴ・ガルシア基地に所在していた海兵隊の海上事前集積船（Maritime Prepositioning Ship: MPS）を派遣するという案が浮上した[133]。しかし、パウエルは、派遣の目的が不明確であること、クウェートからの要請がないこと及びクウェート軍が動いていないことを理由として海上事前集積船を派遣するという案を採用しなかった[134]。

7 月 31 日（アメリカ東部標準時）、イラク軍砲兵部隊と兵站部隊が展開したことを知ったパウエルはシュワルツコフに対して、状況を報告するように求めた。8 月 1 日午後（アメ

---

131 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』306-309 頁。

132 ウッドワード『司令官たち』205-206、246-249 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』102-103 頁。

133 MPS は海兵隊が世界中に即応展開を行うための船舶である。MPS の 1 個船隊は 13 隻の徴用商船で編成され、1 個 MEB が 30 日間戦闘できる装備と物資を積載することが可能だった。詳細は James K. Matthews, *So Many, So Much, So Far, So Fast: United States Transportation Command and Strategic Deployment for Operation Desert Shield / Desert Storm* (Washington, D.C.: GPO, 1998), pp. 118, Appendix 5; Paul W. Westermeyer, *U.S. Marines in the Gulf War, 1990-1991: Liberating Kuwait* (Quantico, Va.: History Division, United States Marine Corps, 2014), pp. 8, 37 を参照。

134 ウッドワード『司令官たち』255-269 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』105-106 頁。後日、パウエルは「今となっては、危機を迎えた当初に、政治的、軍事的措置をとらなかったことが悔やまれる」と回顧している。

リカ東部標準時）、国防総省においてシュワルツコフはパウエル及びチェイニー（Dick Cheney）国防長官に対して、イラクがクウェートへ侵攻する可能性があると警告した。しかし、シュワルツコフによる評価は、イラク軍がクウェート全土を占領することはないだろう、イラク軍の目的はクウェート領内のルメイラ（Rumaylah）油田及びブビヤン（Bubiyan）島を占領することだろうという楽観的な内容だった。国防総省からフロリダ州タンパの中央軍司令部に戻ったシュワルツコフは、中央軍司令部に休暇を許可した[135]。

8 月 1 日夜（アメリカ東部標準時）、イラクによるクウェート侵攻が明白となった。パウエルはシュワルツコフをタンパから呼び戻した。8 月 2 日朝（アメリカ東部標準時）、パウエルとシュワルツコフはブッシュ大統領が招集した国家安全保障会議に参加した。シュワルツコフは、サウジアラビア防衛のための作戦計画「1002-90」について報告した際、作戦を実行に移すまでには数か月の準備期間が必要であり、あわせてアメリカ軍が基地を利用することをアラブ諸国に認めてもらうことが必要だと説明した[136]。

8 月 2 日（アメリカ東部標準時）、ブッシュ大統領はイギリスのサッチャー（Margaret Thatcher）首相と会談した。ブッシュ大統領とサッチャー首相は、何らかの行動を起こさなければならないという意見で一致した[137]。

8 月 3 日（アメリカ東部標準時）、再び NSC が開催された。会議の席上、中央情報局ウェブスター（William H. Webster）長官が、イラク軍がサウジアラビアを侵攻した場合、イラクは世界の原油埋蔵量の約 40%を手中に収めると報告した。ブッシュ大統領はチェイニー国防長官に対して、翌日までに軍事オプションを説明するように指示した。しかし、この時、アメリカ軍が湾岸地域に展開するためには必要不可欠だった事項、すなわちサウジアラビアをはじめとするアラブ諸国がアメリカ軍を受け入れるかどうかが明らかになっていなかった。このため、ブッシュ大統領は駐米サウジアラビア大使バンダル王子に対して、アメリカはサウジアラビア防衛のために協力すると申し出た。また、チェイニー国防長官はバンダル王子に対して、アメリカが派遣可能な兵力について具体的に説明した[138]。

8 月 4 日朝（アメリカ東部標準時）、キャンプ・デービッドにおいてシュワルツコフは、湾岸地域への兵力展開の所要時間及び作戦計画「1002-90」を詳しく説明した。シュワルツコフは、サウジアラビアの防衛に必要な陸海空軍及び海兵隊の所要兵力を 20 万乃至 25 万、兵力展開の所要時間を約 17 週間と報告した。あわせてシュワルツコフは、攻勢作戦は全く別の問題であることを強調した上で、攻勢作戦に必要な兵力を数十万、攻勢作戦の開始までの所要時間を 8 乃至 10 か月と説明した。列席者の一部から嘆声が漏れた。しかし、シュワルツコフは、実行可能な計画を提示するため、司令部で徹底的な検討を行っていた。チェイ

---

135 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』309-310 頁；ウッドワード『司令官たち』267-268 頁。
136 ウッドワード『司令官たち』273-280 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』106-107 頁。
137 <https://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/gulf/script_a.html>（2020 年 7 月 24 日アクセス）
138 ウッドワード『司令官たち』291-303 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』107-112 頁。

ニー国防長官とパウエルはシュワルツコフを支持した。

ブッシュ大統領はファハド国王に電話し、サウジアラビアにアメリカ軍を受け入れる意向があるかを探った。ファハド国王は、地上部隊の派遣は必要としないが、サウジアラビア防衛のためにアメリカは何をできるのかを説明してほしいと回答した。このため、ブッシュ大統領は、チェイニー国防長官及びシュワルツコフを中心とする一団をファハド国王のもとに派遣した[139]。

### （3） 「砂漠の盾」作戦の開始

#### ア ファハド国王の決断

「インターナル・ルック 90」の想定と現実に起こった湾岸危機の間には相違点があり、アメリカ政府やアメリカ軍が至急解決しなければならない課題は少なくなかった。主要な課題の第一は作戦基盤を確立することだった。アメリカ軍は、サウジアラビアに展開するためには、受け入れ国となる同国からの支援（host nation support）を受けながら作戦基盤を確立しなければならなかった。第二は、サウジアラビアとの調整メカニズムを確立することだった。サウジアラビアとアメリカの間には軍事協定が締結されておらず、確立された調整の要領はなかった。湾岸危機の以前にサウジアラビアに駐留していたアメリカ軍は、正規軍であるサウジアラビア陸軍（Royal Saudi Land Forces: RSLF）及び国王直属の準軍事組織であるサウジアラビア国家警備隊（Saudi Arabian National Guard: SANG）に対して訓練指導を行う38名の軍事顧問（Project Manager for Saudi Army National Guard: PM-SANG）だけであった[140]。（以下、サウジアラビア陸軍とサウジアラビア国家警備隊をあわせて「サウジアラビア軍」と表記する）

8 月 4 日夜（アメリカ東部標準時）、シュワルツコフは中央軍隷下の中央陸軍（Army Forces Central Command: ARCENT）司令官兼ねて第 3 軍司令官ヨソック（John J. Yeosock）中将に電話し、ファハド国王への説明に同行するように命じた[141]。ヨソックは、湾岸危機に対応するためには欠かせない人物だった。ヨソックは、湾岸地域内に展開した部隊に対する兵站支援に関する責任を持ち、かつ地上部隊を指揮して陸上作戦を遂行する責任を持つ司令官だった[142]。また、ヨソックは、湾岸危機において危機が起こった際、中央軍に対して必要な戦力を提供するアメリカ陸軍総軍（United States Army Forces Command:

---

139 ウッドワード『司令官たち』305-318 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』315-317 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』112-113 頁。

140 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 48. サウジアラビアの軍事機構は Kenneth M. Pollack, *Arabs at War: Military Effectiveness, 1948-1991* (Lincoln, Neb.: University of Nebraska Press, 2002), pp. 427-431 を参照。

141 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 46; Swain, *"Lucky War"*, p. 19; Schubert, *The Whirlwind War*, p. 51. ARCENT は、陸海空軍、海兵隊及び特殊部隊の統合部隊である中央軍の中の陸上構成部隊である。ARCENT 司令部はアメリカ陸軍第 3 軍司令部を母体として編成された。

142 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 57-58.

FORSCOM）の副司令官を兼務していた。さらに、ヨソックには 1981 年から 1983 年までの間、サウジアラビアで軍事顧問として勤務した経験があった。（以下、ヨソックの役職を「ARCENT 司令官」と表記する）

シュワルツコフから指示を受けたヨソックは、直ちに FORSCOM 兵站部長パゴニス（William G. Pagonis）少将を呼び、ファハド国王に拝謁する際に使用する資料の作成を依頼した。ヨソックはパゴニスに対して、部隊が展開するために必要な港湾や道路といった施設の使用及び役務の提供など、サウジアラビアに依頼する支援の内容を明らかにすることを求めた。8 月 5 日朝（アメリカ東部標準時）、ヨソックがサウジアラビアに出発する直前、パゴニスはヨソックに対して、兵站に関するすべての所要を明らかにした兵站支援構想を提出した。ヨソックはこれを採用した[143]。

8 月 6 日、チェイニー国防長官に同行したシュワルツコフはファハド国王に対して、イラク軍の状況とサウジアラビア防衛のための作戦構想を説明し、その後、アメリカ軍の展開に必要な国内施設の使用許可を求めた。シュワルツコフは、ファハド国王は即答しないだろうと予想した。しかし、ファハド国王は、王国内に異教徒を受け入れるという内政上のリスクを含む政治判断だったにも拘わらず、アメリカ軍がサウジアラビア国内に展開することを即座に了承した[144]。

### イ　湾岸地域への派遣

ファハド国王の回答についてチェイニー国防長官から報告を受けたブッシュ大統領は、湾岸地域への派兵を承認した。チェイニー国防長官はパウエルに対して、出動命令を出すように指示した。8 月 7 日（アメリカ東部標準時）、F-15 の 2 個飛行隊、早期警戒管制機部隊、2 個空母戦闘群、2 個海上事前集積船隊及び第 18 空挺軍団隷下の第 82 空挺師団の 1 個即応旅団に対して、湾岸地域への展開命令が発令された[145]。シュワルツコフは、チェイニー国防長官に許可を受けたのち、中央空軍（Air Force Central Command: CENTAF）司令官ホーナー（Charles A. Horner）中将及びヨソックに対して、部隊の出発と受け入れ準備について指示した[146]。

指示を受けたヨソックは、アメリカ本土に所在するパゴニスに電話し、FORSCOM 兵站部長だったパゴニスをサウジアラビアへ連れて行き、サウジアラビアとの調整、部隊の受け入れ及び展開した部隊に対する兵站支援を担任させる旨を伝えた[147]。FORSCOM 司令官バ

---

143 *Ibid.*, pp. 46-47.
144 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』319-323 頁；W.G.パゴニス、ジェフリー・クルクシャンク『山・動く――湾岸戦争に学ぶ経営戦略』佐々淳行監修（同文書院インターナショナル、1992 年）116-117 頁。
145 ウッドワード『司令官たち』343-344 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』114 頁；Schubert, *The Whirlwind War*, p. 50; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 36.
146 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』322 頁。
147 パゴニス『山・動く』117-129 頁。

ーバ（Edwin H. Burba Jr.）大将はパゴニスをサウジアラビアに派遣することを承認した。ヨソックは、サウジアラビアから支援を受けながら巨大な兵力を湾岸地域に展開させるためには、パゴニスの力が必要だと判断した。

サウジアラビア防衛の態勢を早期に確立するため、シュワルツコフは戦闘部隊の展開を優先した。シュワルツコフはヨソックに対して、速やかに第 82 空挺師団の 1 個旅団を作戦構想に基づき配置するように命じた[148]。しかし、この結果、本来であれば先に現地入りして到着する戦闘部隊を受け入れるはずだった兵站部隊の展開が遅れた。8 月 8 日にサウジアラビアに到着したパゴニスを待っていたのは、わずか 4 名で到着する部隊の受け入れを実施するという任務だった。パゴニスは、ARCENT 副司令官（兵站）兼ねて ARCENT 隷下の後方支援コマンド司令官として、部隊の受け入れや現地での調整に奔走した[149]。しかし、兵站支援態勢が機能し始めたのは 11 月中旬であり、優先的に展開した第 82 空挺師団や第 24 歩兵師団（機械化）は、サウジアラビアや海上事前集積船からの支援を受けなければならなかった[150]。

戦闘部隊のうち最初にサウジアラビアに到着したのは、第 18 空挺軍団参謀長スコールズ（Edison E. Scholes）准将と戦闘指揮所の参謀たちだった。スコールズは、サウジアラビア防衛のための作戦計画を作成しながら、次々と到着する部隊を配置することを企図していた[151]。

シュワルツコフは、第 18 空挺軍団司令部の参謀が最初に到着したことに不満を持った。シュワルツコフは、戦闘部隊、対地攻撃機及び攻撃ヘリコプターの派遣を優先するように指示していた[152]。また、シュワルツコフはブッシュ大統領に対して、1 週間後には増強された 1 個空挺旅団が防御の態勢を確立すると説明していた。シュワルツコフは中央軍司令部の参謀たちを怒鳴りつけ、理由を問いただした。

ウ　「砂漠の盾」作戦の問題点

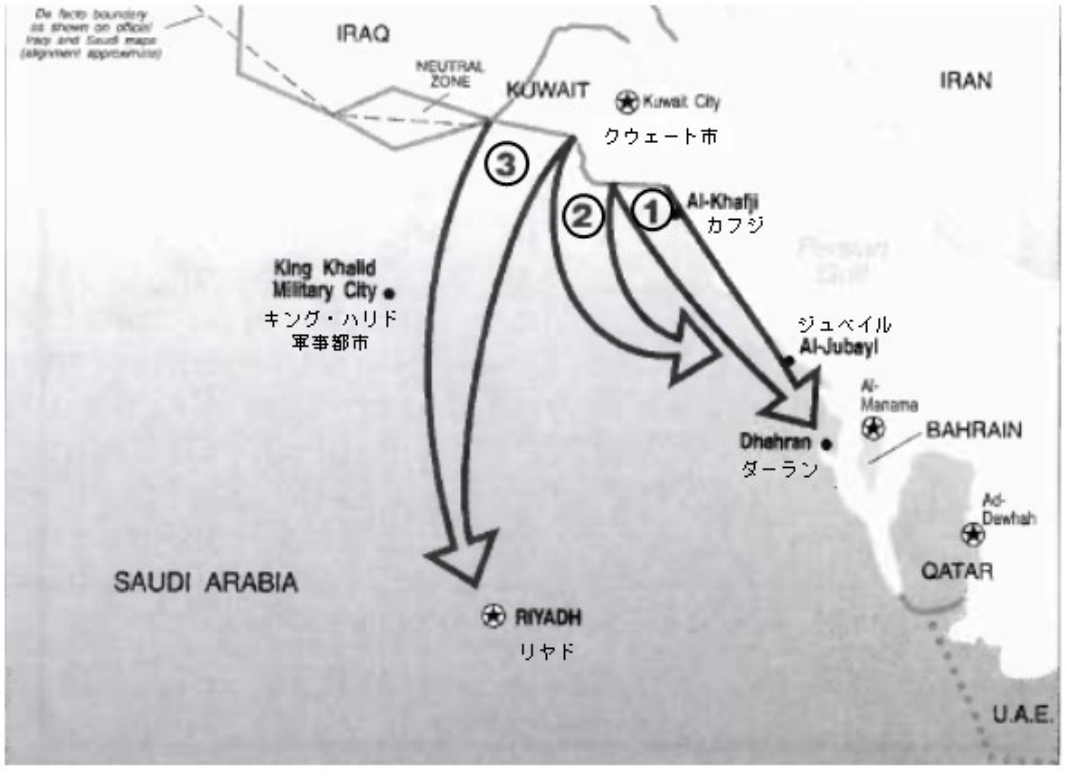
イラク軍がサウジアラビアに侵攻する場合に利用することが想定される経路は次の 3 本だった。（図 5 を参照）

① 海岸線沿いに攻撃してジュベイル（Jubayl）港及びダンマーム港へ至る経路
② 当初、クウェート中央部を道路沿いに攻撃し、その後、海岸線沿いに攻撃してジュベイル港及びダンマーム港へ至る経路
③ 砂漠を横断しながら攻撃してリヤド（Riyadh）へ至る経路

148 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』322 頁。
149 パゴニス『山・動く』136-151 頁。
150 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 34-35.
151 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 48-49.
152 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』326 頁。

特に、イラク軍が侵攻する可能性が最も高いと中央軍司令部が判断した①の経路上には、石油関連施設が多く、またアメリカ軍が湾岸地域に展開するために必要なダーラン空港、ダンマーム港及びジュベイル港が存在した。シュワルツコフは、陸上戦力が到着していない時にイラク軍がサウジアラビアに侵攻した場合、クウェートとサウジアラビアの国境線付近から空軍力で攻撃し、港湾、空港及びリヤドを最終的に保持することを企図した。一方、サウジアラビア軍は可能な限り国境線付近でイラク軍の攻撃を阻止すると主張した[153]。

図5　サウジアラビアへの侵攻方向（見積もり）




出典： Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 32.

シュワルツコフはサウジアラビア防衛作戦を「砂漠の盾」作戦と名付けたが、イラク軍の機甲部隊を阻止することは殆ど困難だった。最も早く到着する予定だった第 18 空挺軍団隷下の第 82 空挺師団は歩兵中心の部隊であり、イラク軍の戦車部隊の突進を阻止するための戦力は十分ではなかった[154]。第 82 空挺師団の兵士は「砂漠の盾」を「減速帯（speed bump）」

[153] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 31-34.
[154] 第 82 空挺師団が装備していた M551 戦車は空輸が可能だったが、装甲が薄く対戦車戦には不向きで、かつ老朽化していた。河津幸英『湾岸戦争大戦車戦（上）』（イカロス出版、2011 年）329 頁。

と呼んで自嘲した。このため、シュワルツコフは、最新鋭の M1A1 戦車を保有する第 24 歩兵師団（機械化）の到着を待ち望んだ[155]。しかし、輸送業務は混乱していた。招集された直後の部隊が港湾や空港で到着する部隊を受け入れていた。また、部隊がサウジアラビアの港湾に到着した時に装備品が未到着だったこと、あるいは装備品だけが到着したことは少なくなかった。

シュワルツコフは、戦力が整う前にイラク軍に攻撃されることを危惧した[156]。このため、シュワルツコフが頼りにしたのは、空軍、特に対地攻撃機だった。シュワルツコフは戦略爆撃を含む航空作戦の準備を急いだ。8 月 17 日、空軍のワーデン（John A. Warden, III）大佐からイラク軍によるサウジアラビア侵攻を阻止することを目的とする戦略的航空作戦計画「インスタント・サンダー（Instant Thunder）」について説明を受けたシュワルツコフは、その内容に満足した。

一方、クウェートとサウジアラビアの国境線付近に展開したイラク軍にサウジアラビア侵攻を準備している気配はなかった。中央軍司令部は、クウェートに侵攻した RGFC はイラク陸軍第 3 軍団と交代し、RGFC の一部はバスラ（Basrah）付近に集結していると判断した[157]。戦後、イラク軍はクウェートを確保するため、この時すでに防御の態勢に移行していたことが明らかになった。しかしながら、当時、フセイン大統領は軍による威嚇やアメリカに対する非難を続けていた。いつ次の侵攻が開始されるかは予断を許さない情勢だった。

### （4） 湾岸地域への展開と「砂漠の盾」作戦の修正

#### ア 第 82 空挺師団の展開及び応急防御

8 月 6 日 2100（アメリカ東部標準時）、フォート・ブラッグ基地の第 82 空挺師団に非常呼集が発令された。第 82 空挺師団の即応旅団であった第 2 旅団は出発準備を完了し、第 2 旅団隷下の 1 個大隊を 18 時間以内に航空機で輸送することが可能となった。また、完全編成の 1 個師団を可能な限り早期にサウジアラビアに展開させることが必要と考えていた FORSCOM は、訓練中だった第 82 空挺師団隷下の第 1 及び第 3 旅団に対して直ちにフォート・ブラッグ基地に戻るように命じた。

第 18 空挺軍団長ラック（Gary E. Luck）中将は第 82 空挺師団長ジョンソン（James H. Johnson Jr.）少将に対して、必要であればサウジアラビアのダンマーム港を確保するように指示した。ラックは、サウジアラビアに展開するためには港湾の確保が特に重要だと見做しており、さらに、イラク軍がサウジアラビアに侵攻した場合には、攻撃ヘリコプターが出

---

155 第 24 歩兵師団（機械化）は第 18 空挺軍団唯一の重戦力で、3 個旅団を基幹とし、249 両の M1A1 戦車、218 両の M2/M3 歩兵戦闘車及び 36 門の MLRS を装備していた。河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』341 頁。

156 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』325 頁。

157 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 65-66.

撃する基地として港湾を利用することを企図していた。また、ラックは第 27 砲兵連隊第 3 大隊の 1 個多連装ロケット・システム（Multiple Launch Rocket System: MLRS）中隊を第 82 空挺師団に配属した。第 82 空挺師団隷下の砲兵部隊が装備していた火砲は空輸可能な 105mm 牽引式榴弾砲であり、イラク軍による攻撃を阻止するための火力は十分とは言えなかった。

第 82 空挺師団はダーラン空港に空輸される予定だった。しかし、1 個空挺旅団を輸送するためには延べ 250 機の C-141 輸送機が必要だったにも拘わらず、戦略輸送軍が準備できた輸送機は 90 機だった。第 82 空挺師団は、サウジアラビア防衛に就く戦闘部隊と携行可能な対戦車火器の空輸を優先した。第 82 空挺師団隷下の工兵大隊及び防空大隊は、後続の飛行機や船舶でサウジアラビアに移動した。

8 月 9 日、第 2 旅団の先遣隊が到着した[158]。非常呼集から 36 時間が経過していた。一方、戦略輸送軍は、世界中から C-141 及び C-5 輸送機をかき集めてサウジアラビアへ部隊を空輸していたが、大統領指令により民間航空機を利用できるようになった。第 2 旅団は 8 月 14 日までにサウジアラビアへの展開を完了した。また、第 1 及び第 3 旅団は、8 月 13 日以降、延べ 582 ソーティに及ぶ空輸により輸送され、9 月 8 日までにサウジアラビアへの展開を完了した[159]。

到着後、第 2 旅団はサウジアラビア防衛のための防衛線の構築を開始した。ラックの作戦構想に基づき、第 2 旅団は、ダンマーム港とダーラン空港一帯がイラク軍の火砲の射程内に入らないようにするため、その外周に防御陣地を構築した。ラックは、第 2 旅団が構築した防御線によりイラク軍の侵攻を最低 72 時間食い止めることを企図していた。第 18 空挺軍団は、第 2 旅団を基幹部隊としたサウジアラビア防衛の態勢を「デザート・ドラゴン I（Desert Dragon I）」と名付けた。

第 18 空挺軍団参謀長スコールズ准将は、最大で 6 個の重師団が攻撃してくる可能性があると予想した。また、スコールズは、イラク軍は地上からの侵攻に連携した特殊部隊によるヘリボン攻撃、航空攻撃、ミサイル攻撃及び化学攻撃を行うと予想した。一方、「デザート・ドラゴン I」の当時、第 18 空挺軍団はサウジアラビアへの展開を完了しておらず、イラク軍の戦車部隊との戦いにおいて頼りとなるのは TOW 対戦車ミサイルだけであった。しかしながら、第 2 旅団が防御線を構築したことにより、サウジアラビアの国民や軍人がパニックに陥ることはなかった[160]。

8 月 12 日、戦車を含む海兵隊の装備品を満載した第 2 海上事前集積船隊の 3 隻が到着した。8 月 14 日、第 7 海兵遠征旅団（7MEB）が航空機により到着した。8 月 25 日、7MEB 隷下の 1 個大隊がジュベイル港一帯で防御の態勢を確立した[161]。

---

158 Schubert, *The Whirlwind War*, p. 52.
159 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 51.
160 *Ibid.*, pp. 82, 85-86.
161 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 37-40, 258-259; Charles J. Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force in Desert Shield and Desert Storm* (Washington, D.C.: History and Museums Division, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1993), p. 6;

スコールズはサウジアラビア防衛計画を修正し、新たな計画「デザート・ドラゴン II」を作成した。この新たな計画に基づき、ヌアイリヤー（Nuayriyah）の南側に前方基地「エセックス（Essex）」が設置され、同時に防御部隊が配置された[162]。「デザート・ドラゴン II」の時点でサウジアラビアへの展開を完了した第 82 空挺師団の兵力は、約 4,200 人、15 機の AH-64 攻撃ヘリコプター、19 両の M551 戦車、56 門の TOW 対戦車ミサイル、20 門の 105mm 榴弾砲及び 3 両の MLRS であった。

しかし、海兵隊が戦列に加わったにも拘わらず、依然としてクウェートに所在するイラク陸軍と戦うには戦力が不足していた。引き続きシュワルツコフは、イラク軍によるサウジアラビア侵攻を警戒した[163]。

イ　海兵隊の展開

8 月 7 日、展開命令を受けた第 1 海兵遠征軍（I Marine Expeditionary Force: IMEF）が行動を開始した[164]。IMEF 司令官兼ねて中央海兵隊（Marine Forces Central Command: MARCENT）司令官ブーマー（Walter E. Boomer）中将は、8 月 20 日にリヤドに向かって出発し、9 月 3 日にはジュベイル港に指揮所を設置した。（以下、ブーマーの役職を「MARCENT 司令官」と表記する）9 月 12 日、第 1 海兵遠征旅団（1MEB）がサウジアラビアに到着した[165]。ブーマーは 1MEB 及びすでに到着していた 7MEB を解組し、IMEF の基幹部隊である第 1 海兵師団に編入した[166]。この他、9 月 7 日、北アラビア海に進出した第 4 海兵遠征旅団（4MEB）及び第 13 海兵遠征隊（特殊作戦能力）（13th Marine Expeditionary Unit（Special Operations Capable）：13MEU（SOC））は、中央海軍（Navy Forces Central Command: NAVCENT）の隷下に入った[167]。

ウ　第 24 歩兵師団（機械化）と第 101 空挺師団（空中強襲）の到着

第 82 空挺師団がサウジアラビアに到着したにも拘わらず、「砂漠の盾」は脆弱だった。

---

Michael R. Gordon and General Bernard E. Trainor, *The Generals' War: The Inside Story of the Conflict in the Gulf* (New York: Little, Brown and Company, 1995), p. 60. MPS は 8 月 7 日にサウジアラビアへの展開命令を受け、8 月 12 日にその一部がサウジアラビアに到着した。

162 アン・ヌアリイヤーは、舗装道の「タップライン道（Tapline Road）」（後の補給幹線「ドッジ（Dodge）」）と補給幹線「メルセデス（Mercedes）」が交差する交通の要衝だった。詳細は CMH Pub 70-117-1, *War in the Persian Gulf Operations Desert Shield and Desert Storm August 1990-March 1991* (Washington, D.C.: Center of Military History, U.S. Army, 2010), p. 14 を参照。

163 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 86-87.

164 MEF は 1 個海兵師団及び海兵航空団を基幹とする海兵空地任務部隊である。

165 MARCENT は、陸海空軍、海兵隊及び特殊部隊で構成される中央軍の中の海兵構成部隊である。MARCENT 司令部は IMEF 司令部を母体として編成された。

166 Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, pp. 3-15; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 38; Brown, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With Marine Forces Afloat*, pp. 222-223.

167 MEU は 1 個海兵大隊及び海兵飛行隊を基幹とする海兵空地任務部隊である。

シュワルツコフと同様、第 18 空挺軍団長ラック中将は重戦力、中でも特に第 24 歩兵師団（機械化）の到着を待ち望んだ。ラックは、第 24 歩兵師団（機械化）が到着すれば、サウジアラビアの防衛は危機を脱することができると考えていた[168]。

8 月 6 日、FORSCOM は第 24 歩兵師団（機械化）に対して、隷下の 1 個旅団を船舶輸送によりサウジアラビアに展開させるように命じた。同日、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の 1 個旅団の将兵が航空機で出発した。一方、装備品を積載した 10 隻の船舶が出発したのは 8 月 13 日であり、この船舶がサウジアラビアに到着したのは 8 月 27 日以降だった。

9 月 7 日、5,000 両を超える車両と 90 機のヘリコプターを伴い、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の 2 個旅団がサウジアラビアへの展開を完了した。第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 197 歩兵旅団は移動中であり、その到着予定は 9 月 14 日だった[169]。

装備品の海上輸送は混乱した。この原因は三つあった。第一は、装備品の積載に関する計画がなかったことだった。派遣部隊はその場にある船舶に装備品を積み込んだ。第二は、輸送艦の故障だった。第三の原因は、シュワルツコフが戦闘車両に弾薬と燃料を満載することを命じたこと及び火器ごとに積載する弾薬の数を細かく統制したことだった[170]。第 24 歩兵師団（機械化）隷下の戦闘支援部隊が到着したのは 9 月 23 日だった。

また、第 24 歩兵師団（機械化）の派遣準備が進む中、「トータル・アーミー（Total Army）」構想が十分に機能しないことが明らかになった。「トータル・アーミー」構想は、予備役や州兵を活用して常備兵力の不足を補うという構想だった[171]。9 月 14 日にサウジアラビアに到着する予定だった第 197 歩兵旅団は、元々、トータル・アーミー構想では第 24 歩兵師団（機械化）の隷下に入る部隊ではなかった。同師団の隷下に入る予定だった部隊は、ジョージア州兵で構成される第 48 歩兵旅団であった。しかし、FORSCOM 司令官バーバ大将が派遣を命じたのは現役部隊である第 197 旅団だった。

この理由は、予備役や州兵は招集を受けてから戦力化が完了するまでに時間がかかり、突発的な紛争に対する即応性が低かったためだった。第 24 歩兵師団（機械化）に対して派遣命令が出た 8 月 6 日の時点で、予備役と州兵に対する招集命令は出ていなかった。第 48 歩兵旅団が招集されたのは 11 月 15 日であり、同旅団の戦力化が完了したのは 1991 年 2 月 28 日だった。しかしながら、第 48 歩兵旅団のように招集から戦力化までに時間がかかり過ぎた歩兵旅団や機甲旅団があったが、「トータル・アーミー」構想のすべてが機能しなかったわけではない。湾岸戦争に参加した砲兵部隊の中には予備役や州兵で構成された砲兵旅団があった。また、兵站部隊の約 7 割は予備役や州兵だった[172]。

サウジアラビアへの展開を予定していたもう一つの師団は、ラックが期待する、最新式の

---

168 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 87.
169 *Ibid.*, p. 89.
170 *Ibid.*, p. 90.
171 松岡『ベトナム症候群』162 頁。
172 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 378-380; Schubert, *The Whirlwind War*, pp. 70-73, 121-127; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』339-340 頁。

AH-64 攻撃ヘリコプターを装備する第 101 空挺師団（空中強襲）だった[173]。8 月 17 日、ラックは、第 101 空挺師団（空中強襲）長ピーエイ（J. H. Binford Peay III）少将に対して、隷下の航空旅団と第 2 旅団（ヘリコプター117 機、車両約 490 両、兵員約 2,700 名）を C-5 及び C-141 輸送機で空輸し、サウジアラビアに展開させるように命じた。第 2 旅団は 13 日間をかけ、延べ 49 機の C-5 輸送機及び延べ 56 機の C-141 輸送機を使って移動した。第 101 空挺師団（空中強襲）隷下のその他の旅団は、旧型の輸送船で移動した[174]。また、到着後、第 101 空挺師団（空中強襲）は第 3 装甲騎兵連隊を作戦統制下に入れた。

第 101 空挺師団（空中強襲）の攻撃ヘリコプターはサウジアラビアに到着したが、クウェートとサウジアラビアの国境線付近の可能な限り遠方の地域からサウジアラビア領内に侵攻したイラク軍を攻撃するためには、ヘリコプター部隊がさらに必要だった。このため、FORSCOM は、第 18 空挺軍団に第 229 ヘリコプター連隊第 2 攻撃ヘリコプター大隊と第 12 航空旅団を配属した。約 1,000 機のヘリコプターを保有することになった第 18 空挺軍団の作戦範囲は拡大した。9 月 1 日、第 18 空挺軍団は作戦地域をクウェートとサウジアラビアの国境線付近まで延伸し、隷下部隊を再配置した。9 月 3 日以降の第 18 空挺軍団を基幹部隊としたサウジアラビア防衛の態勢は「デザート・ドラゴン III」と名付けられた。「デザート・ドラゴン III」は「砂漠の盾」作戦の原型となった。（図 6 を参照）

「デザート・ドラゴン III」では、第 82 空挺師団に代わって、第 24 歩兵師団（機械化）が主会戦地域（MBA）で防御する部隊となった。イギリス第 7 機甲旅団を配属された MARCENT は、ジュベイル港を含むペルシャ湾沿岸の地域で防御した。第 82 空挺師団はダーラン空港、ダンマーム港及び石油関連施設が多いアブカイクを確保した[175]。サウジアラビア軍はクウェートとサウジアラビアの国境線一帯の地域を担任した。さらに、ペルシャ湾では NAVCENT 隷下の 4MEB 及び 13MEU（SOC）が洋上からイラク軍を牽制した。

「デザート・ドラゴン III」の特徴の一つは、攻撃ヘリコプターが主要な戦力となって偵察、警戒及び主力の掩護を行う地域を主会戦地域の北側と西側に設定したことである。第 24 歩兵師団（機械化）の北側の作戦地域（Area of Operation: AO）「ノルマンディ（Normandy）」及び西側の作戦地域「カランタン（Carentan）」では、第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の 5 個航空大隊によりイラク軍を攻撃することが可能だった。この他、前方基地「バストーニュ（Bastogne）」[176]が設置された掩護部隊地域（Covering Force

---

[173] 第 101 空挺師団は 3 個旅団と 1 個航空旅団を基幹部隊とし、37 機の AH-64 攻撃ヘリコプター、130 機の UH-60 多用途ヘリコプター及び 48 機の CH-47 大型ヘリコプターを装備していた。河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』337 頁。

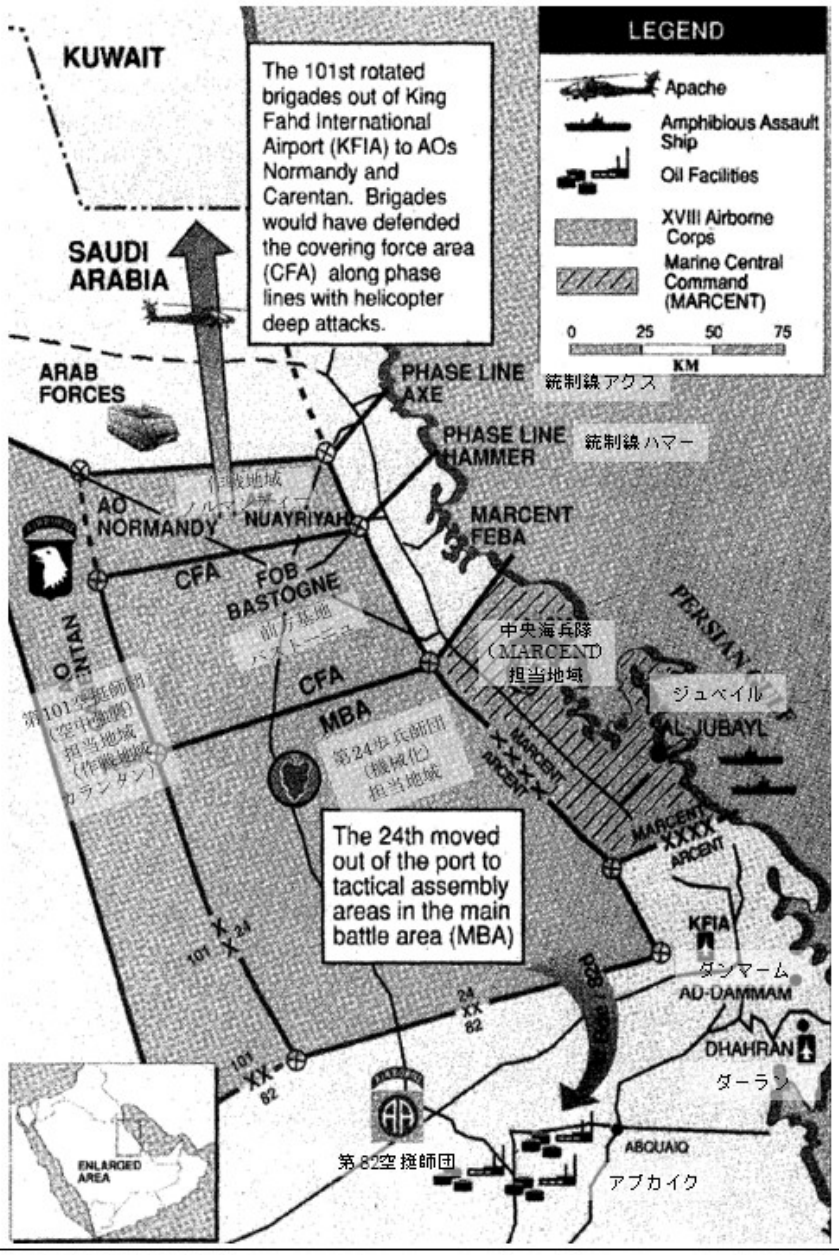
[174] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 89.

[175] *Ibid.*, pp. 91-93. アブカイク製油所はサウジアラビアの主要な製油所の一つであり、作戦計画「1002-90」では防護すべき重要施設に指定されていた。詳細は “Memorandum for U.S. ARCENT Historian, COL Swain, United States Army Forces Central Command, Riyadh, Saudi Arabia, 6 April, 1991” (Gulf War Collection 311.5, U.S. Army Center for Military History, Fort McNair, Washington, D.C.), p. 3 を参照。

[176] 第 101 空挺師団（空中強襲）を配置した際、前方基地「エセックス」は「バストーニュ」に改称された。

Area: CFA）には第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の 1 個歩兵旅団及び第 3 装甲騎兵連隊が配置された。MARCENT はサウジアラビア軍と協力しながら海岸線沿いを警戒した。

図6　デザート・ドラゴンIII（1990年9月3日における中央軍の防衛態勢）




凡　例

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ―×××― | 軍の境界 | MBA | 主会戦地域 | FOB | 前方基地 |
| ―××― | 師団の境界 | FEBA | 主会戦地域の前縁 | | |
| CFA | 掩護部隊地域 | AO | 作戦地域 | | |

出典：　Scales Jr., *Certain Victory*, p. 91.

エ　多国籍軍の参加による防御の完成

国際社会はイラクによるクウェート侵攻を一斉に非難した。イギリス、フランス及びイスラエルを除く中東諸国は、国連決議に基づき地上部隊を派遣した。こうした国々は、受け入れ国であり、同時にイラク軍の脅威を直接受けていたサウジアラビアと連携した。サウジアラビア軍はアメリカ式の装備を保有し、かつ軍事顧問を通じてアメリカ式の訓練を受けていた。また、サウジアラビア軍には英語に堪能な将校が多かった。しかしながら、西欧諸国と共同訓練を実施した経験はなかった。

このため、ARCENT 及び第 18 空挺軍団司令部はサウジアラビア軍との調整を慎重に進めた。まず問題になったのは指揮関係だった。戦後、シュワルツコフは、サウジアラビアのファハド国王が、当初はアメリカ軍に寛容だったが、次第にサウジアラビア軍の統制下にアメリカ軍を入れようとする態度をとり始めたと苦々しく回顧している。シュワルツコフは、アメリカ軍はアメリカ軍指揮官のもとで戦い、サウジアラビア軍はサウジアラビア軍指揮官のもとで戦うという方式を採用した[177]。サウジアラビア軍とアメリカ軍は対等な関係で作戦を行うことになった[178]。

また、シリア軍、エジプト軍及びクウェート軍の地上部隊はサウジアラビア軍の作戦統制下に入った。サウジアラビア軍の総司令官に任命されたのは、王族であり、かつアメリカやイギリスの軍事教育機関に留学した経験を持つ防空軍司令官ハリド（Khaled bin Sultan）中将だった。ハリド中将はアラブ合同軍司令官となった。

指揮関係が明確になったことにより、第 18 空挺軍団とサウジアラビア軍の間の調整が容易になった。サウジアラビア軍は「デザート・ドラゴン III」において 267 両の M60A1 戦車及び 140 門の火砲を保有する東部地域軍（East Area Command）を編成した。第 18 空挺軍団参謀長スコールズ准将は、連絡将校を派遣し、東部地域軍司令官アロモハヤ（Saleh bin Ali Almohayya）少将との意思疎通を図った。同様、中央軍は、第 18 空挺軍団作戦参謀のマルセッロ（John Marcello）大佐を責任者とした統合連絡組織（Joint Liaison Organization）を設置した。しかし、アロモハヤ少将は、可能な限り国境線に近い地域に防御線を構築してイラク軍を阻止しようと考えていた。東部地域軍の作戦構想は中央軍と異なっていた[179]。

フランスは第 6 軽機甲師団を派遣した。シュワルツコフは第 6 軽機甲師団に対して、アメリカ軍とアラブ合同軍の西側の側面に対する警戒の任務を与えた。イラン・イラク戦争でイラクを支援したフランスは、イラクと良好な関係にあった。また、フランスはアメリカからの統制を受け入れることに消極的だった。シュワルツコフはこうしたフランスの立場や

177 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』328-329 頁。
178 11 月 1 日、政府間で指揮関係に関する協定が調印された。詳細はシュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』391 頁を参照。
179 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 93-97.

意向に配慮した。

イギリスは、優れた機甲戦力を持つ第 1 機甲師団を派遣した。9 月にはイギリス第 1 機甲師団隷下の第 7 機甲旅団が到着した[180]。一方、第 18 空挺軍団長ラック中将は、MARCENT がイラク軍による海岸線沿いの攻撃を阻止できるかを懸念していた。海岸線沿いから突破された場合、港湾や空港を喪失する可能性があった[181]。シュワルツコフはイギリス第 7 機甲旅団を MARCENT に配属した。後続のイギリス第 1 機甲師団も同様、MARCENT と協力して海岸線沿いの防御を担任することになった。

10 月までに中央軍は「砂漠の盾」作戦の態勢を確立した。イラク軍と第 18 空挺軍団の戦力比は下表のとおりだった。この他、FORSCOM は第 1 騎兵師団を派遣し、ARCENT の総予備とすることを決定した[182]。（図 7 を参照）

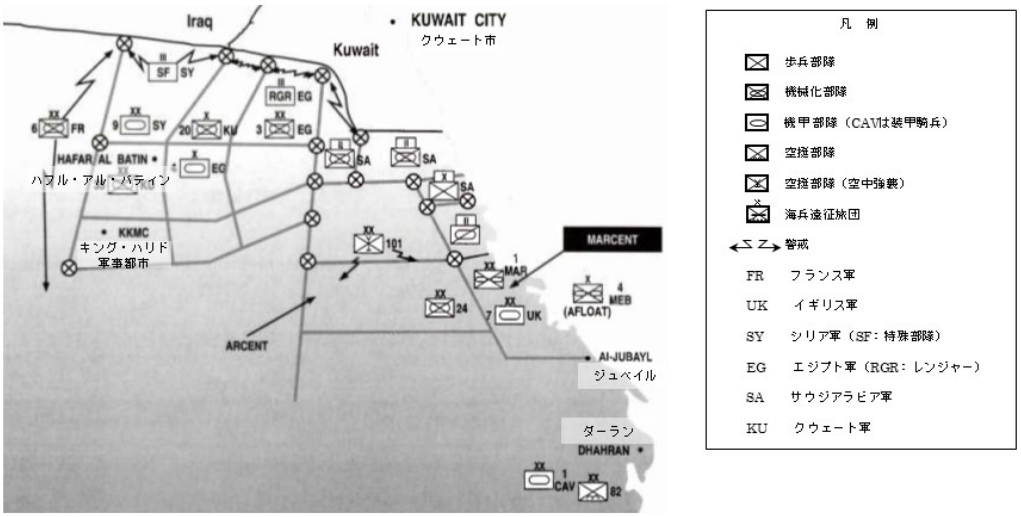
1990 年 11 月初旬ごろの第 18 空挺軍団正面の戦力

| | 第 18 空挺軍団 | イラク軍（RGFC を含む。） |
|---|---|---|
| 戦車 | 783 両 | 836 両 |
| 火砲（MLRS を含む。） | 444 門 | 196 門 |
| 装甲車 | 1,494 両 | 902 両 |
| 攻撃ヘリコプター | 227 機 | 45 機 |

出展： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 97; "101st Airborne Division, after-action briefing from operation Desert Shield and Operation Desert Storm," circa 1991, Box 24, OCLC 70546787, U.S. Army Heritage and Education Center, Carlisle, PA.

[180] イギリス第 7 機甲旅団は、170 両のチャレンジャー戦車を装備していた。詳細は Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, p. 14 を参照。
[181] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 96.
[182] 第 1 騎兵師団は 240 両の M1A1 戦車と 36 機の AH-64 を装備していた。詳細は河津幸英『湾岸戦争大戦車戦（下）』（イカロス出版、2011 年）341 頁を参照。

図7　「砂漠の盾」作戦図（1990年10月頃）




出典：　Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 40.

（５）　攻勢作戦の検討

ア　湾岸危機の初期における攻勢作戦の構想

シュワルツコフとパウエルは、イラク軍がクウェートに侵攻した直後から攻勢作戦の所要兵力に関心を持っていた。二人は、クウェートを占領されたまま、外交交渉や経済制裁の効果が出るのを待つことはできないと考えていた[183]。8 月 15 日、パウエルはブッシュ大統領に対して、経済制裁を続けるのか、それとも戦争に踏み切るのかを 10 月中に決定して欲しいと要請した[184]。

8 月 16 日、パウエルは現有の兵力による攻勢作戦についてシュワルツコフに質問した。シュワルツコフが提示した攻勢作戦案は、クウェートとサウジアラビアの南側の国境線から攻撃して、クウェート市の北西に位置するジャフラ（Jahra）一帯においてイラク軍の後方連絡線を遮断することにより、クウェートを占領したイラク軍を退却させるという内容だった。しかし、シュワルツコフは、攻勢作戦を行うためには大幅な兵力増強が必要であり、現有の兵力による攻勢作戦は現実的ではないと考えていた[185]。

8 月 17 日、ワーデン大佐の戦略的航空作戦計画「インスタント・サンダー」から着想を得たシュワルツコフは、全期間を四つの段階に区分した攻勢作戦の構想をパウエルに報告した。その第一段階は戦略爆撃、第二段階はクウェート国内に構成されたイラク軍の防空網

183 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』330 頁。
184 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』119-120、134 頁。
185 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』330-331、343 頁。

の制圧、第三段階はクウェートを占領したイラク軍の半数を撃破する段階だった。そして最後の第四段階が陸上攻勢作戦であった。また、この時、四つの段階から成る攻勢作戦を「砂漠の嵐（Desert Storm）」作戦と呼ぶことが決まった[186]。

イ　攻勢作戦の検討

シュワルツコフは、ブッシュ大統領がサウジアラビアの防衛だけではなく、クウェート解放を目的とした攻勢作戦の実施を命令するのではないかと警戒していた[187]。9 月中旬、フセイン大統領が徹底抗戦を宣言した。また、クウェート市を占領したイラク軍が防御陣地や障害帯を強化していることが明らかになった。一方、アメリカ国内では、空軍力によりイラク軍をクウェートから追い払うことができるという空軍参謀長の発言が報道された。ブッシュ大統領は、空爆だけでクウェートを解放できるのかとパウエルに繰り返し質問していた[188]。

一方、ARCENT は、湾岸地域に展開した部隊への兵站支援、アメリカ本土から到着する部隊の受け入れ、作戦準備に関する隷下部隊への指示、サウジアラビアをはじめとする関係国との連絡、多国籍軍調整連絡統合センターの運営といった業務に奔走していた。同様、中央軍司令部は攻勢作戦の検討に手が回らない状態だった。

こうした状況を改善するため、陸軍参謀長ヴォノ（Carl E. Vuono）大将はシュワルツコフに対して、高等軍事研究校の卒業生を作戦参謀として派遣することを提案した。シュワルツコフはヴォノの提案を受け入れた[189]。これを受けて、9 月 18 日までにパーヴィス（Joseph H. Purvis）中佐、エッカート（Gregory Eckert）少佐、ロー（Daniel Roh）少佐、ペニーパッカー（William Pennypacker）少佐の 4 人が中央軍司令部に到着した。

シュワルツコフはパーヴィスらを中央軍司令官直属とし、関係者を限定して秘密裏に、攻勢作戦、中でも特に陸上攻勢作戦に関する検討を開始した[190]。シュワルツコフは、攻勢作戦を検討していることが漏洩した場合、イラク軍によるサウジアラビア侵攻を誘発し、かつ多国籍軍の足並みを乱すことになると判断した。「ジェダイの騎士（Jedi Knights）」と呼ばれたパーヴィスらは攻勢作戦の骨格を形作っていった。

ウ　1 個軍団による陸上攻勢作戦案とその問題点

9 月 18 日、シュワルツコフはパーヴィスに対して、現有兵力による攻勢作戦について分析した結果を 2 週間後に報告せよと命じた。陸上攻勢作戦に関する検討の関係者全員が、

186 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』334-336 頁。
187 ウッドワード『司令官たち』374-375、366-373 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』342-343 頁。
188 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』134 頁。
189 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 109.
190 *Ibid.*, p. 110.

イラク軍が防御陣地を強化して多国籍軍を待ち構えている地域に対して正面から攻撃することは避けるべきだと考えていた[191]。

パーヴィスらが出した結論は三つに要約できる。第一の結論は、現有兵力でイラク軍を壊滅させることは不可能であり、クウェートからイラク軍を追い払い、クウェートの正統政府を回復することが実現可能な終末態勢（end-state）であるという内容だった。パーヴィスらは、クウェート政府の回復を目指す場合においても、イラク軍の力の根源、すなわちRGFCを撃破することが必要だと指摘した[192]。

第二の結論は、イラク軍の兵力は巨大だけれどもイラン・イラク戦争に引き続くクウェート侵攻により将兵の士気は低下しており、かつフセイン大統領に権限が集中した指揮統制システムは硬直化しているという内容だった。パーヴィスらは、バグダッドとクウェート戦域（Kuwaiti Theater of Operations: KTO）を分断することにより、イラク軍は組織立てた戦闘を行うことができなくなると判断した。一方、パーヴィスらは、RGFCとイラク陸軍第3軍団はバグダッドと分断された場合においても組織立てた反撃を行うことができる精鋭部隊であり、注意が必要だと指摘した。この他、パーヴィスらは、イラク軍による化学兵器などの大量破壊兵器の使用を特に警戒しなければならないと指摘した[193]。

第三の結論は、アラブ諸国との協力関係の脆さを指摘する内容だった。パーヴィスらは、イスラエルが参戦した場合、多国籍軍の結束が瓦解する可能性があると指摘した。この結論は、シュワルツコフと一致していた。また、パーヴィスらは、様々な装備を保有する軍が集まった多国籍軍にとってのアキレス腱は兵站であり、陸上攻勢作戦を実施するために必要なトラック、燃料タンク車及び重装備輸送車両（Heavy Equipment Transporter: HET）が特に不足していると指摘した[194]。

10月上旬、攻勢作戦の可能性を知らされていた駐サウジアラビア大使フリーマン（Charles W. Freeman Jr.）は、イラクとの戦争を開始した場合におけるアラブ諸国の反応への懸念を表明した。同じ懸念を抱いていたシュワルツコフは、アラブ諸国での経験が豊富な外交官や軍人を集めて「アラブ反応研究会」と名付けたセミナーを開催し、アメリカがイラクに対して採り得る軍事行動及びこれに対して予想されるアラブ諸国の反応について検討した。シュワルツコフは、アラブ諸国から攻勢作戦に対する支持を得るためには、勝利の公算を高めるだけではなく、アラブ諸国と一緒に肩を並べて戦うことが必要だと結論づけた。同時にシュワルツコフは、クウェート解放がアラブ諸国の部隊により達成されることが重要だと結論づけた[195]。

また、陸上攻勢作戦を具体化していく上で問題となったのは、如何にしてイラク軍が待ち構えている地域を避けてRGFCを攻撃するかという問題だった。RGFC攻撃における攻撃

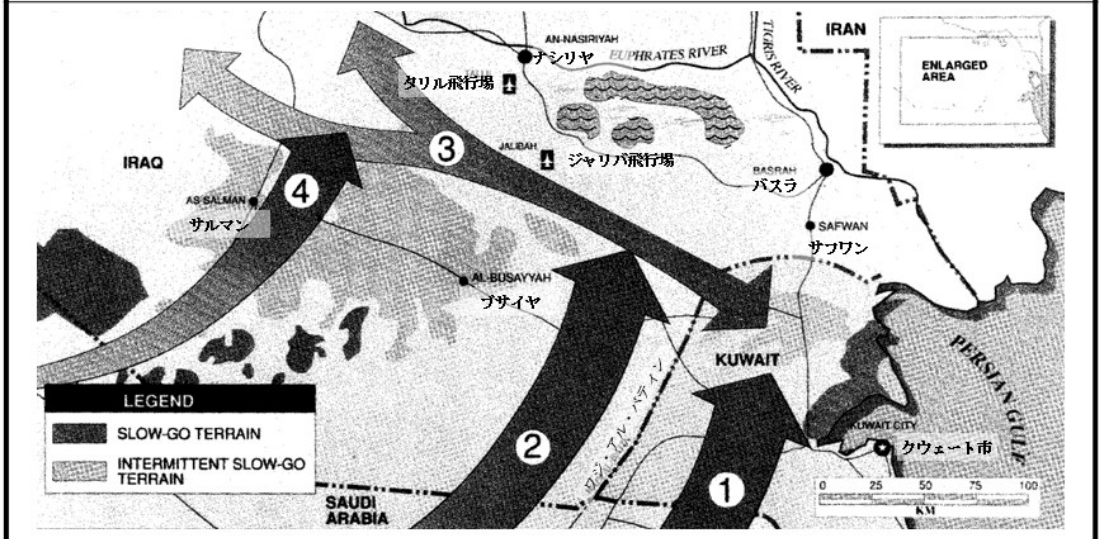
---

191 *Ibid.*, pp. 110-112; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』371頁。
192 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 111-112.
193 *Ibid.*, pp. 116-118.
194 *Ibid.*, pp. 123-124; パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』129頁。
195 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』371-372頁。

方向及び使用可能な経路は次のとおりだった[196]。（図 8 を参照）

① 西部クウェートの国境線（ワジ・アル・バティン[197]）の東側沿いに北部クウェートに向かって攻撃する経路
② 西部クウェートの国境線（ワジ・アル・バティン）の西側沿いにバスラに向かって攻撃する経路
③ イラク軍のタリル（Tallil）飛行場及びジャリバ（Jalibah）飛行場の南側からバグダッドまたはクウェートに向かって前進する経路
④ イラク・サウジアラビア国境のラファ（Rafha）からサルマン（Salman）に至りクウェートまたはバスラに向かって前進する経路

図8　クウェート戦域内の接近経路



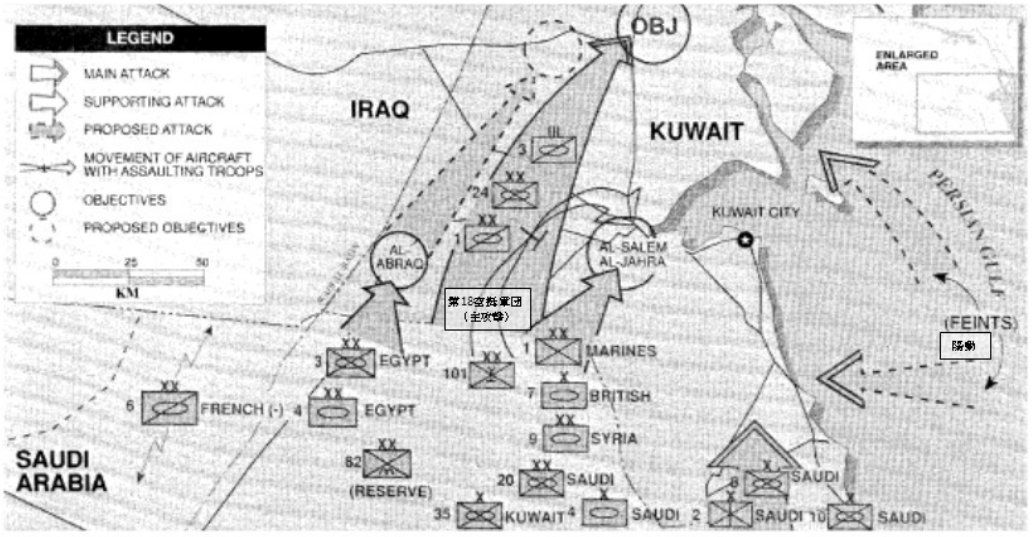

出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 120.

④の経路は、攻撃発起位置が遠すぎることが問題だった。9 月 25 日、パーヴィスらは、陸上攻勢作戦構想の概要を中央軍計画政策部長シャープ（Grant A. Sharp）少将に報告した際、現有の限られた輸送力で長距離を移動することは不可能だと主張した[198]。この他、①の経路はイラク軍が待ち構える南部クウェートに直進する経路だった。パーヴィスらは、正面攻撃となることを理由として①の経路を除外した。③の経路は、空中機動によりイラク領内に侵攻する経路だった。パーヴィスらは、空中機動を行った場合、イラク軍の防空火器により多大な損害が発生すると判断した。

196 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 119-120.
197 ワジ・アル・バティンは総距離 355km に及ぶ乾燥した河床であり、クウェートとイラクの国境線のうち南北に走る国境線はワジ・アル・バティン沿いに引かれていた。
198 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 125.

シュワルツコフが最初に採用した陸上攻勢作戦の構想は、①の経路に戦力を集中してイラク軍の防御陣地を突破し、その後、クウェートとバスラの間の幹線道路を遮断してクウェート市を占領中のイラク軍とバスラ付近の RGFC を分断した後に RGFC を攻撃するという内容だった[199]。主攻撃は、第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）、第 3 装甲騎兵連隊及び 10 月に到着する予定の第 1 騎兵師団だった。主攻撃の両側面を掩護するため、右翼からはイギリス第 7 機甲旅団が配属された第 1 海兵師団が、左翼からはエジプト第 3 機械化師団及び第 4 機甲師団が攻撃を予定した。海岸線沿いからはサウジアラビア軍がクウェート市に向かって攻撃する計画であった。洋上の 4MEB を含む水陸両用作戦部隊は、クウェート領内の沿岸部に対して陽動を行い、イラク軍を牽制する部隊だった[200]。この他、重要な後方地域の施設に対する攻撃に対応するため、ペトリオット・ミサイルを装備した防空部隊の配置が計画された。第 82 空挺師団は予備であった[201]。（図 9 を参照）

図9　1個軍団による陸上攻勢作戦構想




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 127.

10 月 6 日、パーヴィスはシュワルツコフに対して、陸上攻勢作戦の構想を説明した。シュワルツコフはこの作戦構想を承認した。しかし、シュワルツコフは、空爆でイラク軍の戦力を半分以下に低下させた場合においても、陸上攻勢作戦で多国籍軍が被る人的被害は決して少なくないという報告に頭を抱えた[202]。

10 月 6 日の午後、シュワルツコフはパウエルから、チェイニー国防長官、状況によりブッシュ大統領に対して攻勢作戦の要領を説明してほしいという依頼を受けた。政府内で攻

199 *Ibid.*, p. 126.
200 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 42-44.
201 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 125-126.
202 *Ibid.*, p. 126.

勢作戦が議論されていることを知ったシュワルツコフは、サウジアラビア防衛のための戦力だけが与えられている状況であるにも拘わらず、攻勢作戦の実施を命令されるのではないかと警戒した[203]。シュワルツコフは、戦力の増加がない場合、中央軍が達成できる任務はサウジアラビア防衛であると考えていた。また、シュワルツコフは、中央軍の現有戦力で勝利の成算がある作戦はサウジアラビア防衛であり、攻勢作戦には成功の見込みがないという軍事的判断をブッシュ大統領に対して上申する責任は国防総省にあると考えていた。シュワルツコフの苛立ちに気づいていたパウエルは、機先を制し、シュワルツコフの代理をワシントンに派遣するように指示した。シュワルツコフは、中央軍の能力を超えた任務について質問された場合には決して達成可能であると回答してはならないと念を押した上で、中央軍参謀長ジョンストン（Robert B. Johnston）少将、CENTAF 特別計画グループの責任者グロッソン（Buster Glosson）准将及びパーヴィスを派遣した。

ジョンストンらは、10 月 10 日にチェイニー国防長官とパウエルに対して、10 月 11 日にブッシュ大統領に対してブリーフィングを行った。戦略的航空作戦に関する説明は順調に進んだ。しかし、攻勢作戦第四段階の陸上攻勢作戦に関する説明が始まると、列席する閣僚や大統領補佐官からの質問が相次ぎ、大統領も疑問点について質問した。何らかの回答を迫られていたにも拘わらず、ジョンストンはシュワルツコフから受けた指示のとおり、中央軍の現有兵力で達成可能なことだけを説明した。あわせてジョンストンは、もし攻勢作戦での勝利を要求するのであれば 1 個軍団の増派が必要であり、増派される軍団がサウジアラビアに移動するための 90 日間が必要だと主張した[204]。

国防総省以外の閣僚からは、ジョンストンが地上部隊の増派が必要だと発言したことを批判する声が上がった。批判の多くは、すでに十分な地上部隊を派遣した、もしくは空軍力でイラク軍を壊滅できるはずだという内容だった。シュワルツコフを臆病者扱いする意見もあった[205]。しかし、チェイニー国防長官とパウエルは増派が必要だと判断した[206]。

### （6） 湾岸地域への増派と攻勢作戦構想の決定

#### ア 2 個軍団による攻勢作戦の検討

10 月 15 日、シュワルツコフはパーヴィスに対して、2 個軍団による陸上攻勢作戦を検討するように命じた。10 月 16 日から検討が始まったが、この時からパーヴィスらは、増派さ

---

[203] ウッドワード『司令官たち』383-384 頁。
[204] Gordon, *The Generals' War*, p. 133; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 128; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』378 頁；ウッドワード『司令官たち』384-389 頁。
[205] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』379 頁；Swain, *"Lucky War"*, p. 81; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 128.
[206] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』378 頁。

れる部隊は欧州の第 7 軍団になるだろうと予想していた。また、パーヴィスらは、空挺作戦と水陸両用作戦はイラク軍の防空網と沿岸部に設置された機雷によるリスクが大きいと判断した[207]。

10 月 17 日、秘密裏の検討が進む中、中東イギリス軍司令官ドラビリエール（Peter de la Billiere）中将と ARCENT 司令官ヨソック中将に対する陸上攻勢作戦構想の暫定案（1 個軍団案及び 2 個軍団案）の説明が、それぞれ個別に行われた。両司令官は、ワジ・アル・バティンの西側から攻撃する 2 個軍団案が良いと回答した。また、両司令官は、1 個軍団で攻撃する場合、心理戦によりイラク兵の脱走を誘発し、かつ欺騙により攻撃方向を秘匿する必要があると主張した。この他、兵站基地をサウジアラビア西部に設置することが重要だという指摘が挙がった[208]。

イ　増派部隊の選定

陸軍参謀本部は、どの軍団を増派部隊とするかについて検討した。シュワルツコフが 2 個軍団による陸上攻勢作戦の検討を開始したことを知らなかったにも拘わらず、陸軍参謀本部は、重戦力を保有する部隊の派遣が近々必要になるだろうと予測していた。増派部隊の候補として挙がった軍団は、テキサス州の第 3 軍団と欧州の第 5 及び第 7 軍団であった。

第 3 軍団にはアメリカ本土から移動できるという利点があった。しかし、第 3 軍団は候補から除外された。すでに第 3 軍団は湾岸地域に隷下部隊の一部（第 1 旅団／第 2 機甲師団、第 3 装甲騎兵連隊及び第 1 騎兵師団）を派遣しており、このため、他の候補と比べて、第 3 軍団を派遣した場合の戦力の増加分は少なかった。さらに、アメリカ本土に残っていた第3軍団隷下の部隊が装備する戦車は、最新式のM1A1戦車に換装されていなかった[209]。

湾岸地域への増派部隊となった軍団は第 7 軍団だった。当時、欧州に所在していた第 5 及び第 7 軍団は、部隊改編を含む大規模な体制移行の最中だった[210]。陸軍参謀本部は、欧州陸軍（Army Europe: AREUR）司令官セイント（Crosbie E. Saint）大将の意向を踏まえて慎重に検討した結果、第 7 軍団を基幹とし、これに部隊の廃止が決定していた第 3 機甲師団（第 5 軍団隷下）を配属して派遣することを決定した[211]。

第 7 軍団が正式に派遣命令を受けたのは 11 月 8 日だったが、それ以前から第 7 軍団は準備を進めていた。当時、欧州戦域外に第 7 軍団が展開することは想定されておらず、湾岸地域に第 7 軍団が展開するためには相応の準備期間が必要だった。湾岸危機の勃発直後、第 7 軍団長フランクス（Frederick M. Franks Jr.）中将は第 7 軍団参謀長ランドリー（John R. Landry）准将、情報部長クラウス（Gene Klaus）大佐及び作戦部長チェリー（Stanley E.

207 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 128.
208 *Ibid.*, p. 129.
209 *Ibid.*, p. 131.
210 *Ibid.*, pp. 135-136; Schubert, *The Whirlwind War*, pp. 41-43.
211 クランシー『熱砂の進軍（上）』289-297 頁。

Cherrie）大佐に対して、湾岸地域への展開に関する検討を命じた。また、フランクスはセイントに対して、第 7 軍団を湾岸地域に派遣してほしいと申し出た。セイントはフランクスに対して、10 月下旬に湾岸地域への展開計画の作成を命じ、11 月 2 日には計画の作成を秘密裏に実施するように命じた[212]。11 月 8 日、正式の派遣命令を受けたフランクスは湾岸地域への展開の準備を進めた[213]。

ウ　2 個軍団による陸上攻勢作戦構想の確立

一方、中央軍は、2 個軍団による陸上攻勢作戦の構想を具体化した。パーヴィスらは三つの案を検討した。第一案は、増派された軍団を主攻撃としてワジ・アル・バティンの西側に配置し、その左翼に第 18 空挺軍団を配置するという内容だった。第二案は、第一案と同様に主攻撃の軍団を配置し、その右翼に第 18 空挺軍団を配置する案だった。第三案は、2 個軍団を同一経路上に配置して主攻撃の軍団が第 18 空挺軍団を追い越して攻撃する案だった。10 月 18 日、パーヴィスらは中央軍計画政策部長シャープ少将と ARCENT 兵站部長モンロー（James Monroe）准将に対して、三つの案を説明した[214]。

シュワルツコフが注目したのは、主攻撃の軍団の左翼に第 18 空挺軍団を配置する第一案だった。10 月 21 日、パーヴィスから第一案について説明を受けたシュワルツコフは、国道 8 号線を遮断することにより RGFC に脅威を与え、かつ RGFC を殲滅することができると発言した[215]。1 個軍団を前提とした陸上攻勢作戦においても、RGFC を撃破することは達成することが必要不可欠な目標に位置づけられていた。シュワルツコフは、2 個の軍団を使用できる場合、RGFC を徹底的に破壊すること、すなわち RGFC を殲滅することが可能になると判断した。

しかしながら、2 個軍団による陸上攻勢作戦を実行するためには、2 個軍団を如何に西方に移動させるか、あわせて如何に兵站支援を維持するかという問題を解決する必要があった。10 月 22 日、リヤドを訪問中だったパウエルは、2 個軍団による陸上攻勢作戦の構想に賛同した。一方、パウエルは、兵站上の問題が少なくないこと及び 2 個軍団が西方に移動していることが早期に察知された場合にはイラク軍が対策を講じる可能性があることを指摘した[216]。10 月 23 日、パウエルとシュワルツコフは協力しながら必要な戦力の詳細について検討し、陸上攻勢作戦の構想をさらに具体化した。

パウエルは、シュワルツコフの要望を上回る戦力をシュワルツコフに与えた。シュワルツコフはパウエルに対して、欧州の第 7 軍団をサウジラビアに派遣してほしいと願い出た。

---

[212] 同上、285-302 頁。欧州戦域外で第 7 軍団を運用することは想定されていなかったため、第 7 軍団固有の兵站能力が不足した。フランクスは派遣部隊の編成、就中、兵站部隊の増加ついてセイントに要望を出していた。
[213] Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 133-135.
[214] *Ibid.*, p. 129.
[215] *Ibid.*, p. 131; Swain, *"Lucky War"*, p. 83.
[216] Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 132-133; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』384 頁。

この要望に対してパウエルは、第 7 軍団に加えて、アメリカ本土の第 1 歩兵師団（機械化）を派遣することを約束した。さらにパウエルは、第 2 海兵師団を追加派遣すること及び湾岸地域で作戦を遂行する空母と空軍を倍増することを約束した。最後にパウエルはシュワルツコフに対して、「大統領もチェイニー長官も、君が任務を遂行するのに必要なものは何でも用意するつもりだ。心配はいらない。準備が整うまでは動かなくていい。準備不足の状態で開戦する気はない」と伝えた[217]。少ない兵力で如何に攻勢作戦を成功に導くかという難題の重圧に耐えていたシュワルツコフは、パウエルの発言に安堵した。その後、ワシントンに戻ったパウエルは、攻勢作戦を実行するためには第 7 軍団を速やかに派遣する必要があると進言した[218]。

10 月 25 日、チェイニー国防長官が湾岸地域に派遣した部隊をさらに増強することを発表した。しかし、この発表にも拘わらず、シュワルツコフは、ブッシュ大統領が正式に増派を決定した 10 月 31 日まで、1 個軍団の場合と 2 個軍団の場合の両方を検討した[219]。また、シュワルツコフは作戦構想をさらに具体化するため、それまで秘密裡に陸上攻勢作戦について検討していたパーヴィスらを ARCENT 作戦部長兼ねて第 3 軍作戦部長アーノルド（Steven Arnold）准将の配下とした。（以下、アーノルドの役職を「ARCENT 作戦部長」と表記する）チェイニー国防長官の声明を聞いたパーヴィスは増派を確信していた。しかし、シュワルツコフからの指示に従い、パーヴィスらは 1 個軍団による陸上攻勢作戦を含めて検討を続けた[220]。

一方、1 個軍団による陸上攻勢作戦を問題視していたチェイニー国防長官は統合参謀本部に対して、2 個軍団による陸上攻勢作戦を検討するように命じていた。統合参謀本部による検討は、中央軍による検討と関係せず、独立して行われた。統合参謀本部が作成した 2 個軍団による陸上攻勢作戦の案は「西方遠征（Western Excursion）」と名付けられた。その作戦の概要は、イラク軍が防御部隊を配置していない西方の地域、すなわちクウェートから西に 800km 以上も離れたサウジアラビアとイラクの国境線上の地点から攻撃を開始し、攻撃経路上の飛行場を占領しながらクウェートに向かって攻撃するという内容だった。（図 8 を参照）

シュワルツコフとパウエルは、「西方遠征」はあまりにも無謀だという意見で一致した。しかし、チェイニー国防長官を納得させるためには、「西方遠征」を検証して、その問題点を整然と説明することが必要だった[221]。

10 月 27 日、シュワルツコフは、陸上攻勢作戦について検討していたパーヴィスらとは別のチームを編成し、「西方遠征」の実現可能性を検証した。このチームが出した検証結果は次の三つだった。

---

[217] パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』148-149 頁。
[218] ウッドワード『司令官たち』392-393 頁。
[219] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 133; ウッドワード『司令官たち』394-396 頁。
[220] Swain, *"Lucky War"*, pp. 84-85.
[221] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』385-386 頁。

① 飛行場の確保はクウェート解放に寄与しない。
② 西方への移動に対する兵站支援は不可能である。
③ 「西方遠征」は兵力の分散を招く。

検証結果はすべて「西方遠征」に否定的な内容だった。シュワルツコフは検証結果を国防総省に送付した。数回に及ぶ折衝の後、「西方遠征」は取り下げられた[222]。

エ 増派を決定したブッシュ大統領

10 月 30 日、ワシントンにおいて、湾岸危機への対応に関する今後の方針を決定するための会議が開催された。会議の主題は、サウジアラビア防衛に専念しながら経済制裁による圧力をかけ続けてイラク軍がクウェートから撤収するのを待つのか、それとも武力を行使してクウェートを解放するのかという問題だった。スコウクロフト（Brent Scowcroft）国家安全保障担当大統領補佐官は、武力を行使する場合には安全保障理事会の武力行使容認決議を得ることを目指すのか、安保理決議が得られない場合にはアメリカに同調する国々とともに武力を行使するのか、これらの場合を想定した準備は進捗しているのかといった問題を提起した。

その後、パウエルが、12 月上旬にサウジアラビアの防衛態勢が完成することを報告し、あわせて戦略的航空作戦と陸上攻勢作戦から成る攻勢作戦について説明した。パウエルは、攻勢作戦のためには兵力を倍増させることが必要だと主張した。空爆だけでは不十分なのかというブッシュ大統領の質問に対してパウエルは、歴史上、空爆だけで戦争に勝った例はないと回答した。

ブッシュ大統領は増派を決心した。ブッシュ大統領は、10 月 31 日に最終的な承認を与え、11 月 8 日に湾岸地域への増派を発表した[223]。

（7） 陸上攻勢作戦の具体化

ア 中央軍の構想示達

ブッシュ大統領が増派を決定したことを受け、シュワルツコフは 2 個軍団による陸上攻勢作戦の具体化を進めた。11 月 14 日、シュワルツコフは師団長以上の部隊指揮官をダーランに召集し、「砂漠の嵐」作戦及び陸上攻勢作戦の構想を示達した。

---

222 Swain, *"Lucky War"*, pp. 85-87.
223 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』149-152 頁；ウッドワード『司令官たち』404-411 頁。

当初、機密の漏洩防止を徹底するように指示した後、シュワルツコフは三つの戦略目標を示した。戦略目標は次のとおりだった。

① イラク軍をクウェートから排除すること。
② クウェート政府を回復すること。
③ イラクに捕らえられたアメリカ人を解放すること。

次に、シュワルツコフは、戦略目標を達成するためにはイラク軍の重心（center of gravity）、すなわち力の根源を攻撃しなければならないと説明した。シュワルツコフがイラク軍の重心と定義したのは、サダム・フセイン大統領、イラク軍の化学戦能力及び RGFC だった。

中でも特にシュワルツコフが強調したのは RGFC を殲滅することだった。シュワルツコフは、戦闘が終了した時、RGFC の戦力を残していてはならないと説明した。

続けて、シュワルツコフは、戦場における目標を説明した。目標の第一はイラク軍の指揮統制機能を攻撃すること、第二は制空権をイラク軍から奪い取ること、第三はイラク軍の大量破壊兵器及びその使用能力を破壊することだった。

最後に、シュワルツコフは「砂漠の嵐」作戦を構成する四つの段階について説明した。各段階は次のとおりだった。

第 1 段階：戦略的航空作戦（Phase I: Strategic Air Campaign）
第 2 段階：クウェート戦域での航空優勢獲得（Phase II: Air Supremacy in KTO）
第 3 段階：地上戦開始のための条件作為（Phase III: Battlefield Preparation）
第 4 段階：陸上攻勢作戦（Phase IV: Offensive Ground Campaign）[224]

あわせてシュワルツコフは、「砂漠の嵐」作戦のタイムラインについて概要を説明した。その内容は次のとおりだった[225]。

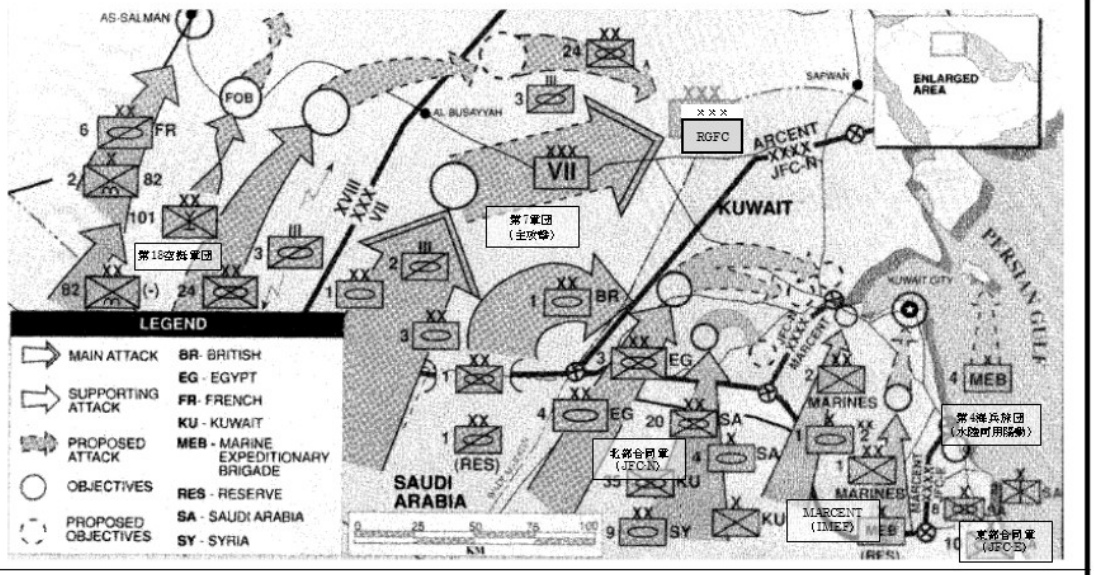
① 戦略的航空作戦の開始日は 1 月中旬であること。
② 陸上攻勢作戦の開始日は 2 月中旬であること。
③ 中央部及び西部から攻撃する地上部隊の攻撃発起位置への移動は、戦略的航空作戦の開始後とすること。

議題は陸上攻勢作戦に移った。陸上攻勢作戦を行う地域は四つの地域に区分されていた。それぞれの地域における作戦の概要は次のとおりだった。（図 10 を参照）

[224] 正確に翻訳した場合、「Campaign」の用語が使用されている第 1 及び第 4 段階は「戦略的航空戦役」及び「陸上攻勢戦役」となる。しかし、四つの段階で構成される一連の行動が「砂漠の嵐作戦」と呼称されていることから、本章は第 1 及び第 4 段階を「戦略的航空作戦」及び「陸上攻勢作戦」と翻訳した。
[225] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』398-403 頁；クランシー『熱砂の進軍（上）』320-324 頁。

| | |
|---|---|
| 海岸線沿い | MARCENT とサウジアラビア軍を主体とする東部合同軍（Joint Force Command-East: JFC-E）が攻撃し、イラク軍の牽制とクウェート市の包囲を行う。 |
| 西部クウェート | エジプト軍及びサウジアラビア軍を主体とする北部合同軍（Joint Force Command-North: JFC-N）が MARCENT と連携しながら攻撃し、クウェート市の北西において幹線道路の交差点を確保して、クウェート市とバスラを結ぶ幹線道路を遮断する。 |
| 中央部 | 主攻撃の第 7 軍団がワジ・アル・バティンの西側沿いに攻撃し、RGFC を殲滅する。 |
| 西　部 | 第 18 空挺軍団がユーフラテス川の線に向かって攻撃し、同河川の付近で国道 8 号線を封鎖して RGFC の退路を遮断する。 |

図10　2個軍団による陸上攻勢作戦構想




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 130.

イ　イギリス軍及びフランス軍の配備変更

11 月 29 日、イラクに対する武力行使を認めた安保理決議 678 が採択された。これ以降、各国の動きが活発化した。中東イギリス軍司令官ドラビリエール中将は、MARCENT ではなく、主攻撃となる第 7 軍団と一緒にイギリス第 1 機甲師団を運用してほしいと申し出た。ドラビリエールは三つの理由を挙げた。第一は、MARCENT の行動地帯内には障害となる地形や石油関連施設が多く、戦車の機動力を十分に発揮できないという理由だった。第二は、アメリカ海兵隊の攻撃に協力するという任務は最新鋭のチャレンジャー戦車を装備するイ

ギリス第 1 機甲師団にとって役不足であり、イギリスが同戦車を海外に輸出する上での宣伝効果が少ないという理由だった。第三は、MARCENT の行動地帯にはイラク軍が待ち構えており、多くの損害が見込まれるという理由だった。

ドラビリエールの要望を尊重したシュワルツコフは、MARCENT 司令官ブーマー中将が反対していたにも拘わらず、イギリス第 1 機甲師団が ARCENT に加わることを承認した。12 月 24 日、シュワルツコフは指揮関係を変更した。イギリス第 1 機甲師団はフランクスが指揮する第 7 軍団の隷下で陸上攻勢作戦に参加することになった[226]。

一方、イギリス第 1 機甲師団を引き抜かれたことにより、イラク軍が待ち構える防御陣地に対して正面から攻撃する MARCENT では、機甲戦力及び障害処理能力が不足した。MARCENT の戦力を補うため、シュワルツコフは ARCENT 司令官ヨソック中将に対して、戦力を提供するように命じた。しかし、ヨソックは戦闘力の分散を招くという理由から、戦力の提供に消極的だった。MARCENT に対する戦力補充の問題は、最終的に ARCENT の第 1 旅団／第 2 機甲師団と MLRS の 1 個中隊を MARCENT の作戦統制下に入れることで妥結した。1991 年 1 月 10 日、シュワルツコフは指揮関係を変更した[227]。

一方、フランスは、戦後の湾岸地域への影響力を強化するため、より積極的な態度に変化した。フランス政府は、統合参謀長シュミット（Maurice Schmitt）大将をサウジアラビアに派遣した。12 月 6 日、シュワルツコフと会談したシュミットは、陸上攻勢作戦への参加し、多国籍軍の左翼を担いたいと申し出た。フランス軍の第 6 軽機甲師団には RGFC 隷下の重師団に対抗する能力はなかった。一方、シュワルツコフは、第 18 空挺軍団の西側の側面を掩護する部隊を探していた。シュワルツコフは、戦車、装甲車及びヘリコプターを保有するフランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の側面の掩護に適任だと判断した。シュワルツコフはシュミットの申し出を快諾した[228]。

### ウ　兵站支援態勢に関する検討

増派された第 7 軍団の受け入れは、サウジラビアでの兵站支援態勢が充実し始めたことから、円滑に進んだ。また、ドイツからサウジラビアに移動する際、隷下の兵站部隊を伴っていた第 7 軍団は、自力で必要な兵站支援を実施することができた。このため、戦闘部隊を優先したために兵站部隊と分離した第 18 空挺軍団とは異なり、第 7 軍団の受け入れでは兵站支援上の問題は少なかった。

湾岸危機以前における中央軍の計画において、湾岸地域での兵站支援を担任する部隊は、第 377 戦域陸軍地域コマンド（377 Theater Army Area Command）だった。第 377 戦域陸軍地域コマンドは、アメリカ本土で派遣に向けた準備を進めていた。しかし、サウジラビ

---

[226] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 72-76; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』404 頁。
[227] Gordon, *The Generals' War*, pp. 169-170; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 75, 87-89.
[228] Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 197-198.

アに緊急展開するために臨時に編成した後方支援コマンドが十分に機能していた。シュワルツコフとヨソックは第 377 戦域陸軍地域コマンドの派遣を取り消した[229]。

12 月初旬、ARCENT 副司令官兼ねて後方支援コマンド司令官パゴニス少将は、シュワルツコフから攻勢作戦の内容について伝達を受けた。パゴニスは、西部の砂漠に 2 個軍団を展開させるための兵站所要は膨大であり、「砂漠の盾」作戦を想定した兵站組織や兵站施設を「砂漠の嵐」作戦を想定したものに作り直すことが必要だと判断した。パゴニスはシュワルツコフに対して、第 18 空挺軍団と第 7 軍団が西部に展開するために必要な兵站支援態勢を確立できるだろうと回答した。

中でも特に懸念された問題は、第 18 空挺軍団と第 7 軍団がそれぞれの攻撃発起位置に移動する際に交差してしまうことだった。この問題をさらに困難にしていたのは、シュワルツコフが両軍団の移動開始時期を戦略的航空作戦の開始後に統制したことだった[230]。（図 11 を参照）

パゴニスは、2 個軍団による陸上攻勢作戦のための兵站支援について計画した。12 月 27 日、パゴニスはシュワルツコフに対して、戦略的航空作戦を開始する前に西部の兵站基地を設置し、そこに必要な軍需品を集積したいと願い出た。しかし、シュワルツコフはこの要望を認めなかった。シュワルツコフは、西方の砂漠から攻撃する企図を秘匿することを重視した。パゴニスは、2 個の軍団が西方への展開を開始する前に設置することが必要な兵站基地「チャーリー（Charlie）」及び「エコー（Echo）」を戦略的航空作戦の開始後に設置することを決定した。12 月 29 日、シュワルツコフはパゴニスが作成した兵站計画を承認した[231]。（図 12 を参照）

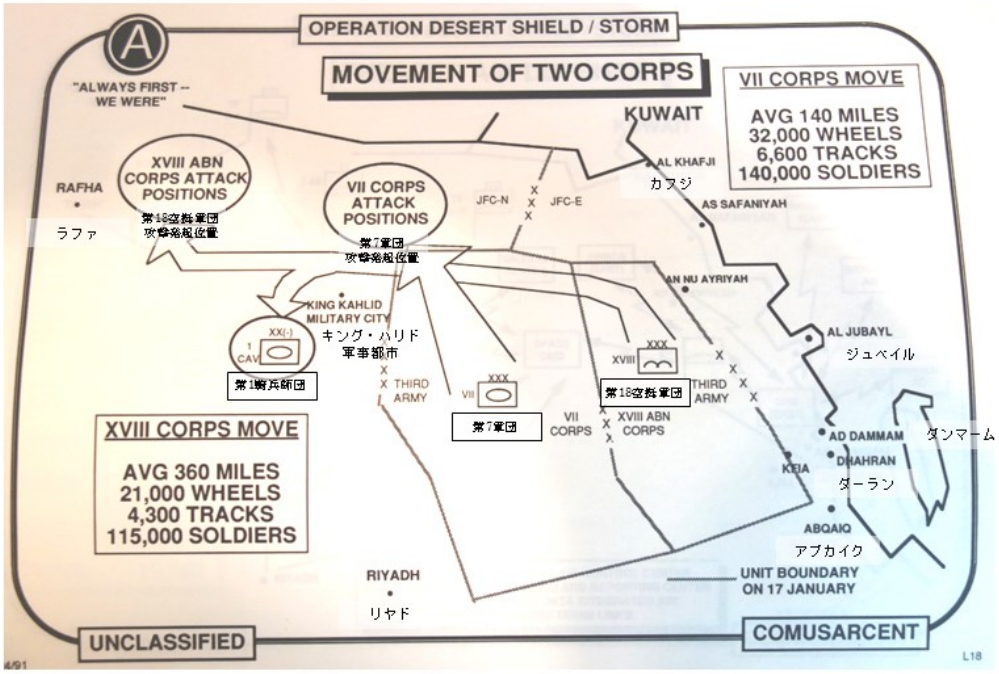
しかし、輸送の問題が残っていた。第 18 空挺軍団が攻撃発起位置のラファまで移動するためには重装備輸送車両の調達が必要だった[232]。

12 月 16 日、陸軍参謀本部は、廃止されていた第 22 後方支援コマンドを再建し、同時に臨時編成の部隊だった後方支援コマンドを第 22 後方支援コマンドとすることを決定した。パゴニス以下、兵站支援に奔走していた将兵の士気は高揚した[233]。

---

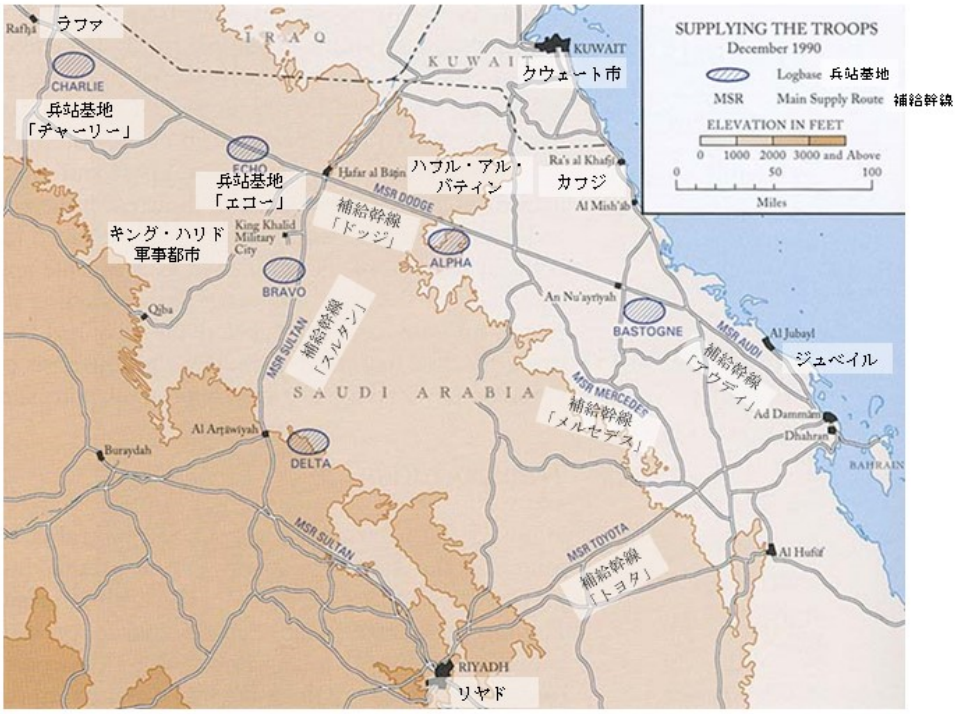
[229] Schubert, *The Whirlwind War*, pp. 57-58; パゴニス『山・動く』198 頁。
[230] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 145.
[231] Swain, *"Lucky War"*, pp. 106-108; パゴニス『山・動く』201-211 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』419-420 頁。
[232] Swain, *"Lucky War"*, p. 105.
[233] パゴニス『山・動く』201-202 頁。

図11　第7軍団及び第18空挺軍団の攻撃発起位置への移動




出典： After Action Report, "Third Army, after action briefing on "Operation Desert Shield-Storm"," September 24, 1991, Box 23, OCLC 70551821, U.S. Army Heritage and Education Center, Carlisle, PA.

図12　中央軍の兵站組織




出典： アメリカ陸軍歴史センター<https://history.army.mil/books/www/p064map5.jpg>（2020年7月2日アクセス）

## ３　「砂漠の嵐」作戦――陸上攻勢作戦の準備

攻勢作戦の準備間、アメリカ軍内の各軍種の統合や多国籍軍を構成する各国軍の共同は順調に進んだとは言えない。アメリカ陸軍、空軍及び海兵隊の間では、攻勢作戦の進め方に関する考え方の違いが顕在化した。また、イラク軍のスカッド・ミサイル（Scud Missile）による攻撃とカフジ（Khafji）に対する攻撃は、多国籍軍の結束を動揺させた。シュワルツコフは、各軍種の主張を調整すること及びアラブ諸国との協力関係を維持することに特別の注意を払った。

加えて、結果的に多国籍軍は僅か 100 時間で勝利したけれども、陸上攻勢作戦の計画は、RGFC の殲滅という目標の達成に向かってすべての地上部隊の作戦を連携させた計画だったとは言えない。このことは、中でも特に、陸上作戦をどのように終結するのかというチェイニー国防長官の質問に対してシュワルツコフが回答しなかったことから伺える。

### （１）　戦略的航空作戦

#### ア　空軍の作戦に対する各軍種間の考え方の相違

陸上攻勢作戦の準備が進むにしたがって、空軍が行う地上部隊に対する協力について考え方が軍種間で異なることが明らかになった。空軍がどのように対地攻撃を行うかという問題は陸上攻勢作戦の遂行要領を左右した。シュワルツコフには、空軍が行う作戦と地上部隊が行う作戦を連携させる責任があった。

陸軍と空軍の間の意見の相違は、イラク国内及びクウェート戦域内の戦略目標に対する爆撃と地上部隊に協力するために行う対地攻撃のそれぞれに対してどの程度の空軍力を配分するかという点にあった。空軍は、空軍力によってイラクを屈服させて戦争に勝利することができると考えていた。一方、陸軍は、最終的な決着をつけるのは陸軍だと考えていた[234]。陸軍出身のシュワルツコフとパウエルは、空軍力によって戦争に勝利できるという考え方に懐疑的だった[235]。

1991 年 1 月 14 日、CENTAF 司令官ホーナー中将から航空作戦計画に関する最終的な説明を受けた時、シュワルツコフは、陸軍からの要求が十分に反映されていないという理由で、怒りを露わにした。計画作成時、CENTAF 特別計画グループのグロッソン准将は、陸軍からの要望に基づき航空火力を対地攻撃に配分した。しかし、シュワルツコフが問題視したのは、地上部隊に協力するために行う対地攻撃を開始する時期だった。ホーナーは、攻勢作戦の各段階に応ずる空軍力の運用を報告した。その内容は、航空優勢獲得（第 2 段階）の後、

[234] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 175.
[235] Gordon, *The Generals' War*, p. 190; パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』151 頁。

バスラ一帯の RGFC とクウェートを占領中のイラク軍に対する対地攻撃を開始するというものだった。シュワルツコフは、戦略的航空作戦（第 1 段階）の当初から RGFC 及びクウェートに所在するイラク軍を空軍力で攻撃することを要求した[236]。

1980 年代の初め、陸軍と空軍は、連携の強化を図るため空軍が行う対地攻撃の中に「戦場航空阻止」の区分を導入することに合意した。しかし、空軍が実際に「戦場航空阻止」を行うためには、あらかじめイラク軍の防空網を破壊しておく必要があった。防空網を破壊するよりも前の段階から空軍力で RGFC を攻撃することに固執したシュワルツコフは、最新の電波妨害装置を搭載し、かつ高々度上空から爆撃することができる B-52 の使用を検討するように命じた。しかし、ホーナーとグロッソンは、RGFC に対する空爆を開始できるのは戦略的航空作戦の開始時刻の 18 時間後以降であるという結論に達した[237]。空軍にとって、対空火器が制圧されていない中で RGFC を攻撃することに伴う危険は大きかった。

あわせて、空軍が行う地上部隊に対する協力には臨機応変性に欠けるという難点があった。空軍が地上部隊からの要求に基づき地上の目標を攻撃するためには、手続き上、地上部隊は攻撃を希望する時刻の 72 時間前までに空軍に対して攻撃を要請しなければならなかった。空軍力を活用する計画を練り上げていた第 7 軍団長フランクス中将は、陸上攻勢作戦間、空軍による「縦深攻撃」を臨機応変に行うことができないことに不満だった[238]。

一方、海兵隊と空軍の間の意見の相違は、二つの点に要約できる。第一は、海兵隊の航空部隊を空軍の統制下に置くかという点だった。MARCENT 隷下の航空部隊である第 3 海兵航空団（3rd Marine Aircraft Wing: 3MAW）の本来の任務は、MARCENT 隷下の地上部隊の作戦に協力することだった。しかし、空軍は、クウェート戦域内に数多く存在する戦略目標を爆撃するため、空軍が航空戦力を一元的に運用することが望ましいと主張した。一方、MARCENT は 3MAW を空軍の統制下に入れることを嫌った。この問題は、MARCENT が攻撃機 A-6E 及び電子戦機 EA-6B の全部と攻撃機 FA-18 及び AV-8B の半数を空軍に提供し、MARCENT が対地攻撃を要望した時には空軍の爆撃機 B-52 及び攻撃機 A-10 が 3MAW に協力するという案で妥結した[239]。

第二は、臨機応変性を重視する海兵隊の作戦に対して空軍はどのように協力するかという点だった。72 時間前までに空軍に対して対地攻撃を要請するという手続きは、海兵隊の作戦に馴染むものではなかった[240]。この問題は、ホーナーが 3MAW の航空機が武装偵察（Armed Reconnaissance）を実施することを許可したにより解消した。2 月 20 日以降、ブーマーは統合航空構成部隊司令官（JFACC）だったホーナーを経由することなく、MARCENT 隷下の地上部隊指揮官の要求に応じて 3MAW の航空機を使って対地攻撃を行うことができるようになった[241]。

---

[236] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』334-336 頁。
[237] Gordon, *The Generals' War*, pp. 199-200. 「戦場航空阻止」の区分の導入は本章第 1 節(3)項を参照。
[238] Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 368-369. 「縦深攻撃」は本章第 1 節(3)項を参照。
[239] Gordon, *The Generals' War*, p. 310.
[240] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 89.
[241] *Ibid.*, pp. 148-149.

イ　空爆の効果

航空作戦に関する陸軍と空軍の間における考え方の相違は、実際に攻撃した目標の比率にも表れた。戦略的航空作戦の開始直後、実際に空軍が攻撃した目標の殆どは、陸軍が対地攻撃を要求した目標とは別の目標だった。1 月 17 日未明、海軍のトマホーク対地ミサイルなどの各種の攻撃手段を使って、戦略的航空作戦が始まった。戦略的航空作戦においてARCENT は約 1,200 個の目標への対地攻撃を要請した。しかし、このうち空軍が航空作戦任務命令（Air Tasking Order: ATO）に含めた目標は約 200 個であり、実際に空軍が攻撃した目標は約 140 個だった[242]。

ARCENT 司令官ヨソック中将にとって、航空作戦の成果は満足できる内容ではなかった。ヨソックが期待していたのは、陸上攻勢作戦の開始前までに、クウェート戦域内のイラク軍の火砲や機甲部隊の半数を破壊すること及び ARCENT が陣地を突破する地点に向けられたイラク軍火砲の 90%を破壊することだった[243]。しかし、2 月 23 日付のブッシュ大統領に対する報告書は、最も楽観的な中央軍の報告でさえ、イラク軍の戦車の 39%、装甲車の 32%、火砲の 47%を破壊したという内容だった[244]。一方、防御陣地帯の後方に位置したイラク陸軍の重師団及び RGFC は、約 40 日間に及ぶ空爆を受けたにも拘わらず、戦闘可能な状態を維持していた。中でも特に RGFC には、僅かな損害だけで空爆を回避した部隊は少なくなかった[245]。

一方、空軍による攻撃の心理的効果は大きかった。防御陣地帯に展開していた最前線のイラク陸軍の師団では、空爆のために補給が途絶え、士気が低下した。また、空爆と同時に行った心理作戦が奏功した。イラク陸軍第 7 師団が防御する陣地に対して、「明日 B-52 で爆撃するので国境に向かって前進し投降せよ」あるいは「無用な抵抗を諦めて多国籍軍に投降せよ」とアラビア語で書いたビラが撒かれた[246]。イラク陸軍の師団の中には、陸上攻勢作戦の開始前までに半数の兵士が脱走した師団があった[247]。

---

[242] Gordon, *The Generals' War*, p. 319; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 180.
[243] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 178.
[244] Gordon, *The Generals' War*, p. 335. CIA による評価は戦車の 12%、装甲車の 9%、火砲の 8%を破壊したという内容だった。戦後の空軍による調査結果は戦車の 40%、装甲車の 30%、火砲の 47%を破壊したという内容だった。詳細は Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey, Vol. II, Pt2* (Washington, D.C.: GPO, 1993), pp. 211, 220, 261 を参照。
[245] Pollack, *Arabs at War*, pp. 246-247; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 207-211.
[246] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 150-151.
[247] Gordon, *The Generals' War*, p. 352.

（2）　スカッド・ミサイルによる攻撃

ア　フセイン大統領の狙い

当初、シュワルツコフはイラクによるミサイル攻撃に対して特別の注意を払っていなかった。スカッド・ミサイルに対する空爆の優先度は、その他の重要目標と同じだった。シュワルツコフは、化学兵器などの大量破壊兵器が搭載されたミサイルを警戒したが、一方、通常弾頭のミサイルは一機の航空機が飛来してでたらめに小型爆弾を落として飛び去るのと同じと評価していた[248]。一方、湾岸危機の勃発前、中央軍は、イラクはスカッド B（Scud B）（射程 300km、半数必中界約 2.3km、弾頭重量約 825kg）を約 600 発、これを改良したアル・フセイン（Al-Husayn）（射程 600km、弾頭重量 160kg）とアル・ヒジャラ（Al Hijarah）（射程約 750km）を合計約 100 発、固定式発射台を 28 基及び移動式発射台を 36 基保有していると判断していた[249]。

フセイン大統領が狙っていたのは、純軍事的な効果ではなかった。フセイン大統領は、イスラエルにミサイル攻撃を行うことにより、アラブ人の支持を獲得し、クウェートを軍事力で併合したことに対する非難を緩和することができると信じていた[250]。さらに、フセイン大統領は、イスラエルが反撃した場合、湾岸危機はイスラエルを含む欧米諸国とアラブ諸国との戦争に変わると予想していた。

アメリカにとって、イスラエルによる反撃は回避しなければならないシナリオだった。12 月 11 日、イスラエルのシャミル（Yitzhak Shamir）首相はブッシュ大統領に対して、イラクに対する先制攻撃を行わないことを約束した[251]。しかし、攻撃を受けた場合、イスラエルが反撃しないという保証はなかった[252]。

イ　アメリカ政府及び中央軍の対応

1991 年 1 月 18 日 0300、イスラエルの商都テルアビブ（Tel Aviv）及び主要都市ハイファ（Haifa）に対してイラク領内からスカッド・ミサイルが発射され、7 名が負傷した[253]。イスラエルのアレンス（Moshe Arens）国防相は、直ちにチェイニー国防長官に電話し、ペトリオット・ミサイルを装備した防空部隊の派遣を要請した。1 月 19 日、防空部隊の第一

---

248 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』434 頁。
249 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 13-15.
250 モハメド・ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』和波雅子訳（時事通信社、1994 年）356 頁。
251 ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』357 頁；ウッドワード『司令官たち』466 頁。
252 Gordon, *The Generals' War*, pp. 195-196.多国籍軍が戦略的航空作戦を開始する直前、シャミル首相はイーグルバーガー国務副長官及びウォルフォウィッツ国防次官に対して、イスラエルが採る行動については確約できないが行動を起こす前にはアメリカと相談すると約束した。これを受けてイーグルバーガーとウォルフォウィッツはミサイル攻撃に関する早期警戒情報の提供、イスラエルへの防空部隊の配備及びペンタゴンとテルアビブを結ぶ秘密回線の設置を申し出た。
253 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 166.

陣がイスラエルに到着した[254]。

問題となったのは、イスラエルがイラクに対する報復攻撃を実施するためにサウジアラビア領空通過の許可と敵味方識別コードを要求したことだった[255]。イスラエルの要求は、アメリカとサウジラビアにとって受け入れがたい内容だった。また、イスラエル空軍が隣国ヨルダンの領空を許可なく通過した場合、辛うじて中立を維持していたヨルダンをイラク側に押しやってしまう可能性があった。1 月 18 日 2240（アメリカ東部標準時）、ベーカー国務長官と電話会談したシャミル首相は、当分の間、反撃を自制することを約束した。しかし、スカッド・ミサイルによる攻撃は続いた。

CENTAF は、F-16 及び空中から地上を監視する統合監視目標攻撃レーダーシステム（Joint Surveillance Target Attack Radar System: JSTARS）をスカッド・ミサイル破壊の任務に投入した。さらに、CENTAF 特別計画グループのグロッソン准将は、3 日間、すべてのソーティをスカッド・ミサイル破壊の任務に配分するという大胆な提案を行った。

しかし、シュワルツコフは、空爆の重点をスカッド・ミサイル破壊の任務に移すことを望まなかった。『将軍たちの戦争（*The Generals' War*）』の著者ゴードン（Michael R. Gordon）とトレーナー（Bernard E. Trainor）は、湾岸戦争で実施された約 4.1 万ソーティのうちスカッド・ミサイル破壊の任務に配当されたのは約 1,500 ソーティ（3.5%）だったと指摘している[256]。一方、回顧録においてシュワルツコフは、1 日間に実施可能な 2,000 ソーティの三分の一をスカッド・ミサイル破壊の任務に配分したと主張している[257]。

1 月 19 日、イラクは再びスカッド・ミサイルをテルアビブに発射した。さらに 1 月 22 日、スカッド・ミサイルがテルアビブに着弾し、3 名が死亡し、数十名が負傷した[258]。エジプトのムバラク（Hosni Mubarak）大統領は、いかなる国も自衛権を持つという声明を発表したが、他のアラブ諸国はこの声明に同調しなかった[259]。

1 月 28 日（アメリカ東部標準時）、チェイニー国防長官とパウエルは、イスラエルのアイヴリ（David Ivri）国防長官、副参謀総長バラク（Ehud Barak）大将及び駐米イスラエル大使館付武官ベンショーシャ（Ben-Shoshan）少将と会談した。イスラエル側は、イラク西部に攻め込み、空爆と地上戦によりスカッド・ミサイル発射基地を破壊する作戦について説明した[260]。イスラエルに反撃を自制させるため、ブッシュ大統領は直接シャミル首相と交渉し、同時にイーグルバーガー（Lawrence S. Eagleburger）国務副長官とウォルフォウィッツ（Paul D. Wolfowitz）国防次官をイスラエルに派遣した[261]。

1 月 20 日以降、イラクは、サウジアラビアに対してもスカッド・ミサイルによる攻撃を

---

254 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 181-183.
255 Gordon, *The Generals' War*, p. 231.
256 *Ibid.*, pp. 237-239.
257 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』436 頁。
258 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 166-168.
259 ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』356 頁。
260 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』188-190 頁。
261 Gordon, *The Generals' War*, pp. 235-236; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』437 頁。

開始した。1 月 20 日、ダーランに 4 発のスカッド・ミサイルが飛来した。このうち 3 発はペトリオット・ミサイルにより迎撃された。1 月 21 日、サウジアラビアの首都リヤドに 6 発のミサイルが飛来した。多国籍軍は何らかの対策を講じる必要に迫られた[262]。

ウ　特殊部隊の投入

空爆によりスカッド・ミサイルを破壊する作戦における困難な課題は、移動式発射台を発見することだった[263]。中型トラック搭載型の移動式発射台は、ミサイルを発射した後、僅か 6 分間で隠れることが可能だった[264]。ミサイルが発射された地点に向かって出撃した空軍機が発射台を発見できない回数は少なくなかった。広大な砂漠地帯の中で、ワジ（流水がない涸れた河川）などの地形や人工物に隠れながら夜間及び悪天候を利用して展開し、さらにはデコイ（囮）に紛れた移動式発射台を発見することは容易ではなかった[265]。

最新式の装備を搭載した空軍機による捜索にも拘わらず、移動式発射台の発見は困難だった。空軍は、U-2 や RF-4C といった偵察機や B-52 を移動式発射台が隠れていると疑われる地域の上空で運用し、厳重な監視態勢を敷いた。また、昼間は A-10 及び F-16、夜間は夜間低高度赤外線航法・目標指示システムを装備した F-16 と F-15E 及び赤外線前方監視装置を装備した A-6E が上空から監視した[266]。しかし、移動式発射台の捜索は奏功しなかった。

移動式発射台を発見するため、中央軍は特殊部隊を投入した。1 月 22 日からはイギリス陸軍の特殊作戦部隊（Special Air Service: SAS）が、2 月 7 日からはアメリカ軍の統合特殊作戦任務部隊（Joint Special Operations Task Force: JSOTF）がイラク領内に潜入した。特殊部隊は、厳しい地形と悪天候を克服しながら航空機と連携し、移動式発射台や通信施設の発見と破壊の任務を遂行した[267]。（図 13 を参照）

空軍と特殊部隊を組み合わせた作戦は、イラクによるミサイル攻撃をある程度減少させ

---

[262] Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 182-183; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』435 頁。
[263] Gordon, *The Generals' War*, p. 230.
[264] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』437 頁。
[265] William Rosenau, *Special Operations Forces and Elusive Enemy Ground Targets: Lessons from Vietnam and the Persian Gulf War* (Santa Monica, CA: RAND, 2001), p. 32. アラブ合同軍司令官ハリド中将は、スカッド・ミサイルの発射が日没から日の出までの時間帯で、かつ雲高が 3,000ft 以下の気象条件に限定されていると指摘した。詳細は Hrh General Khaled Bin Sultan, *Desert Warrior: A Personal View of the Joint Forces Commander* (New York: Harper Collins Publishers, 1995) pp. 355-356 を参照。また、デコイは精巧に作られており、地上約 23m の距離から確認しても真贋の判別が困難だった。詳細は Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey Summary Report* (Washington, D.C.: GPO, 1993), p. 86 を参照。
[266] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 168. 赤外線前方監視装置（Forward Looking Infrared: FLIR）は赤外線センサーによりパイロットに地形映像を提供する装置。夜間低高度赤外線航法・目標指示システム（Low Altitude Navigation and Targeting Infrared for Night: LANTIRN）は FLIR、地形追随レーダー及びレーザー目標指示器を統合した装置。
[267] アンディ・マクナブ『ブラヴォー・ツー・ゼロ――SAS 兵士が語る湾岸戦争の壮絶な記録』伏見威蕃訳（早川書房、2000 年）453-471 頁。

たことは確かだけれども、十分な成果を収めたとは言えない。DIA は、1 月 18 日から 1 月 27 日までの間にイラクはイスラエルに対して 25 発及びサウジアラビアに対して 24 発のミサイルを発射したが、空軍と特殊部隊が投入された 1 月 28 日から 2 月 10 日までの間にはミサイル攻撃の回数が減少し、イラクが発射したミサイルはイスラエルに対して 5 発及びサウジアラビアに対して 3 発だったと結論づけている。しかし同時に、DIA は、その後、手口を巧妙化させたイラクのミサイル攻撃の回数が回復し、2 月 11 日から 2 月 25 日までの間にイスラエルに対して 10 発及びサウジアラビアに対して 19 発のミサイルが発射されたと指摘している[268]。また、空軍のパイロットは約 80 基のスカッド・ミサイルを破壊したと主張したが、戦後に空軍が実施した調査は、空爆で破壊したスカッド・ミサイルの殆どはデコイだったと結論づけている[269]。同様、戦後の議会報告においてアメリカ軍特殊部隊は 12 基のスカッド・ミサイルを破壊したと証言したが、CIA と DIA は特殊部隊の証言を証明する事実は確認できないと結論づけている[270]。

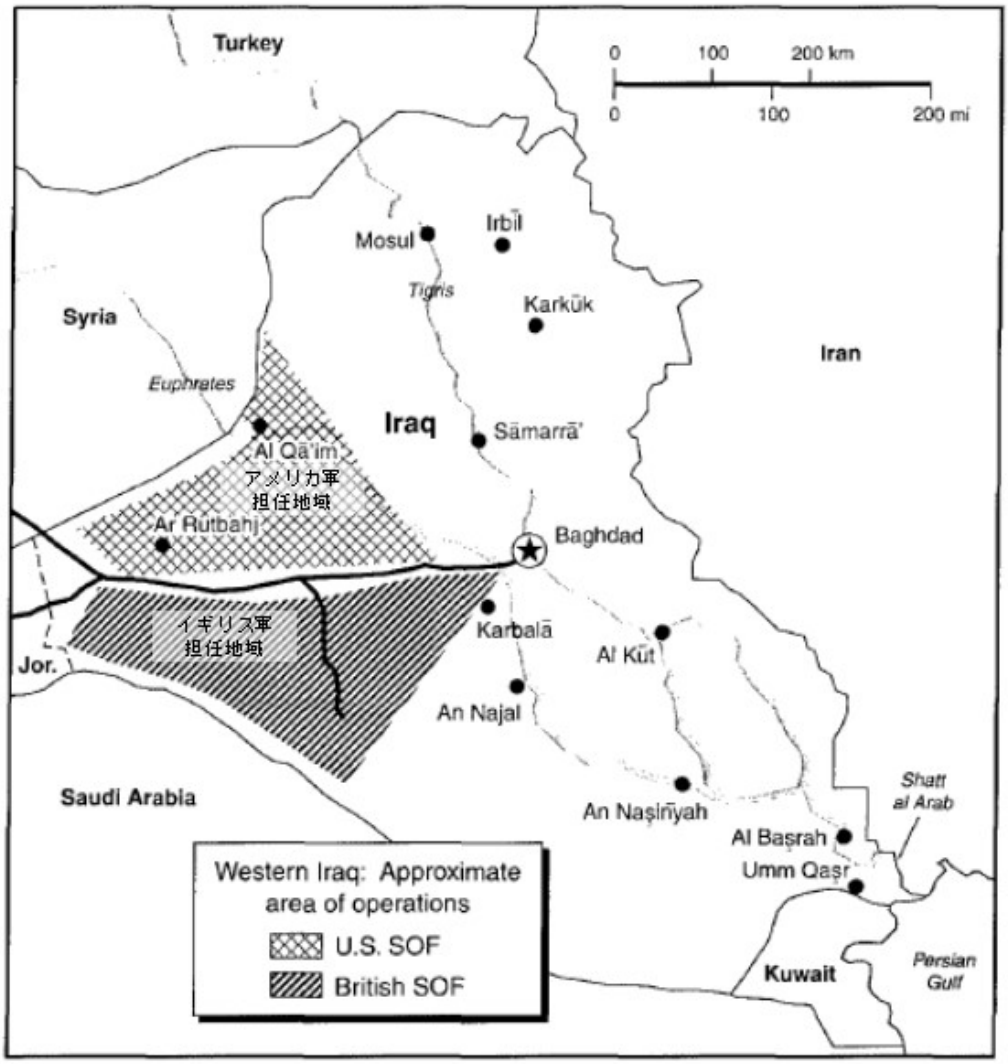
また、防空部隊もスカッド・ミサイルから重要地点を完全に防護したとは言えない。戦後に行われた調査の中には、ペトリオット・ミサイルがサウジアラビアに飛来したミサイルの 89%及びイスラエルに飛来したミサイルの 44%を破壊したという調査結果を出したものがある[271]。しかし、『嵐の戦争（*The Whirlwind War*）』の著者シューベルト（Frank N. Schubert）とクラウス（Theresa L. Kraus）及び『確かな勝利（*Certain Victory*）』の著者スケールズ（Robert H. Scales Jr.）は、ペトリオット・ミサイルが弾着前に空中分解したミサイルの破片に命中した可能性を指摘しており、ペトリオット・ミサイルの高い迎撃成功率に対して懐疑的な見方をしている[272]。

陸上攻勢作戦が終わるまで、スカッド・ミサイルによる攻撃は続いた。多国籍軍は、空軍、特殊部隊及びペトリオット・ミサイルを投入したにも拘わらず、スカッド・ミサイルによる攻撃を完全に排除することはできなかった。2 月 9 日、テルアビブに対するミサイル攻撃により 27 名の市民が負傷した。2 月 25 日、サウジアラビアのダーランにあった兵舎にスカッド・ミサイルが直撃し、28 名のアメリカ軍兵士が死亡し、98 名が負傷した[273]。これは、湾岸戦争全期間を通してアメリカ軍が一度に受けた被害の中で最大のものだった。

---

[268] Gordon, *The Generals' War*, p. 247.
[269] Cohen, *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, pp. 83, 124.
[270] Gordon, *The Generals' War*, pp. 245-246.
[271] Schubert, *The Whirlwind War*, p. 155.
[272] *Ibid.*, p. 155; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 182-183.
[273] Gordon, *The Generals' War*, p. 239.

図13　特殊部隊潜入地域




出典： William Rosenau, *Special Operations Forces and Elusive Enemy Ground Targets: Lessons from Vietnam and the Persian Gulf War* (Santa Monica, CA: RAND, 2001), p. 36.

エ　アメリカ政府の対応

命中精度が低く、かつ通常弾頭によるスカッド・ミサイルによる攻撃には、ある程度の戦術的な効果があった。しかし、その戦略的な効果は大きかった。アメリカ政府はイスラエルに反撃させないことに腐心しなければならなかった。

イスラエルは、イラクに対する報復攻撃を開始する寸前だった。2 月 11 日、シャミル首相の指示を受けてワシントンを訪問したアレンス国防相は、ブッシュ大統領、ベーカー国務長官及びチェイニー国防長官に対して、イラクへの報復攻撃を行うと伝えた。アレンス国防

相は、ペトリオット・ミサイルの迎撃成功率は僅か 20%程度に過ぎず、自国を防衛するためには報復攻撃が必要だと主張した[274]。

アメリカ側とイスラエル側は、ペトリオット・ミサイルの有効性を巡って刺々しい議論を交わした。アレンス国防相はチェイニー国防長官に対して、イラク西部への侵攻に対する承認及び空軍機が飛行するための空中回廊の設定を要求した。チェイニー国防長官はいずれの要求も拒否した。代わってチェイニー国防長官は、ミサイル攻撃からイスラエルを防衛する態勢を強化するため、10 億ドルの支援を行うことを約束した[275]。

ミサイル攻撃によりイラク包囲網に楔を打ち込み、これを崩壊させようとしたフセイン大統領の企てを最終的に阻止したのは、アメリカの外交努力とイスラエルの自制だった。42 発に及ぶスカッド・ミサイルがイスラエルに対して発射されたにも拘わらず、アメリカ政府はイスラエルに反撃を自制させることに成功した。湾岸危機は、イスラエルを含む欧米諸国とアラブ諸国との戦争に変わらなかった[276]。

また、アメリカ政府は、化学兵器を搭載したミサイルをイラクに使用させないことに成功した。特にイスラエルに対して化学兵器を充填したミサイルが着弾した場合、その影響の大きさは計り知れなかった[277]。1 月 9 日、イラクのアジズ外相との会談においてベーカー国務長官は、イラクが化学兵器を使用した場合にはアメリカも応酬すると警告していた[278]。

### （3） カフジに対する攻撃

#### ア イラク軍のカフジ攻撃計画

1 月下旬、フセイン大統領は難局を打開する方策を模索していた。当時、外交交渉は行き詰まり、1 週間程度と予想した多国籍軍の空爆は予想に反して続いていた。

フセイン大統領は、多国籍軍、中でも特にアメリカ軍をイラク軍の防御陣地へ誘い出して痛撃を加え、かつ消耗戦に引き込むため、カフジに対する攻撃を命じた。フセイン大統領の狙いはアメリカ国民の戦意を動揺させることにあった[279]。

ベトナム戦争やレバノン紛争について研究したフセイン大統領は、アメリカは大量の人

---

[274] 湾岸戦争が終わった後も、イスラエルのアレンス国防相とショムロン参謀総長は、ペトリオット・ミサイルが迎撃に成功したスカッド・ミサイルは 1 発乃至皆無であり、その軍事的有効性は疑わしいと主張し続けた。 *The New York Times*, “Patriot Missile’s Success a Myth, Israeli Aides Say” (Nov. 21, 1993). <https://www.nytimes.com/1993/11/21/world/patriot-missile-s-success-a-myth-israeli-aides-say.html>（2019 年 2 月 22 日アクセス）

[275] Rick Atkinson, *Crusade: The Untold Story of the Persian Gulf War* (New York: Houghton Mifflin Company, 1993), pp. 279-281.

[276] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 168; Cohen, *Gulf War Air Power Survey Summary Report*, p. 86.

[277] ヘイカル『アラブから見た湾岸戦争』357 頁。

[278] 同上、337 頁。

[279] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 101. この他、フセイン大統領はアメリカとの交渉における取引材料とするため、アメリカ兵を可能な限り多く捕虜とすることを狙っていた。

的被害に耐えることができないと判断した[280]。フセイン大統領は、アメリカ軍に大損害を与えることによりアメリカ国内で厭戦気分を引き起こし、最終的にアメリカ軍を撤退に追い込むことができると考えた。

カフジは、クウェートとサウジアラビアの国境線から南へ約 11km の地点にある、ペルシャ湾に面した都市である。1990 年 8 月、クウェートに侵攻したイラク軍砲兵部隊の射程内に入ったため、カフジ市民に対する避難命令が発令された。

また、この時、サウジアラビア軍はカフジ守備隊の一部をカフジに残し、守備隊の主力をカフジの南側の地域に避難させた。シュワルツコフもアラブ合同軍司令官ハリド中将も、イラク軍砲兵部隊の射程内となったカフジを確保し続けることは困難だと判断した[281]。

「砂漠の盾」作戦においてカフジの周辺に配置されていた部隊は、MARCENT とサウジアラビア軍を主体とする JFC-E だった。また、イラク軍によるサウジアラビア侵攻を警戒するため、国境線沿いには合計七か所に監視所が設置されていた。各監視所は、西側から順番に第 6、第 5、第 4、第 1、第 2、第 7、第 8 監視所だった。また、監視所の後方には 5 個の大隊が警戒部隊となって展開していた。各大隊は、西側から次の順で配置していた。（図 14 を参照）

① シェパード任務部隊（Task Force Shepherd）（アメリカ第 1 海兵師団隷下の第 1 軽装甲歩兵大隊）
② 第 2 軽装甲歩兵大隊（アメリカ第 2 海兵師団の隷下）
③ オマール任務部隊（Task Force Omar）（サウジアラビア陸軍第 10 機械化旅団を基幹として編成）隷下の 1 個大隊
④ オスマン軍（Force Othman）（サウジアラビア陸軍第 8 機械化旅団とクウェート軍アル・ファタハ（Al-Fatah）旅団を基幹として編成）隷下の 1 個大隊
⑤ アブー・バクル軍（Force Abu Bakr）（サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団）隷下の第 5 大隊

「砂漠の盾」作戦ではカフジを直接防衛する部隊はいなかった[282]。防御陣地が構築されていた地域は、5 個の大隊が展開していた地域の後方約 20km であった。一方、カフジを含む海岸線沿いの地域には、イラク軍の戦車部隊の突進を阻止するため、攻撃ヘリコプターと攻撃機のみで編成したカニンガム任務部隊（Task Force Cunningham）が配置されていた。

フセイン大統領は、三つの理由からカフジを攻撃目標に選定した。第一は、カフジの港湾を奪取することにより多国籍軍の海上部隊に脅威を与えることができるという理由だった。

---

[280] *Ibid.*, pp. 20-21.
[281] *Ibid.*, p. 101. 回顧録においてシュワルツコフは、ハリド中将がシュワルツコフの助言を受け入れてカフジ守備隊を後退させたと主張している。一方、ハリド中将は、自身の判断でカフジ守備隊を後退させたと主張している。詳細はシュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』442 頁；Khaled, *Desert Warrior*, pp. 366-367 を参照。
[282] *Ibid.*, pp. 102-104.

第二は、クウェートに配置したイラク軍砲兵の射程内であるという理由だった。第三は、サウジアラビア軍の反撃を誘発することができるという理由だった[283]。

カフジ攻撃を担任する部隊は、イラク陸軍第 3 軍団隷下の第 3 機甲師団と第 5 機械化師団及びイラク陸軍第 4 軍団隷下の第 1 機械化師団だった。イラン・イラク戦争の際、第 3 軍団はバスラ防衛戦において、カフジ攻撃と同様の、敵を誘い出すことを目的とした攻勢作戦を遂行した経験を持っていた[284]。

カフジ攻撃の作戦構想は次のとおりだった[285]。

① 1 月 29 日 2000、西側から順番に第 1 機械化師団、第 3 機甲師団、第 5 機械化師団を並列して攻撃開始する。
② 主攻撃の第 5 機械化師団は海岸線沿いに攻撃し、1 月 30 日 0100 までにカフジを占領する。
③ 中央の第 3 機甲師団はサウジアラビアとクウェートの国境線が屈曲する地点（国境線の「踵（かかと）（Heel）」）から攻撃し、カフジに向かって攻撃する第 5 機械化師団の西側の側面を掩護する。
④ 最右翼の第 1 機械化師団は第 3 機甲師団の西側の側面を掩護する。
⑤ 第 5 機械化師団がカフジを占領した後、第 1 機械化師団と第 3 機甲師団はクウェートに後退する。
⑥ 第 5 機械化師団は、多国籍軍の地上部隊の攻撃を誘発した後、カフジからクウェートに後退する。

1 月 27 日朝、空爆下にも拘わらず、フセイン大統領はバスラを訪れ、第 3 軍団長マフムード（Saleh Aboud Mahmoud）少将と第 4 軍団長ザキ（Aeeid Khlel Zaki）少将に対して直接作戦計画を示達した。フセイン大統領はマフムード少将に対して、カフジ攻撃に関する指揮権を与えた。

この時、フセイン大統領は、多国籍軍に損害を与えることが重要であると訓示した。フセイン大統領は、イラン・イラク戦争におけるイラク軍の武勇を賞賛し、同時に精神力が弱い多国籍軍はイラク軍との地上戦で損害が出ることを恐れており、損害を与えることによりイラク市民を守り、戦争に勝利することができると説明した[286]。

多国籍軍による空爆が続く中、マフムード少将は、夜間を活用して慎重にカフジ攻撃部隊を攻撃開始位置に配置した。イラン・イラク戦争の際にアメリカ軍から偵察衛星で収集した情報の提供を受けていたマフムード少将は、偵察衛星にも注意を払った。また、マフムード

[283] *Ibid.*, p. 98.
[284] 詳細は陸戦学会『イラン・イラク戦争――戦争に見る湾岸の力学』（九段社、2003 年）289-290 頁を参照。
[285] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 99.
[286] *Ibid.*, p. 105.

少将は隷下部隊に対して、敵に制空権を奪われた中で行動する際の注意点について詳細な指示を与えた[287]。

しかし、3 個師団による攻撃準備を完全に秘匿することは困難だった。1 月 22 日、1 月 25 日及び 1 月 28 日、多国籍軍の空軍機は、監視所が発見した移動中のイラク軍の車列を攻撃した。この他、イラク軍の無線を傍受していたアメリカ海兵隊の情報部隊は、150 人程度のイラク軍工兵部隊が戦車用の機動路を整備していると判断し、MARCENT 司令部に報告した[288]。

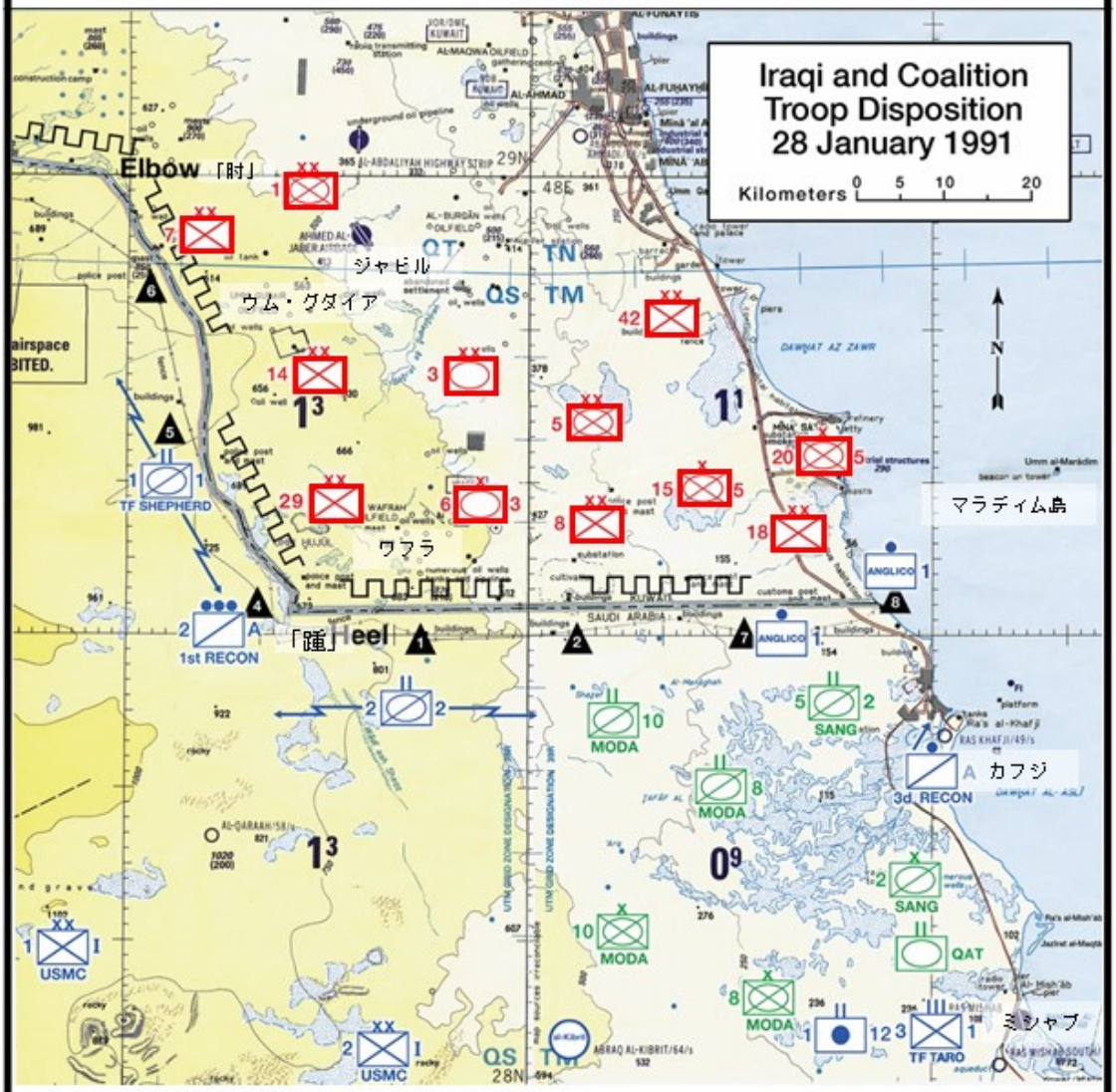
イラク軍が攻勢に出る可能性を示す情報は少なくなかったにも拘わらず、中央軍はイラク軍がカフジ攻撃を準備していることを見抜くことができず、奇襲を受けた。この頃、中央軍司令部の関心は、すでに開始していた戦略的航空作戦と陸上攻勢作戦準備に集中していた。また、サウジアラビア防衛の態勢を確立していた中央軍司令部は、もしイラク軍が攻勢に出る場合は、西方の地域、すなわちキング・ハリド軍事都市（King Khalid Military City）に向かって攻撃するか、もしくはワジ・アル・バティン沿いに攻撃するだろうと予想していた[289]。1 月 25 日、MARCENT 司令官ブーマー中将は CIA から、イラク軍が国境線の監視所を襲撃する可能性があるという警告を受けた。しかし、ブーマーは、第 2 海兵師団に対して CIA からの警告を伝達する以外、特別な対策を講じなかった。同様、CIA からの警告を受けた中央軍司令部は、イラク軍は国境線沿いの防御陣地を強化しているのだろうと判断した。

1 月 29 日夜、イラク軍はカフジに対する攻撃を開始した。最右翼の第 1 機械化師団は多国籍軍の第 5 及び第 6 監視所を攻撃した。中央の第 3 機甲師団は第 4、第 1 及び第 2 監視所を攻撃した。主攻撃の第 5 機械化師団は海岸線沿いの第 7 及び第 8 監視所を攻撃した。

---

287 *Ibid.*, p. 101; Gordon, *The Generals' War*, p. 271.
288 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 106.
289 *Ibid.*, p. 110; Gordon, *The Generals' War*, pp. 267-268.

図14　クウェートとサウジアラビアの国境付近の状況（1月28日）




凡例（太枠で表記した部隊はイラク軍）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 歩兵部隊 | 偵察部隊 | MODA | サウジアラビア陸軍 |
| 機械化部隊 | 軽装甲部隊 | SANG | サウジアラビア国家警備隊 |
| 機甲部隊 | ANGLICO 海空火力支援連絡中隊<br>火力統制チーム | QAT | カタール軍 |
| 砲兵部隊 | ▲ 監視所（OP）<br>※△内の数字は、監視所番号を示す。 | | |
| 警戒 | | | |

出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 104.

イ　イラク軍によるカフジへの攻撃

（ア）　第 4、第 1 及び第 2 監視所の正面

1 月 29 日 2000、クウェートとサウジアラビアの国境線の「踵」と呼ばれる地点を警戒していた第 4 監視所は、イラク軍の大規模な車列を発見した[290]。この車列は、第 3 機甲師団隷下の第 6 機甲旅団だった。（図 15 を参照）

監視所に配置されていたアメリカ海兵隊の偵察小隊は、北西に位置していたシェパード任務部隊隷下の軽装甲歩兵中隊及び上級部隊への無線連絡を試みた。しかし、イラク軍により無線は妨害されていた。このため、偵察小隊長は伝令を派遣した。偵察小隊長は隷下部隊に対して、軽装甲歩兵中隊の掩護を受けながら後退するように命じた。

この時、アメリカ海兵隊同士の友軍相撃が起こった。軽装甲歩兵中隊の装輪装甲車が発射した TOW 対戦車ミサイルが自軍の装輪装甲車に命中し、乗員 7 名全員が戦死した。原因は、自軍の装輪装甲車をイラク軍の戦車と誤認したことだった。また、アメリカ空軍の A-10 攻撃機が発射した空対地ミサイルがアメリカ海兵隊の装輪装甲車に命中し、7 名が戦死し 2 名が負傷した[291]。約 5 時間に及んだ戦闘の結果、アメリカ海兵隊は友軍相撃により 2 両の装輪装甲車を失った。

一方、イラク第 6 機甲旅団の攻撃は失敗した。マフムード少将は、第 6 機甲旅団によりサウジアラビア領内奥深くに突進することを企図した。しかし、航空機の協力を受けたアメリカ海兵隊の抵抗に遭った第 6 機甲旅団は、戦車、装甲車あわせて 22 両を喪失した。マフムード少将は第 6 機甲旅団に対して後退を命じた[292]。

第 4 監視所から約 24km 東側に位置する第 2 監視所では、第 2 海兵師団隷下の第 2 軽装甲歩兵大隊が警戒に就いていた。第 4 監視所一帯での戦闘を察知した大隊長はイラク軍の攻撃に備えた。遠方から接近するイラク軍の T-62 戦車を発見した装輪装甲車が TOW 対戦車ミサイルを発射し、先頭の戦車を破壊した。残りの戦車は後退した。その後、第 2 軽装甲歩兵大隊は、空軍及び 3MAW に対地攻撃を要請した。

第 2 監視所の東側の地域で機械化部隊の気配を察知した第 2 軽装甲歩兵大隊が照明弾を打ち上げた時、サウジアラビア国家警備隊の機械化中隊が第 2 軽装甲歩兵大隊に砲口を向けていた。サウジアラビア国家警備隊は、イラク軍が攻撃を開始したことを知って国境線一帯から後退していたが、イラク軍が退却したことを知って国境線一帯に戻って来ていた[293]。

290 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 111-113.
291 *Ibid.*, pp. 113-115.
292 *Ibid.*, pp. 115-116.
293 Gordon, *The Generals' War*, pp. 274-275.

（イ）　第 5 及び第 6 監視所の正面

第 5 及び第 6 監視所においてもイラク軍の攻撃が始まった。警戒に就いていたシェパード任務部隊隷下の軽装甲歩兵中隊は、イラク軍の火力を回避するため一旦後退した。その後、約 70 両のイラク軍の車両が第 6 監視所に向かって前進していることが明らかになった。第 6 監視所一帯でイラク軍を阻止する任務を受領した軽装甲歩兵中隊は北に向かった。

軽装甲歩兵中隊は、イラク軍を対戦車ミサイルで攻撃しながら第 6 監視所に向かって前進した。1 月 30 日 0100、第 6 監視所に到着した軽装甲歩兵中隊は対地攻撃を要請し、周辺のイラク軍を追い払った[294]。軽装甲歩兵中隊に損害はなかった[295]。

（ウ）　第 7 及び第 8 監視所の正面

海岸線沿いでもイラク軍の攻撃が始まった。最右翼の第 8 監視所には、アメリカ海兵隊の海空火力支援連絡中隊（Air Naval Gunfire Liaison Company: ANGLICO）隷下の火力統制チーム、第 3 偵察大隊の 1 個チーム及びアメリカ海軍特殊部隊の 1 個分遣隊が展開していた。1 月 29 日 2000 頃、隣接する第 7 監視所に対する制圧射撃と同時に、イラク陸軍第 5 機甲師団隷下の第 15 機械化旅団が、第 8 監視所に攻撃を開始した。第 8 監視所に配置されていた各部隊は航空機の協力を受けて、損害を受けずに後退した。

制圧射撃を受けた第 7 監視所は、友軍の配置が把握できなくなるほど混乱した。3MAW がイラク軍砲兵部隊を攻撃し、1 月 30 日 0230 までに第 7 監視所の部隊は後退した。

第 8 監視所の後方には、サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団隷下の第 5 機械化大隊が展開していた。しかし、第 5 機械化大隊はイラク軍と戦わずに後退した。アラブ合同軍司令官ハリド中将は第 5 機械化大隊に対して、イラク軍が攻撃してきた場合は南方のサウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団と合流せよと予め命令していた[296]。

1 月 30 日 0200、イラク陸軍第 5 機械化師団隷下の第 15 機械化旅団がカフジを占領した。第 15 機械化旅団は、アメリカ空軍及び 3MAW からの対地攻撃を受けたが、地上部隊の抵抗を受けなかった[297]。

ウ　中央軍の楽観とサウジアラビア軍の焦燥

イラク軍によるカフジ攻撃に対して、CENTAF は直ちに反撃した。1 月 29 日深夜、リヤドの戦術航空統制センター（Tactical Air Control Center: TACC）において、CENTAF 特別計画グループのグロッソン准将は CENTAF 司令官ホーナー中将に対して、イラク軍がカ

294 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 117.
295 Gordon, *The Generals' War*, p. 275.
296 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 118-119.
297 *Ibid.*, p. 122.

フジに対する攻撃を開始したことを報告した。ホーナーは、戦線が拡大する前にイラク軍を阻止するため、空軍、海兵隊及び海軍機による対地攻撃を強化するように命じた。あわせて、ホーナーは JSTARS に対して、イラク軍地上部隊の監視を命じた[298]。

しかし、シュワルツコフをはじめとするアメリカ軍の司令官たちは、イラク軍によるカフジ攻撃を楽観視した。カフジ攻撃は予想外だったけれども、多国籍軍は制空権を獲得しており、アメリカ軍の司令官たちは攻撃を跳ね返すことは決して困難ではないと判断していた。1 月 29 日夜、シュワルツコフはアラブ合同軍司令官ハリド中将に対して、1 月 30 日の朝までに空爆でイラク軍を攻撃するので心配する必要はないと伝えた[299]。同様、1 月 30 日朝のブリーフィングにおいて、MARCENT 司令官ブーマー中将は、イラク軍にカフジを占領されたことは悲しむべきことではないと述べた[300]。

対照的に、サウジアラビアはカフジ失陥に衝撃を受けた。特に、聖地の守護者の称号を受けていたファハド国王にとって、フセイン大統領が王国の一部を占領したことは看過できない事態だった。ファハド国王はハリド中将に対して、速やかにカフジを奪回することを繰り返し要求した[301]。

ファハド国王と同様にカフジ失陥を看過できない事態と見做していたハリド中将は、アメリカ軍への不信感を募らせていた。元々、ハリド中将は、イラク軍がサウジアラビアに侵攻した場合、国境線付近で阻止すると決意していた。ハリド中将は、1 月 29 日から 1 月 30 日までのイラク軍によるカフジ攻撃の際、対地攻撃を再三要請したにも拘わらず、十分な対地攻撃が実施されなかったと感じていた。ハリド中将は、サウジアラビア空軍をアメリカ軍の統制下から引き上げてサウジアラビア軍のために運用すると公言するほど、苛立っていた[302]。

ハリド中将はカフジ奪回を急いだ。1 月 30 日朝、JFC-E 司令官スルタン（Sultan Ibn Al Mutairi）少将は、アメリカ海兵隊の協力を受けて、サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団によりカフジを包囲する作戦を開始した[303]。この作戦は、カフジを占領中のイラク軍に降伏を受け入れさせて両軍の無用な犠牲を抑制することを目指していた。しかし、1 月 30 日午後、ハリド中将はこの作戦の中止を命じた。代わってハリド中将はスルタン少将に対して、1 月 30 日夜からカフジを強攻して速やかに奪回するように命じた。サウジアラビアにとってカフジ奪回は作戦や戦闘に関する問題でなく、むしろ国内外に対する威信に関わる問題だった。ハリド中将は、サウジアラビア軍の手でカフジを奪回することを決意していた。このことは、ハリド中将が「私が懸念したのは、シュワルツコフがアメリカ海兵隊の水陸両用攻撃や陸軍のヘリボン攻撃により私の責任地域内の私の町〔カフジ〕を奪回する

298 Gordon, *The Generals' War*, p. 278.
299 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』442 頁。
300 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 123.
301 *Ibid.*, p. 123.
302 Khaled, *Desert Warrior*, p. 374.
303 Gordon, *The Generals' War*, pp. 279-280.

ことだった。そのような恥辱は耐え難かった」と述べたことから伺える[304]。

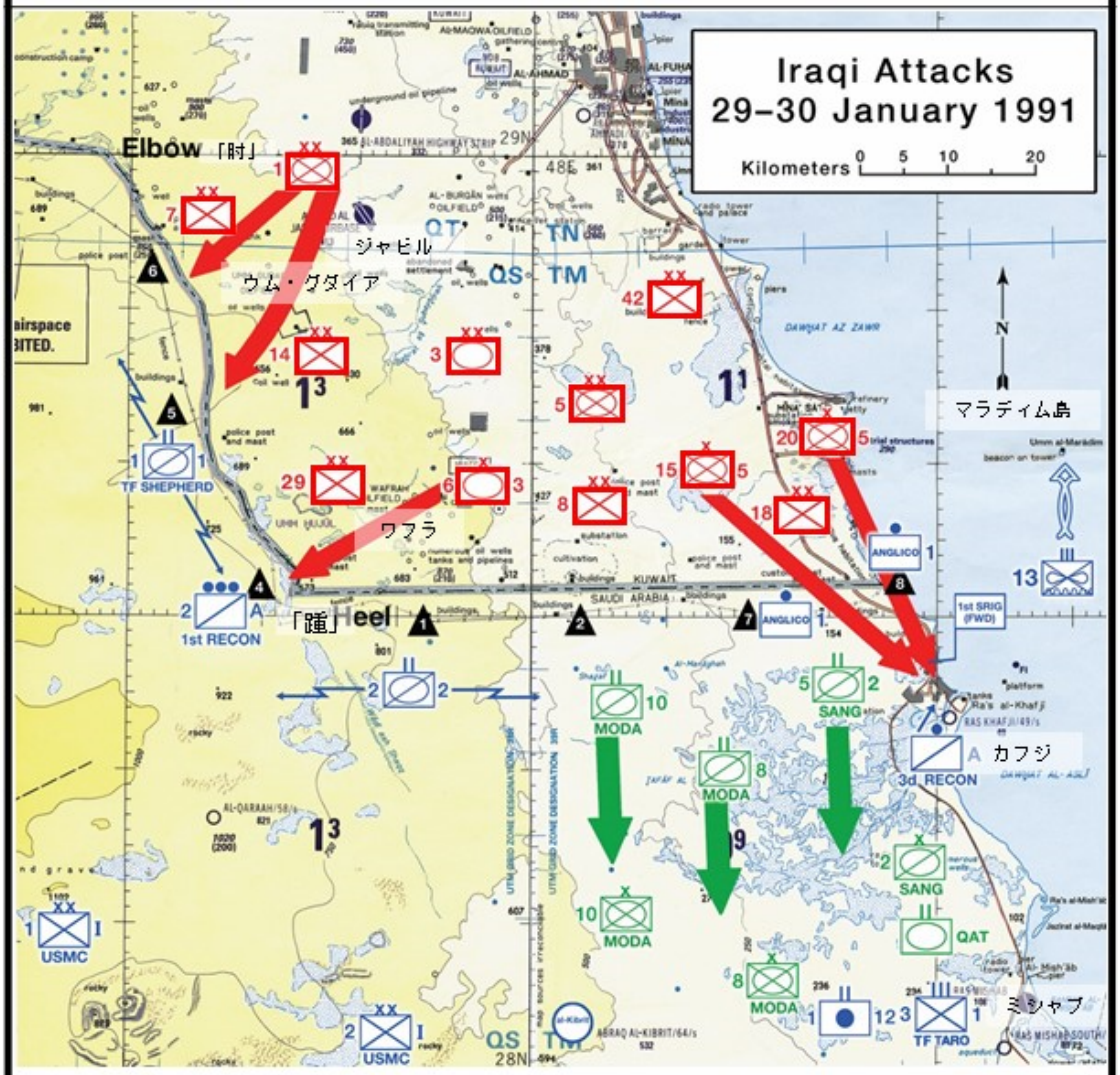
アメリカ海兵隊にとって、カフジ奪回を JFC-E に任せることは悩ましい問題だった。カフジにはアメリカ海兵隊第 3 偵察大隊の海兵隊員が取り残されていた。この海兵隊員たちは、カフジ市内のイラク軍を監視し、目標の位置を多国籍軍の航空機や砲兵部隊に知らせていた。カフジの奪回を JFC-E に任せた場合、JFC-E の火力により海兵隊員に死傷者が出ることが想定された。友軍相撃の発生を防止するため、1 月 30 日昼、サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団とアメリカ海兵隊海空火力支援連絡中隊は、カフジ奪回に関する調整を行った[305]。

一方、イラク陸軍第 3 軍団長マフムード少将は航空機による対地攻撃の脅威を感じていた。イラク陸軍参謀総長から今後の見通しに関する質問を受けた際、マフムード少将は 1 月 30 日と 1 月 31 日の夜間を利用してカフジから後退することが望ましいと進言した[306]。

---

[304] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 127.
[305] *Ibid.*, pp. 125-126; Gordon, *The Generals' War*, pp. 280-281.
[306] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 122-123.

図15　イラク軍によるカフジ攻撃（1月29日～1月30日）




出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 111.

エ　JFC-E によるカフジ奪回

1 月 30 日、JFC-E 司令官スルタン少将は、サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団長アルファミィ（Turki Al Firmi）大佐にカフジの奪回を命じた。カフジ奪回を担任する部隊は第 2 自動車化歩兵旅団隷下の第 7 機械化大隊及びカタール軍の機械化歩兵大隊隷下の 2 個戦車中隊だった。

カフジ奪回作戦は用意周到とは言い難い内容だった。カフジ奪回作戦は、二つの国の軍が共同して夜間に攻撃する作戦であるため、簡単な作戦ではなかった。しかし、湾岸危機の以前、サウジアラビア国家警備隊とカタール軍の共同訓練は実施されていなかった。さらに、カフジ奪回を開始する直前になっても、カフジ一帯の地図、両部隊間の連絡を確保するための通信手段及び火力運用に関する計画はなかった[307]。

第 7 機械化大隊長は、速やかにカフジ奪回作戦を開始することを優先した。アメリカ第 1 海兵師団第 3 海兵連隊から派遣された連絡将校は、奪回作戦を開始する前に火力調整を実施するように助言した。しかし、ファハド国王から速やかなカフジ奪回を命じられていた第 7 機械化大隊長は奪回作戦を強行した。

カフジ奪回のための攻撃は 2 度失敗した。1 月 30 日 2000、アメリカ海兵隊砲兵による攻撃準備射撃に引き続き、第 7 機械化大隊が攻撃を開始した。しかし、その攻撃は統制を欠いていた。道路上を突進した第 7 機械化大隊がカフジ市内への入り口を通過した時、イラク軍が集中砲火を浴びせた。第 7 機械化大隊は混乱し、大隊長は後退を命じた。1 月 31 日 0400 から開始した 2 回目の攻撃も同様の結果だった[308]。（図 16 を参照）

一方、カフジを占領中のイラク軍は対地攻撃に苦しんでいた。イラク陸軍第 3 軍団長マフムード少将はカフジ後退の許可を繰り返し求めたが、後退は許可されなかった。JFC-E に協力するアメリカ海兵隊の海空火力支援連絡中隊は対地攻撃を要請し、イラク軍の増援部隊に損害を与えた。JSTARS は昼夜の区別なくイラク軍地上部隊を監視した[309]。

カフジ奪回のための 3 度目の攻撃は成功した。1 月 30 日夜、サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団隷下の第 5 機械化大隊及びサウジアラビア陸軍第 8 旅団隷下の 1 個大隊がカフジの北側に展開し、カフジを占領中のイラク軍を包囲した。1 月 31 日早朝、カフジ市内に潜伏していた海兵隊員からの情報に基づき、アメリカ海兵隊砲兵部隊が制圧射撃を開始した。友軍相撃を防止するため、海空火力支援連絡中隊が火力の発揮を統制した。1 月 31 日 0730、サウジアラビア国家警備隊第 7 機械化大隊及びカタール軍の戦車中隊が攻撃を再開した。イラク軍は激しく抵抗したが、攻撃機や攻撃ヘリコプターの掩護下に第 7 機械化大隊はカフジ市内に突入した。1 月 31 日 1050、マフムード少将は第 15 機械化旅団に対してクウェートへの後退を命じた。JFC-E は 1 月 31 日 1300 までにカフジの南半分を

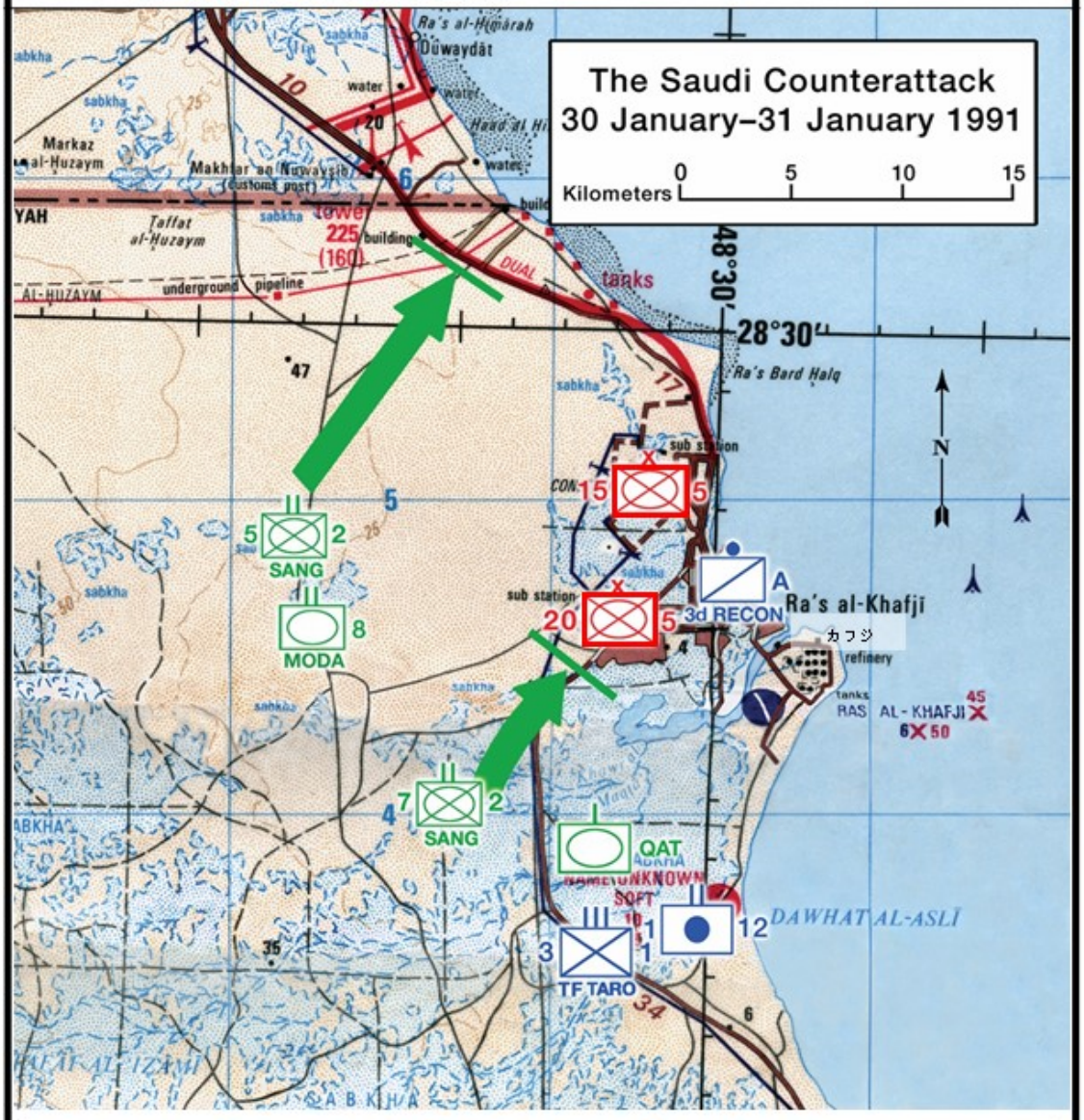
307 Gordon, *The Generals' War*, p. 281.
308 *Ibid.*, p. 282.
309 *Ibid.*, pp. 283-288. イラク軍はカフジに 2 個師団を増援しようとしたが、2,000 名の兵士及び 300 両の車両が損害を受けたため増援を断念した。

確保し、2 月 1 日朝にカフジ全域を確保した。（図 17 を参照）

カフジの争奪戦を通して、多国籍軍は執拗な対地攻撃を実施した。イラク軍がカフジ攻撃を準備していた 1 月 28 日から JFC-E がカフジの殆どを奪回した 1 月 31 日までの間、多国籍軍は合計 262 ソーティの対地攻撃を実施した。また、2 月 1 日から 2 月 3 日までの間、多国籍軍はカフジから後退するイラク軍に対して合計 554 ソーティの対地攻撃を実施した[310]。イラク軍の無線を傍受した結果、カフジ攻撃において主攻撃を担任していたイラク陸軍第 3 軍団第 5 機械化師団のうち無事にクウェートに帰還した部隊は全体の 2 割程度だったことが明らかになった。対地攻撃によって殆ど壊滅状態となった敵は、中央軍司令部が RGFC に次ぐ精鋭部隊と評価していたイラク陸軍第 3 軍団であり、その中でも特にイラク最強の機甲部隊の一つと見做されていた第 5 機械化師団であった[311]。

[310] *Ibid.*, p. 287; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 130.
[311] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』445 頁。

図16　サウジアラビア軍によるカフジの奪回（1月30日夜～1月31日朝）

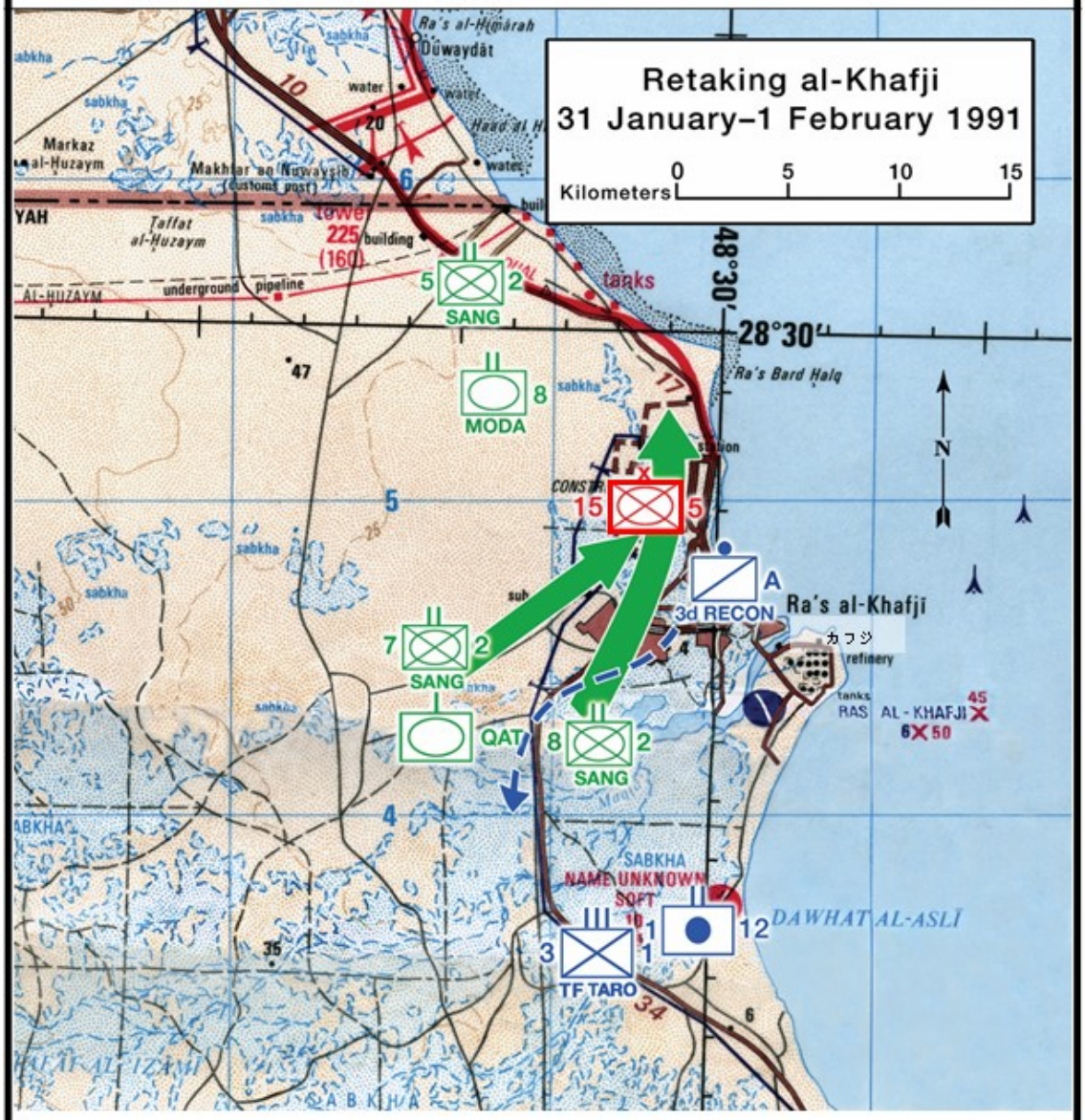



凡例（太枠で表記した部隊はイラク軍）

| | | |
|---|---|---|
| 歩兵部隊 | 偵察部隊 | MODA　サウジアラビア陸軍 |
| 機械化部隊 | | SANG　サウジアラビア国家警備隊 |
| 機甲部隊 | | QAT　カタール軍 |
| 砲兵部隊 | | |

出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 124.

図17　サウジアラビア軍によるカフジの奪回（1月31日朝～2月1日朝）




凡例（太枠で表記した部隊はイラク軍）

| | | | |
|---|---|---|---|
| ☒ | 歩兵部隊 | MODA | サウジアラビア陸軍 |
| ⊠ | 機械化部隊 | SANG | サウジアラビア国家警備隊 |
| ⬭ | 機甲部隊 | QAT | カタール軍 |
| ● | 砲兵部隊 | | |
| ／ | 偵察部隊 | | |

出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 129.

オ　カフジの戦いが陸上攻勢作戦に与えた影響

多国籍軍、中でも特にアメリカ軍を防御陣地に誘い出して長期の消耗戦に引き込もうとしたフセイン大統領の企ては失敗に終わった。カフジを奪回した後、中央軍は、引き続き航空作戦を継続しながら、2 個軍団による陸上攻勢作戦の準備を進めた。フセイン大統領はカフジの戦いに勝利したとイラク国内で宣伝していたが、シュワルツコフはイラク軍によるカフジ攻撃を象の皮膚を針で刺したようなものだったと評価した[312]。

カフジの戦いの後、アメリカ空軍、陸軍及び海兵隊のそれぞれがイラク軍を再評価した。空軍は、カフジの戦いをエア・パワーによる勝利と形容したことから伺えるとおり、空軍力の有効性に対する自信を強めた。海兵隊は、従来の評価よりもイラク軍の戦闘技量と戦意は低いと判断した。一方、陸軍はイラク軍に一定の評価を与えた。陸軍は、多国籍軍による空爆や砲兵部隊の火力で制圧されていたにも拘わらず、イラク軍の機甲部隊は戦闘能力を維持していたと評価した[313]。

アメリカ軍内では友軍相撃が問題となった。カフジの戦いにおけるアメリカ軍の 25 名の戦死者のうち 11 名は、友軍相撃による戦死者だった。特に友軍相撃を深刻な問題と捉えて再発防止策を徹底したのは MARCENT だった。カフジの戦い以降、シュワルツコフは、夜間においても視認できる友軍車両識別標識の装着を義務づけた。さらに MARCENT 司令官ブーマー中将は、友軍位置に関する最新情報を常に共有すること及び火力調整線（Fire Support Coordination Line: FSCL）を確認することを徹底し、友軍が近傍にいる場合に火力を発揮する際の条件を厳格化した[314]。

また、アラブ合同軍にとってカフジの戦いは作戦上の転機となった。JFC-E では 18 名の戦死者と 50 名の負傷者が発生したが、カフジを奪回したことにより兵士の士気が向上した。また、アラブ合同軍司令官ハリド中将は、「我々は同盟国と肩を並べるパートナーである」と述べたことから伺えるとおり、アラブ合同軍の戦闘能力に対する自信を強めた[315]。

しかし、カフジの戦い以降、アラブ合同軍、中でも特にその中核となっていたサウジアラビア軍とアメリカ軍の連携が強化されたわけではなかった。元々、国境線付近でイラク軍を阻止することを企図していたハリド中将は、カフジが占領された際、カフジ奪回作戦を性急に開始した。また、カフジの戦い以降もサウジアラビアの命令書には「秘－アメリカ人閲覧不可」の文字が表記され、アメリカ軍の命令書には「秘－外国人閲覧不可」の文字が表記されていた[316]。この他、『クウェート解放（*Liberating Kuwait*）』の著者ウェスターメイヤー（Paul W. Westermeyer）は、イラク軍がカフジ攻撃を開始する前、カフジの南側のミシャ

---

[312] Gordon, *The Generals' War*, p. 289; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 134.
[313] Gordon, *The Generals' War*, pp. 290, 295; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 134; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 190-191.
[314] *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force January-February 1991* (USMC Archives Branch, History Division, Quantico), pp. 19-20.
[315] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 134; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』445 頁。
[316] Gordon, *The Generals' War*, p. 27.

ブ（Mishab）の防衛責任が JFC-E からアメリカ海兵隊に移ったことについて、アラブ合同軍の戦闘能力に対してアメリカ海兵隊が抱いていた不信感の表れだと評価している[317]。港湾と飛行場があるミシャブの防衛は、カフジの戦いの後もアメリカ海兵隊が担任した。

### （4） 陸上攻勢作戦の準備

#### ア ARCENT の陸上攻勢作戦準備

##### （ア） 兵站支援態勢の確立

1990 年 11 月 14 日、シュワルツコフは隷下部隊長に対して、「砂漠の嵐」作戦及び陸上攻勢作戦の構想を示達した[318]。2 月中旬の陸上攻勢作戦の開始に向けて ARCENT は陸上攻勢作戦の準備を進めた。

準備の所要が特に大きかったのは、陸上攻勢作戦において主攻撃となる第 7 軍団だった。しかし、陸上攻勢作戦の構想が示達された 11 月 14 日、第 7 軍団はまだドイツに所在していた。

第 7 軍団長フランクス中将は、それまで想定したこともなかった湾岸地域での作戦となることから、作戦準備に特別の注意を払った。11 月 11 日、作戦構想の示達を受けるためにリヤドに到着したフランクスは、副参謀長と作戦参謀に加えて、2 人の隷下部隊指揮官、すなわち第 7 軍団の兵站を担任する支援コマンド指揮官及び通信網の構成と維持を担任する通信旅団長を同行させていた。11 月 15 日にドイツに戻るまでの間、フランクスらは、作戦構想の示達を受けただけではなく、港湾、幹線道路、砂漠及び集結予定地の現地偵察、あるいはサウジアラビアに展開中の部隊からの聞き取りを精力的に実施した[319]。

フランクスは、第 7 軍団をドイツからサウジアラビアに移動させるだけではなく、新しく配属される部隊を掌握しなければならなかった。陸上攻勢作戦の際、第 7 軍団は、同じく欧州に駐留する第 5 軍団隷下の第 3 機甲師団及びアメリカ本土の第 1 歩兵師団（機械化）が配属される計画となっていた[320]。

ARCENT 副司令官（兵站）兼ねて後方支援コマンド司令官パゴニス少将は、陸上攻勢作戦の準備において重要な役割を果たした。パゴニスはサウジアラビアに到着中の部隊に対する兵站支援を行いながら、同時に第 7 軍団の受け入れを実施した。11 月中旬からの 2 か月間でパゴニスが受け入れた兵士は約 22 万人、装備品と物資の総量は 70 万 t に及んだ[321]。

作戦準備に関して、第 18 空挺軍団と第 7 軍団がそれぞれの集結地から攻撃発起位置に移

---

317 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 101, 128.
318 本章第 2 節(7)項アを参照。
319 クランシー『熱砂の進軍（上）』318-329 頁。
320 サウジアラビア派遣時における第 7 軍団の編成はクランシー『熱砂の進軍（上）』293-297 頁を参照。
321 パゴニス『山・動く』192 頁。

動する際に交差するという問題が残っていた。また、西方の砂漠から 2 個軍団で攻撃することを秘匿するため、第 18 空挺軍団と第 7 軍団の移動開始時期は 1 月中旬に予定する戦略的航空作戦の開始以降に統制されていた[322]。

パゴニスは、戦略的航空作戦開始後の 21 日目までに 2 個軍団を攻撃発起位置に移動させる計画及び陸上攻勢作戦の実施間を通じて両軍団に必要な兵站支援を継続する計画を作り上げた。整斉とした攻撃発起位置への移動と作戦実施間の兵站支援を可能にした要因は二つあった。

第一は、2 個軍団を攻撃発起位置に移動させるため 1,300 台に及ぶ大型輸送車両を装備する輸送団を編成し、かつ交差する 2 個軍団の移動を綿密に統制したことだった。第 18 空挺軍団の兵士数は約 11.5 万人、装輪車の台数は約 2.1 万両、装軌車の台数は約 4,300 両であり、第 7 軍団の兵士数は約 14 万人、装輪車の台数は約 3.2 万両、装軌車の台数は約 6,600 両だった。また、集結地から攻撃発起位置までの移動距離は第 18 空挺軍団で約 580km、第 7 軍団で約 226km に及んでおり、輸送所要は膨大だった[323]。一方、中央軍が保有する重装備輸送車両は 112 台であり、輸送力が不足した。パゴニスは、他国の軍やサウジアラビアの民間企業の協力を得て、大型輸送車両をかき集めた。

第二は、兵站支援基地を推進しながら陸上攻勢作戦を支援する要領を確立したことだった。パゴニスは、アレキサンダー大王と第二次世界大戦アフリカ戦線のイギリス軍から着想を得て、敵の軍需品を利用しながら攻撃の進展に合わせて兵站支援基地を次々と設置していく計画を作成した[324]。

### （イ） 陸上構成部隊指揮官の責任を担ったシュワルツコフ

シュワルツコフは、独立した陸上構成部隊指揮官（Land Component Commander: LCC）のポストを設けなかった。陸上構成部隊指揮官はすべての地上部隊の作戦、すなわちアメリカ陸軍、アメリカ海兵隊、イギリス陸軍、フランス陸軍及びアラブ合同軍の地上部隊の作戦を指揮統制し、かつ地上部隊が必要とする資源の配分を統制する責任を担う指揮官である。シュワルツコフは陸上構成部隊指揮官の責任を双肩に担った[325]。

陸上構成部隊指揮官のポストを設けるのか、また、ポストを設ける場合は専任の陸上構成部隊指揮官を任命するのかという点が問題になった。パウエルは、シュワルツコフの負担が重すぎるという理由から、陸上構成部隊指揮官のポストを設け、専任の陸上構成部隊指揮官を任命すべきだと主張した。一方、シュワルツコフから陸上構成部隊指揮官の要否について質問された中央軍副司令官ウォラー（Calvin Waller）中将は、陸上構成部隊指揮官と彼を補佐する参謀のための司令部を新設するには人と時間が不足しているという理由から、シ

322 本章第 2 節(7)項ウを参照。
323 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 146.
324 パゴニス『山・動く』202-211 頁。
325 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 140-141.

ュワルツコフが陸上構成部隊指揮官を兼務することが望ましいと回答した[326] 。

特にシュワルツコフが配慮したのはアラブ合同軍との関係だった。シュワルツコフは、アラブ合同軍をアメリカ軍の隷下に置くことを避けた。シュワルツコフは、アラブ合同軍司令官ハリド中将を自身と対等な関係に置き、中央軍司令官とアラブ合同軍司令官が多国籍軍を共同で指揮するという指揮系統を採用した。ハリド中将は、自身がアラブ諸国の軍のすべてを指揮することを要望していた。シュワルツコフはハリド中将に対して、陸上作戦に関する最終決定権は自身が持つとしながらも、決定前には必ず協議し、ハリド中将やファハド国王から同意を得ていない作戦を実施しないことを約束した[327]。

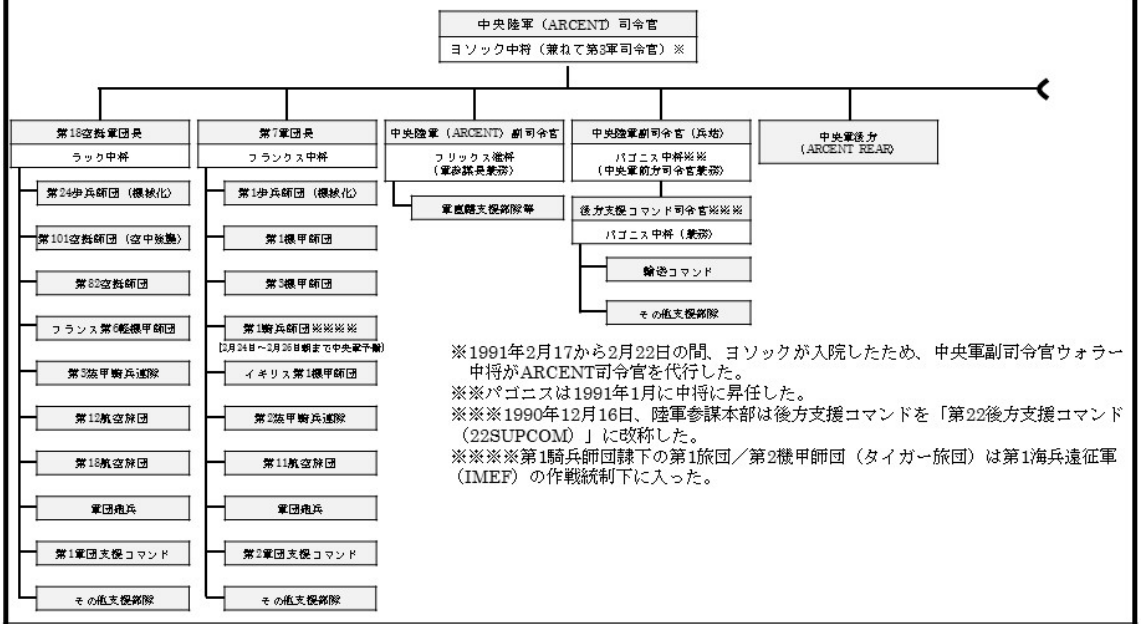
しかし、陸上構成部隊指揮官の責任を担ったにも拘わらず、シュワルツコフが作成した陸上攻勢作戦の計画はすべての地上部隊の作戦を十分に連携させていなかったという批判がある。シュワルツコフは、中央軍副司令官ウォラー中将の補助を受けながら、陸上攻勢作戦計画の具体化を進めた[328]。この計画について『将軍たちの戦争』の筆者ゴードンらは、ARCENT が RGFC に対する側面攻撃を計画する一方で MARCENT はクウェート市への突進を計画しており、中央軍の内部で陸上攻勢作戦に関する考え方が統一されていなかったと批判的に評価している[329]。この他、『確かな勝利』の著者スケールズは、陸上攻勢作戦の計画を具体化する際、ARCENT が陸上攻勢作戦に必要な資源の配分について MARCENT、イギリス陸軍、フランス陸軍及びアラブ合同軍と言い争ったことを記録している[330]。

一方、最終的に ARCENT 司令官ヨソック中将が指揮統制する権限を持っていたのは、ARCENT 隷下の地上部隊の作戦、すなわちフランス第 6 軽機甲師団が配属された第 18 空挺軍団及びイギリス第 1 機甲師団が配置された第 7 軍団の作戦であった[331]。アラブ合同軍司令官ハリド中将はシュワルツコフと対等な関係であったため、ヨソックにはアラブ合同軍の作戦を指揮統制する権限はなかった。同様、ヨソックは MARCENT の作戦を指揮統制する権限を持っていなかった。（図 18 を参照）

---

326 Gordon, *The Generals' War*, pp. 187, 300-301.
327 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』391-392 頁。
328 Stephen A. Bourque, *Jayhawk!: The VII Corps in the Persian Gulf War* (Washington, D.C.: Department of the Army, 2002), p. 34.
329 Gordon, *The Generals' War*, p. 177.
330 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 140.
331 Gordon, *The Generals' War*, p. 301.

図18　「砂漠の嵐」作戦における中央陸軍（ARCENT）編成表




※1991年2月17から2月22日の間、ヨソックが入院したため、中央軍副司令官ウォラー中将がARCENT司令官を代行した。
※※パゴニスは1991年1月に中将に昇任した。
※※※1990年12月16日、陸軍参謀本部は後方支援コマンドを「第22後方支援コマンド（22SUPCOM）」に改称した。
※※※※第1騎兵師団隷下の第1旅団／第2機甲師団（タイガー旅団）は第1海兵遠征軍（IMEF）の作戦統制下に入った。

出典：Department of Defense, *Conduct of Persian Gulf War*, p. 549; Bourque, *Jayhawk!*, p. 88; Swain, *"Lucky War"*, pp. 351, 353.

陸上攻勢作戦の計画を作成した期間を通して観ると、ARCENT 司令官ヨソック中将あるいは ARCENT 司令部が作成した作戦計画の内容と範囲はその時々で異なっている。1 個軍団による陸上攻勢作戦の検討を開始した 1990 年 9 月中旬、シュワルツコフは陸上攻勢作戦を検討するパーヴィスらを中央軍司令官直属とした。この時、ARCENT 司令部は作戦計画を作成する責任の埒外だった。サウジアラビアへの 1 個軍団増派の可能性が高まっていた 10 月末、シュワルツコフはパーヴィスらを ARCENT 作戦部長アーノルド准将の配下に置いた。この時、ARCENT 司令部は多国籍軍内のすべての地上部隊の作戦を計画した。その後、陸上攻勢作戦の構想示達の直前の 11 月 10 日、MARCENT 司令官ブーマー中将が海兵隊の運用について反対していることを知ったシュワルツコフは、ARCENT 司令部が作成する作戦計画の内容と範囲を ARCENT 隷下の地上部隊の作戦に限定した。この時、MARCENT の作戦は ARCENT 司令部が作成する作戦計画の中から除外された。

シュワルツコフから陸上攻勢作戦の構想示達を受けたヨソックは陸上攻勢作戦の構想を具体化した。11 月 23 日、ヨソックはシュワルツコフに対して、2 個軍団による陸上攻勢作戦の構想を報告した。シュワルツコフはこの構想を承認した。

2 個軍団による陸上攻勢作戦の構想においてヨソックは、作戦の全期間を四つの段階に区分した。第一段階は、戦略的航空作戦の開始後に 2 個軍団が西方に展開するために必要な兵站基地「チャーリー」及び「エコー」を設置する段階であり、第二段階は 2 個軍団が西方に展開する段階だった。イラク軍に対する攻撃の開始を想定していたのは第三段階以降であり、第四段階は RGFC を殲滅する段階だった。また、ヨソックは、この四つの段階で構

成される陸上攻勢作戦は 8 週間の作戦になるだろうと予想していた[332]。

11 月 24 日、ヨソックは隷下部隊指揮官に対して、2 個軍団による陸上攻勢作戦の構想を示達した[333]。構想示達を受けて、第 18 空挺軍団長ラック中将と第 7 軍団長フランクス中将は自隊の攻撃構想を具体化した。

（ウ） 第 7 軍団及び第 18 空挺軍団の攻撃構想

12 月 7 日、フランクスはヨソックに対して第 7 軍団の攻撃構想を報告した。フランクスが報告した攻撃構想は次のとおりだった[334]。

① 当初、第 1 歩兵師団（機械化）が障害処理を実施し、イラク軍の障害帯に通路を開設する。障害帯に通路を開設した第 1 歩兵師団（機械化）は、後続のイギリス第 1 機甲師団の障害帯通過を掩護する。
② イギリス第 1 機甲師団は、第 1 歩兵師団（機械化）が開設した障害帯通路を通過する。障害帯を通過した後、イギリス第 1 機甲師団は東に向かって攻撃し、第 7 軍団の東側の側面を掩護する。
③ イギリス第 1 機甲師団が障害帯を通過した後、当初、第 2 装甲騎兵連隊が障害帯を通過する。その後、第 1 及び第 3 機甲師団が障害帯を通過する。この時、シュワルツコフが第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属している場合、第 1 騎兵師団も障害帯を通過する。第 2 装甲騎兵連隊、第 1 及び第 3 機甲師団、第 1 騎兵師団は RGFC に向かって索敵しながら前進する。
④ 第 2 装甲騎兵連隊が RGFC を発見した後、第 7 軍団は第 1 及び第 3 機甲師団並びに第 1 騎兵師団の 3 個師団により RGFC を攻撃する。この時あわせて、砲兵部隊と航空機はイラク軍陣地の後方の地域を攻撃する。
⑤ 戦闘が終了した後、第 7 軍団は北部クウェートで防御の態勢に移行する。

フランクスはヨソックに対して、陸上攻勢作戦に関する二つの修正を提案した。第一の修正案は、第 18 空挺軍団と第 7 軍団の配置を入れ替えて、主攻撃の第 7 軍団がイラク軍の防御陣地が構築されていない西方の砂漠から攻撃するという内容だった。第二の修正案は、第 18 空挺軍団と第 7 軍団が別々の経路から攻撃することを中止し、両軍団が同一の経路から攻撃するという内容だった。この案の具体的な攻撃要領は、当初、第 18 空挺軍団がイラク軍の障害帯に通路を開設し、その後、第 7 軍団が開設された通路から攻撃するという内容

[332] Swain, *"Lucky War"*, p. 91.
[333] この時からフランクスは、第 7 軍団と第 18 空挺軍団が離れすぎており、両軍団が連携できない点を懸念していた。詳細はクランシー『熱砂の進軍（上）』328-329 頁を参照。
[334] Bourque, *Jayhawk!*, p. 35.

だった[335]。

また、12 月 14 日にシュワルツコフに対して攻撃構想を報告した際、フランクスは第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属して欲しいと申し出た[336]。第 1 騎兵師団は中央軍の予備となる予定だった。シュワルツコフは、イラク軍によるリヤド攻撃が起こった場合に対処する部隊として、イラク軍を牽制する部隊として、あるいはエジプト軍が危急の事態に陥った場合にエジプト軍に加勢する部隊として第 1 騎兵師団を保持するつもりだった[337]。

フランクスの提案と要望には二つの狙いがあった。第一の狙いは、RGFC を攻撃する時に戦車部隊を集中することだった。フランクスは、RGFC を攻撃するためには 3 個機甲師団の戦力を集中することが不可欠かつ重要だと考えていた。中央軍司令部と CENTAF は、空爆によってイラク軍の戦力は半分に低下すると予想した。しかし、フランクスは、空爆後もイラク軍は 75%近くの戦力を温存しているだろうと慎重に判断していた[338]。また、障害帯の通過に手間取った場合、化学兵器を充填した砲弾を保有するイラク軍砲兵部隊の好餌となる可能性があった。フランクスは、RGFC を攻撃する時まで戦力を温存するためには、第 7 軍団が障害帯に通路を開設することや障害帯を通過することは可能な限り避ける必要があると考えていた。

第二の狙いは攻撃の進展速度を増大することにあった。フランクスは、RGFC を殲滅するためには RGFC が対抗策を講じる前に包囲する必要があると判断した。このため、フランクスは、企図を秘匿することが容易で、かつ障害帯の通過に手間取る心配がない西方の砂漠から攻撃することを要望したのだった[339]。

しかし、シュワルツコフはフランクスが出した修正案と要望を認めなかった。また、シュワルツコフは、第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属することについて回答を保留した。シュワルツコフは死傷者の発生を懸念していた。フランクスの修正案は、軽装備の第 18 空挺軍団をイラク軍の防御陣地に向かって攻撃させるものであり、人的被害を抑制することを重視していたシュワルツコフにとって受け入れがたい内容だった[340]。同じ理由によりシュワルツコフは、予期しない事態が起こった場合に対応可能な部隊として第 1 騎兵師団を保持しておくことを重視した。

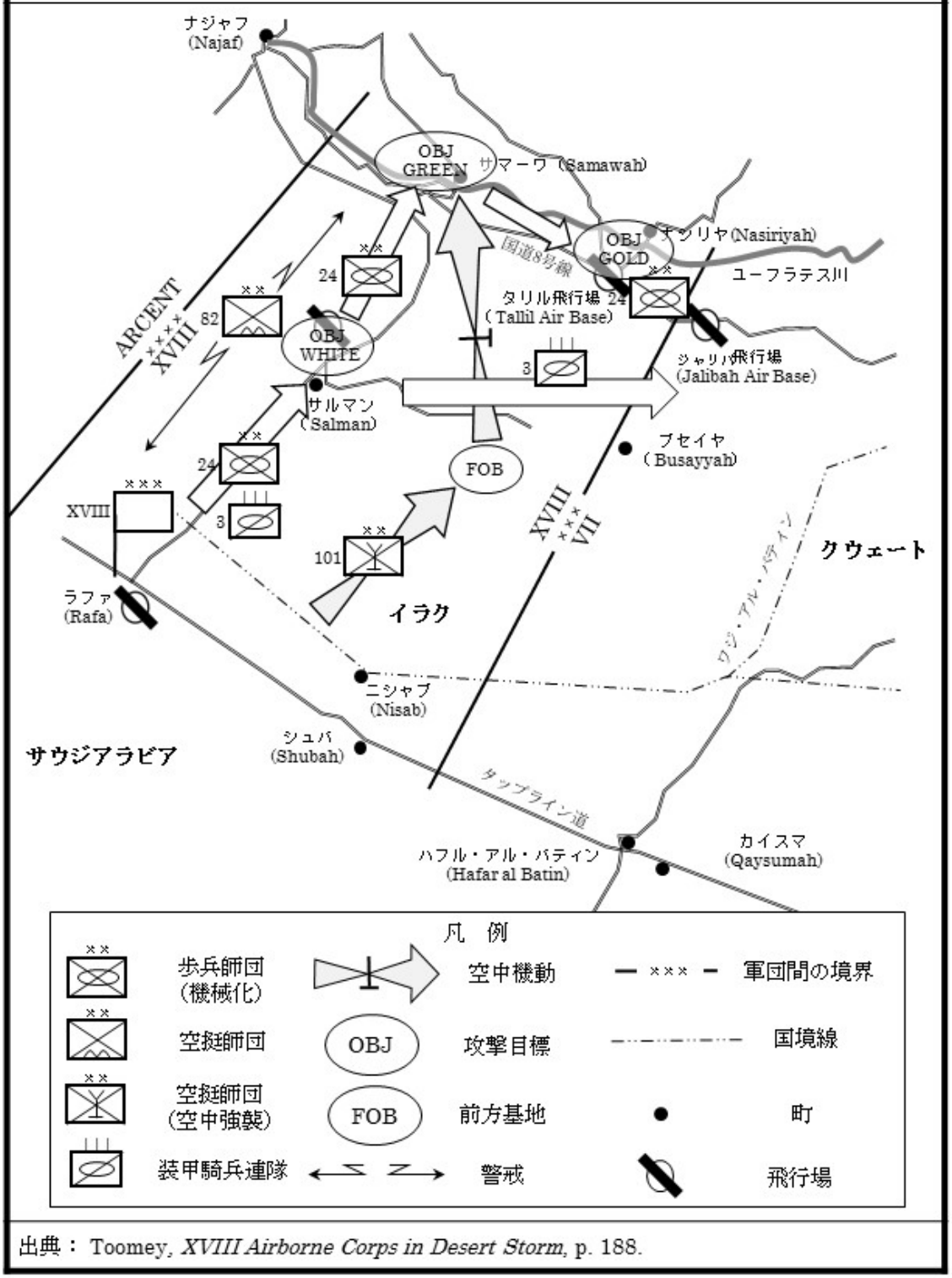
一方、第 18 空挺軍団も攻撃構想を具体化した。第 18 空挺軍団の攻撃構想は次のとおりだった[341]。（図 19 を参照）

---

335 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 139-140.
336 クランシー『熱砂の進軍（上）』327 頁。
337 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 150.
338 クランシー『熱砂の進軍（上）』23 頁。
339 同上、379-383 頁。
340 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 139-140, 150; Gordon, *The Generals' War*, p. 304; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 36-37.
341 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 186-188.

① 当初、第 24 歩兵師団（機械化）が北に向かって攻撃して、サルマン（攻撃目標「ホワイト（White）」）を確保する。
② 第 24 歩兵師団（機械化）がサルマンを確保した後、第 3 装甲騎兵連隊が東に向かって攻撃する。
③ 第 101 空挺師団（空中強襲）は、前方基地を設定した後、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の 1 個旅団と協力してサマーワ（Samawah）（攻撃目標「グリーン（Green）」）を確保する。
④ 第 24 歩兵師団（機械化）は、サマーワを通過した後、東に向かって攻撃する。第 24 歩兵師団（機械化）は国道 8 号線を通ってユーフラテス川沿いに攻撃し、タリル飛行場一帯（攻撃目標「ゴールド（Gold）」）を確保する。
⑤ 第 101 空挺師団（空中強襲）は、サマーワを確保した後、空中機動によりナシリヤ（Nasiriyah）を攻撃して第 24 歩兵師団（機械化）の北側の側面を掩護する。
⑥ 第 82 空挺師団は第 18 空挺軍団の西側の側面を掩護する。
⑦ フランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の西側で攻撃する。

図19　第18空挺軍団の攻撃構想（当初）




出典： Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 188.

（エ）　12 月 19 日及び 12 月 20 日のブリーフィング

12 月 19 日及び 12 月 20 日、シュワルツコフはリヤドを訪問中のチェイニー国防長官とパウエルとともに「砂漠の嵐」作戦の作戦計画を修正した[342]。この中で、ARCENT 作戦部長アーノルド准将が西方の砂漠から第 7 軍団と第 18 空挺軍団が攻撃して RGFC を撃破する要領を説明した[343]。

シュワルツコフは陸上攻勢作戦を急いで開始することを望んでいなかった。同様、チェイニー国防長官は、性急に陸上攻勢作戦を開始することにより多くの戦傷者が発生するのではないかと懸念していた。シュワルツコフはチェイニー国防長官とパウエルに対して、「砂漠の嵐」作戦のタイムライン、すなわち戦略的航空作戦、陸上攻勢作戦のための兵站支援態勢の確立及び陸上攻勢作戦のそれぞれの期間について説明した。シュワルツコフは、戦略的航空作戦の開始後から陸上攻勢作戦のための兵站支援の準備を開始し、兵站支援態勢を確立するまでには 2 週間が必要であると説明した。あわせてシュワルツコフは、サウジアラビア防衛の態勢をとっている地上部隊が陸上攻勢作戦を開始できる態勢を確立するまでに 2 週間が必要であり、陸上攻勢作戦を戦う期間は最大で 2 週間となるだろうと説明した[344]。一方、シュワルツコフが説明した作戦計画では戦略的航空作戦の期間は最大で 19 日間となっていたが、この時、空爆をいつまで続けるのかという点は決定されなかった[345]。

この他、シュワルツコフはチェイニー国防長官に対して、軍の作戦に政府が干渉するのではないかという懸念を伝えた。チェイニー国防長官はシュワルツコフに対して、ブッシュ大統領が今回の戦争を第二のベトナム戦争にしたくないと発言していること及び「砂漠の嵐」作戦の開始以降は軍の手を縛るつもりはないことを伝達した[346]。

（オ）　攻撃計画の完成

チェイニー国防長官とパウエルに対するブリーフィングの後、第 18 空挺軍団長ラック中将は攻撃構想を一部修正した。12 月 26 日時点での攻撃構想は次のとおりだった[347]。（図 20 を参照）

① 第 101 空挺師団（空中強襲）が空中機動し、前方基地「コブラ（Cobra）」を設置する。その後、第 101 空挺師団（空中強襲）は空中機動し、サマーワ（攻撃目標「グリーン」）を確保する。

---

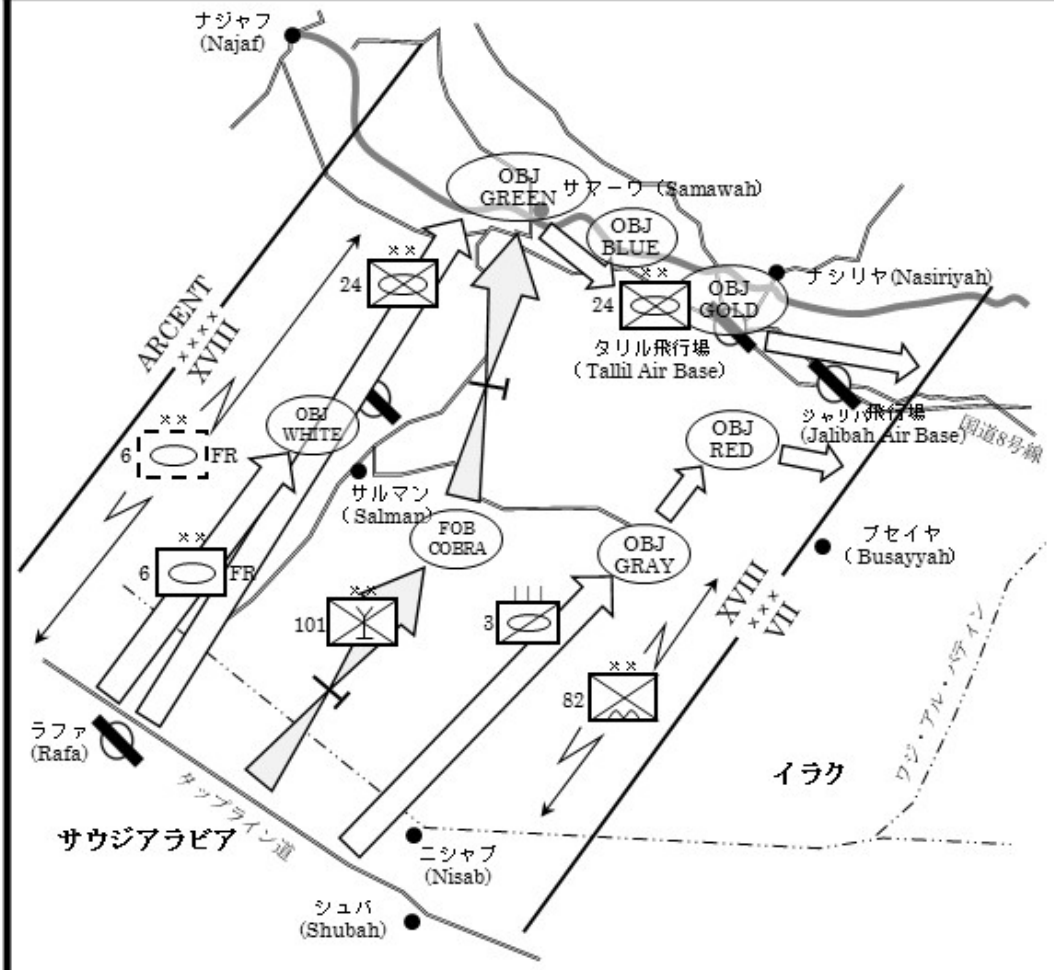
342 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 231.
343 Gordon, *The Generals' War*, p. 193.
344 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 231.
345 Gordon, *The Generals' War*, p. 193.
346 ウッドワード『司令官たち』445-447 頁。
347 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 202-204.

② 第 101 空挺師団（空中強襲）の東側ではフランス第 6 軽機甲師団がサルマン（攻撃目標「ホワイト」）を確保する。
③ 第 82 空挺師団隷下の 1 個旅団は、フランス第 6 軽機甲師団によるサルマン攻撃に協力する。この 1 個旅団は引き続き北に向かって攻撃し、第 101 空挺師団（空中強襲）によるサマーワ攻撃に協力する。
④ 第 24 歩兵師団（機械化）はサマーワを通過した後、東向きに方向変換する。第 24 歩兵師団（機械化）は、国道 8 号線を使ってユーフラテス川沿いに攻撃し、ヒドル（Khidr）（攻撃目標「ブルー（Blue）」）及びタリル飛行場一帯（攻撃目標「ゴールド」）を確保する。
⑤ 第 3 装甲騎兵連隊はブセイヤ(Busayyah)の西側の地域(攻撃目標「グレイ(Gray)」)及びブセイヤ西側とタリル飛行場の中間地点（攻撃目標「レッド（Red）」）を確保する。第 3 装甲騎兵連隊は第 18 空挺軍団の東側の側面を掩護すると同時に、隣接する第 7 軍団との連絡を維持する。
⑥ その後、第 82 空挺師団の本隊は第 18 空挺軍団の東側の側面を掩護する。また、第 82 空挺師団は、第 3 装甲騎兵連隊による攻撃目標「レッド」に対する攻撃に協力する。
⑦ サルマンを確保した後、フランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の西側の側面を掩護する。
⑧ サマーワを確保した後にイラク軍の反撃がある場合、第 101 空挺師団隷下の 1 個旅団が空中機動し、ナシリヤ一帯（攻撃目標「シルバー（Silver）」）を確保する。

攻撃構想を修正したラックの狙いは、より迅速にユーフラテス川沿いの地域に戦力を投入し、より早期にイラク軍の後方連絡線を遮断することだった。ユーフラテス川沿いの国道 8 号線はバクダッドとバスラを結ぶ幹線道路であり、クウェートに侵攻したイラク軍の後方連絡線となっていた。ラックは、陸上攻勢作戦の開始の 120 時間後までには国道 8 号線沿いでイラク軍の往来を遮断し、かつその反撃を撃退する態勢を確立できると判断し、新しい攻撃構想に対する自信を強めた[348]。

[348] *Ibid.*, pp. 203-204.

図20　第18空挺軍団の攻撃構想（1990年12月26日時点）




※破線は、実線で表記した行動を終えた後の行動を示す。

凡　例

| | | | |
|---|---|---|---|
| 歩兵師団（機械化） | 装甲騎兵連隊 | 軍団間の境界 | |
| 6 FR フランス第6軽機甲師団 | 空中機動 | 警戒 | |
| 空挺師団 | OBJ 攻撃目標 | 国境線 | |
| 空挺師団（空中強襲） | FOB 前方基地 | 町 | 飛行場 |

出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 203.

しかし、ラックは修正した攻撃構想を放棄し、最初から攻撃構想を作り直さなければならなかった。1991 年 1 月 4 日、ヨソックはシュワルツコフに対して攻撃計画を報告した。シュワルツコフは第 18 空挺軍団の内部配置、すなわち第 18 空挺軍団隷下の師団級の部隊が西側の地域から攻撃することを問題視した[349]。

特に問題となったのは、機甲戦力を持つ第 24 歩兵師団（機械化）が西側の地域で攻撃しており、同師団が RGFC と戦わないまま作戦が進む可能性があることだった。シュワルツコフの関心は、イラク軍の力の根源と見做した RGFC を殲滅することにあった。しかしながら、ラックは、第 24 歩兵師団（機械化）の配置が問題となったことに不満だった。11 月 14 日の構想示達の際、シュワルツコフは第 18 空挺軍団を可能な限り西側の地域から攻撃させるように指示していた[350]。

ヨソックから報告を受けたシュワルツコフは、第 18 空挺軍団の攻撃構想を修正し、攻撃計画を作成するように命じた。シュワルツコフは第 18 空挺軍団の攻撃について事細く指示を与えた。その内容は次のとおりだった[351]。

① 市街地を避けて攻撃せよ。
② イラク軍が十分に防御を準備した地域を回避せよ。
③ 第 7 軍団と第 18 空挺軍団の間の境界線ついて再検討せよ。
④ 第 82 空挺師団の運用について再検討せよ。
⑤ RGFC の注意を第 7 軍団に引きつけるため、第 18 空挺軍団の攻撃開始時刻は第 7 軍団の 24 時間後以降とせよ。

1 月 8 日、ヨソックはシュワルツコフに対して第 18 空挺軍団の攻撃計画を報告した。主要な変更点は、第 24 歩兵師団（機械化）を東側に移した点だった。シュワルツコフはこの攻撃計画を承認した。攻撃計画は次のとおりだった[352]。（図 21 を参照）

① 第 24 歩兵師団（機械化）は第 18 空挺軍団の右翼を前進し、当初、統制線「スマッシュ（Smash）」上の攻撃目標「ブラウン（Brown）」と「グレイ」を確保する。
② 第 24 歩兵師団（機械化）は引き続き攻撃し、統制線「ヴァイキング（Viking）」上の攻撃目標「レッド」を確保する。
③ 第 101 空挺師団（空中強襲）は空中機動し、前方基地「コブラ」を設置する。第 101 空挺師団（空中強襲）は引き続き空中機動し、サマーワ一帯（作戦地帯「イーグル（Eagle）」）を確保する。

[349] *Ibid.*, p. 236.
[350] *Ibid.*, p. 235.
[351] *Ibid.*, p. 236.
[352] *Ibid.*, pp. 236-238.

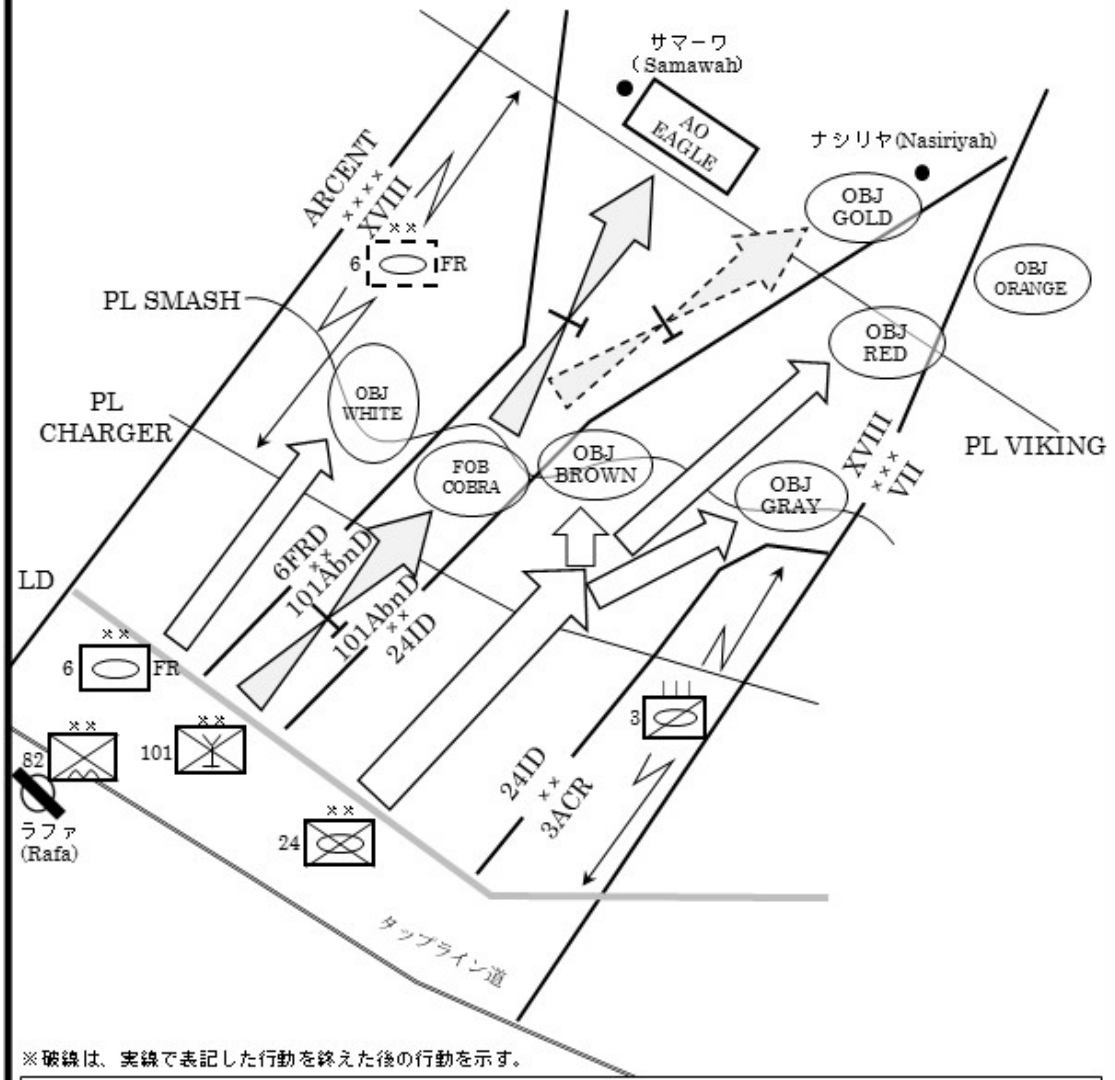
④ 第 3 装甲騎兵連隊は、第 24 歩兵師団（機械化）の東側において隣接する第 7 軍団との連絡を維持する。

⑥ フランス第 6 軽機甲師団はサルマン（攻撃目標「ホワイト」）を確保する。サルマンを確保した後、フランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の西側の側面を掩護する。

第 24 歩兵師団（機械化）の配置を東側に変更した理由は、RGFC 攻撃に同師団を投入することを容易にするためだった。しかし、この第 18 空挺軍団の攻撃計画は、主攻撃となって RGFC を攻撃する第 7 軍団の攻撃計画と綿密に調整されていたとは言えない。このことは、第 7 軍団長フランクス中将が、ARCENT は 2 個軍団の攻撃を連携させることを怠ったと批判したことから伺える。フランクスは、イラク領内奥深くの攻撃目標（攻撃目標「レッド」、「ゴールド」及び「オレンジ」を指すと推察される）を確保しても第 18 空挺軍団は RGFC 殲滅に貢献できないと指摘した[353]。

[353] Bourque, *Jayhawk!*, p. 39.

図21　第18空挺軍団の攻撃構想（最終）




出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 237.

第 7 軍団は、1 月 13 日に「砂漠の剣（Desert Saber）」と銘打つ攻撃計画を完成した。フランクスは、第 2 装甲騎兵連隊、第 1 及び第 3 機甲師団の攻撃要領を変更していた。

「砂漠の剣」において第 2 装甲騎兵連隊、第 1 及び第 3 機甲師団は、障害帯に開設された通路を通るのではなく、イラク軍が防御陣地を構築していない西方の砂漠から攻撃を開始することになった。偵察の結果、フランクスは、西方の砂漠にはイラク軍が配置されていないことを確認した。フランクスは、RGFC 攻撃の中心戦力となる機甲師団にイラク軍の障害帯を通過させることを避けた[354]。

1 月 17 日、戦略的航空作戦が始まった。1 月 20 日未明、第 18 空挺軍団及び第 7 軍団は前方集結地に向かって移動を開始した。2 月 20 日までに両軍団は攻撃発起位置に到着した。

第 22 後方支援コマンド司令官パゴニス中将[355]が指揮する第 318 輸送統制所は、両軍団に幹線道路の使用時間を割り当てた。また、第 89 憲兵旅団は幹線道路において交通規制を実施した。幹線道路上では 15 秒間隔で車両が運行された。最も交通量が多い時、補給幹線（Main Supply Route: MSR）「ドッジ（Dodge）」上では 1 分間に 18 台の車両が通過した。この他、C-130 大型輸送機はラファ近郊の飛行場まで第 18 空挺軍団を輸送した。イラク軍に発見されないために、C-130 大型輸送機は低高度で飛行した。両軍団が移動を開始した 1 月 20 日から 2 月 1 日までの間、C-130 大型輸送機は 7 分間隔で 24 時間休まずに飛行場から発進した[356]。

パゴニスは兵站基地「チャーリー」と「エコー」への軍需品の集積を進めた[357]。パゴニスは、陸上攻勢作戦開始前までに 60 日分の補給品を集積することを目指した。しかし、攻撃開始日となった 2 月 24 日までに集積できたのは、29 日分の糧食と水、約 5 日分の燃料、45 日分の弾薬だった[358]。

また、パゴニスは移動式兵站基地の準備を進めた。パゴニスは、遠く離れた西方の砂漠からイラク領内奥深くに攻撃する両軍団に対する兵站支援態勢を確立するため、イラク領内に四つの兵站基地を設置する計画を作成した。第 18 空挺軍団を支援する兵站基地は「オスカー（Oscar）」と「ロメオ（Romeo）」であり、第 7 軍団を支援する兵站基地は「ホテル（Hotel）」と「ノベンバー（November）」だった。輸送車両が 24 時間以内に各兵站基地の間を往復できるようにするため、パゴニスはそれぞれの基地の間隔を 144km 未満とした[359]。

この他、パゴニスは捕虜対応に関する責任を持っていた。パゴニスは、2 月上旬までに、それぞれ約 2.8 万人を収容できる捕虜収容所「ブルックリン（Brooklyn）」と「ブロンクス

---

354 *Ibid.*, pp. 36-38.
355 パゴニスは階級が少将だったため、中将が指揮する軍団を相手とした調整に苦労した。パゴニスの任務遂行を容易にするため、1991 年 1 月、シュワルツコフはパゴニスを軍団長と同じ中将に昇進させた。詳細はパゴニス『山・動く』217-218 頁を参照。
356 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 245-246; Schubert, *The Whirlwind War*, pp. 156-157; パゴニス『山・動く』219 頁。
357 本章第 2 節(7)項ウを参照。
358 Schubert, *The Whirlwind War*, p. 159.
359 パゴニス『山・動く』219-222 頁。

（Bronx）」を補給幹線「ドッジ」沿いに設置する予定だった。しかし、戦略的航空作戦を開始した直後の 1 月 21 日、最初のイラク軍捕虜が到着した。このため、パゴニスは捕虜収容所の開設を急いだ。州兵と予備役の約 7,000 名で編成した第 800 憲兵旅団が捕虜に対応した[360]。

2 月 1 日、ARCENT は最終的な攻撃要領について検討した。検討の中でフランクスはヨソックに対して、RGFC がある地点に留まっている場合、両軍団が連携して攻撃しなければならないと説明した。続けてフランクスは、第 7 軍団が東向きに方向変換して RGFC を攻撃する際、同時に第 18 空挺軍団を第 7 軍団の北側の地域に投入し、2 個軍団で RGFC を攻撃することを提案した。ヨソックはフランクスの提案に同意した[361]。

2 月 9 日、シュワルツコフは再びリヤドを訪れたチェイニー国防長官とパウエルに対して、陸上攻勢作戦に関する最終的なブリーフィングを実施した。作戦計画の概要は次のとおりだった[362]。

① 陸上攻勢作戦開始日（G-Day）（以下、「G 日」と表記する）0400、第 18 空挺軍団隷下の第 101 空挺師団（空中強襲）と第 82 空挺師団及びフランス第 6 軽機甲師団が攻撃を開始する。第 18 空挺軍団は西側の側面を掩護しながら、イラク領内に向かって攻撃し、敵の後方連絡線である国道 8 号線を確保してクウェートに所在する敵の退路を遮断する。

② G 日 0400、MARCENT が攻撃を開始する。MARCENT はクウェートを占領中のイラク軍を攻撃することによりこの敵が北に後退することを阻止し、同時にアラブ合同軍によるクウェート市解放を容易にする。あわせて MARCENT はイラク軍の予備隊を拘束し、この敵が西に転用されることを阻止する。

③ G 日 0400、JFC-E が攻撃を開始する。JFC-E は海岸線沿いに攻撃して、MARCENT の東側の側面を掩護する。その後、JFC-E はクウェート市を解放する。

④ G＋1 日、第 7 軍団と第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）と第 3 装甲騎兵連隊が攻撃を開始する。第 7 軍団は主攻撃となり、当初、ワジ・アル・バティンの西側から北に向かって前進する。その後、第 7 軍団は東向きに方向変換し、RGFC を攻撃する。

⑤ 第 7 軍団の攻撃開始時刻の 1 時間後、JFC-N がクウェート南西部から攻撃を開始する。JFC-N は、第 7 軍団の東側の側面を掩護しながら前進し、北部クウェートでイラク軍の後方連絡線を遮断する。その後、JFC-N はクウェート市を解放する。

⑤ 第 1 騎兵師団は、ワジ・アル・バティン沿いの地域で陽動攻撃を実施する。

---

360 Schubert, *The Whirlwind War*, p. 162.
361 クランシー『熱砂の進軍（上）』370-373 頁。
362 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 243-245; Schubert, *The Whirlwind War*, pp. 143-146.

⑦ NAVCENT は、第 7 軍団と第 18 空挺軍団が攻撃する西方の砂漠からイラク軍の注意をそらすため、ペルシャ湾から陽動を実施する。

ここで再度、フランクスは RGFC を殲滅するためには第 7 軍団の戦力を増強することが必要であり、第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属してほしいと願い出た。しかし、シュワルツコフはこの要望を認めなかった[363]。

ブリーフィングの最後にチェイニー国防長官が、どうやってこの作戦は終わるのかと質問した。シュワルツコフとヨソックは沈黙した。フランクスは、第 7 軍団長としての見解だと断った上で、攻撃目標「コリンズ（Collins）」で東向きに方向転換した後、3 個機甲師団の戦力で RGFC を撃破し、その後、クウェートとイラクの国境線付近まで攻撃すると回答した。さらにフランクスは、第 7 軍団が国境線付近で金敷となり、第 18 空挺軍団が北側から振り下ろされるハンマーになると回答した[364]。

チェイニー国防長官が発した質問は、具体的にどのような態勢となった時に陸上攻勢作戦を終了できると判断するのか、そして、その態勢を創り出すためにどのように部隊を運用するのかに関する重要な問いであった。同時にこの問いは、対ゲリラ戦では戦術的な目標を達成したけれども、これを戦争の勝利という目的に繋げることができずに長期化したベトナム戦争の失敗を繰り返さないための重要な問いであった。

この問いに回答すべき第一の責任者はシュワルツコフだった。しかし、シュワルツコフは回答しなかった。シュワルツコフは事実上の陸上構成部隊指揮官として、陸上攻勢作戦に参加するすべての地上部隊の作戦を指揮統制する責任を担っていた。また、多国籍軍の作戦に関する最終決定権を持ち、かつ中央軍隷下のアメリカ陸海空軍、海兵隊及び特殊部隊を統合する権限を持っていたシュワルツコフにとって、すべての地上部隊の作戦を指揮統制することは決して不可能なことではなかった。『ジェイホーク（*Jayhawk!*）』の著者ブルク（Stephen A. Bourque）は、チェイニー国防長官は正鵠を得た問いを発したが本来回答しなければならない指揮官が回答しなかったとフランクスが評価したことを記録している[365]。

また、シュワルツコフは陸上攻勢作戦をどのように終結させるかについて具体的な考えを持っていなかったという批判がある。『幸運な戦争（*"Lucky War"*）』の著者であり、ヒストリアンとして 2 月 9 日のブリーフィングに参加していたスウェインは、チェイニー国防長官に質問されるまでシュワルツコフが戦争終結という難しい問題について十分に検討していなかったことは明白だと厳しく指摘している[366]。

ブリーフィングの後、チェイニー国防長官、パウエル及びシュワルツコフの三人だけの話し合いが行われた。シュワルツコフは、2 月 21 日には陸上攻勢作戦を開始する態勢が整う

[363] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』450-451 頁。
[364] クランシー『熱砂の進軍（上）』394-395 頁。
[365] Bourque, *Jayhawk!*, p. 39.
[366] Swain, *"Lucky War"*, p. 124.

と報告した[367]。

戦略的航空作戦と最後の外交交渉が続く中、この 2 月 9 日のブリーフィングで陸上攻勢作戦計画は決まった。しかしながら、計画に内在する問題は少なくなかった。これらの問題のいくつかは陸上攻勢作戦を実際に戦う中で顕在化した。

各軍団は、陸上攻勢作戦に向けた最終的な準備を続けた。地形や気象に慣れておくことは、11 月中旬以降に湾岸地域に到着した第 7 軍団にとって特に重要だった。フランクスは、実戦用の弾薬を用いた射撃訓練を許可し、砂漠の一角に射撃訓練場を設置した。また、第 7 軍団隷下の工兵大隊は正面幅約 5km に及ぶイラク軍戦闘陣地の実物大模型を作成した。障害処理を担任する予定だった第 1 歩兵師団（機械化）はこの模型を使用して訓練を行った[368]。この他、イギリス第 1 機甲師団は 4,500 両に及ぶ装備車両を使用して、第 1 歩兵師団（機械化）を追い越して攻撃する訓練を行った[369]。前方集結地に到着した後も訓練は続いた[370]。

第 18 空挺軍団は、第 7 軍団と同様、イラク軍陣地の実物大模型を使用して訓練を行った。また、ラックはフランス第 6 軽機甲師団との連携を強化するため、相互に連絡将校を派遣した。この他、イラク軍がフランス製のヘリコプターを保有していたことから、友軍相撃を予防するためフランス軍機には 3 線の白線が塗装された[371]。

最終的な作戦準備を推進したのは中央軍副司令官ウォラー中将だった。2 月 9 日にヨソックは肺炎のために入院し、2 月 17 日にドイツの病院に転院した。ヨソックの不在間、ウォラーは中央軍副司令官と ARCENT 司令官を兼務した。第 18 空挺軍団の記録には、ウォラーが ARCENT 司令官代理に就いた後の 1 週間で、ヨソックが上司だったそれ以前の 3 か月間よりも多くの事項が決定したと記されている[372]。一方、ヨソックは、陸上攻勢作戦開始の 1 日前の 2 月 23 日に復帰した[373]。

### イ　MARCENT の陸上攻勢作戦準備

#### （ア）　攻撃構想

MARCENT 司令官ブーマー中将は陸上攻勢作戦の構想に反対した。11 月 6 日、ARCENT 作戦部長アーノルド准将から陸上攻勢作戦構想の概要について初めて説明を受けた時、ブ

---

367 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』192-194 頁。一方、シュワルツコフは、チェイニーから 2 月 21 日以降陸上攻勢作戦を開始してよいという許可を得たと回顧している。詳細はシュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』451-452 頁を参照。

368 イラク軍の大隊三角形拠点陣地は対戦車壕を有し、すべての方向に対して火力を発揮することができた。詳細は Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 252-254 を参照。

369 Nigel Pearce, *The Shield and the Sabre: The Desert Rats in the Gulf 1990-91* (London: HMSO, 1992), p. 69; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 111-113.

370 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 150-154; クランシー『熱砂の進軍（上）』168-181 頁。

371 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 279-280.

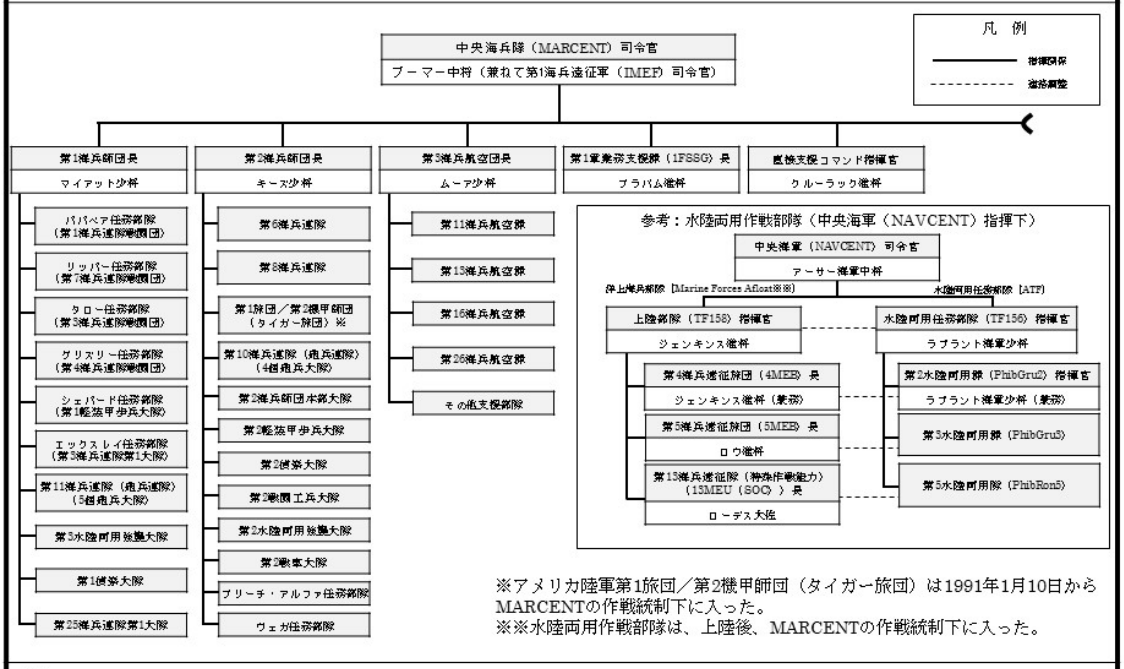
372 *Ibid.*, p. 278.

373 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』455 頁；Swain, *"Lucky War"*, p. 195.

ーマーは、海兵隊を陸軍の破城槌として用いようとする案には賛成できないと述べ、作戦構想に反対した。

陸上攻勢作戦の構想を作成していた ARCENT 司令部のパーヴィスらはアメリカ陸軍の作戦を中心に検討しており、アメリカ海兵隊やアラブ合同軍の作戦に十分な注意を払わなかった[374]。アメリカ海兵隊はアメリカ陸軍ほどの重戦力を持っておらず、艦船による艦砲射撃や航空機による対地攻撃で戦力を補っていた。このためパーヴィスらは、海兵隊の地上部隊を陸軍と同様に扱った場合、陸軍の自由な活動の妨げになる可能性があると判断した。ブーマーが海兵隊は陸軍の付属物のように扱われていたと指摘したとおり、パーヴィスらが作成した 11 月の作戦構想では、MARCENT の任務は陸軍に対する協力であった[375]。（図 22 を参照）

図22　「砂漠の嵐」作戦における中央海兵隊（MARCENT）編成表等




出典： Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 43, 241-250.

シュワルツコフはブーマーに対して理解を示した。シュワルツコフは陸軍大将だったが陸軍に肩入れせず、海兵隊には海兵隊の役割があると考えていた。11 月 10 日、シュワルツコフは ARCENT 司令部のパーヴィスらが作成した海兵隊の運用構想を却下し、同時に、ARCENT 司令部が作成する作戦計画の内容と範囲を ARCENT 隷下の地上部隊の作戦に限定した[376]。

海兵隊総司令官グレイ（Alfred M. Gray Jr.）大将も同様、陸上攻勢作戦の構想に不満を持っていた。10 月 10 日に中央軍参謀長ジョンストン少将がチェイニー国防長官やパウエ

374 Bourque, *Jayhawk!*, p. 34.
375 Brown, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With Marine Forces Afloat*, p. 110.
376 Gordon, *The Generals' War*, pp. 159-162, 166.

ルに対してブリーフィングを行った際、同席していたグレイは陸上攻勢作戦の構想を厳しく批判した。グレイは、海兵隊が信条にする臨機応変性を重視する戦い方と海兵隊が保有する水陸両用作戦能力を陸軍は無視していると感じていた[377]。

グレイは、海兵隊の攻撃計画は海兵隊が作成することが必要だと判断した。グレイは、海兵隊戦闘開発コマンド（Marine Corps Combat Development Command: MCCDC）のカールフィールド（Matthew P. Caulfield）少将に攻撃計画の作成を命じた。

カールフィールドが作成した攻撃計画の構想の殆どは政治的に許容できない内容だった。カールフィールドは紅海からヨルダンに上陸した後にイラク領内に向かって攻撃する作戦、あるいはシリアやトルコからイラク領内に向かって攻撃する作戦の計画を作成した。

ブーマーは、グレイが作成した攻撃計画を積極的に実施しようとする態度を示さなかった。グレイは 11 月末までにイラクに対する水陸両用強襲作戦「タイガー」の計画を作成し、その後、この計画をブーマーに説明した。「タイガー」計画はバスラ近郊の海岸線に上陸するという内容だった。バスラ近郊への上陸作戦はイラク軍の背後を衝くことができる反面、中立を保っていたイランを刺激する可能性を含んでいた[378]。

12 月上旬、ブーマーは MARCENT の攻撃構想を検討した。12 月 19 日のブリーフィングの時点で MARCENT の任務は次のとおりだった[379]。

① クウェート南東部に所在するイラク軍の予備隊が西方に投入されることを防止するため、助攻撃となって攻撃してイラク軍の予備隊を撃破または拘束すること。
② イラク軍の予備隊を撃破または拘束した後、クウェート南東部とクウェート市に所在するイラク軍の退却を阻止すること。

障害を処理するための装備が多くなかった海兵隊には、2 個の海兵師団を並列して攻撃するという選択肢はなかった。このためブーマーは、同一経路に 2 個海兵師団を投入する攻撃構想を作成した[380]。

グレイは、イラク軍の防御陣地を正面から攻撃するというブーマーの攻撃構想を問題視した。しかし、MARCENT を訪問したグレイはブーマーに対して攻撃構想に対する懸念を伝えなかった。代わってグレイはシュワルツコフに対して、MARCENT 司令官と IMEF 司

---

377 Brown, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With Marine Forces Afloat*, p. 112; Gordon, *The Generals' War*, p. 133.
378 Brown, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With Marine Forces Afloat*, pp. 114-115; Gordon, *The Generals' War*, pp. 174-175.
379 *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force December 1990* (USMC Archives Branch, History Division, Quantico), p. 5. MARCENT の任務について別の説明がある。攻撃計画の作成に参加したマフサーク（James D. Majchrzak）大佐は MARCENT の任務について、本文中の①に加えて、②JFC-E がクウェート市を解放するための攻撃を開始するまで同市を包囲しておくこと、③引き続き北に向かって攻撃して ARCENT の攻撃に協力することの三つだったと説明している。詳細は Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 72 を参照。
380 Gordon, *The Generals' War*, p. 175.

令官をブーマーが兼務している現状を見直すことを提案した。その内容はブーマーよりも上位の中将を MARCENT 司令官に補職して、ブーマーを IMEF 司令官に専念させるという内容だった[381]。これは、事実上、攻撃計画の作成に対するブーマーの影響力を弱め、同時にブーマーの役割を与えられた命令の実行に限定することを意味していた。

ブーマーを信頼していたシュワルツコフは、ブーマーの意見を確認した上でグレイの提案を断った。グレイは新たに MARCENT 司令官に別の将校を補職することを諦め、代わって自身が信頼する将官や佐官を MARCENT に派遣した[382]。

（イ） 攻撃計画

1991 年 1 月 1 日、ブーマーは MARCENT の攻撃計画を完成した。ブーマーは MARCENT の攻撃を次の四つの段階に区分した[383]。

第 1 段階： 第 1 海兵師団がワフラ（Wafrah）と海岸線の間からイラク軍防御陣地を突破する。その後、第 1 海兵師団は、イラク軍防御陣地の後方に向かって攻撃する第 2 海兵師団を掩護する。

第 2 段階： 第 2 海兵師団が第 1 海兵師団を追い越して攻撃する。第 2 海兵師団は、シュアイバ（Shuaybah）港に上陸する第 4 及び第 5 海兵遠征旅団と提携する。

第 3 段階： 第 1 及び第 2 海兵師団が周辺のイラク軍を撃破する。両師団は協力して、ジャフラ周辺の幹線道路の集約点を確保し、かつジャフラ南西のイラク軍防御陣地を攻撃する。

第 4 段階： 第 1 及び第 2 海兵師団がイラク軍のクウェート南東部からの後退を阻止する。あわせて両師団は、アラブ合同軍によるクウェート市解放のための攻撃を掩護する態勢を確立する。

MARCENT 隷下の部隊指揮官は、同一の経路に 2 個の海兵師団を投入するというブーマーの攻撃計画に不安を感じた。1 月 22 日、第 1 及び第 2 海兵師団が合同で指揮所演習を実施した結果、狭い行動地帯の中で 2 個の海兵師団が攻撃前進と攻撃前進の掩護を交代しながら攻撃する要領が複雑で、かつ時間がかかるという点が問題になった[384]。カフジの戦いを通じてイラク軍の戦闘能力は疑わしいと判断していた第 2 海兵師団長キーズ（William M.

---

381 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 75.
382 Gordon, *The Generals' War*, pp. 166, 175-177.
383 *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force January-February 1991*, pp. 8-9.
384 Dennis P. Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division in Desert Shield and Desert Storm* (Washington, D.C.: History and Museums Division, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1993), p. 24; *Command Chronology Collection, 2nd Marine Division 1 January-13 April 1991* (USMC Archives Branch, History Division, Quantico), p. II-5.

Keys）少将でさえ、ブーマーの攻撃計画では 2 個師団の攻撃が鈍重であり、イラク軍の反撃、中でも特に化学兵器を充填した砲弾の好餌となる可能性が高いと評価した。

キーズは、堅固な防御陣地に対して正面から攻撃することを中止し、イラク軍陣地の側面から 2 個海兵師団を並列して攻撃することが望ましいと主張した。実際、クウェートとサウジアラビアの国境線が屈曲する地点、すなわち「踵」と呼ばれた地点にはイラク軍の配備の間隙が存在した[385]。

2 月 1 日、キーズの意見を採用したブーマーは、攻撃計画の修正を開始した[386]。しかし、2 個海兵師団を並列した攻撃を実施するためには、障害を処理するための装備を増加することが必要だった。この問題を解決するため、MARCENT はイスラエルから障害処理器材を調達した。

アラブ合同軍との協力関係を維持するため、イスラエルから援助を受けたことは秘匿された。アメリカ海兵隊の将校がイスラエルを訪問し、地雷原処理鋤や地雷原処理ローラーを購入した。購入した障害処理器材は、アメリカ本土を経由してサウジアラビアに輸送され、2 月上旬に MARCENT 内に行きわたった[387]。この時、障害処理器材にはアメリカ海兵隊のマークが塗装されていた[388]。

クウェート沿岸部への上陸作戦は、NAVCENT も賛同していたにも拘わらず、中止となった。クウェート沿岸部に上陸作戦を実施した場合、MARCENT は攻撃を有利に進めることができた。しかし、クウェート沿岸部への上陸作戦が国内外に及ぼす悪影響は小さくなかった。

2 月 2 日、旗艦「ブルーリッジ（*Blue Ridge*）」において「総司令官の戦役計画を支援するための水陸両用作戦部隊の役割について」と銘打つ会議が実施された。クウェート沿岸部への上陸作戦の狙いは次のとおりだった。

① イラク軍の注意をクウェートの海岸線に引きつけ、西方の砂漠から攻撃を開始する第 7 軍団に対するイラク軍の対応を遅らせる。
② クウェートとサウジアラビアの国境線沿いのイラク軍防御陣地に対して正面から攻撃する MARCENT 及びアラブ合同軍に対する圧力を弱め、その攻撃を容易にする。
③ クウェートの港湾を確保することにより長期的な兵站支援を可能にする。

しかし、クウェート沿岸部への上陸作戦を実施するためには、イラク軍が敷設した機雷をあらかじめ除去しておくことが必要だった。NAVCENT は、機雷を除去するために必要な時間を最大 28 日間と予想した。NAVCENT 司令官アーサー（Stanley A. Arthur）中将は

---

385 *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force January-February 1991*, p. 14.
386 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 136.
387 *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force January-February 1991*, p. 15.
388 Gordon, *The Generals' War*, p. 298.

シュワルツコフに対して、国連決議 678 がクウェート撤退の期限日とした 1 月 15 日を待たず、ペルシャ湾内でイラク軍の機雷敷設艦を攻撃することを許可してほしいと願い出た。シュワルツコフはこの要望を認めなかった[389]。

あわせて、クウェート沿岸部への上陸作戦を実施するためには、上陸前に上陸予定地点一帯を攻撃して地対艦ミサイルを排除しておくこと及び火災を引き起こす可能性がある液化天然ガスプラントを破壊しておくことが必要だった。しかし、このような攻撃や破壊を行った場合、大規模な非戦闘員の死傷や非戦闘用途の施設の破壊を招き、戦後のクウェート復興に悪影響を及ぼす可能性があった。

シュワルツコフは、クウェートを救うためにクウェートを破壊するようなことは行わないと決意した[390]。シュワルツコフはブーマーに対して、クウェート沿岸部への上陸作戦を実施せずに陸上攻勢作戦を実施することは可能かと質問した。ブーマーは、長い沈黙の後、可能だと回答した。ブーマーは、クウェート沿岸部への上陸作戦を実施しない場合、イラク軍を沿岸部に釘付けにするため、水陸両用作戦部隊により陽動や襲撃を行うことが必要だと付け加えた。

シュワルツコフは MARCENT に対して、水陸両用作戦の目標と規模を縮小するように命じた。ブーマーは、水陸両用作戦部隊による陽動と襲撃を行うことを決定した。アーサーは「砂漠の斬撃（Desert Slash）」と銘打つ、ファイラカ（Faylakah）島に対する襲撃計画を作成した[391]。

2 月 6 日、ブーマーは 2 個海兵師団を並列して攻撃することを正式に決定した。しかし、新たな問題が発生した。MARCENT の攻撃が西側に移動したため、MARCENT と JFC-E との間に 50km に及ぶ配備の間隙が生じたのである。この間隙をイラク軍に衝かれることを懸念したハリド中将はブーマーに対して、アメリカ海兵隊による地上部隊の配置と対地攻撃の準備を要望した。しかし、ブーマーはハリド中将の要望を受け入れなかった。このため、ハリド中将はシュワルツコフとホーナーに直談判した[392]。最終的にブーマーはトロイ任務部隊（Task Force Troy）をこの間隙に配置して、MARCENT 隷下の 2 個海兵師団がイラク軍の陣地に対して正面から攻撃するように見せかけた。（図 23 を参照）

（ウ）　兵站支援態勢の確立

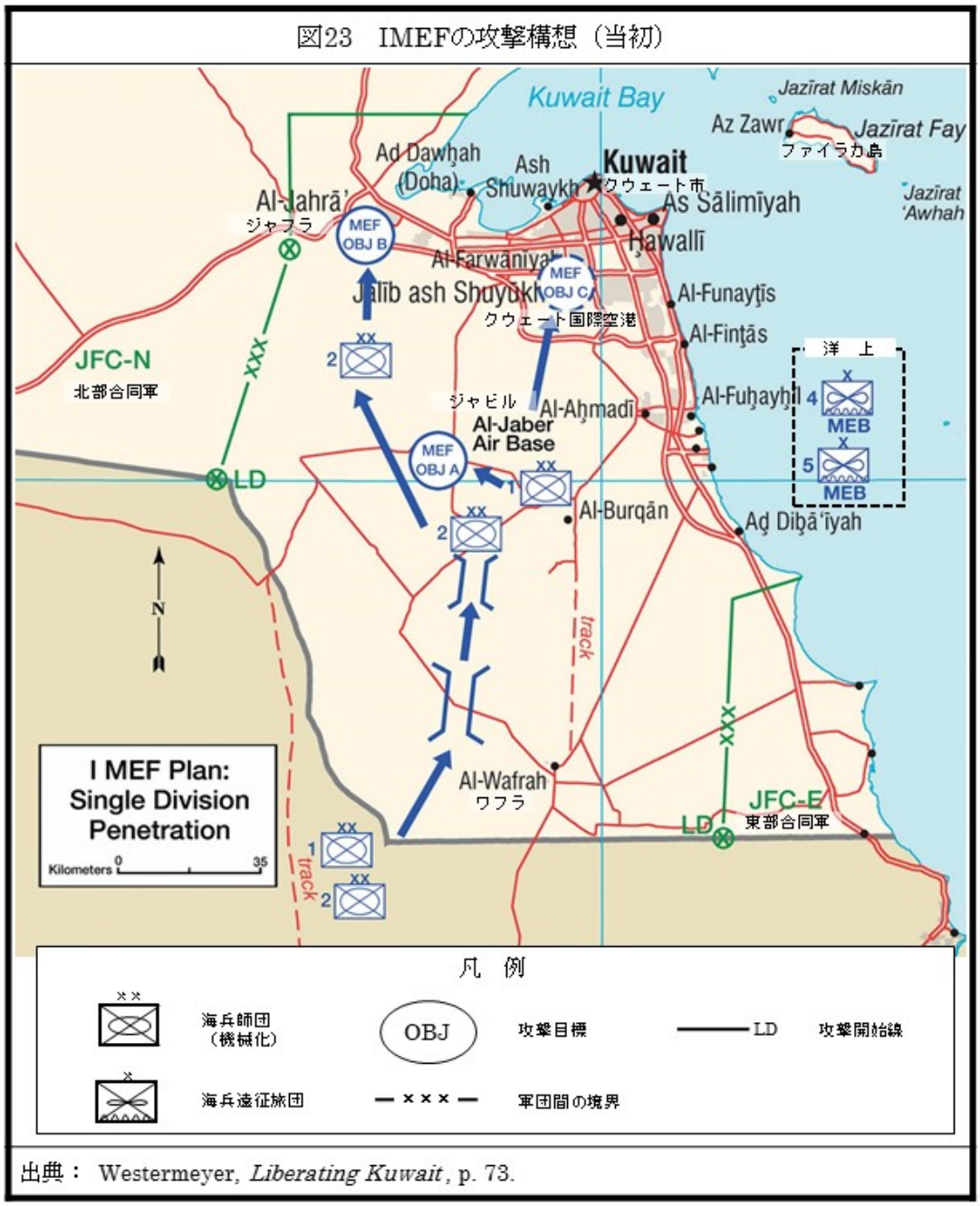
MARCENT が攻撃要領を変更したため、兵站支援の態勢を変更することが必要だった。直接支援コマンド指揮官クルーラック（Charles C. Krurak）准将は、ミシャブ港近郊のキブリート（Kibrit）に設定した兵站基地を、キブリートから約 130km 北西の内陸部に位置するカンジャール（Khanjar）に移設した。

---

389 *Ibid.*, p. 292.
390 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 137.
391 *Ibid.*, pp. 149-150.
392 Khaled, *Desert Warrior*, p. 402.

兵站基地の移設は、僅か 2 週間で 480 万ガロンの燃料、120 万食の糧食及び 1.7 万トンの弾薬を集積し、かつ 14 か所の野戦病院を開設するという困難な任務だった。しかし、クルーラックは 450 台の大型輸送車両とフィリピン人やパキスタン人から成る 500 人の操縦手を確保して 1 時間あたり 6 便の輸送隊を運行した。大型輸送車両は、後に 1,200 台に増加した。さらに、クルーラックは C-130 大型輸送機用の滑走路 2 本を新設し、空輸を併用して兵站基地の移設を急いだ。過酷な条件下での車両運行だったため、2 月下旬、およそ半数の車両が故障した。クルーラックが兵站支援の態勢を整えたのは、陸上攻勢作戦の開始の直前だった[393]。

[393] Gordon, *The Generals' War*, p. 297.




ウ　アラブ合同軍の陸上攻勢作戦準備

陸上攻勢作戦の準備に関して、アラブ合同軍との連携が順調だったとは言えない。1990年12月末頃、シュワルツコフは、アラブ合同軍側の態度が消極的になってきていることに苛立っていた。シリア軍が陸上攻勢作戦への参加を渋っていると聞いた時、シュワルツコフの苛立ちは頂点に達した。シュワルツコフはハリド中将の目の前でシリア軍を批判した。最終的にシュワルツコフとハリド中将は、シリア軍をアラブ合同軍の総予備として陸上攻勢

作戦に参加させるという案で妥結した[394]。

この他、アラブ合同軍が障害を処理するための装備を十分に保有していないことが問題となった。シュワルツコフは、イラク軍が待ち構えている防御陣地に対して JFC-E と JFC-N が攻撃した場合、多くの死傷者が発生すると判断した。シュワルツコフはハリド中将に対して、アメリカ海兵隊が障害帯に開設したから、アメリカ海兵隊の後に続いて攻撃することを勧めた。しかし、ハリド中将はシュワルツコフの提案を拒否した。ハリド中将は、アメリカ海兵隊がアラブ合同軍の後に続いて攻撃することを希望しているのであれば、これを認めると言い返した[395]。

アラブ合同軍は、トルコ及びエジプトから障害処理のための装備を調達した。また、アラブ合同軍は、サウジアラビア軍の 2 個工兵大隊にシリア軍の工兵部隊を配属した。陸上攻勢作戦の開始日までアラブ合同軍は、イラク軍防御陣地の実物大模型に本物の地雷を設置して障害処理訓練を行った。

### （5） 陸上攻勢作戦の開始時期

2 月 9 日、シュワルツコフはチェイニー国防長官とパウエルに対して、2 月 21 日に陸上攻勢作戦を開始するための態勢が整うと報告した。しかし、シュワルツコフは陸上攻勢作戦の開始を延期した。

延期の理由は、MARCENT が攻撃計画を修正したことに起因するものだった。2 月 14 日にブーマーから攻撃要領の変更について報告を受けたシュワルツコフは、陸上攻勢作戦の開始を延期し、イラク軍防御陣地に対する空爆を追加してその戦力をもっと低下させてほしいというブーマーの要望を受け入れた[396]。

シュワルツコフはパウエルに対して、陸上攻勢作戦の開始を延期したいと申し出た。パウエルは、慎重過ぎると感じていたが、シュワルツコフの判断を尊重した。チェイニー国防長官とブッシュ大統領は陸上攻勢作戦の開始を延期することを認めた。新しい攻撃開始日は 2 月 24 日となった。

MARCENT の攻撃に関して、シュワルツコフとパウエルの考え方が一致していなかった可能性がある。パウエルは、MARCENT の攻撃の目的はクウェートを占領中のイラク軍を拘束することだと理解しており、大きな損害が予想される場合、強攻する必要はないと考えていた。これに対してブーマーが目的としていたのは、イラク軍を拘束することではなく、クウェートを解放することだった。ブーマーは、シュワルツコフも同じ考えだったと主張している[397]。

---

394 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』420-422 頁。
395 Khaled, *Desert Warrior*, p. 401; 河津『湾岸戦争大戦車戦（上）』282-285 頁。
396 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』453 頁；パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』192-193 頁。
397 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』193 頁；Westermeyer,

シュワルツコフはパウエルに対して、もう一度、陸上攻勢作戦の開始の延期を申し出た。2 月 20 日夜、今後しばらくの間は悪天候が見込まれるという予報が中央軍に入った。悪天候により空軍からの対地攻撃が減少することを懸念したブーマーと空中機動作戦が不可能になることを懸念した第 101 空挺師団（空中強襲）長ピーエイ少将はシュワルツコフに対して、陸上攻勢作戦の開始の再延期を要望した。シュワルツコフはパウエルに電話し、陸上攻勢作戦の開始日を 2 月 26 日に延期したいと申し出た[398]。

陸上攻勢作戦の開始の再延期を巡ってシュワルツコフとパウエルは衝突した。これまでシュワルツコフとっての最大の理解者であり、政府内でシュワルツコフの考えを代弁していたパウエルは、再延期の要望を聞いた時、感情を爆発させた。この頃、ソ連が停戦交渉の仲介に乗りだし、イラクのアジズ外相はソ連が提案した和平案を国内に持ち帰っていた。アメリカ政府内では陸上攻勢作戦の開始日の繰り上げを求める声が強くなっていた。パウエルは、早期の陸上攻勢作戦の開始を求める圧力に抵抗していた。シュワルツコフも興奮し、大統領が軍事的な誤りを犯さないように諫言することはパウエルの役目だと言い返した。

しばらくの間、感情的な応酬は続いたが、シュワルツコフとパウエルは冷静さを取り戻した。二人が引き続き協力することを約束した頃、天気予報が変わり、2 月 24 日以降の天候はそれほど悪くないことが明らかになった。陸上攻勢作戦の開始は 2 月 24 日に決まった。

## 4　「砂漠の嵐」作戦――陸上攻勢作戦の実施

「砂漠の嵐」作戦における陸上攻勢作戦は「100 時間で勝利した」と形容されることがある[399]。この「100 時間」は、陸上攻勢作戦計画において攻撃開始日となっていた 2 月 24 日の朝から多国籍軍に戦闘停止命令が出た 2 月 28 日の朝までの期間を指す。しかし、実際には、多国籍軍の地上部隊は 2 月 24 日以前からイラク軍陣地に対する攻撃を開始していた。また、多国籍軍とイラク軍が停戦に合意した 3 月 3 日まで戦闘は続いた。

陸上攻勢作戦の結果、多国籍軍はクウェートを解放した。クウェートの解放は「砂漠の嵐」作戦における戦略目的の一つだった[400]。2 月 25 日夜、イラク軍はクウェートからの退却を開始した。2 月 27 日、アラブ合同軍はクウェート市を解放し、MARCENT は北部クウェートの要衝を確保した。

しかしながら多国籍軍は、シュワルツコフがその重要性を繰り返し強調していた、RGFC を殲滅するという目標を達成しなかった。2 月 28 日 0800、RGFC を目の前にしていたにも拘わらず、戦闘停止命令に基づき ARCENT は攻撃を中止した。この時、RGFC の戦力は残っていた。

RGFC の殲滅を達成する前に戦闘を停止することを最終的に決断したのはブッシュ大統

---

*Liberating Kuwait*, p. 72.

398 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』461-462 頁。

399 Schubert, *The Whirlwind War*, p. 173.

400 本章第 2 節(7)項アを参照。

領だったけれども、戦闘停止命令が出るまでの間、「砂漠の嵐」作戦における陸上攻勢作戦は全体としてのまとまりを欠いていた。個々の戦闘や会戦が目標の達成に向かって関連付けられていたのかという視点で観た場合、多国籍軍内のそれぞれの地上部隊による作戦がRGFC の殲滅という目標に向かって連携していたとは言えない。同様、空軍の作戦と地上部隊の作戦が RGFC の殲滅という目標に向かって連携していたとは言えない。『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、MARCENT はクウェートを占領中のイラク軍を正面からではなく側面から攻撃して驚くほど早く撃破したけれども、MARCENT は ARCENT による RGFC 攻撃に貢献するためにイラク軍を動けない状態にするという役割を果たしたのだろうかという問いを提示している[401]。

陸上攻勢作戦が全体としてのまとまりを欠いたことに対するシュワルツコフの責任は決して小さくない。シュワルツコフはすべての地上部隊、すなわち MARCENT、アラブ合同軍及び ARCENT の作戦を指揮統制する責任と権限を持っていた[402]。さらに、戦域統合軍である中央軍の司令官だったシュワルツコフには、空軍と陸軍の作戦を連携させる責任と権限があった。陸上攻勢作戦を開始した 2 月 24 日、MARCENT による攻撃が予想を上回る速度で進んだことからシュワルツコフは第 7 軍団、第 18 空挺軍団の一部及び JFC-N の攻撃開始時刻を繰り上げた。しかし、この結果、その後の ARCENT、中でも特に RGFC 殲滅の任務を与えられていた第 7 軍団の攻撃は混乱した。さらに、RGFC に対する攻撃の圧力を強めていた 2 月 27 日、シュワルツコフは FSCL を変更した。しかし、この結果、多国籍軍による空爆の空白地帯が発生し、RGFC はこの空白地帯で空爆を回避した。

### （1） 2 月 24 日（G 日）以前の陸上作戦

#### ア イラク軍の状況

##### （ア） 多国籍軍の戦略的航空作戦の開始前（1 月 17 日以前）

フセイン大統領は、戦争を長期化させて消耗戦に持ち込むことを狙っていた。イラク軍は、長期の消耗戦に耐えることができる兵力を保有していた[403]。長期の消耗戦を実現するため、フセイン大統領は次の二つを重視した。

---

401 Gordon, *The Generals' War*, p. 374.
402 本章第 3 節(4)項ア(イ)を参照。
403 フセイン大統領の狙いは本章第 3 節(3)項アを参照。1991 年 1 月 15 日時点での DIA の見積もりでは、クウェート戦域に展開するイラク軍の総兵力は①兵士数 54.5 万以上、②43 個師団、③戦車 4,280 両、火砲 3,100 門、装甲人員輸送車 2,800 両だった。詳細は Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 254 を参照。資料によりイラク軍の総兵力に関する見積もりには若干の差異がある。戦後にアメリカ空軍が調査した結果は Eliot A. Cohen ed., *Gulf War Air Power Survey, Vol. I, Pt1* (Washington, D.C.: GPO, 1993), pp. 202-204 を参照。

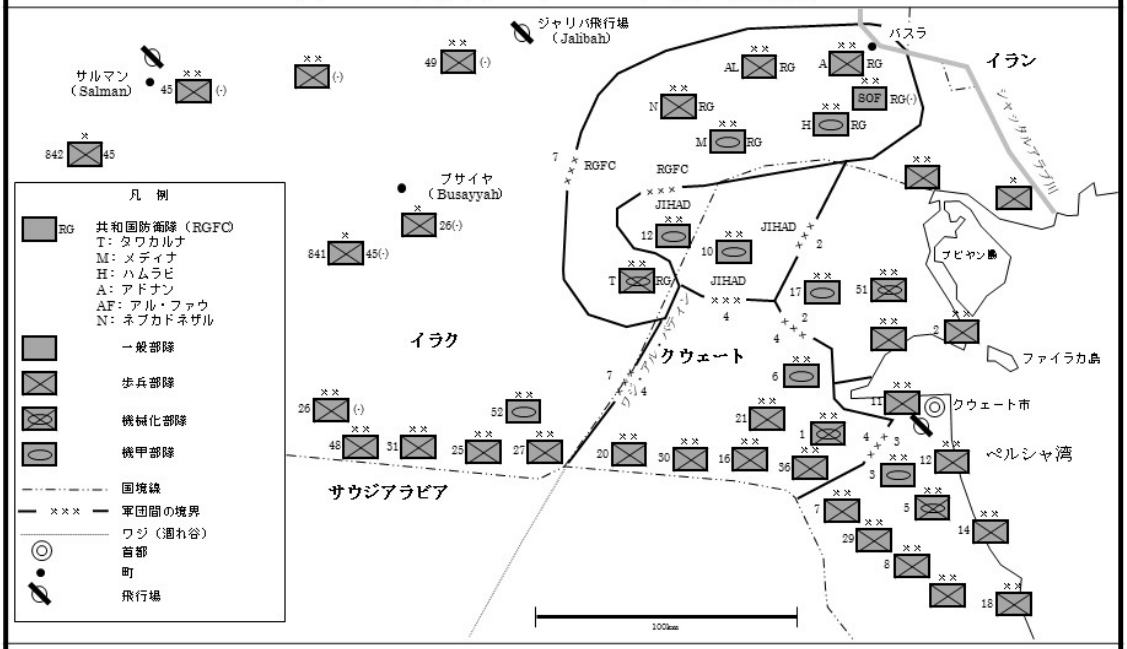
① 事前に準備した防御陣地と外国製の対空火器により、多国籍軍の空爆による損害を抑制すること。

② 防御陣地で多国籍軍地上部隊の攻撃を阻止し、損害を与え続けること。

また、フセイン大統領は軍に対して、多国籍軍を市街地戦に引きずり込むように命じた。あわせてフセイン大統領は、8 年間に及ぶ長期戦となったイラン・イラク戦争の教訓を活用せよと訓示した[404]。

イラク軍は、「サダム・ライン」と呼ばれた陣地帯と陣地帯後方の予備隊により防御を編成した。これは、イラン・イラク戦争で成功を収めた要領だった。（図 24 を参照）

図24　1991年1月中旬におけるイラク軍の配置（見積もり）




出典：Scales Jr., *Certain Victory*, p. 161.

イラク軍の陣地帯は、ペルシャ湾からクウェートを横断し、サウジアラビアとイラクの国境線沿いに伸びていた。陣地帯に配置された部隊の殆どはイラク陸軍の歩兵師団だった。

一方、陣地帯の後方には機甲師団や機械化師団が予備隊となって控えていた。シュワルツコフが殲滅しなければならない敵と見做していた RGFC は、イラクとクウェートの国境線の北側に戦略予備となって展開していた。

この他、イラク軍は海岸線の防御を固めていた。沿岸部に対する上陸作戦を警戒していたイラク軍は、イラクとクウェートの沿岸部、ブビヤン島及びファイラカ島に歩兵部隊を配置した。

404 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 137, 140.

イラク軍は、クウェートとサウジアラビアの国境線沿いの防御を重視した。クウェートとサウジアラビアの国境線沿いにおいてイラク軍は最前線に第一陣地帯を、その後方に第二陣地帯を構成した。

イラク軍は、多国籍軍はワジ・アル・バティンあるいはクウェート南東部から攻撃すると予想していた。イラク側の資料に基づき『究極の会戦（*The Mother of All Battles*）』を執筆したウッズ（Kevin M. Woods）は、1990 年 8 月にイラク軍が作成した多国籍軍の攻撃方向に関する見積もりを同書に掲載している。イラク軍は、アメリカ軍の兵力を 1 個軍団と予想していた。また、イラク軍が予想していた多国籍軍の攻撃方向は、シュワルツコフが 1 個軍団で攻撃することを前提として作成した 1990 年 10 月の攻撃構想における攻撃方向と概ね一致していた[405]。

クウェートとサウジアラビアの国境線沿いの防御におけるイラク軍の狙いは、第一陣地帯と第二陣地帯の間の殲滅地域（killing zone）において砲兵部隊の火力で多国籍軍を撃破することだった。第一陣地帯の役割は多国籍軍の進撃を遅らせることであり、第二陣地帯の役割は、砲兵部隊の火力で撃破するまでの間、多国籍軍の攻撃を阻止し続けることだった。イラク軍砲兵部隊は、第一陣地帯の南側約 9km 遠方の地域までを制圧することが可能であり、地対地ロケット弾発射機で増強されていた[406]。

シュワルツコフはイラク軍砲兵部隊を最大の脅威と見做していた。中でも特にイラク軍砲兵部隊が化学兵器を充填した砲弾を使用することをシュワルツコフは憂慮していた。クウェートとサウジアラビアの国境線沿いで攻撃するブーマーも同様、イラク軍砲兵部隊の火力と化学兵器を充填した砲弾の使用を恐れていた。障害帯の処理や陣地帯の突破に手間取っている時にイラク軍から化学攻撃を受けることは多国籍軍にとって最悪のシナリオだった[407]。

一方、イラク軍は西方の砂漠から多国籍軍が攻撃することを想定していなかった。イラク軍が構築した陣地帯はイラクとサウジアラビアの国境線の途中で途切れており、陣地帯の右翼は開放していた。イラク軍は砂漠では前進方向を維持することが困難であり、かつ幹線道路が少ないため兵站支援が困難だと判断した。しかし、ARCENT は全地球位置測位システム（GPS）を活用して砂漠を前進し、高い兵站支援能力で砂漠からの攻撃を支えた[408]。

この他、イラク軍は、多国籍軍の空爆の期間を 3 日間から 7 日間と予想した。また、イラク軍は多国籍軍の空中機動作戦を警戒していた。

---

405 *Ibid.*, pp. 138-139. 1 個軍団を前提とした中央軍の攻撃構想は本章第 2 節(5)項ウを参照。
406 *Ibid.*, p. 140.
407 Edward J. Marolda and Robert J. Schneller Jr., *Shield and Sword: The United States Navy and the Persian Gulf War* (Washington, D.C.: Naval Historical Center, Department of the Navy, 1998), p. 270. 化学兵器を懸念したシュワルツコフは、63 の病院、2 隻の病院船及び 18,000 床のベッドを準備した。詳細はシュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』456 頁を参照。
408 Gordon, *The Generals' War*, p. 353; Pollack, *Arabs at War*, p. 239.

（イ）　戦略的航空作戦の開始後

多国籍軍による戦略的航空作戦の開始後、フセイン大統領とイラク軍の計画は大きく躓いた。予想に反して、多国籍軍の航空作戦は約 1 か月半に及んだ。昼夜の別を問わない空爆により、イラク軍の戦力は低下した。物理的な損害だけではなく、第一線部隊では脱走が続いた[409]。

さらに、空爆により指揮統制システムが破壊されたイラク軍は混乱した。前線の部隊は、上級部隊からの命令を受けることも情報収集を行うこともできなかった。空爆を恐れたイラク軍は電波の発射を控え、イギリス放送協会（BBC）やアメリカの国営放送「アメリカの声（Voice of America）」を頼りに多国籍軍の動向を探った[410]。

パーヴィスらが分析したとおり、フセイン大統領に権限が集中した指揮統制システムは脆弱だった。バクダッドから分断されたイラク軍は戦力を十分に発揮することが困難になった。軍に対する指令はバグダッドから下され、現場部隊指揮官の自由な判断が認められる裁量行為は僅かだった。猜疑心が強いフセイン大統領は、軍事的な能力ではなく、自身に対する忠誠度、あるいは出自や宗派を重視して将校を昇進させていた[411]。特にフセイン大統領が戦略予備とした RGFC では、将兵の殆どがフセイン大統領の故郷であるティクリート（Tikrit）出身のスンニ派だった[412]。

フセイン大統領は、ソ連が仲介役となった和平交渉に期待していた[413]。しかし、2 月 22 日、ブッシュ大統領はフセイン大統領に対して、2 月 23 日 2000 までにクウェートからの全面撤退を開始することを求める最後通牒をつきつけた。フセイン大統領はこの最後通牒を無視した[414]。

イ　主攻撃方向の欺騙

中央軍は欺騙を特に重視した。欺騙の目的は、多国籍軍がクウェート正面から侵攻するとイラク軍に誤認させて、第 7 軍団と第 18 空挺軍団が西方に戦闘展開していることを秘匿することだった[415]。（図 25 を参照）

中央軍の欺騙行動はクウェートとサウジアラビアの国境線沿いの地域に集中した。第 1 騎兵師団は、1 月 8 日から陸上攻勢作戦の開始直前までワジ・アル・バティンで陽動を行った。第 18 空挺軍団は、1 月 14 日から 2 月 4 日までの間、国境線の「踵」に派遣した任務部隊

409 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 202-203. 空爆の効果は本章第 3 節(1)項イを参照。
410 Gordon, *The Generals' War*, p. 353.
411 *Ibid.*, pp. 352-353; Pollack, *Arabs at War*, pp. 258-259. バーヴィスが分析したイラク軍の弱点は本章第 2 節(5)項ウを参照。
412 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 114.
413 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 212-219.
414 ソ連が仲介役となった和平交渉の経緯は Gordon, *The Generals' War*, pp. 332-334, 349-350, 507; 松井芳郎『湾岸戦争と国際連合』（日本評論社、1993 年）128-130 頁を参照。
415 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 247-248.

により偽の宿営地の設営、偽の通信及び戦車デコイの設置を実施し、軍団規模の部隊が攻撃準備を行っているように見せかけた[416]。

あわせて中央軍は、クウェート沿岸部にイラク軍の注意を引きつけた。4MEB、5MEB 及び 13MEU（SOC）を指揮下に置いていた NAVCENT は、1990 年 9 月から 1991 年 1 月末までの間、「海の兵士（Sea Soldier）」と銘打つ水陸両用作戦演習を合計 4 回実施して、クウェート沿岸部に対して水陸両用強襲を実施するように見せかけた[417]。さらに、1 月 29 日、13MEU（SOC）はマラディム（Maradim）島に対して水陸両用襲撃を実施した[418]。

欺騙を実施する際、中央軍はメディアを活用した。4MEB と 5MEB が参加した第四次「海の兵士」演習は広く報道された。イギリス第 1 機甲師団は障害処理訓練をメディアに公開し、取材を受ける際は必ずペルシャ湾を背景にして対応した。この他、中央軍は、イギリス第 1 機甲師団が MARCENT との協同作戦を準備しているような印象を与える映像をメディアに提供した[419]。

欺騙が続く中、戦略的航空作戦の開始以降、第 7 軍団と第 18 空挺軍団は西方の砂漠に向かって戦闘展開を開始した。また、ARCENT は両軍団の攻撃を支援するための兵站組織を構成した。

多国籍軍の欺騙は奏功した。『究極の会戦』の著者ウッズは、2 月 15 日にイラク軍が作成した状況図を同書に掲載している。この状況図ではアメリカ陸軍第 7 軍団と第 18 空挺軍団はクウェートとサウジアラビアの国境線沿いに展開しており、イラク軍が第 7 軍団と第 18 空挺軍団が西方に展開したことを把握していなかったことが伺える[420]。イラク軍では、多国籍軍の展開に関する情報を入手すればするほど、攻撃方向を予想することが困難になった。また、防御陣地で空爆に耐えていたイラク軍にとって、防御陣地を出て情報収集を行うことや配備を変更することは殆ど困難だった。

1 月 23 日、イラク軍は、ヘリコプターを含む部隊がラファ方面に向かって移動していることを確認した。1 月 23 日にイラク軍の情報機関が出した分析結果の要点は次のとおりだった[421]。

○ 多国籍軍が選択する可能性が最も高い攻撃方向はクウェート市正面である。この攻撃方向はクウェート市に至る最短経路であり、多国籍軍にとって最良の攻撃方向である。また、アメリカ軍は少ない人的被害でクウェート市を確保することを目標としている。ワジ・アル・バティン沿いに攻撃した場合、アメリカ軍は壊滅的な

---

416 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm,* pp. 269-271.
417 Marvin Pokrant, *Desert Shield at Sea: What the Navy Really Did* (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1999), pp. 149-159; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 55-57, 93-95; Marolda, *Shield and Sword*, p. 150.
418 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 110.
419 Pearce, *The Shield and the Sabre*, pp. 79-80; ルパート・スミス『軍事力の効用――新時代「戦争論」』佐藤友紀訳（原書房、2014 年）397-398 頁。
420 Woods, *The Mother of All Battles*, p. 206.
421 *Ibid.*, pp. 187-189.

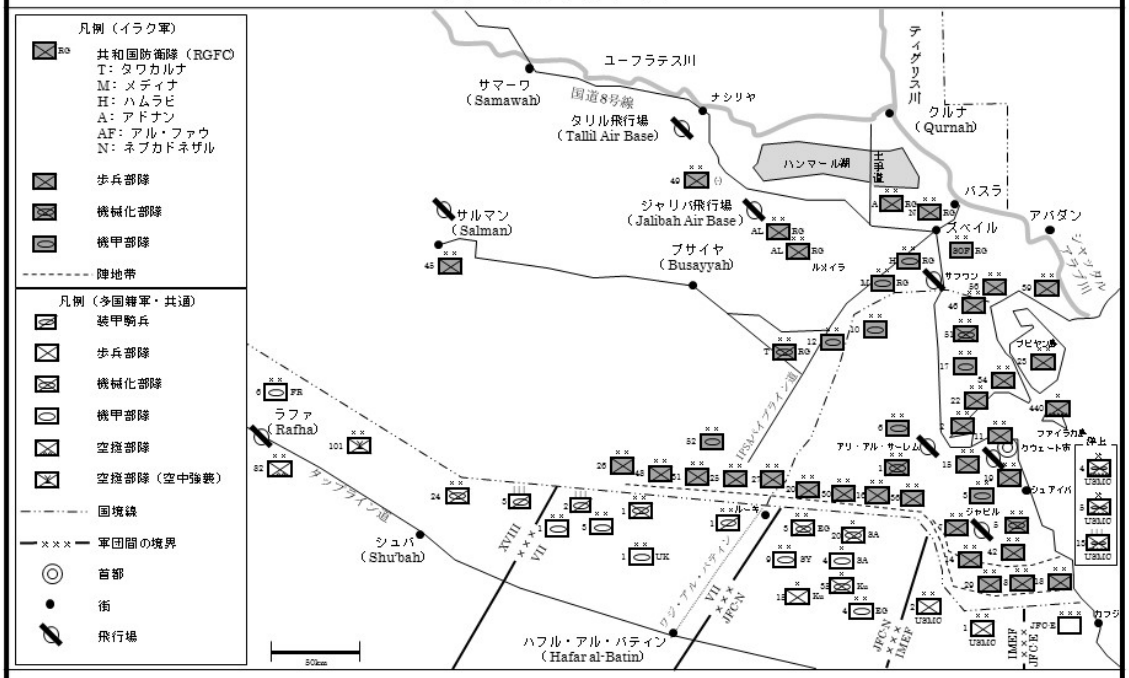
損害を受ける可能性がある。

- ○ 多国籍軍は海岸線の道路沿いを主攻撃として攻撃する。海岸線沿いでは、海兵隊と1個以上の重師団が攻撃する。
- ○ いかなる攻撃においてもクウェート軍が最前線で攻撃する。シリア軍とエジプト軍は独立軍団として行動する。
- ○ アメリカ軍は第7軍団を予備とする。
- ○ アメリカ軍は 1 個機甲師団により西側の側面を掩護する。ラファ方面に移動した車列は西側の側面を掩護する部隊である。
- ○ 多国籍軍の部隊が西方に移動したことは、我々〔イラク軍〕の西側の側面が攻撃される可能性が高まったことを示している。西側の側面の防御と後方の部隊を強化することが重要である。
- ○ 一方、多国籍軍の部隊が西方に移動したという情報は、我々に配備を変更させて防御陣地を準備していない地点及び陣地帯の後方に配置した部隊を発見するため、多国籍軍が故意的に漏洩したものである可能性がある。

2月18日、イラク軍情報機関はフセイン大統領に対して、多国籍軍が西側の砂漠から攻撃する可能性が高いと報告した。報告は、第18空挺軍団や機甲部隊が西方に展開しており、イラク軍の後方連絡線や後方地域に対して深刻な脅威を与える可能性があるという内容だった。『究極の会戦』の著者ウッズは、フセイン大統領がどのように反応したかは分かっていないとした上で、多国籍軍の空爆が続く中で地上部隊の配備を変更することは危険であったため、報告は無視されたようだと推察している[422]。

[422] *Ibid.*, pp. 207-208.

図25　状況図（2月24日）




出典： Gordon, *The Generals' War*, p. 341; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 190-191.

ウ　MARCENT の状況

（ア）　MARCENT

攻撃準備間、MARCENT はイラク軍の減殺、情報収集及び欺騙を目的として積極的に戦った。戦後明らかになったイラク側の資料の多くが、2 月 21 日に多国籍軍が陸上作戦を開始したと記録している[423]。

1 月 30 日、MARCENT は砲兵と海兵隊機によりイラク軍に対する攻撃を開始した。空軍機と戦艦が MARCENT に協力した。2 月になると、少人数だったけれども、国境を超えて投降するイラク軍兵士が後を絶たなかった[424]。

MARCENT は、第 1 及び第 2 海兵師団の戦闘展開からイラク軍の注意をそらすため、第 2 海兵師団が集結していた地域にトロイ任務部隊を配置してイラク軍を欺騙した。2 月 18 日以降、トロイ任務部隊は偽陣地の構築やヘリコプターの離着陸、大型スピーカーによる戦車のエンジン音の放送を実施した。トロイ任務部隊の欺騙と連携して NAVCENT は 2 月 16 日からペルシャ湾の掃海を開始し、上陸作戦を準備しているように見せかけた[425]。

2 月 19 日、第 1 及び第 2 海兵師団は攻撃発起位置に向かって戦闘展開を開始した。両師団はクウェートとサウジアラビアの国境線の「踵」の北西部で攻撃を準備した。偵察部隊は、

423 *Ibid.*, p. 208.
424 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 141-143.
425 *Ibid.*, p. 153.

2 月 18 日からクウェート領内に潜入を開始し、障害帯の位置や陣地帯の弱点を解明した[426]。（図 26 を参照）

MARCENT にとって、イラク軍が構築した二線に及ぶ陣地帯を突破することやイラク軍砲兵の射程内で障害帯に通路を開設することは決して容易ではなかった。攻撃開始前に実施したシミュレーションの結果は、イラク軍防御陣地に対する攻撃により MARCENT は 25 乃至 30%の戦力を喪失するだろうという内容だった[427]。

しかし、MARCENT 隷下の第 1 及び第 2 海兵師団は、イラク軍の防御が手薄な地点あるいは兵士の脱走や投降によって発生した弱点を見つけ出して攻撃計画を修正した。2 月 23 日、第 1 及び第 2 海兵師団はイラク軍が強固に防御を準備していた地点を避け、陣地帯の間隙や弱点を攻撃した[428]。

MARCENT 司令官ブーマー中将は隷下部隊指揮官や参謀との対話を繰り返し、注意深く彼らの意見に耳を傾けながら攻撃計画を修正した。ブーマーは 2 月 10 日に図上演習、2 月 12 日に将官級指揮官が参加する図上演習、2 月 19 日に攻撃計画を検証するための指揮官会議、2 月 20 日に攻撃計画を再検証するための図上演習を実施した[429]。

（イ） 第 1 海兵師団

MARCENT の任務は次のとおりだった[430]。

① 2 月 24 日 0400、MARCENT はワフラの西からクウェート市に向かって攻撃を開始する。MARCENT は前面のイラク軍を撃破し、イラク軍の戦術予備及び作戦予備を拘束して西方への転用を阻止する。
② あわせて MARCENT はクウェート南東部及びクウェート市からイラク軍が後退することを阻止し、同時にクウェート市に向かって攻撃するアラブ合同軍に協力する。

最終的なブーマーの攻撃構想は次のとおりだった[431]。

① イラク軍陣地を突破した第 1 海兵師団が、引き続き東に向かって攻撃し、イラク軍が砲兵部隊の主力とクウェート南部司令部を置くジャービル（Jaber）飛行場を

---

426 *Ibid.*, p. 262; Charles H. Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division in Desert Shield and Desert Storm* (Washington, D.C.: History and Museums Division, Headquarters, U.S. Marine Corps, 1993), pp. 49, 53.
427 <https://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/gulf/script_b.html>（2020 年 7 月 5 日アクセス）
428 Robert Coram, *Boyd: The Fighter Pilot Who Changed the Art of War* (New York: Little, Back Bay Books, 2002), pp. 424-425.
429 *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force January-February 1991*, p. 37.
430 *Ibid.*, pp. 6, 22; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 243-245.
431 Gordon, *The Generals' War*, p. 356.

確保する。

② ジャービル飛行場を確保した後、主攻撃の第 2 海兵師団がクウェート国際空港に向かって攻撃する。同時に第 2 海兵師団はクウェート市西部のムトラ（Mutlah）丘陵に向かって攻撃し、クウェート南東部に展開するイラク軍の退路を遮断する。

③ その後、第 1 海兵師団はアラブ合同軍によるクウェート市の解放に協力する。

ブーマーは第 1 海兵師団に対して、ワフラ油田とウム・グダイア（Umm Gudair）油田の間のイラク軍陣地を突破することを命じた[432]。第 1 海兵師団長マイアット（James M. Myatt）少将は隷下部隊を再編成した。第 1 海兵師団の攻撃のための編成は次のとおりだった[433]。

| | |
|---|---|
| ① パパベア任務部隊<br>（Task Force Papa Bear） | ・ 第 1 海兵連隊を基幹として編成した諸兵科協同部隊<br>・ 2 個海兵大隊、1 個戦車大隊、1 個戦闘工兵中隊を保有 |
| ② リッパー任務部隊<br>（Task Force Ripper） | ・ 第 7 海兵連隊を基幹として編成した諸兵科協同部隊<br>・ 2 個海兵大隊、1 個戦車大隊、1 個戦闘工兵大隊を保有 |
| ③ タロー任務部隊<br>（Task Force Taro） | ・ 第 3 海兵連隊を基幹として編成した諸兵科協同部隊<br>・ 2 個海兵大隊を保有 |
| ④ グリズリー任務部隊<br>（Task Force Grizzly） | ・ 第 4 海兵連隊を基幹として編成した諸兵科協同部隊<br>・ 2 個海兵大隊を保有 |
| ⑤ シェパード任務部隊<br>（Task Force Shepherd） | ・ 第 1 軽装甲歩兵大隊 |
| ⑥ エックスレイ任務部隊<br>（Task Force X-Ray） | ・ 第 3 海兵連隊第 1 大隊 |
| ⑦ 第 11 海兵連隊（砲兵連隊） | ・ 5 個砲兵大隊を保有 |
| ⑧ 第 3 水陸両用強襲大隊 | |
| ⑨ 第 1 偵察大隊 | |
| ⑩ 第 25 海兵連隊第 1 大隊 | |

[432] Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, pp. 18-19.
[433] *Ibid.*, pp. 20-21.

マイアットの攻撃構想は次のとおりだった[434]。

第 1 段階： 第 1 海兵師団が集結地に移動する。この間、工兵部隊はクウェートとサウジアラビアの国境線沿いに設置された砂堤を処理する。偵察部隊は部隊が通行できる地域を明らかにする。

第 2 段階： 歩兵主体のグリズリー及びタロー任務部隊が第一障害帯に通路を開設する。その後、グリズリー及びタロー任務部隊は障害帯の通路から前方に進出し、後に続く第 1 海兵師団主力の両側面を掩護する態勢を確立する。続いて、機甲戦力を持つパパベア及びリッパー任務部隊が第二障害帯に向かって攻撃する。

第 3 段階： パパベア及びリッパー任務部隊が第二障害帯に通路を開設する。その後、シェパード任務部隊はバルカン油田まで戦力を推進し、第 1 海兵師団の前衛となる。

第 4 段階： 第 1 海兵師団がジャービル飛行場を確保する。

第 5 段階： 第 1 海兵師団は北に向かって攻撃し、クウェート国際空港を確保する。その後、第 1 海兵師団はクウェート市に対する攻撃を準備する。

2 月 22 日 0000、雨の中、グリズリー任務部隊がイラク軍の陣前に進出した。マイアットは、グリズリー任務部隊に協力する砲兵大隊の陣地を推進した。砲兵大隊の野戦砲はイラク軍の野戦砲と比べて射程が短かったため、一方的に制圧される危険があった[435]。

2 月 23 日 1500、砲兵部隊と空軍の掩護下にイラク軍防御陣地を偵察していたグリズリー任務部隊隷下の斥候が障害帯の通路を発見した。グリズリー任務部隊長フルクス（James A. Fulks）大佐はマイアットに対して、障害帯を通過して戦力を推進したいと願い出た[436]。

しかし、マイアットはフルクスの要求を認めなかった。この当時、ソ連が仲介役となった最後の和平交渉が続いていた。マイアットはフルクスに対して、陸上攻勢作戦の開始の許可が出るまで地上部隊が障害帯を通過することを禁止する大統領命令が出ていることを伝えた[437]。

要望を認められなかったフルクスはイラク軍防御陣地を火力で制圧し、その後、イラク軍に投降を勧告した。この結果、2 月 23 日 1740 までに 30 名以上のイラク軍兵士が投降した。捕虜となったイラク軍兵士を尋問した結果、イラク軍がジャービル飛行場を放棄していること及び兵士の士気が低いことが明らかになった。

フルクスは損害を受けずに障害帯を通過する好機だと判断した。再度、フルクスはマイアットに対して、障害帯の通過を許可してほしいと願い出た。マイアットは、ブーマーと相談

434 *Ibid.*, pp. 18-19.
435 *Ibid.*, pp. 52, 57.
436 *Ibid.*, p. 59.
437 *Ibid.*

した後、障害帯の通過を許可した。マイアットは、障害帯を通過する部隊の規模を制限し、あわせて活動内容を障害帯通路の表示と陣地の掃討に限定した。

2 月 23 日夕、フルクスはグリズリー任務部隊を推進し、マイアットはグリズリー任務部隊に協力する砲兵大隊の陣地を推進した。一方、ブッシュ大統領がクウェートからの全面撤退の期限としてイラク側につきつけていた 2 月 23 日 2000 を過ぎても、イラク軍は撤退を開始しなかった。2 月 23 日 2300、グリズリー任務部隊の主力が障害帯を通過した。その後、グリズリー任務部隊は第 1 海兵師団主力の障害帯通過を掩護する態勢を確立した[438]。

クウェート領内に侵入したタロー任務部隊は抵抗を受けずにイラク軍陣地に接近した。2 月 23 日 0320、タロー任務部隊はイラク軍の防御陣地が確認されていた地点に到着した。しかし、陣地は放棄されていた。タロー任務部隊長アドマイアー（John H. Admire）大佐は、タロー任務部隊に協力する砲兵部隊と工兵部隊をイラク軍防御陣地の近くまで推進した。2 月 23 日 1745、タロー任務部隊は障害帯の処理を開始した。

アドマイアーは、障害帯の通過を禁止した大統領命令により第 1 海兵師団の攻撃が遅れることを懸念していた。アドマイアーは、第 1 海兵師団主力を掩護する態勢を確立するまでには 6 時間が必要だと判断していた。アドマイアーは、第 1 海兵師団主力が 2 月 24 日朝から攻撃を開始できるようにするため、タロー任務部隊は可能な限り早期に障害帯を通過しなければならないと考えていた。マイアットも同様の懸念を持っていた[439]。

タロー任務部隊と 3MAW の間で友軍相撃が発生した。2 月 23 日夜、海兵隊機がイラク軍の対空レーダーに対して発射した対輻射源ミサイル（HARM）が、タロー任務部隊の対砲迫レーダーに命中した。イラク軍は、空爆による被害の回避するため、対空レーダーの電波発射を封止していた[440]。

2 月 23 日 2100、タロー任務部隊は障害帯の通過を開始した。その後、タロー任務部隊は第 1 海兵師団主力を掩護する態勢を確立した[441]。

（ウ） 第 2 海兵師団

第 2 海兵師団の攻撃のための編成は次のとおりだった[442]。

| | |
|---|---|
| ① 第 6 海兵連隊 | ・ 3 個海兵大隊、1 個戦車大隊を保有 |
| ② 第 8 海兵連隊 | ・ 3 個海兵大隊を保有 |
| ③ 第 2 機甲師団第 1 旅団<br>（タイガー旅団） | ・ ARCENT から配属を受けた部隊<br>・ 2 個装甲大隊、1 個歩兵（機械化）大隊、1 個 |

438 *Ibid.*, pp. 59-61.
439 *Ibid.*, p. 61.
440 Gordon, *The Generals' War*, pp. 346-350; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 160.
441 Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, p. 63.
442 Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 91-92.

| | |
|---|---|
| | 砲兵大隊を保有 |
| ④　第 10 海兵連隊（砲兵連隊） | ・　4 個砲兵大隊を保有 |
| ⑤　第 2 海兵師団本部大隊 | |
| ⑥　第 2 軽装甲歩兵大隊 | |
| ⑦　第 2 偵察大隊 | |
| ⑧　第 2 戦闘工兵大隊 | |
| ⑨　第 2 水陸両用強襲大隊 | |
| ⑩　第 2 戦車大隊 | |
| ⑪　ブリーチ・アルファ任務部隊<br>（Task Force Breach Alpha） | |
| ⑫　ヴェガ任務部隊<br>（Task Force Vega） | |

第 2 海兵師団長キーズ少将の攻撃構想は次のとおりだった[443]。

① 第 6 海兵連隊がイラク軍の陣地帯を突破する。
② 第 6 海兵連隊はさらに前方に戦力を推進し、後続の部隊を掩護する態勢を確立する。
③ イラク軍の陣地帯を通過した後、第 8 海兵連隊は右翼に、第 6 海兵連隊は中央に、タイガー旅団は左翼に展開する。その後、第 8 海兵連隊、第 6 海兵連隊及びタイガー旅団は北に向かって攻撃する。
④ 第 8 海兵連隊は隣接する第 1 海兵師団との境界線沿いに攻撃する。
⑤ タイガー旅団はイラク軍機甲部隊の逆襲を警戒する。イラク軍が退却する場合、タイガー旅団はイラク軍の退却を阻止する。
⑥ 第 2 戦車大隊は第 2 海兵師団の予備隊となる。

キーズは、障害帯を処理している最中にイラク軍砲兵部隊から攻撃されることを恐れていた。攻撃開始前における MARCENT の見積もりは、約 500 門のイラク軍野戦砲が第 2 海兵師団を制圧できる態勢を整えているという内容だった。中でも特にキーズが恐れていたのは、イラク軍が化学剤を充填した砲弾を使用することだった[444]。

キーズは第 2 海兵師団の攻撃方向を秘匿し、かつ欺騙するための対策を講じた。2 月 20 日から第 2 海兵師団は、クウェートとサウジアラビアの国境線沿いに構築されていた砂堤に必要数の 3 倍に及ぶ 18 本の通路を開設した[445]。また、キーズは、イラク軍が火炎壕を構

443 *Ibid.*, pp. 26-27.
444 *Ibid.*, p. 20.
445 *Ibid.*, pp. 37-38.

築して強固に防御していた陣地を航空機で攻撃してイラク軍の注意を引きつけながら、第2海兵師団主力でパイプライン網の隙間から攻撃することを決定した[446]。この他、第 2 軽装甲歩兵大隊は 2 月 21 日からクウェート領内に進出し、イラク軍防御陣地に対する牽制を繰り返した。第 2 軽装甲歩兵大隊の任務は、イラク軍防御陣地を偵察すること及びイラク軍の注意を引きつけて第 2 海兵師団主力の攻撃方向を秘匿することだった。約 50 両の戦車を破壊されたイラク軍は、多国籍軍が陸上攻勢作戦を開始したと誤認した[447]。

2 月 22 日、第 1 及び第 2 海兵師団と戦っていたイラク軍が油井に放火した。油井への放火を命令したのはフセイン大統領であり、放火の狙いは多国籍軍の視界を制限することだった[448]。イラク軍が放火した油井は 140 基に及んだ。イラク軍が油井に放火した結果、和平交渉は決裂した。

2 月 23 日夜、2 月 24 日の攻撃に備えるため、第 10 海兵連隊隷下の 3 個砲兵大隊と 1 個 MLRS 中隊が第一線部隊の前方に射撃陣地を占領した。砲兵大隊が装備する 155mm 榴弾砲の射程はイラク軍砲兵部隊の野戦砲よりも短かった。2 月 24 日の攻撃の際に第 10 海兵連隊がイラク軍砲兵部隊を制圧するためには、イラク軍陣地により近い位置に射撃陣地を推進することが必要だった。第 2 海兵師団は 2 月 24 日の攻撃のための態勢を確立した[449]。

（エ） 4MEB、5MEB 及び 13MEU（SOC）

NAVCENT 指揮下の 4MEB 及び 13MEU（SOC）は、ペルシャ湾からイラク軍を牽制した。また、MARCENT と JFC-E の間の地域に配置されることになった 5MEB は上陸の準備を進めた。

一方、ファイラカ島に対する襲撃作戦は失敗した。2 月 17 日、4MEB 及び 13MEU（SOC）が襲撃作戦を開始した。しかし、強襲揚陸艦「トリポリ（*Tripoli*）」と巡洋艦「プリンストン（*Princeton*）」が触雷した。2 月 18 日、襲撃作戦は中止となった。

この他、2 月 23 日 2315、戦艦「ミズーリ（*Missouri*）」がファイラカ島に対して艦砲射撃を開始した。この目的は、ファイラカ島に対する上陸作戦が始まったとイラク軍に誤認させることだった。

エ アラブ合同軍の状況

JFC-N と JFC-N を構成した主要な部隊は次のとおりだった[450]。

---

446 Gordon, *The Generals' War*, pp. 348-349.
447 Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 33-35; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 158.
448 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 132, 136-137, 210-211.
449 Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 39-41.
450 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 236-237, 258.

| | |
|---|---|
| JFC-N | ・ エジプト軍団（第 3 機械化師団、第 4 機甲師団、レンジャー連隊）<br>・ シリア師団（第 9 機甲師団、特殊作戦連隊）<br>・ ムサンナ軍（Force Muthannah）（サウジアラビア陸軍第 20 機械化旅団、クウェート第 35 機械化歩兵旅団）<br>・ サアド軍（Force SAAD）（サウジアラビア陸軍第 4 機甲旅団、クウェート第 15 歩兵旅団） |
| JFC-E | ・ アブー・バクル軍（サウジアラビア国家警備隊第 2 旅団）<br>・ オスマン軍（サウジアラビア陸軍第 8 機械化旅団、クウェートアル・ファタハ旅団、オマーン自動車化歩兵大隊、バーレーン歩兵中隊）<br>・ オマール任務部隊（サウジアラビア陸軍第 10 機械化旅団、UAE 自動車化歩兵大隊）<br>・ タリク任務部隊（Task Force Tariq）（サウジアラビア海兵大隊、セネガル歩兵大隊、モロッコ第 6 機械化歩兵連隊） |

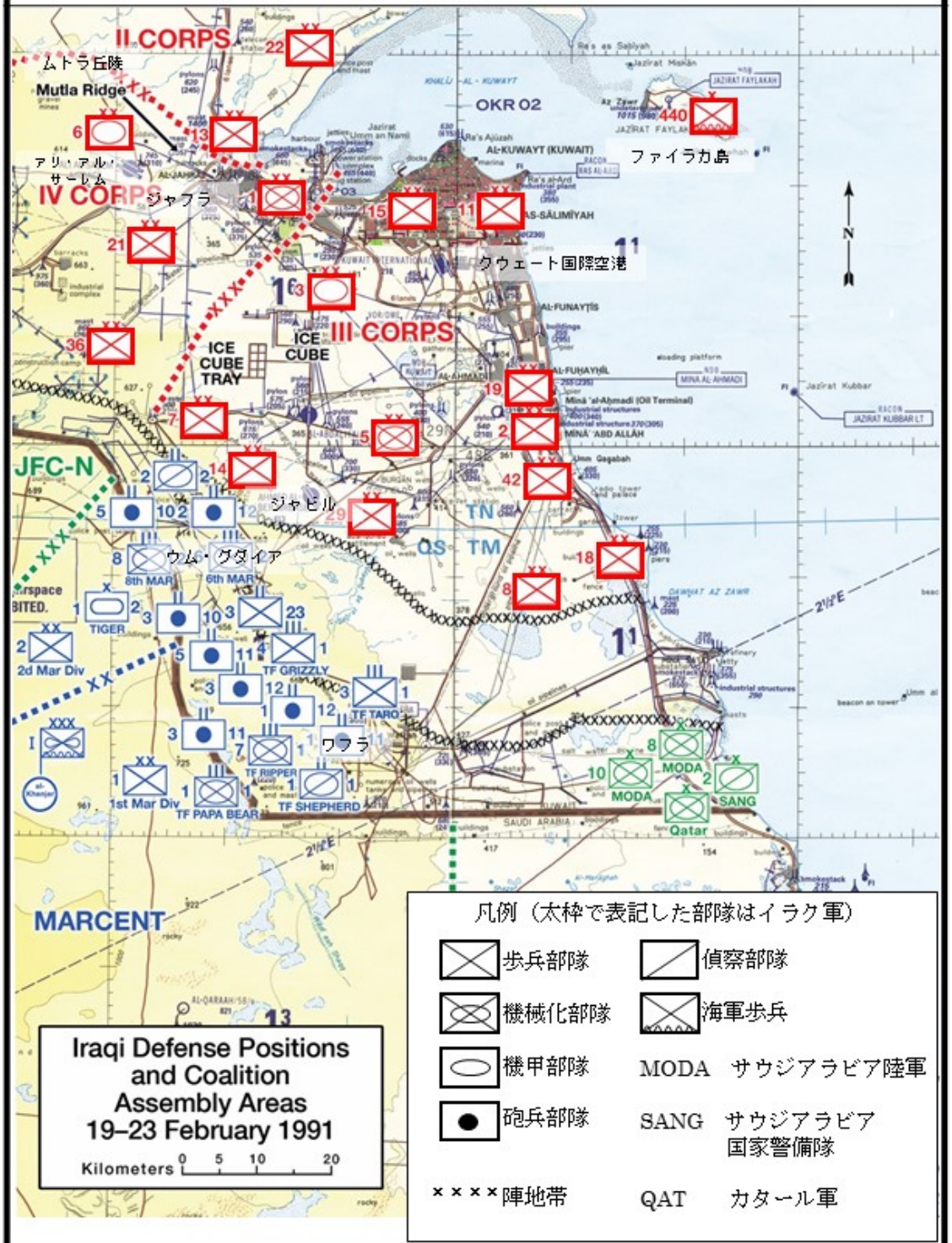
アラブ合同軍の任務は次のとおりだった[451]。（図 26 を参照）

① JFC-E は海岸線沿いに攻撃し、イラク軍を撃破して重要施設を確保する。あわせて JFC-E は MARCENT の東側の側面を掩護する。
② JFC-N はクウェート市の北側においてイラク軍の後方連絡線を遮断する。
③ JFC-E と JFC-N はクウェート市を包囲する。イラク軍が退却した後、あるいはイラク軍が撃破された後、JFC-E と JFC-N はクウェート市を解放する。

ハリド中将は、イラク軍に関する情報が不足したため、戦車、砲兵、工兵及び特殊部隊で編成した部隊をクウェート領内に潜入させて情報活動を実施した[452]。また、JFC-N は MARCENT の西側で、JFC-E は MARCENT の東側で攻撃準備を実施した。

[451] *Ibid.*, pp. 243-244.
[452] Khaled, *Desert Warrior*, pp. 402-403.

図26　クウェートとサウジアラビアの国境付近の状況（2月19～2月23日）




出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 155.

オ　ARCENT の状況

（ア）　第 7 軍団

第 7 軍団の任務は次のとおりだった[453]。

① 第 7 軍団は主攻撃となって、ワジ・アル・バティンの西側を北に向かって攻撃する。
② その後、第 7 軍団は東向きに方向変換して攻撃し、第 18 空挺軍団と連携して RGFC を撃破する。

第 7 軍団は 2 月 14 日から移動を開始し、2 月 17 日までにワジ・アル・バティンの西側の前方集結地に展開した。第 1 及び第 3 機甲師団と第 2 装甲騎兵連隊は 2 月 14 日から、イギリス第 1 機甲師団は 2 月 15 日から移動を開始した。車列の長さが 100km に及ぶ部隊もあった[454]。また、空軍の協力を受けながら第 7 軍団は、陸上攻勢作戦の開始までイラク軍防御陣地に対する制圧射撃を継続した[455]。

一方、第 7 軍団は、MARCENT と同様、陸上攻勢作戦の開始日（2 月 24 日）以前からイラク軍との戦闘を開始した。イラク軍と戦ったのは、第 1 歩兵師団（機械化）及び一時的に第 7 軍団の隷下に入った第 1 騎兵師団だった。第 1 騎兵師団はワジ・アル・バティンにおいて、第 1 歩兵師団（機械化）は第 1 騎兵師団の西側においてイラク軍を攻撃した。

1 月 8 日から陸上攻勢作戦の開始直前まで、ヨソックは第 1 騎兵師団を第 7 軍団の隷下に置いた。ヨソックとフランクスは、イラク軍が ARCENT の攻撃準備を妨害することを目的としてワジ・アル・バティン沿いに攻撃してくるのではないかと懸念していた。1 月 29 日にイラク軍がカフジに攻撃すると、ヨソックとフランクスは懸念を一層強くした。特に兵站施設や兵站部隊が攻撃を受けた場合、第 7 軍団と第 18 空挺軍団による西方からの攻撃が破綻する可能性があった。フランクスからの要望を受けたヨソックは、第 1 騎兵師団を第 7 軍団に一時的に配属した[456]。

第 1 騎兵師団の任務はイラク軍の注意を引きつけ、同時に西方に戦闘展開する第 7 軍団と第 18 空挺軍団の側面を掩護することだった。第 7 軍団と空軍の協力を受けながら第 1 騎兵師団は野戦砲や MLRS、AH-64 を使って積極的に攻撃し、ワジ・アル・バティン周辺のイラク軍に圧力をかけ続けた。第 1 騎兵師団は約 1,800 名のイラク軍兵士を捕虜とした[457]。

---

[453] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 243-245, 262-263; Bourque, *Jayhawk!*, p. 184.
[454] Bourque, *Jayhawk!*, pp. 173-176.
[455] *Ibid.*, pp. 161-163.
[456] *Ibid.*, pp. 122-123, 139-141.
[457] *Ibid.*, pp. 141-146; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 248; クランシー『熱砂の進軍（上）』31-32、408-412 頁。

第 1 騎兵師団が陸上攻勢作戦の開始前に実施した攻撃のうち最も規模が大きかった攻撃は、2 月 20 日 1200 から実施した「ナイト・ストライク（Night Strike）」だった。第 1 騎兵師団第 2 旅団隷下の大隊任務部隊が攻撃した。大隊任務部隊は、2 個戦車中隊と 1 個機械化中隊を基幹として編成された諸兵科協同部隊だった[458]。

「ナイト・ストライク」では、イラク軍が第 1 騎兵師団を痛撃した。イラク軍は陣地帯に侵入した大隊任務部隊に対して、隣接する陣地から集中砲火を浴びせた。大隊任務部隊は 1 両の M163 自走バルカン対空砲と 2 両の M2 ブラッドレー歩兵戦闘車を破壊され、触雷により 1 両の戦車を喪失した。また、3 名が戦死し、9 名が負傷した。第 1 騎兵師団長ティレリ（John H. Tilelli Jr.）准将は火力でイラク軍防御陣地に反撃し、大隊任務部隊を後退させた[459]。

「ナイト・ストライク」の結果、1 ヶ月間以上に及ぶ空爆にも拘わらず、防御を準備している場所ではイラク軍が粘り強く抵抗することが明らかになった。フランクスや第 7 軍団隷下の各部隊指揮官は、この結果を陸上攻勢作戦のための教訓とした。フランクスはイラク軍が待ち構えていない場所から攻撃し、イラク軍が態勢を立て直す前に撃破することが重要だと結論づけた[460]。

第 1 騎兵師団は、陸上攻勢作戦の開始までワジ・アル・バティンの周辺でイラク軍と戦った[461]。その後、第 1 騎兵師団は第 7 軍団の隷下を離れ、中央軍の予備となった。2 月 26 日 0920 に第 1 騎兵師団を第 7 軍団に再び配属するまで、シュワルツコフは中央軍の予備となった第 1 騎兵師団を手元に置いた[462]。

ワジ・アル・バティンの西側では、第 1 歩兵師団（機械化）隷下のアイアン任務部隊（Task Force Iron）がイラク軍と戦った。2 月 15 日、第 1 歩兵師団（機械化）長レーム（Thomas G. Rhame）少将は、第 1 歩兵師団（機械化）の攻撃準備を掩護するため、アイアン任務部隊をサウジアラビアとイラクの国境線沿いに配置した。アイアン任務部隊は、第 1 歩兵師団（機械化）隷下の第 3 旅団を基幹として編成した諸兵科協同部隊だった[463]。

2 月 16 日夜、イラク軍防御陣地の前面に進出したアイアン任務部隊は、イラク軍偵察部隊との戦闘を開始した。2 月 17 日 0059、AH-64 がアイアン任務部隊の戦闘車両を誤って攻撃した。この友軍相撃で 2 名が死亡し、6 名が負傷した[464]。

中央軍司令部は、ワジ・アル・バティンの西側で攻撃するアイアン任務部隊がイラク軍の注意をこれ以上引きつけてしまった場合、第 7 軍団と第 18 空挺軍団が西方の砂漠から攻撃を開始することがイラク軍に察知されてしまうのではないかと懸念した。2 月 17 日午後、中央軍司令部が懸念していることを知ったフランクスはレームに対して、アイアン任務部

458 Bourque, *Jayhawk!*, p. 143.
459 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 206-207.
460 *Ibid.*, pp. 206-207; Bourque, *Jayhawk!*, p. 146; クランシー『熱砂の進軍（上）』410 頁。
461 Bourque, *Jayhawk!*, p. 146.
462 シュワルツコフが第 1 騎兵師団を予備とした理由は本章第 3 節(4)項ア(ウ)を参照。
463 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 153-154.
464 *Ibid.*, p. 159.

隊の後退を命じた[465]。

陸上攻勢作戦の開始前における一連の戦闘で、情報収集と火力発揮に関する問題が明らかになった。第一の問題は、偵察衛星が収集したイラク軍地上部隊の位置に関する情報には誤差が含まれていることだった。砲兵部隊が射撃するためには、より正確な位置を特定することが必要だった。この問題を解決するためフランクスは、偵察衛星がイラク軍地上部隊を発見した後、当該地域に第 7 軍団に割り当てられた無人偵察機を投入した。一方、イラク軍は、第 7 軍団が攻撃対象としていた砲兵部隊を頻繁に移動させて対抗した。第二の問題は、第 7 軍団が火力で攻撃した後にその成果を確認できないことだった。この問題にフランクスは悩み続けた。陸上攻勢作戦の開始までにどの程度イラク軍の戦力を低下させたかという問題は、陸上攻勢作戦間におけるフランクスの判断を左右する重要なポイントだった。しかし、イラク軍地上部隊の正確な位置の特定と火力による攻撃の成果の確認を同時に実施できるほどの無人偵察機をフランクスは持っていなかった。フランクスは、イラク軍の戦車や砲兵部隊がどの程度残っているかを正確に把握することができなかった[466]。

（イ） 第 18 空挺軍団

第 18 空挺軍団の任務は次のとおりだった[467]。

① 第 18 空挺軍団はユーフラテス川の線までの約 260km を攻撃し、バクダッドに通じる国道 8 号線を確保してイラク軍の後方連絡線を遮断する。第 18 空挺軍団は国道 8 号線においてイラク軍の増援と退却を阻止し、クウェート戦域のイラク軍を孤立させる。
② 命令が出た場合、第 18 空挺軍団は東に向かって攻撃し、RGFC の撃破に協力する。

2 月 14 日、第 18 空挺軍団の砲兵部隊がイラク軍に対する射撃を開始した。2 月 18 日、MLRS、第 82 空挺師団の AH-64 及びフランス軍砲兵部隊が陸上攻勢作戦の開始前では最大の制圧射撃を実施した[468]。

この他、第 18 空挺軍団隷下の各部隊はヘリコプターを活用して、イラク領内の奥深くにおいて情報活動と襲撃を実施した[469]。2 月 20 日、第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の AH-64 及び AH-1 攻撃ヘリコプター並びに歩兵中隊は、イラク軍兵士から鹵獲した文書に基づき、ブサイヤの南側のイラク軍防御陣地を襲撃した。襲撃部隊は、抵抗を続けるイラク軍陣地に対して投降を勧告するビラを散布した。また、心理戦部隊は大型スピーカーを使って投

465 *Ibid.*, pp. 153-160.
466 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 204-206.
467 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 243-245, 260; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm,* p. 334.
468 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm,* p. 286.
469 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 198-200.

降を勧告した。この結果、イラク陸軍第 841 歩兵旅団第 1 大隊の全員が降伏した[470]。

2 月 21 日、捕虜となったイラク軍大隊長を尋問した結果、次のことが明らかになった[471]。

① イラク軍では大隊長級の指揮官でさえ多国籍軍の配置を知らないこと。
② イラク軍の指揮通信機能は破壊されていること。
③ イラク軍の第一線部隊は化学兵器を保有していないこと。
④ ラファからサルマンに向かう第 101 空挺師団（空中強襲）の正面には障害帯がないこと。

2 月 22 日、第 101 空挺師団（空中強襲）長ピーエイ少将は、イラク軍兵士の戦意は決して高くないため、多国籍軍の攻撃は予想よりも迅速に進むだろうと判断した。ピーエイは第 24 歩兵師団（機械化）長マカフリー（Barry McCaffrey）少将に電話して、自身の判断を伝えた[472]。

（ウ） 第 7 軍団と第 18 空挺軍団の連携に関する問題

フランクスの最大の懸念はどのように RGFC を攻撃するかという問題だった。フランクスは、第 7 軍団が攻撃する正面には合計 11 個師団以上のイラク軍が待ち構えていると判断した。一方、第 7 軍団の戦力は 4 個師団だった[473]。このため、陸上攻勢作戦の計画を作成した時、フランクスはシュワルツコフとヨソックに対して、第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属すること及び第 7 軍団と第 18 空挺師団を連携させて RGFC を攻撃することを繰り返し要求したのだった。

中央軍副司令官ウォラー中将は、フランクスと同様、第 7 軍団と第 18 空挺軍団を連携させて RGFC を攻撃することが必要だと判断した[474]。ウォラーは、急病のため入院したヨソックに替わって ARCENT 司令官を兼務した時、第 7 軍団と第 18 空挺軍団を連携させる要領を具体化した。

2 月 18 日、ウォラーは RGFC 攻撃に関する計画を完成した。この計画は、第 7 軍団と第 18 空挺個軍団が攻撃目標「コリンズ」で一旦停止して態勢を整え、その後、東向きに方向変換した両軍団が連携しながら RGFC を攻撃するという内容だった。

シュワルツコフやヨソックとは対照的に、ウォラーは陸上攻勢作戦の開始前に隷下部隊を訪問した。ウォラーは各軍団長や各師団長の状況を自身で確認し、彼らの意見に注意深く耳を傾けた。ウォラーは、隷下の部隊指揮官や参謀を怒鳴ることなどない、信望の厚い人物

470 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm,* pp. 286-289.
471 *Ibid.*, p. 289.
472 *Ibid.*
473 <https://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/gulf/oral/franks/1.html>（2020 年 7 月 5 日アクセス）
474 Bourque, *Jayhawk!*, p. 188.

だった[475]。

ところが、2 月 23 日の朝、ドイツの病院に入院していたヨソックが ARCENT 司令官に復帰した。ウォラーは中央軍副司令官に戻った[476]。

復帰したヨソックは、ウォラーが作成した RGFC 攻撃計画を差し戻した。ヨソックは、その時々の状況を見極めて RGFC 攻撃の要領を決定するほうが望ましいと考えていた。ヨソックが作成した 2 月 24 日の RGFC 攻撃計画では、ウォラーが第 18 空挺軍団に与えた RGFC 攻撃の任務は取り消されていた[477]。

MARCENT では陸上攻勢作戦の開始の直前までブーマーが隷下部隊指揮官と意見を交換しながら攻撃要領を具体化していったのとは対照的に、ヨソックは RGFC の攻撃要領の具体化を事実上保留した。2 月 1 日、ヨソックは最終的な作戦会議を実施した。会議では、RGFC 攻撃に関する複数の計画が議論されたが、ヨソックはどの計画をいかなるタイミングで実行するかを明らかにしなかった[478]。

陸上攻勢作戦間、ヨソックがその時々の状況を見極めて RGFC 攻撃の要領を決定したとは言えない。『ジェイホーク』の著者ブルクは、ヨソックが前線の状況を自分自身で確認することはなかった、ヨソックが第 7 軍団と第 18 空挺軍団を調整させて RGFC を攻撃する要領を決断することはなかったと批判している[479]。ARCENT 作戦部長アーノルド准将と情報部長ステュアート（John F. Stewart）准将は、陸上攻勢作戦間、前線近くに司令部を開設しようと考えていた。しかし、ヨソックは、シュワルツコフが居る中央軍司令部の近くに開設した ARCENT 司令部から動かなかった[480]。ヨソックは、毎日夕方から中央軍司令部で実施されるシュワルツコフに対するブリーフィングへの参加を日課としていた[481]。ヨソックは隷下部隊の状況を把握するため、第 7 軍団及び第 18 空挺軍団に連絡班を派遣した[482]。

ヨソックに対する批判は少なくない。『幸運な戦争』の著者スウェインは、ヨソックが RGFC 攻撃の要領を明らかにしなかったために、シュワルツコフが第 7 軍団を批判するという結果になったと指摘している[483]。戦後、シュワルツコフは第 7 軍団の攻撃速度が遅かったために RGFC を取り逃がしたと主張している。

ヨソックと同様、シュワルツコフは中央軍司令部から動かなかった。シュワルツコフは国防総省や統合参謀本部あるいはアラブ諸国との連絡と調整に奔走していた。『ジェイホーク』の著者ブルクは、前線から遠く離れた中央軍司令部から動かなかったシュワルツコフが隷

---

475 Swain, *"Lucky War"*, p. 205.
476 ヨソックの健康状態は完全に回復していなかったという指摘がある。詳細はシュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』463-464 頁；Bourque, *Jayhawk!*, p. 188 を参照。
477 Swain, *"Lucky War"*, pp. 120-121, 195-196, 205, 219.
478 *Ibid.*, pp. 118-121.
479 Bourque, *Jayhawk!*, p. 459.
480 *Ibid.*, p. 230; Gordon, *The Generals' War*, p. 362.
481 トム・クランシー、フレッド・フランクス Jr.『トム・クランシー 熱砂の進軍（下）』白幡憲之訳（原書房、1999 年）72、90 頁。
482 Swain, *"Lucky War"*, pp. 149-150.
483 *Ibid.*, pp. 196, 219.

下部隊の状況を把握することは困難だったと指摘している[484]。

（2） 2月24日（G日）の陸上作戦

ア イラク軍の状況

2月24日朝、フセイン大統領は、クウェートとサウジアラビアの国境線の「踵」一帯で防御しているイラク陸軍第14歩兵師団の正面から多国籍軍の大規模な機甲部隊が攻撃を開始したという報告を受けた。2月24日0900、フセイン大統領は、第14歩兵師団の防御陣地が突破される可能性があるという報告を受けた。同時にフセイン大統領は、多国籍軍がファイラカ島への上陸作戦を開始する気配があること及び西方の砂漠に向かって多国籍軍のヘリコプターや装甲車が移動していることを知った[485]。

フセイン大統領は、西方の砂漠に向かって多国籍軍が移動していることはイラク軍をクウェートから撤退させための策略だと判断した。しかしながら、西方からの攻撃に備えるため、イラク軍司令部はサルマンに配置した第45歩兵師団及び防御陣地帯の最右翼で防御中の第26歩兵師団に対して、西部の砂漠からの多国籍軍の攻撃に対応せよと命じた。イラク軍司令部の参謀の中には、第7軍団と第18空挺軍団がRGFCを攻撃することを見抜き、クウェートを占領中の部隊を一旦後退させて西方からの攻撃に備えることをフセイン大統領に進言した将校がいた[486]。

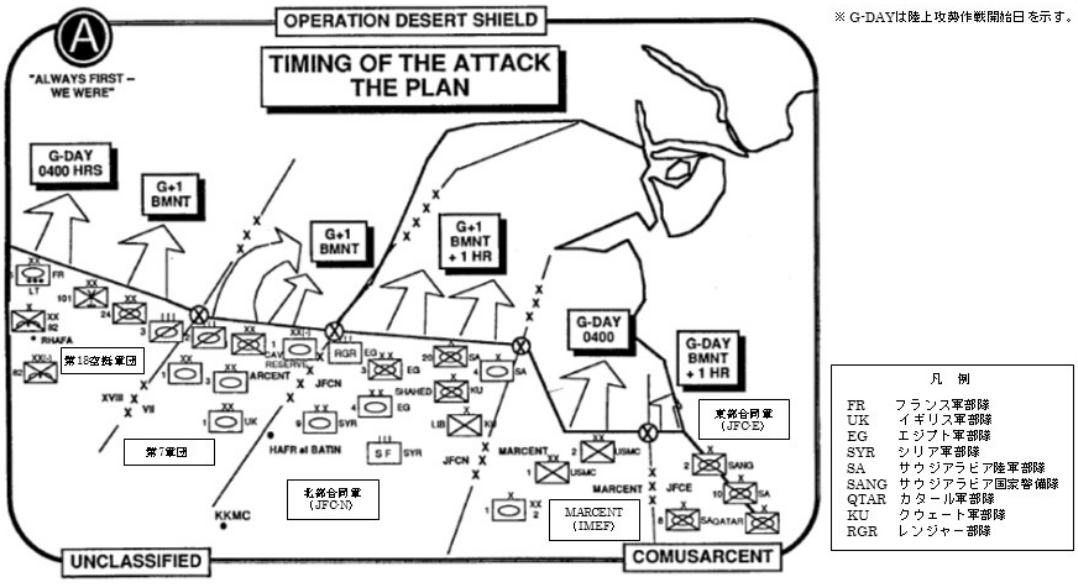
イ 多国籍軍の態勢

多国籍軍は、サウジアラビアの国境線沿いに東西に展開した。多国籍軍の展開線は480kmに及んだ。

攻撃計画では、2月24日朝にMARCENT、JFC-E及び第18空挺軍団主力が攻撃を開始し、2月25日朝にJFC-N、第7軍団及び第18空挺軍団隷下の第24歩兵師団（機械化）と第3装甲騎兵連隊が攻撃を開始する予定だった。攻撃開始時刻に約1日間の差を設けた目的は、多国籍軍がクウェート正面から攻撃してくるとイラク軍に誤認させることにあった[487]。シュワルツコフは、RGFCをクウェート正面に引きつけながら第7軍団によりRGFCを撃破することを企図していた。（図27を参照）

484 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 230, 458-459.
485 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 219-220.
486 *Ibid.*, pp. 220-221.
487 Atkinson, *Crusade*, p. 392.

図27　各部隊の攻撃開始時刻（計画）




出典： Swain, *"Lucky War"*, p. 122.

第18空挺軍団主力の攻撃開始時刻を2月24日朝とした狙いについて二つの説明がある。『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、RGFC の退路を可能な限り早期に遮断することが狙いだったと説明している[488]。一方、『幸運な戦争』の著者スウェインは、第 24 歩兵師団（機械化）が攻撃を開始する前に、同師団のための兵站基地と補給幹線を開設することが狙いだったと説明している[489]。

2 月 24 日、降雨と強風により航空機やヘリコプターの行動が制限される中、多国籍軍は攻撃を開始した。放火された油井から昇る黒煙が地上部隊の視界を制限した[490]。一方、JSTARS や電子光学器材といった最新装備が効果を発揮した[491]。

ウ　MARCENT の攻撃

（ア）　第 1 海兵師団

2 月 24 日 0359、MARCENT 司令官ブーマー中将は陸上攻勢作戦の開始に関する命令を受領した。ブーマーは隷下の 2 個海兵師団に対して攻撃の開始を命じた[492]。（図 28 を参照）

第一陣地帯におけるイラク軍の抵抗は弱かった。第 1 海兵師団の攻撃は大きな抵抗を受

488 Gordon, *The Generals' War*, pp. 375-376.
489 Swain, *"Lucky War"*, p. 121.
490 *Command Chronology Collection, 1st Marine Expeditionary Force January-February 1991*, p. 23.
491 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 256.
492 Gordon, *The Generals' War*, pp. 355-356.

けずに進んだ。2 月 24 日 0510、リッパー任務部隊は第 1 海兵師団の先頭となって攻撃を開始した。リッパー任務部隊隷下の戦闘工兵大隊は僅か 24 分間で障害帯の処理を完了した。2 月 24 日 0644、リッパー任務部隊隷下の戦車大隊が障害帯を通過した[493]。一方、敵味方の識別が不十分だったため、リッパー任務部隊とすでにイラク軍陣地内に浸透していたグリズリー任務部隊との間で友軍相撃が起こった[494]。

2 月 24 日 1125、リッパー任務部隊は第二陣地帯に対する攻撃を開始した。防御していたイラク軍の一部は抵抗したが、多くのイラク軍は降伏した[495]。

第 1 海兵師団は捕虜への対応に苦慮した。攻撃開始後の数時間で第 1 及び第 2 海兵師団が収容したイラク軍捕虜は 8,000 名以上に及んだ[496]。攻撃の進展速度が低下したため、リッパー任務部隊隷下の第 7 海兵連隊第 1 海兵大隊長マティス（James N. Mattis）中佐は隷下の戦闘部隊に対して、投降するイラク軍兵士のために停止せずに前進を継続せよと命じた。マティスは隷下の兵站部隊に対して、イラク軍捕虜に対応するように命じた[497]。

第 1 海兵師団による 2 月 24 日の攻撃は、予想に反して順調に進んだ。2 月 24 日 1800、第 1 海兵師団はジャービル飛行場を確保した。ジャービル飛行場には組織的に抵抗するイラク軍は残っていなかった。攻撃計画では、ジャービル飛行場に対する攻撃は 2 月 25 日に開始する予定だった[498]。

（イ） 第 2 海兵師団

2 月 24 日 0430、第 2 海兵師団は攻撃準備射撃を開始した。攻撃準備射撃には陸軍の MLRS 及び空軍機が協力した。2 月 24 日 0530、第 2 海兵師団隷下の第 6 海兵連隊が攻撃を開始した。陸軍の心理戦部隊は大型スピーカーで『海兵隊賛歌（*Marine Hymn*）』を放送した[499]。

第 2 海兵師団が攻撃を開始すると、多くのイラク軍が投降した。2 月 24 日に第 2 海兵師団が収容したイラク軍捕虜は 4,000 名以上に及んだ。30 両以上の戦車が戦闘可能な状態だったにも拘わらず、全員が投降した戦車大隊もあった[500]。イラク軍にとって第 2 海兵師団の攻撃は予想外の方向からの攻撃だった。また、砲撃や空爆により重火器を破壊されていた

493 Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, pp. 74-76.
494 *Ibid.*, pp. 70-71; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 163-164.
495 Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, pp. 76-77.
496 Gordon, *The Generals' War*, p. 363.
497 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 166-168.
498 *Ibid.*, pp. 168-169.
499 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 266; Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 42-43.
500 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 174; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 266. 2 月 25 日、第 2 海兵師団は障害帯通路付近に 2 箇所の収容施設を開設した。詳細は Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 52-53 を参照。

防御陣地のイラク軍は、第 2 海兵師団の攻撃に対抗する手段を失っていた[501]。

2 月 24 日夕までに第 2 海兵師団の隷下部隊の殆どがイラク軍の第二陣地帯を突破した。2 月 24 日夜、第 6 海兵連隊及びタイガー旅団は 2 月 25 日朝からの攻撃のための足がかりとなる地域を確保した。また、第 2 海兵師団長キーズ少将は、隣接する第 1 海兵師団隷下のグリズリー任務部隊と連携するため、1 個偵察中隊を基幹とするヴェガ任務部隊を第 2 海兵師団の最右翼に配置した[502]。

（ウ） 4MEB、5MEB 及び 13MEU（SOC）

MARCENT と JFC-E の間隙を閉塞するため、5MEB が上陸を開始した。2 月 24 日 1830、強襲揚陸艦からヘリコプターで出撃した 5MEB 隷下の 1 個大隊がワフラ油田の南側の地域を確保した。

2 月 24 日 1245、5MEB 隷下の 2 個大隊は、ホバークラフト揚陸艇 LCAC（Landing Craft Air Cushion）によりサウジアラビアのミシャブ港に上陸した。その後、この 2 個大隊はキブリートまで移動し、イラク軍防御陣地の掃討や捕虜対応を実施した[503]。

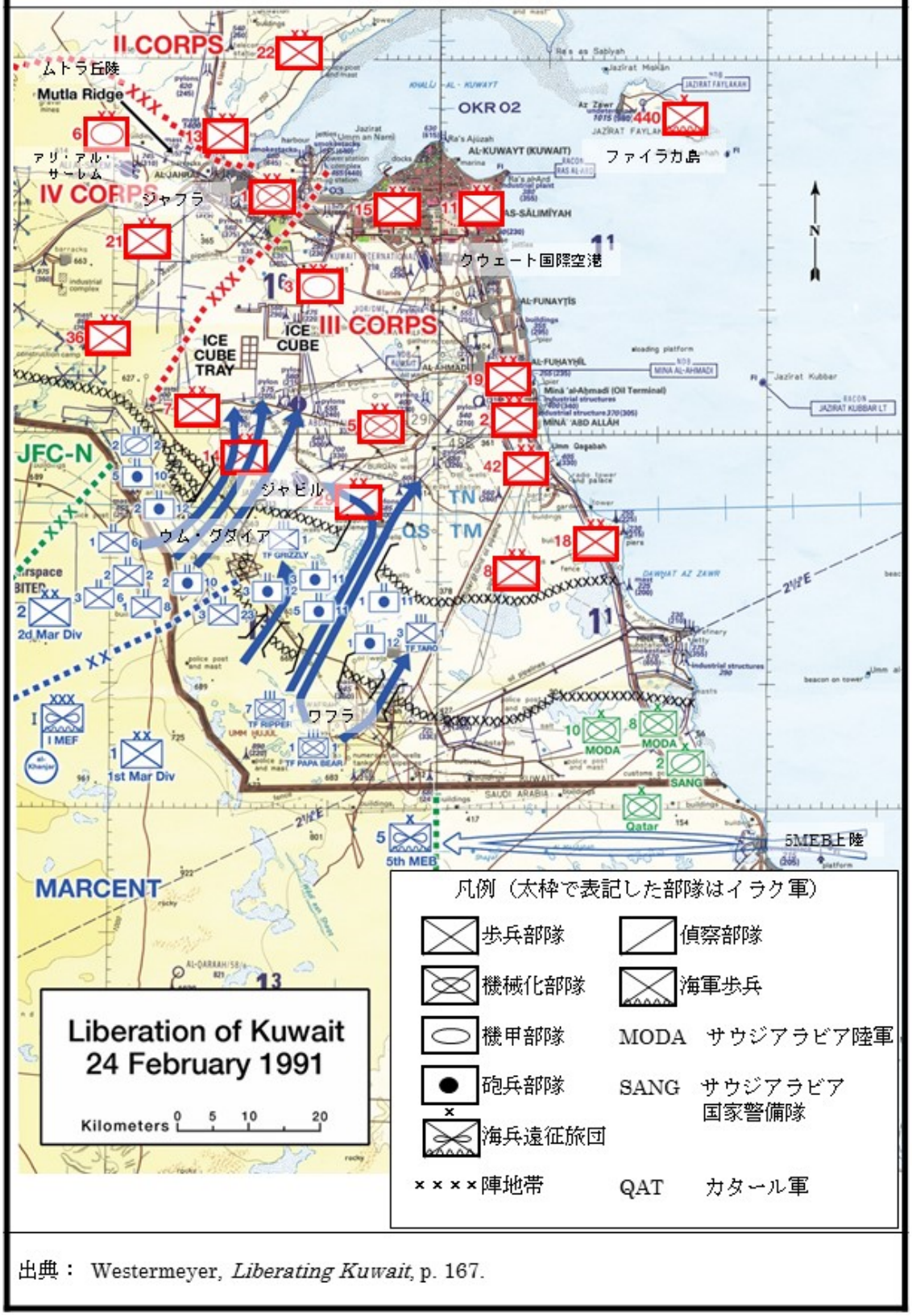
---

[501] Gordon, *The Generals' War*, p. 360; Atkinson, *Crusade*, p. 379.

[502] Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 49-53.

[503] *Command Chronology Collection, 5th Marine Brigade SOC January-March 1991* (USMC Archives Branch, History Division, Quantico), p. III-22; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 176; Marolda, *Shield and Sword*, p. 289.

図28　クウェート正面での戦闘（2月24日）




出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 167.

エ　攻撃開始時刻の繰り上げ

多くの損害を覚悟していたブーマーとシュワルツコフにとって、2 月 24 日に MARCENT が獲得した戦果は予想外の素晴らしい内容だった。MARCENT から逐一報告を受けていたシュワルツコフはイラク軍が瓦解する気配があると判断した。同様、ブーマーもイラク軍は急速に瓦解に向かっていると判断した[504]。

2 月 24 日の攻撃が順調に進んでいた時、ブーマーとシュワルツコフは、MARCENT の西側の側面を懸念し始めていた。予想以上に攻撃が進展したため MARCENT は単独でイラク軍の陣地帯に深く入り込んだ態勢となっていた。MARCENT の西側の側面は無防備だった。MARCENT の西側で攻撃する JFC-N 及び第 7 軍団の攻撃開始時刻は 2 月 25 日朝の予定だった[505]。

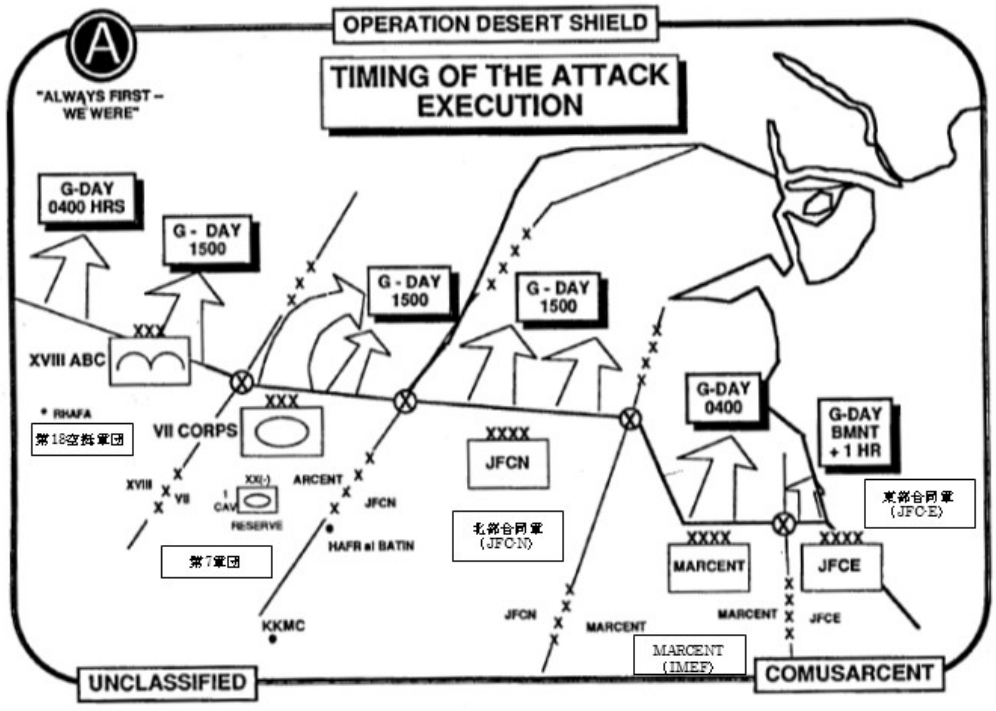
2 月 24 日午前、シュワルツコフはヨソックとハリド中将に対して、JFC-N、第 7 軍団及び第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）と第 3 装甲騎兵連隊の攻撃開始時刻を繰り上げる可能性があると予告した。2 月 24 日正午頃、最終的にシュワルツコフは JFC-N、第 7 軍団及び第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）と第 3 装甲騎兵連隊の攻撃開始時刻を 2 月 25 日 1500 に変更した[506]。

この攻撃開始時刻の変更は、陸上攻勢作戦間にシュワルツコフが決断した事項の中でも特に大きな影響を及ぼした。この時、シュワルツコフはイラク軍がすでに退却を開始しており、イラク軍に壊滅的な損害を与えることができる好機が到来したと判断していた[507]。（図 29 を参照）

---

504 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』468 頁；Marolda, *Shield and Sword*, pp. 289-290.
505 Atkinson, *Crusade*, p. 392; Marolda, *Shield and Sword*, p. 290.
506 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』468-470 頁。
507 同上、468-470 頁；Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 245.

図29　各部隊の攻撃開始時刻（修正後）




※G-DAYは2月24日だった。
※※JFC-Nの実際の攻撃開始時刻は2月24日1600となった。

出典： Swain, *"Lucky War"*, p. 231.

オ　アラブ合同軍の攻撃

（ア）　JFC-E

2 月 24 日 0800、JFC-E が攻撃を開始した。JFC-E は障害帯を処理した後、海岸線沿いにクウェート市に向かって攻撃した。2 隻の戦艦、アメリカ海兵隊の海空火力支援連絡中隊及び偵察部隊がサウジアラビア軍に協力した[508]。（図 28 を参照）

JFC-E の攻撃は大きな抵抗を受けることなく順調に進んだ。JFC-E が第一陣地帯を通過した後、数千人のイラク軍兵士が投降した。2 月 24 日夜までに JFC-E は攻撃目標を確保した。JFC-E 隷下のアブー・バクル任務部隊は引き続き海岸線沿いの地域を偵察した[509]。

（イ）　JFC-N

[508] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 175.
[509] *Ibid.*, pp. 175-176; Marolda, *Shield and Sword*, pp. 288-289; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 267.

シュワルツコフは JFC-N の攻撃開始時刻を 2 月 25 日朝から 2 月 24 日 1500 に変更した。当初、JFC-N の隷下に入っていたエジプト軍のハラビー（Salah Halabi）少将は、悪天候を理由として攻撃開始時刻の繰り上げを拒否した。最終的にエジプト政府からの命令によりハラビーは攻撃開始時刻の繰り上げを了承した[510]。

シュワルツコフは、湾岸戦争が欧米諸国とアラブ諸国との戦争になることを避けるため、アラブ諸国の軍を多国籍軍に留めておくことを重視していた。一方、アラブ諸国とその軍はアラブの同胞であるイラクを攻撃することに慎重だった。シュワルツコフは多国籍軍の結束を維持することに腐心した[511]。

JFC-N の攻撃の進展速度は遅かった。2 月 24 日 1600、JFC-N が攻撃を開始した。JFC-N の攻撃開始は 1 時間遅れていた。また、エジプト第 3 機械化師団は、前面のイラク軍が空爆により戦力を殆ど喪失していたにも拘わらず、イラク軍機甲部隊の逆襲を警戒しながら慎重に前進した。エジプト軍の中には障害帯の処理に手間取り、イラク軍が放火した火炎壕の前面で 10 時間以上停止した部隊があった。エジプト第 3 機械化師団は攻撃目標だった西部クウェートのアブラク（Abraq）に到達する前に攻撃を一旦停止し、2 月 25 日朝からの攻撃を準備した。

また、攻撃への参加を渋っていたシリア軍の第 9 機甲師団は JFC-N の予備となり、エジプト軍の後方を前進した。シリア軍第 9 機甲師団隷下の偵察大隊は JFC-N の東側の側面を警戒し、MARCENT との連絡を維持した[512]。

### カ　ARCENT の攻撃

#### （ア）　第 7 軍団（第 2 装甲騎兵連隊、第 1 機甲師団、第 3 機甲師団、第 1 歩兵師団（機械化）、イギリス第 1 機甲師団）

攻撃開始時刻の繰り上げる可能性があるという連絡はフランクスを驚かせた。フランクスは、あらゆる可能性を考慮に入れていたが攻撃開始時刻の繰り上げだけは予想外だったと回顧している[513]。元々の攻撃計画では、第 7 軍団の攻撃開始時刻は 2 月 25 日朝だった。2 月 24 日 0912、ヨソックはフランクスに電話し、第 7 軍団の攻撃開始時刻を繰り上げることは可能かと質問した。連絡を受けた時、すでに第 7 軍団の隷下部隊は 2 月 25 日朝の攻撃開始に向けて準備している最中だった[514]。

元々のフランクスの攻撃構想は、第 7 軍団と第 18 空挺軍団が連携して RGFC を攻撃すること及び第 1 騎兵師団が第 7 軍団に配属されることを前提としていた。フランクスの攻

---

[510] Gordon, *The Generals' War*, p. 362; Pollack, *Arabs at War*, p. 140.
[511] Scales Jr., *Certain Victory*, p. 122; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』510-511 頁。
[512] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 264-265; Pollack, *Arabs at War*, pp. 140-141.
[513] クランシー『熱砂の進軍（下）』39 頁。
[514] Bourque, *Jayhawk!*, p. 215.

撃構想は次のとおりだった[515]。（図 30 を参照）

① 防御陣地の突破

(1) 第 7 軍団はイラク軍の偵察を封殺しながら、攻撃準備射撃を実施する。その後、第 1 歩兵師団（機械化）がイラク軍防御陣地を突破し、周辺のイラク軍戦術予備を撃破する。

(2) 第 1 歩兵師団（機械化）はイギリス第 1 機甲師団の障害帯通過を掩護する。

(3) イギリス第 1 機甲師団が障害帯を通過すると同時に、西方の第 2 装甲騎兵連隊が攻撃開始線を通過する。第 2 装甲騎兵連隊は統制線「スマッシュ」に向かって攻撃し、後続の第 1 及び第 3 機甲師団の前面を掩護する。あわせて第 2 装甲騎兵連隊はイラク軍戦術予備を包囲する。

② 戦術予備の撃破

(1) イギリス第 1 機甲師団は第 1 歩兵師団（機械化）を追い越した後、東に向かって攻撃してイラク軍戦術予備を撃破または拘束して、第 7 軍団の東側の側面を掩護する。

(2) 第 2 装甲騎兵連隊は、引き続き統制線「スマッシュ」に向かって攻撃し、第 1 及び第 3 機甲師団の前面を掩護する。この時、第 1 騎兵師団が第 7 軍団の統制下に入っている場合、第 2 装甲騎兵連隊は第 1 騎兵師団の前面もあわせて掩護する。

③ RGFC の撃破

(1) 統制線「スマッシュ」を通過した後、第 7 軍団は RGFC 撃破に移行する。

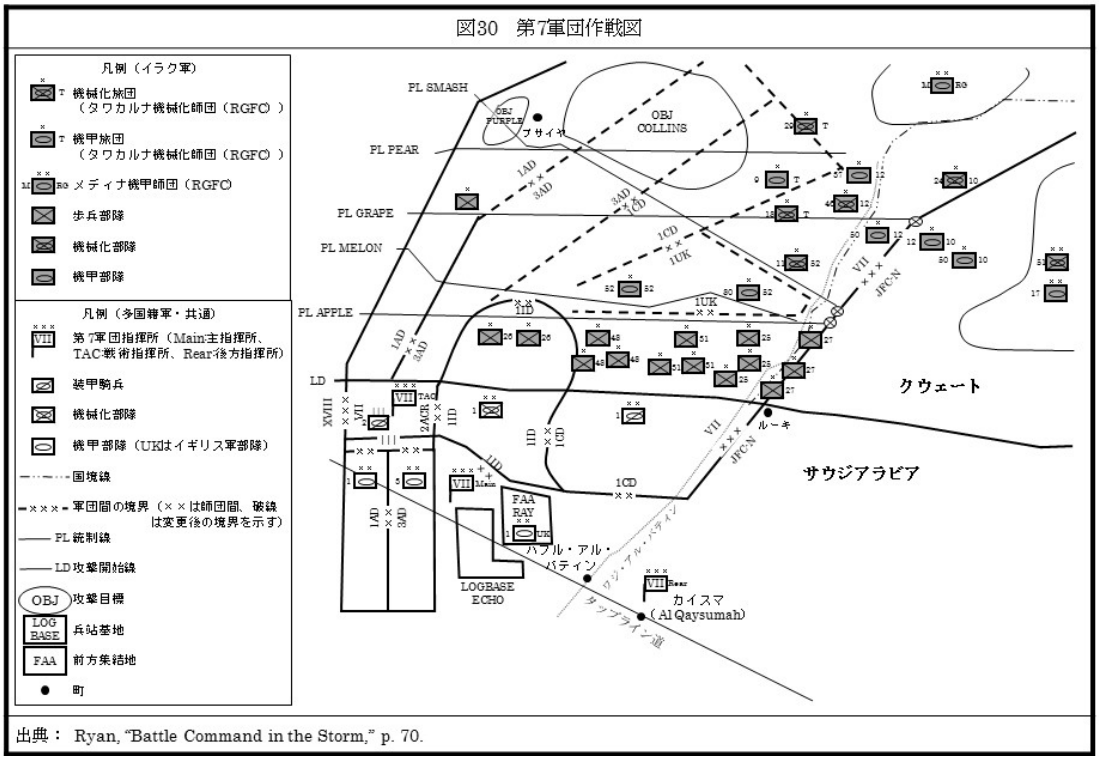
- 第 2 装甲騎兵連隊は 3 個師団（第 1 及び第 3 機甲師団の 2 個師団に、第 1 騎兵師団と第 1 歩兵師団（機械化）のいずれかを加えた合計 3 個師団）の攻撃を先導する。
- 3 個師団は攻撃目標「コリンズ」を超えて攻撃する。
- その後の攻撃は RGFC がどのように行動するかにより決定する。

RGFC が第 7 軍団を攻撃する場合、第 7 軍団は北側から攻撃する第 18 空挺軍団と連携し、攻撃または応急防御を実施して RGFC を包囲する。

RGFC がその場で防御する場合及び北あるいは東に向かって退却する場合は、第 7 軍団と第 18 空挺軍団は RGFC をその場に拘束して撃破する。

---

[515] John T. Ryan, “Battle Command in the Storm: Lieutenant General Franks and VII Corps” (Fort Leavenworth, Kans.: School of Advanced Military Studies United Army Command and General Staff College, 1998), pp. 13-14.



出典： Ryan, "Battle Command in the Storm," p. 70.

ヨソックから攻撃開始時刻を繰り上げる可能性があるという連絡を受けたフランクスは、もし攻撃開始時刻が 2 月 24 日に繰り上げられた場合、どのように隷下部隊を運用するかを検討した。フランクスが検討した部隊運用案は次の二つだった[516]。

① 攻撃開始時刻のみを変更し、これ以外は変更しない。第 7 軍団の隷下部隊は元々の攻撃構想に基づき攻撃する。
② 攻撃開始時刻の変更にあわせて隷下部隊の運用を変更する。左翼から攻撃する第 3 機甲師団がイラク領内に進出した後、東に向かって攻撃する。第 3 機甲師団は第 1 歩兵師団（機械化）が開設した障害帯通路に近づかないように注意しながら、イラク軍の防御陣地及びその後方の予備隊を一掃する。その後、第 3 機甲師団は第 7 軍団の東側の側面を掩護する。第 1 機甲師団と第 2 装甲騎兵連隊は並列して北に向かって攻撃し、RGFC を攻撃する。

第二の部隊運用案の狙いは、第 7 軍団の攻撃の進展速度を増大させることだった。第二の部隊運用案の場合、障害帯がない場所からイラク領内に進出した第 3 機甲師団が第 7 軍団の東側の側面を掩護するため、障害帯を通過したイギリス第 1 機甲師団が東側の側面を掩護する態勢を確立するまで待つ必要がある第一の部隊運用案を比べて、より早期に

[516] Bourque, *Jayhawk!*, p. 216; クランシー『熱砂の進軍（下）』47-48 頁。

RGFC に向かって第 7 軍団の戦力を推進することが可能だった。しかしながら、第二の部隊運用案の場合、元々の攻撃構想と比べると北に向かって攻撃する戦力が少ないため、RGFC を攻撃する際に戦力が不足することは明らかだった。

フランクスは、隷下部隊長を交えて検討した結果、第一の部隊運用案を採用に決定した。フランクスは、RGFC を攻撃するためには可能な限り戦力を集中することが必要だと判断した。あわせてフランクスは、第二の部隊運用案を採用した場合、すでに元々の攻撃構想に基づき準備している最中の隷下部隊を混乱させてしまうと判断した。

しかし、この時のフランクスの決定はシュワルツコフの企図と異なっていた。シュワルツコフは、イラク軍は瓦解し始めていると判断しており、第 7 軍団が元々の攻撃構想を放棄して急いで攻撃することを期待していた。一方、ヨソックから連絡を受けた時、フランクスは、攻撃を急ぐ必要性が差し迫っているとは感じなかった[517]。回顧録においてフランクスは、ヨソックから聞いたのは MARCENT の攻撃が順調に進んでいるという内容だけであり、攻撃計画の変更あるいは第 7 軍団の任務や攻撃要領の変更について聞いていないと主張している[518]。

フランクスは、シュワルツコフは陸上攻勢作戦計画のすべてを変更して攻撃を急ぐことを要求しているのではなく、ただ単に攻撃開始時刻を早めることを要求しているのだろうと理解した。実際、第 7 軍団正面のイラク軍は陣地帯で防御しており、退却する気配はなかった。また、2 月 24 日、シュワルツコフが予備として手元に置いていた第 1 騎兵師団はワジ・アル・バティン付近で陽動を実施中であり、第 7 軍団に配属されていなかった。フランクスは、イラク軍の反撃によってエジプト軍が危険な状態に陥る可能性が引き続き残っているため、シュワルツコフは第 1 騎兵師団を手放していないのだろうと判断した[519]。

この他、フランクスが関心を持っていたのは、攻撃開始時刻が 2 月 24 日の何時になるかという点だった。フランクスは、攻撃開始線を 2 月 24 日に繰り上げるのであれば、可能な限り早い時刻に攻撃を開始することが望ましいと判断した。フランクスは、2 月 24 日の昼頃までに攻撃を開始できるのであれば、第 7 軍団の攻撃は混乱しないだろうと判断した。

フランクスが可能な限り早い時刻の攻撃開始を望んだ理由は RGFC との戦いを見据えていたためだった。フランクスは、2 月 24 日の日没前までに第 1 歩兵師団（機械化）が障害帯を処理して障害帯通路を表示し、かつ後続のイギリス第 1 機甲師団による障害帯の通過を掩護する態勢を確立することを望んでいた。これを達成すれば、夜陰に紛れて企図を秘匿しながらイラク軍に接近すること及びイラク軍砲兵部隊から制圧される危険を回避することが可能になるとフランクスは判断していた。一方、フランクスは、第 1 歩兵師団（機械化）による障害帯の処理や通路の表示が 2 月 24 日の夜間となった場合、障害帯の通過は混

---

517 Bourque, *Jayhawk!*, p. 219.
518 クランシー『熱砂の進軍（下）』39-41 頁。
519 同上、41-42 頁；Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 267-268. シュワルツコフが第 1 騎兵師団を予備とした理由は本章第 3 節(4)項ア(ウ)を参照。

乱するだろうと予想した[520]。第 1 歩兵師団（機械化）師団長レーム少将の考えも同様だった。フランクスが隷下部隊指揮官の意見を確認した際、レームは 2 月 24 日 1300 に攻撃を開始することを要望した[521]。

2 月 24 日 1000、フランクスはヨソックに電話し、第 7 軍団は 2 月 24 日昼に攻撃を開始することが可能だと回答した。2 月 24 日 1030、ヨソックはフランクスに対して、2 時間以内に攻撃準備を完了せよと命令した。2 月 24 日 1130 までに、第 7 軍団隷下の各部隊はそれぞれの攻撃開始位置に向かって前進を開始した[522]。

しかし、シュワルツコフは攻撃開始時刻を 2 月 24 日 1500 とすることを決定した。2 月 24 日 1300 頃、第 7 軍団が攻撃準備を殆ど完了していたにも拘わらず、ヨソックはフランクスに対して 2 月 24 日 1500 に攻撃を開始できるように準備せよと命じた[523]。シュワルツコフが 2 月 24 日 1500 まで攻撃開始時刻を遅らせた理由は、第 7 軍団や第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）と第 3 装甲騎兵連隊と同時に JFC-N に攻撃を開始させるためだった。この時、JFC-N 隷下のエジプト軍が攻撃開始時刻を繰り上げることを渋っていた[524]。

シュワルツコフが攻撃開始時刻を 2 月 24 日 1500 に変更したことにより、第 7 軍団の作戦は困難になった。障害帯を処理した後にイギリス第 1 機甲師団の障害帯通過を掩護する任務を持っていた第 1 歩兵師団（機械化）にとって、使用可能な昼間の時間は僅か 3 時間となった[525]。また、元々の攻撃構想において第 7 軍団は、昼間に障害帯を処理することを想定していた。このため、第 1 歩兵師団（機械化）は、夜間に障害帯を処理するための訓練や予行を十分に行っていなかった[526]。

2 月 24 日 1430 から第 7 軍団は 30 分間の攻撃準備射撃を実施した。イラク軍の砲兵部隊と化学兵器を破壊することを目的として実施された第 1 歩兵師団（機械化）正面の攻撃準備射撃は特に激しかった。戦後、第 1 歩兵師団（機械化）の正面で防御していたイラク軍の師団長は、この時の砲撃で大地が揺れたと証言している[527]。

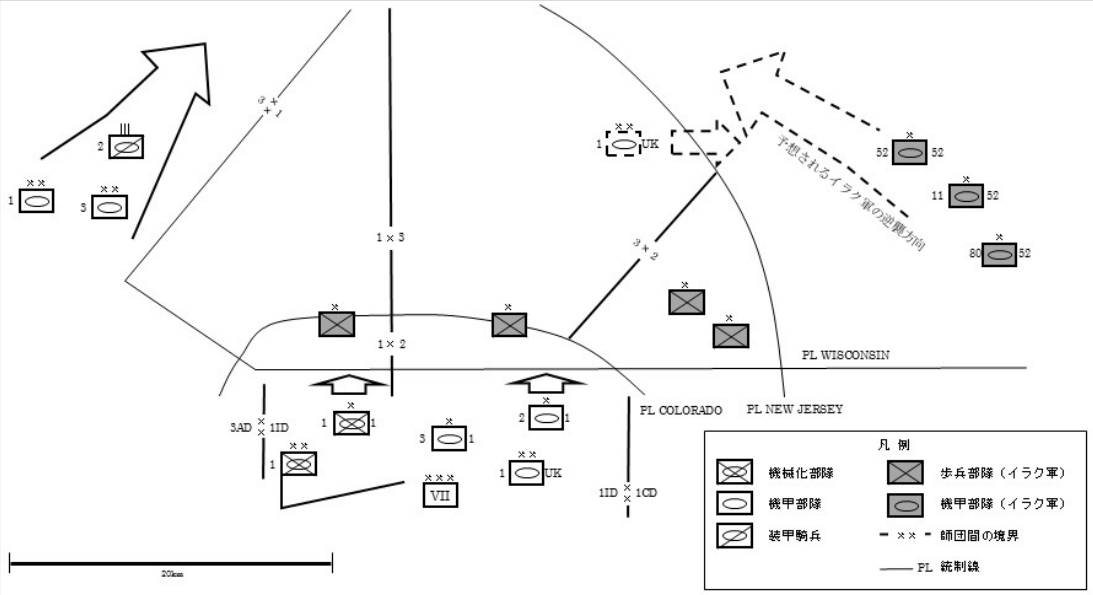
2 月 24 日 1500、第 1 歩兵師団（機械化）は隷下の 2 個旅団を並列して攻撃を開始した。両旅団の先頭で攻撃するすべての大隊は諸兵科協同部隊の編成となっていた。地雷処理鋤を装着した戦車が攻撃を先導し、その後方にブラッドレー歩兵戦闘車を主体とする機械化歩兵部隊が続いた。イラク軍の抵抗は弱かったが、退却する気配はなかった。イラク軍は、アメリカ陸軍が下車戦闘に移行するのを待ち構えている様子だった。しかし、第 1 歩兵師団（機械化）は下車戦闘に移行せず、戦車と装甲車の排土板を使ってイラク軍兵士が立て籠

---

520 クランシー『熱砂の進軍（下）』43-45 頁。
521 Bourque, *Jayhawk!*, p. 216.
522 *Ibid.*, p. 216.
523 *Ibid.*, p. 218.
524 Swain, *"Lucky War"*, p. 232.
525 2 月 24 日の日没は 1753 だった。詳細は Bourque, *Jayhawk!*, p. 206 を参照。
526 Bourque, *Jayhawk!*, p. 218.
527 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 226; クランシー『熱砂の進軍（下）』46、50-51 頁。

もる塹壕を埋めていった[528]。（図 31 を参照）

図31　第7軍団によるイラク軍第一線陣地帯の突破（2月24日～2月25日）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 231.

攻撃開始時刻が 1500 となったことにより昼間の時間が不足したため、第 1 歩兵師団（機械化）の攻撃に遅れが生じ始めた。第 1 歩兵師団（機械化）は 1,000 人以上に及ぶイラク軍捕虜を収容し、2 月 24 日 1654 までに 24 本の障害帯通路を開設した。また、2 月 24 日の日没までに第 1 歩兵師団（機械化）隷下の 2 個旅団のうち東側の第 2 旅団はイラク軍防御陣地を突破し、統制線「コロラド（Colorado）」に到達した。しかし、2 月 24 日の日没になってもイラク軍は、第 1 歩兵師団（機械化）が開設した障害帯通路に対する制圧射撃を繰り返して抵抗を続けていた。また、西側の第 1 旅団はイラク軍陣地を一つ一つ潰している最中だった。さらに、第 3 旅団と砲兵部隊はイラク領内に進出していなかった。第 3 旅団は、イギリス第 1 機甲師団による障害帯通過を掩護するために統制線「ニュージャージー（New Jersey）」まで進出するという任務を持っていた[529]。

レームは、夜間も引き続き攻撃することを危惧した。夜間、不発弾が散乱し、かつイラク軍の砲撃を受ける中で障害を処理することは危険だった。さらに、第 1 及び第 2 旅団が開設した障害帯の通路から第 3 旅団と砲兵部隊が統制線「ニュージャージー」に向かって攻撃するためには、関係する部隊の間で綿密に調整することが必要だった。しかし、そのような調整を夜間に行うことは殆ど不可能だった[530]。

イギリス第 1 機甲師団長スミス（Rupert A. Smith）少将も攻撃の遅れを懸念していた。

528 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 223-225.
529 *Ibid.*, pp. 225-226; Swain, *"Lucky War"*, p. 234.
530 Bourque, *Jayhawk!*, p. 226; Swain, *"Lucky War"*, pp. 234-236.

イギリス第1機甲師団は2月24日の夜間に重装備輸送車両によりイラク領内に輸送される予定だった。しかし、攻撃の遅れを懸念したスミスは隷下の第4旅団に対して、自走により前進を開始するように命じた。2月24日夜、第4旅団は重装備輸送車両を使用せずにイラク軍防御陣地に向かって戦力を推進した[531]。

一方、第7軍団の左翼では、2月24日1430、フランクスの命令により第2装甲騎兵連隊が攻撃を開始した。第2装甲騎兵連隊はイラク軍の抵抗を排除しながら攻撃し、2月24日1700までにイラク領内40kmの地点に進出した[532]。

2月24日1500、第1及び第3機甲師団が第2装甲騎兵連隊の後に続いて攻撃を開始した。第3機甲師団は東側に、第1機甲師団は西側に展開してサウジアラビアとイラクの国境線を通過した。悪天候による視界不良や泥濘化のため第1及び第3機甲師団は国境線沿いに設置された砂堤の通過に手間取った。攻撃を先導する第2装甲騎兵連隊と後に続く2個機甲師団は分離した[533]。

後続の第1及び第3機甲師団が遅れていることを知った第2装甲騎兵連隊長ホルダー大佐はフランクスに対して、砲兵部隊とヘリコプターに夜間も引き続き攻撃させる一方、地上部隊は第1及び第3機甲師団が第2装甲騎兵連隊に追いつくまで一時的に停止したほうがよいと提案した。ホルダーは、第2装甲騎兵連隊と後続の2個機甲師団の戦力が分離した状態のままRGFCに向かって前進することは危険だと判断した[534]。

2月24日夕、隷下部隊の状況を確認したフランクスは今後の攻撃要領について検討した。フランクスが検討した攻撃要領の案は次のとおりだった。

① 可能な限り早期にRGFCと接触するため、第7軍団は夜間も攻撃を継続する。
② 第7軍団は攻撃を一旦停止して態勢を整えた後、2月25日朝から攻撃を再開する。

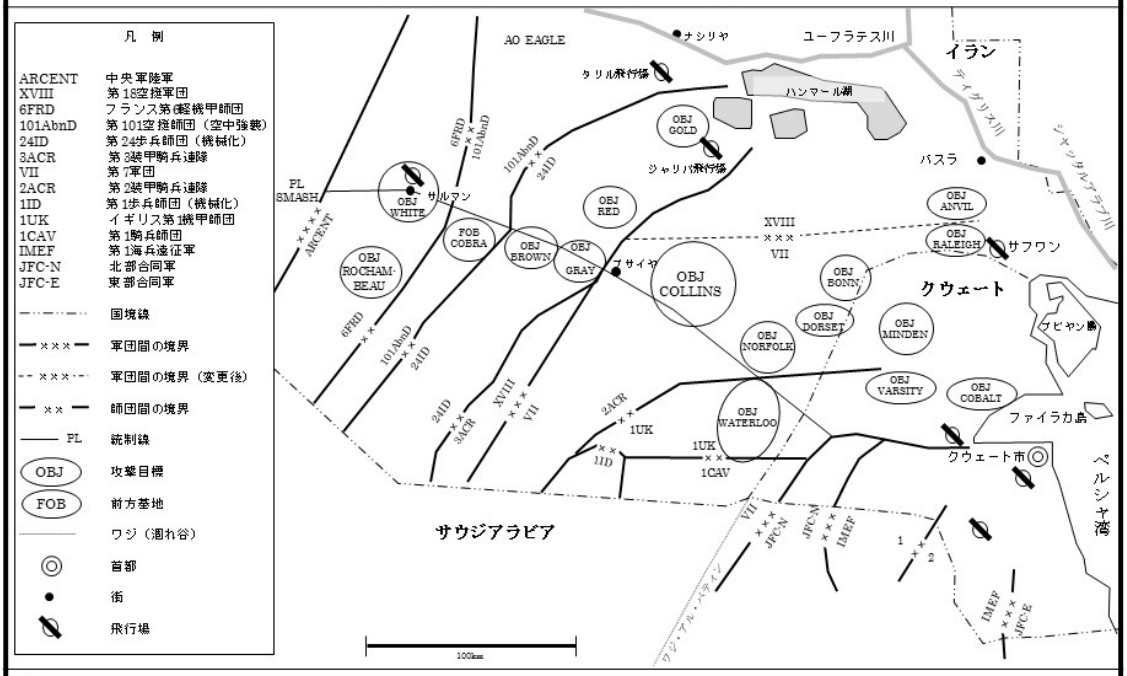
フランクスは、攻撃を一旦停止して2月25日朝から攻撃を再開することを決定した。2月24日の夕方、フランクスはヨソックに対して、地上部隊が危険を冒して夜間も前進を続ける価値はないと報告した。ヨソックは同意した。2月24日夕における第7軍団の攻撃の進展状況についてフランクスとヨソックは、予定よりも順調に進んでいると判断した。

陸上攻勢作戦の計画を作成した時、フランクスとヨソックは、攻撃を開始してからRGFCを撃破するまでどのようなタイムラインで陸上攻勢作戦が推移していくかという点で概ね一致していた。フランクスとヨソックは、攻撃開始からRGFCと接触するまでの所要時間を2日間と予想していた。また、フランクスは、第7軍団がRGFCに対する攻撃を開始する時期を2月26日1500頃と予想し、またRGFCと接触する地域を統制線「スマッシュ」

531 Bourque, *Jayhawk!*, p. 234.
532 *Ibid.*, pp. 218, 227.
533 *Ibid.*, p. 229.
534 クランシー『熱砂の進軍（下）』60頁；Atkinson, *Crusade*, p. 402.

以降と予想した[535]。一方、『幸運な戦争』の著者スウェインは、アメリカ政府や統合参謀本部との連絡に追われていたシュワルツコフは、フランクスとヨソックが予想した RGFC 攻撃に関するタイムラインを知らなかったと指摘している[536]。（図 32 を参照）

図32　統制線「スマッシュ（SMASH）」




出典：Scales Jr., *Certain Victory*, Figure 5-1.

フランクスは RGFC との戦いを見据えながら、攻撃を一時停止するか否かについて判断した。フランクスの最大の関心は、RGFC に対する攻撃を開始すると予想される時期と場所において第 7 軍団がどのような態勢となっているかにあった。

フランクスが RGFC との戦いを見据えながら判断したことは、2 月 25 日朝まで攻撃を一旦停止するという決定に至った二つの理由から伺える。第一の理由は、夜間も攻撃を続けた場合、弾薬と燃料の輸送が妨害され、第 7 軍団が RGFC に対する攻撃を開始する時に弾薬と燃料が不足するという理由だった。フランクスは、2 月 24 日の昼間に攻撃したイラク軍陣地の掃討が不完全になり、残存するイラク軍が第 7 軍団の兵站部隊や補給幹線を攻撃することを危惧した。第二の理由は、夜間も攻撃を続けた場合、イラク軍の逆襲への対応が困難となり、RGFC に対する攻撃を開始する前に第 7 軍団の戦力が低下する可能性があるという理由だった。第 7 軍団の東側の側面を掩護するイギリス第 1 機甲師団のイラク領内への進出は遅れていた。フランクスは、イギリス第 1 機甲師団が東側の側面を掩護していな

535 クランシー『熱砂の進軍（下）』60-61、65、81-82 頁。
536 同上、72、93 頁；Swain, *"Lucky War"*, pp. 232, 238. ヨソックが作成した陸上攻勢作戦の推移に関するタイムラインは Swain, *"Lucky War"*, p. 233 を参照。

い中で第2装甲騎兵連隊と2個機甲師団が攻撃を続けた場合、東側の側面が無防備となり、イラク軍機甲部隊の逆襲に対応できないと判断した[537]。

2月24日夜、攻撃を一旦停止した第7軍団は情報活動、砲兵部隊や攻撃ヘリコプターによる攻撃及び兵站活動を継続し、2月25日朝からの攻撃再開に備えた。左翼の第2装甲騎兵連隊の先頭はイラク領内約70kmの地点だった。フランクスは、イギリス第1機甲師団が第1歩兵師団（機械化）を追い越して攻撃を開始する時刻を2月25日1200に決定した[538]。

戦後、2月24日夜に第7軍団を停止したことでフランクスは批判された。特に舌鋒鋭く批判したのはシュワルツコフだった。シュワルツコフは回顧録やメディアや使って、イラク軍が潰走し始めていたにも拘わらず、慎重なフランクスが元々の攻撃計画に執着して追撃に移行しなかったため、イラク軍を壊滅することができなかったという主張を繰り返している[539]。また、『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、第7軍団の元々の攻撃計画があまりに精巧に作られていたため、フランクスは状況にあわせて攻撃計画を変更することができなかったと指摘している[540]。

こうした批判に対してフランクスは回顧録において、イラク軍が潰走していた、あるいは追撃に移行すべき状況だったというシュワルツコフの主張に反証を上げながら、一旦停止して態勢を整えた後に2月25日朝から攻撃を再開したことは間違っていないと反論している。フランクスは、2月24日2000の時点でRGFC隷下の3個師団及びイラク陸軍隷下の4個重師団は戦力を温存し、かつ後退する気配はなく、その場に留まって戦うか、もしくは攻撃してくる可能性があったと主張している[541]。

戦後の研究により、2月24日夜の時点でRGFCは西方の砂漠からの攻撃を阻止する態勢に移行しており、退却を開始していなかったことが明らかになっている。西方の砂漠から規模不明の部隊が接近していることを危惧したイラク軍参謀本部は、RGFC 司令官アルラウィ中将に対して、南西からの攻撃を阻止するように命じた。この時RGFCが受領した任務は、クウェート戦域内のイラク軍が退却できるようにするため、可能な限り長い期間、バスラに向かう多国籍軍の攻撃を阻止することだった。アルラウィはRGFC隷下のタワカルナ機械化師団とジハード軍団隷下の2個機甲旅団を防御陣地に配置した[542]。

この他、戦後の研究のいくつかは正確な情報がシュワルツコフに報告されなかった可能性があることを示している。『幸運な戦争』の著者スウェインは、第7軍団の参謀がARCENT司令部に対して第 7 軍団の攻撃進展に関する楽観的な予想を報告し、この楽観的な予想が

---

537 Bourque, *Jayhawk!*, p. 234; クランシー『熱砂の進軍（下）』62-69頁。M1A1戦車の燃費は悪かったため、150km以上を進撃する第7軍団は燃料補給に特別の注意を払った。
538 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 236-237; クランシー『熱砂の進軍（下）』75-76頁。
539 <https://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/gulf/oral/schwarzkopf/1.html>（2020年7月5日アクセス）；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』471-472頁。
540 Gordon, *The Generals' War*, p. 380.
541 クランシー『熱砂の進軍（下）』70-71、90頁。
542 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 233, 235.

中央軍司令部に報告された時に第 7 軍団の現状だと誤解された可能性を指摘している[543]。同様、『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、ARCENT 作戦部長アーノルド准将がフランクスは障害処理のみを 2 月 25 日朝まで延期したのだと誤認し、第 7 軍団隷下のすべての部隊が一時停止するという正確な情報を中央軍司令部に報告しなかった可能性があると婉曲的に指摘している[544]。また、回顧録においてフランクスは、中央軍司令部内の地図上には 12 時間以上前の自軍の位置情報が掲示されていたと主張している[545]。一方、回想録においてシュワルツコフは、中央軍作戦部長から 2 月 24 日夜のうちに第 7 軍団の攻撃は大きく進むだろうという報告を受けたと主張している。シュワルツコフの回想録には、第 7 軍団が攻撃を一時停止するという報告を受けたという記述はない[546]。

フランクスはヨソックに対して、第 7 軍団の状況や今後予定する行動について報告した[547]。一方、この時、ヨソックとシュワルツコフは、第 7 軍団による今後の攻撃に関する命令や指示を出さなかった[548]。

しかしながら、第 7 軍団が攻撃を一旦停止していた 2 月 24 日夜、ヨソックは ARCENT 作戦部長アーノルド准将に対して、第 7 軍団と第 18 空挺軍団を連携させて RGFC を攻撃する要領を具体化するように指示した。ヨソックは、第 7 軍団が RGFC と接触する前に、第 18 空挺軍団の地上部隊で RGFC をその場に拘束すること及び第 18 空挺軍団の火力で RGFC の砲兵部隊を撃破することを企図していた[549]。

（イ） 第 18 空挺軍団（第 3 装甲騎兵連隊、第 82 空挺師団、第 101 空挺師団（空中強襲）、第 24 歩兵師団（機械化）、フランス第 6 軽機甲師団）

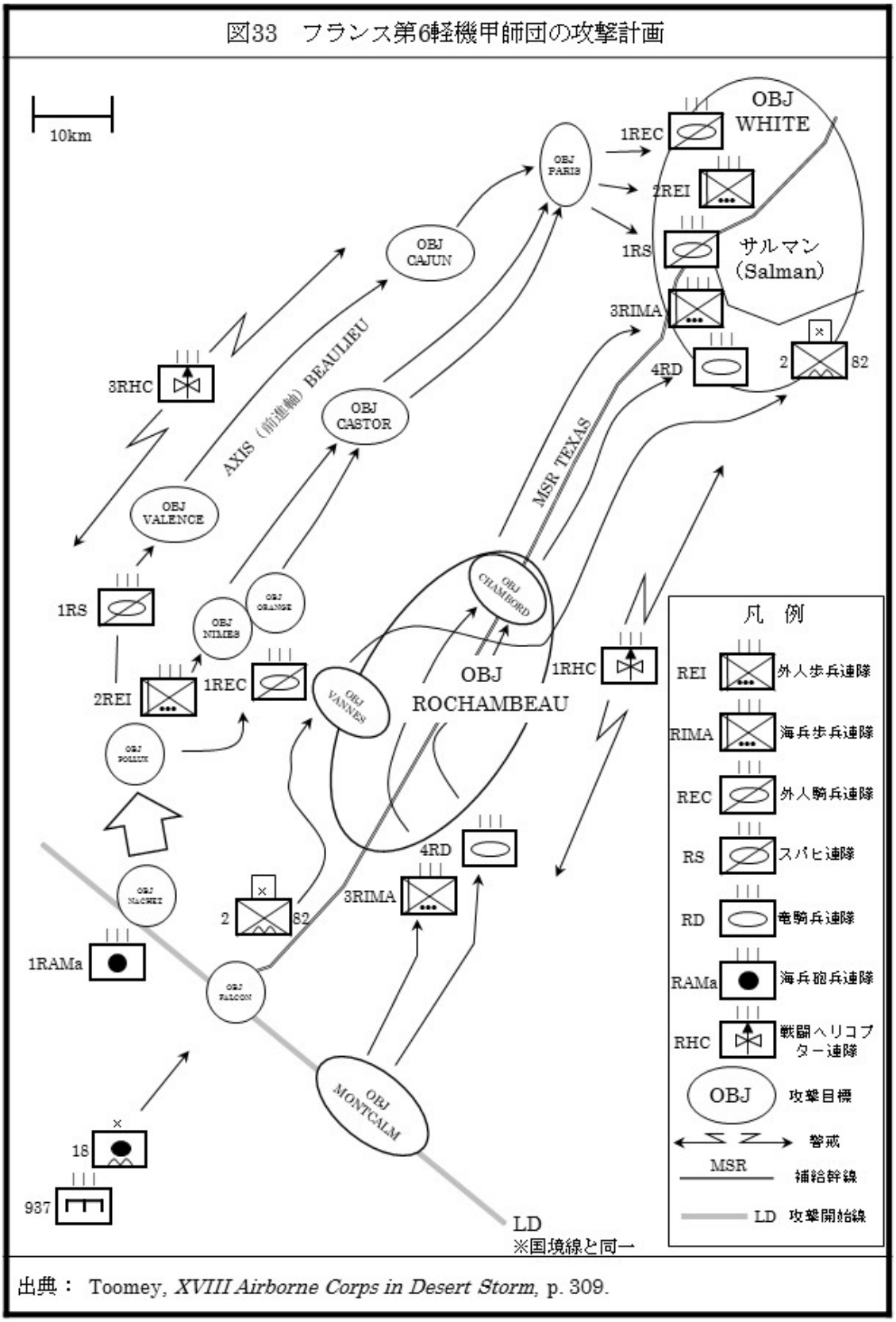
第 18 空挺軍団の攻撃はフランス第 6 軽機甲師団の攻撃で始まった。第 82 空挺師団隷下の 1 個旅団はフランス第 6 軽機甲師団に協力した。フランス第 6 軽機甲師団の任務は次のとおりだった[550]。（図 33 を参照）

① フランス第 6 軽機甲師団はサルマン一帯（攻撃目標「ホワイト」）を奪取し、補給幹線「テキサス（Texas）」を開設する。
② その後、フランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の西側の側面を掩護する。

---

543 Swain, *"Lucky War"*, pp. 239-240.
544 Gordon, *The Generals' War*, p. 380.
545 Ryan, "Battle Command in the Storm," p. 65; クランシー『熱砂の進軍（下）』90、165 頁。
546 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』469 頁。この他、シュワルツコフが第 7 軍団の一旦停止について報告を受けた様子は Bourque, *Jayhawk!*, p. 235 を参照。
547 クランシー『熱砂の進軍（下）』71-72 頁。
548 Bourque, *Jayhawk!*, p. 236.
549 Swain, *"Lucky War"*, p. 238.
550 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 148.

図33　フランス第6軽機甲師団の攻撃計画




出典： Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 309.

2 月 24 日 0530、フランス第 6 軽機甲師団は攻撃を開始した。フランス第 6 軽機甲師団の攻撃は順調に進んだ。2 月 24 日 1100、アメリカ陸軍砲兵部隊の協力のもと、フランス第 6 軽機甲師団隷下の 2 個連隊は攻撃目標「ロシャンボー（Rochambeau）」を攻撃した。道路沿いからの攻撃に備えていたイラク軍は奇襲を受けた。補給幹線「テキサス」を確保したフランス第 6 軽機甲師団は攻撃目標「ロシャンボー」に対する攻撃を続けながら、同時に攻撃目標「ホワイト」に向かって前進した。2 月 24 日午後までにフランス第 6 軽機甲師団が収容したイラク軍捕虜は 1,200 名に及んだ[551]。

一方、補給物資を輸送する車両と攻撃部隊の車両で混雑していた補給幹線「テキサス」は、大量の捕虜が出たことにより一層渋滞した。補給幹線「テキサス」は周辺地域内で唯一の舗装道路だった。第 18 空挺軍団長ラック中将は補給幹線「テキサス」の使用を統制し、砲兵部隊、工兵部隊及び弾薬と燃料を輸送する車両の通行を優先した。また、アメリカ軍及びフランス軍の憲兵部隊は昼夜の別を問わず交通統制を実施した[552]。

フランス第 6 軽機甲師団は、2 月 24 日 1410 に攻撃目標「ホワイト」に対する攻撃を開始し、2 月 24 日 1800 に同目標を包囲した。また、フランス第 6 軽機甲師団長ジャンビエ（Bernard Janvier）准将は、2 月 24 日のうちに攻撃目標「ロシャンボー」を確保するという元々の攻撃計画を修正し、2 月 25 日朝から攻撃を再開することを決定した[553]。

第 82 空挺師団はフランス第 6 軽機甲師団の後に続いて前進した。第 82 空挺師団は補給幹線「テキサス」を防護した[554]。

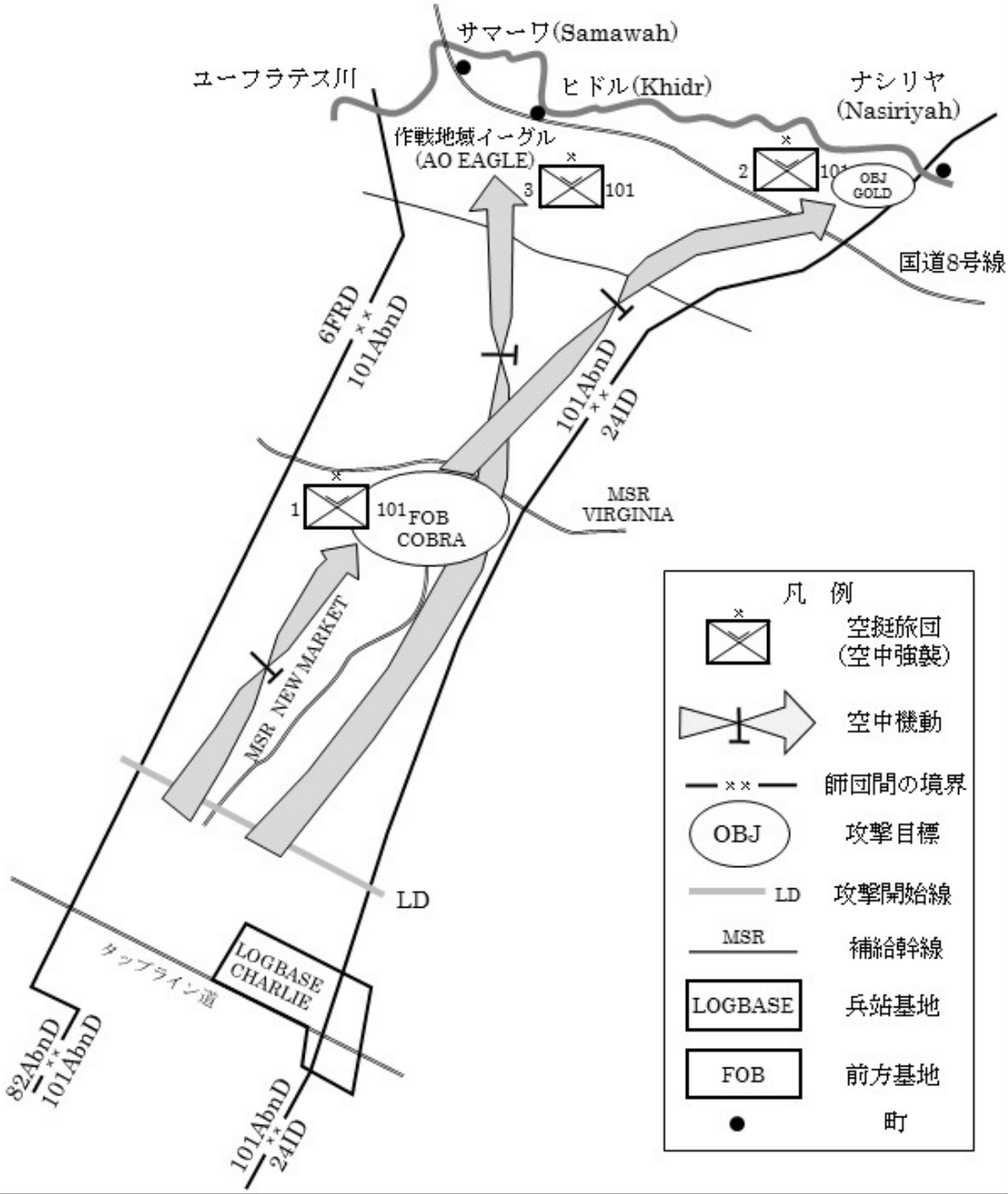
第 101 空挺師団（空中強襲）はヘリボン攻撃を実施した。第 101 空挺師団（空中強襲）の任務は次のとおりだった[555]。（図 34 を参照）

① 当初、第 101 空挺師団（空中強襲）は空中機動し、前方基地「コブラ」を開設する。
② 第 101 空挺師団（空中強襲）は、引き続き空中機動し、作戦地域「イーグル」においてイラク軍の後方連絡線〔国道 8 号線〕を遮断する。国道 8 号線沿いにおいて第 101 空挺師団（空中強襲）はクウェートに向かうイラク軍の増援部隊を妨害し、クウェート戦域のイラク軍を孤立させる。
② RGFC を攻撃する際、第 101 空挺師団（空中強襲）はバスラの北側の道路を封鎖し、イラク軍の増援と退却を阻止する。

---

551 *Ibid.*, pp. 216-217; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 310-312.
552 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 217; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 315-317.
553 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 217; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 316-317.
554 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 261.
555 *Ibid.*, p. 260; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 319.

図34　第101空挺師団（空中強襲）の攻撃計画




出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 320.

濃霧のため、第 101 空挺師団長ピーエイ少将は攻撃開始時刻を 2 月 24 日 0727 に遅らせた[556]。ヘリボン攻撃を実施する部隊は 4 個空挺大隊を基幹とする、第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の第 1 旅団だった。攻撃には 200 機以上のヘリコプターが参加した[557]。

2 月 24 日 0815、第 1 旅団の第一波攻撃部隊は、空軍機と攻撃ヘリコプターが周辺のイラク軍を制圧する中、前方基地「コブラ」の近くに降着した。2 月 24 日 1039、第 1 旅団は前方基地「コブラ」を確保した。前方基地「コブラ」周辺のイラク軍は攻撃を受けることを予想していなかった。第 1 旅団は 375 名のイラク軍捕虜を収容した[558]。

前方基地「コブラ」を確保したことにより、イラク領内におけるヘリコプターの行動可能範囲が拡大した。2 月 24 日 1330 以降、攻撃ヘリコプターにより国道 8 号線上のイラク軍を索敵し攻撃することが可能になった。また、ヘリコプターを使ってイラク領内のさらに奥深くに潜入した偵察部隊は、作戦地域「イーグル」一帯で情報活動を実施した。

一方、大型ヘリコプターと輸送車両は補給物資を前方基地「コブラ」に輸送した。2 月 24 日の終わりまでに第 101 空挺師団（空中強襲）が前方基地「コブラ」に集積した航空燃料は 20 万ガロンに及んだ[559]。

悪天候のため、ピーエイは 2 月 24 日のうちにユーフラテス川の線まで進出することを断念した。偵察の結果、ユーフラテス川付近の降着予定地域は降り続く雨のために泥濘化していることが明らかになった。潜入した偵察部隊は徹夜で降着可能な地域を探した。ピーエイは、2 月 25 日朝からユーフラテス川の線に向かって攻撃を再開することを決定した[560]。

シュワルツコフは、第 7 軍団だけではなく、第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）と第 3 装甲騎兵連隊の攻撃開始時刻を 2 月 24 日 1500 に繰り上げた。元々の陸上攻勢作戦の計画では、第 18 空挺軍団の右翼に配置された第 24 歩兵師団（機械化）と第 3 装甲騎兵連隊の攻撃開始時刻は、第 7 軍団と同様、2 月 25 日朝だった。この狙いは、第 7 軍団と連携した攻撃を実施することにあった[561]。

第 18 空挺軍団長ラック中将は攻撃開始時刻の繰り上げを歓迎した。ヨソックから攻撃開始時刻を繰り上げる可能性があることを聞いたラックは、第 24 歩兵師団（機械化）長マカフリー少将と第 3 装甲騎兵連隊長スタール（Doug Starr）大佐に確認した後、2 時間以内に攻撃を開始できるとヨソックに回答した。ラックが攻撃開始時刻の繰り上げを歓迎した理由は、第 101 空挺師団（空中強襲）が第 24 歩兵師団（機械化）とより早期に提携することが可能になるためだった。第 101 空挺師団（空中強襲）の対戦車戦闘能力は決して高くなかった。国道 8 号線上において第 101 空挺師団（空中強襲）がイラク軍機甲部隊の反撃に

556 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 323-324.
557 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 217-218.
558 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 325-329.
559 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 219-220; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 330-332.
560 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 220; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 331.
561 本章第 3 節(4)項ア(オ)を参照。

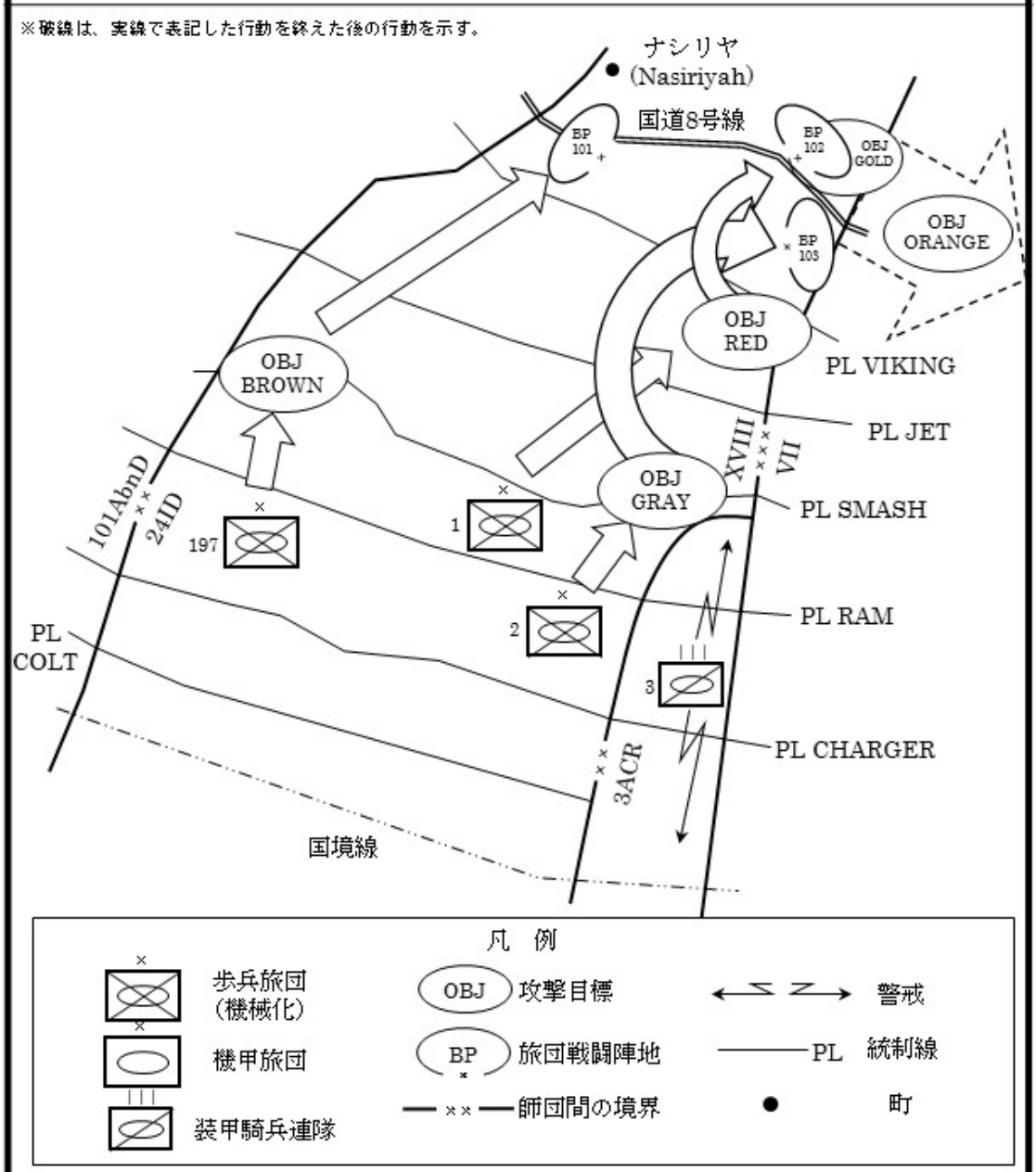
対抗するためには、第 24 歩兵師団（機械化）と提携することが必要かつ重要だった[562]。

一方、ラックは、第 18 空挺軍団に RGFC 攻撃への参加が命じられた場合、機甲戦闘力を保有する第 24 歩兵師団（機械化）の運用が特に重要になると判断していた。第 24 歩兵師団（機械化）の任務は次のとおりだった[563]。（図 35 を参照）

① 第 24 歩兵師団（機械化）は第 101 空挺師団（空中強襲）と提携して国道 8 号線沿いでイラク軍を阻止し、イラク軍の後方連絡線を遮断する。
② 命じられた場合、第 24 歩兵師団（機械化）は東に向かって攻撃して RGFC の北側の側面を攻撃する。

[562] Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 222, 253-254.
[563] *Ibid.*, p. 254; Toomey*, XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 334.

図35　第24歩兵師団（機械化）の攻撃計画




出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 335.

2 月 24 日 1500、第 24 歩兵師団（機械化）は隷下の 3 個旅団を並列し、約 300km 遠方のユーフラテス川に向かって攻撃を開始した。第 24 歩兵師団（機械化）は日没後も前進を続けた[564]。

2 月 24 日夜、第 24 歩兵師団（機械化）はイラク軍の抵抗を受けず順調に前進した。第 24 歩兵師団（機械化）長マカフリー少将は、2 月 25 日朝から統制線「スマッシュ」上の攻撃目標「グレイ」と「ブラウン」を攻撃することを決定した[565]。

第 3 装甲騎兵連隊の任務は次のとおりだった[566]。

① 第 3 装甲騎兵連隊は第 18 空挺軍団の東側の側面を掩護する。
② 同時に第 3 装甲騎兵連隊は第 7 軍団との連絡を維持する。

2 月 24 日 1500、第 3 装甲騎兵連隊は第 18 空挺軍団の最右翼となって攻撃を開始した。第 3 装甲騎兵連隊は、西側の第 24 歩兵師団（機械化）及び東側の第 7 軍団隷下の第 1 機甲師団との連絡を維持しながら、北に向かって攻撃した[567]。

（3） 2 月 25 日の陸上作戦

ア イラク軍の状況

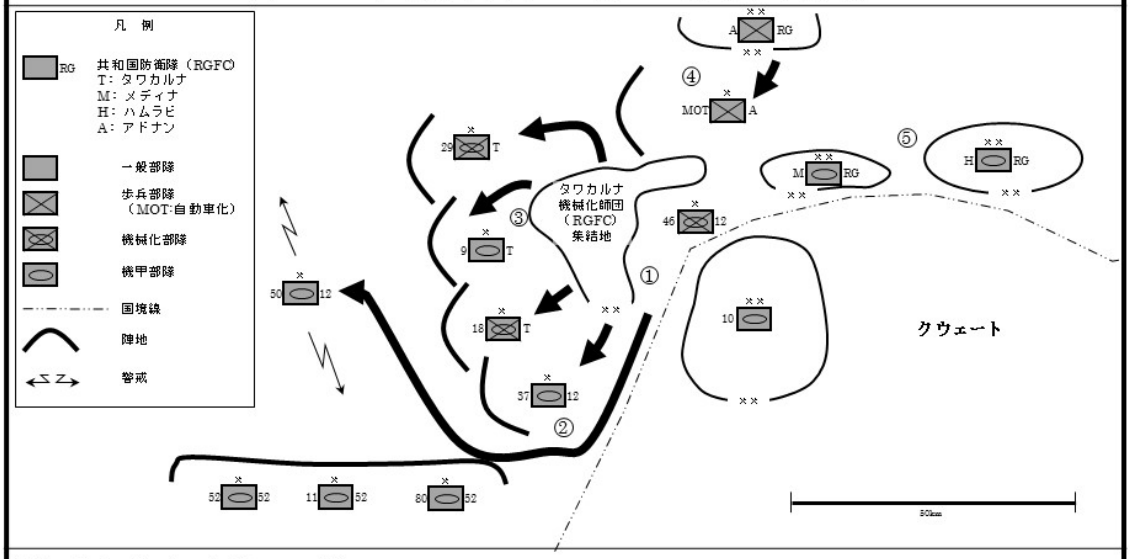
第 7 軍団が攻撃を一旦停止していた 2 月 24 日夜、タワカルナ機械化師団とジハード軍団が配備を変更した。RGFC 司令官アルラウィ中将は RGFC 隷下のタワカルナ機械化師団とイラク陸軍ジハード軍団隷下の第 12 機甲師団に対して、西方の砂漠からバスラに向かう攻撃を阻止するように命じた。タワカルナ機械化師団と第 12 機甲師団は、空爆を受けていたにも拘わらず、戦力を温存していた。また、ジハード軍団は第 10 及び 12 機甲師団の 2 個師団で編成されており、配備変更の以前ではワジ・アル・バティン沿いからの攻撃に対する逆襲を準備していた[568]。

タワカルナ機械化師団隷下の第 9 機甲旅団、第 18 機械化旅団及び第 29 機械化旅団並びに第 12 機甲師団隷下の第 37 機甲旅団は、西方の砂漠からの攻撃を阻止するための防御陣地を占領した。多国籍軍の接近を早期に警告するため、第 12 機甲師団隷下の第 50 機甲旅団は防御陣地の前方に、アドナン自動車化歩兵師団隷下の 1 個自動車化歩兵旅団は防御陣地の北側にそれぞれ展開した。RGFC 隷下のメディナ及びハムラビ機甲師団は後方に控えていた[569]。（図 36 を参照）

---

564 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 254-255; Gordon, *The Generals' War*, p. 381.
565 Swain, *"Lucky War"*, pp. 237-238.
566 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 260.
567 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 254; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 343.
568 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 233-235; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 242-244, 247-248, 323.
569 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 232-236; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 242-244, 247-248.

図36　イラク軍が実施した西方からの攻撃への対処（2月24日夜以降）




出典：　Scales Jr., *Certain Victory*, p. 234.

一方、クウェート領内に展開していたイラク陸軍第3軍団は、2月25日未明にMARCENTに対する逆襲を実施し、同時に新しい防御陣地の構築を開始した。逆襲の目的は、第1及び第2海兵師団を挟み撃ちにして撃破することだった。イラク陸軍第3軍団隷下の第7歩兵師団が第2海兵連隊を北側から攻撃し、第5機械化師団が第1海兵師団を東側から攻撃した[570]。

しかし、イラク軍の逆襲は失敗した。黒煙と霧に紛れて第1及び第2海兵師団の側面を衝いたイラク軍は果敢に戦った。戦後、DIAは、ブルガン（Burgan）油田一帯での第1海兵師団とイラク軍との戦いは湾岸戦争における特に重要な場面の一つだったと評価している[571]。

2月25日夜、フセイン大統領はクウェートを占領していたすべてのイラク軍の部隊に対して、バスラへの退却を命じた。同時にフセイン大統領は、サマーワからナシリヤを経由してバスラに至る線に新しい防衛線を構築することを命じた。クウェートから退却する際の渋滞を防止するため、イラク軍は退却の順番を整序した[572]。

2月25日、フセイン大統領はソ連のゴルバチョフ（Mikhail Gorbachev）大統領に書簡を送り、安保理決議を受諾して軍をクウェートから撤退すると伝えた。フセイン大統領はゴルバチョフ大統領に対して、安全保障理事会が停戦決議を採択するように努力してほしい

[570] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 178.
[571] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 273-276; Gordon, *The Generals' War*, p. 370.
[572] Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 227-230.

と要請した[573]。

2 月 25 日 2000 以降、中央軍はイラク軍がクウェートから退却していることを示す多くの情報を入手した。2 月 25 日 2200、JSTARS と A-6E がバスラに向かって前進しているイラク軍の車列を発見した。空軍は、クウェート市とバスラを結ぶ幹線道路上のイラク軍の車列に対して夜間爆撃を繰り返した。破壊されたイラク軍の車両が溢れた幹線道路は、後に「死のハイウェイ」と呼ばれた[574]。

### イ　MARCENT の攻撃

#### （ア）　第 1 海兵師団

2 月 25 日未明、夜明け後からの攻撃再開を準備していた MARCENT の正面で、イラク軍が逆襲を準備していることを示す兆候が現れた。鹵獲した文書、捕虜に対する尋問の結果及び通信を傍受した結果から、イラク軍が逆襲を実施すると判断した第 1 海兵師団長マイアット少将はイラク軍戦車部隊に対する警戒を強化した[575]。

2 月 25 日 0415、炎上する油井から上がる黒煙に隠れながら、イラク陸軍第 5 機械化師団が逆襲を開始した。ブルガン油田付近ではイラク軍は第 1 海兵師団の指揮所から 300m の地点まで侵入した。シェパード任務部隊とリッパー任務部隊は対戦車ミサイルや 25mm 機関砲で接近戦を戦った。また、攻撃ヘリコプターと航空機がイラク軍を攻撃した[576]。（図 37 を参照）

2 月 25 日昼頃、イラク軍の逆襲を撃退した第 1 海兵師団はクウェート国際空港に対する攻撃の準備を開始した。2 月 25 日夜、第 1 海兵師団は、2 月 26 日朝からクウェート国際空港に対する攻撃を開始する態勢を確立した。マイアットは、輸送ヘリコプターで前線に進出したエックスレイ任務部隊をパパベア任務部隊に配属した。また、ジャービル飛行場で抵抗を続けるイラク軍を掃討していたグリズリー任務部隊は、イラク軍砲兵から射撃を受けたにも拘わらず、2 月 25 日 2100 までにジャービル飛行場を確保した[577]。

---

573 松井『湾岸戦争と国際連合』130-131 頁。

574 Gordon, *The Generals' War*, p. 369; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 197. 「死のハイウェイ」と形容されたけれども、実際の状況は異なっていた。後に現地入りした記者は 1,400 両の破壊された車両を確認したが、確認した死者は 200 人乃至 300 人だった。空爆間、イラク軍兵士は道路を使用せず、砂漠を通って徒歩で退却していた。詳細は Marolda, *Shield and Sword*, pp. 297-298 を参照。

575 Gordon, *The Generals' War*, pp. 364-365.

576 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 178-185; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 275.

577 Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, pp. 91-94; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 185; B.L. Clumley, *The Marine Corps: Three Centuries of Glory* (London: Amber Books, 2002), pp. 238-239.

（イ）　第 2 海兵師団

2 月 25 日 0330 以降、第 2 海兵師団は二回実施されたイラク軍機甲部隊による逆襲を撃退した。第 2 海兵師団は北から順にタイガー旅団、第 6 海兵連隊、第 8 海兵連隊を並列し、ジャフラ一帯に向かって攻撃を開始する態勢を確立した[578]。

2 月 25 日 1315、第 2 海兵師団は攻撃を再開した。黒煙により視界が制限されていたにも拘わらず、第 2 海兵師団はイラク軍の抵抗を排除しながら攻撃した。2 月 25 日の日没までに第 2 海兵師団は、2 月 26 日朝からムトラ丘陵及びジャフラ一帯を攻撃するための態勢を確立した[579]。

（ウ）　13MEU（SOC）

2 月 25 日、13MEU（SOC）はクウェート沿岸部のシュアイバ港に対して、ヘリコプターを使った陽動を実施した。大規模なヘリボン攻撃が実施されているとイラク軍に誤認させるため、ヘリコプターには電波発射装置が搭載された。

クウェート沿岸部への上陸作戦を警戒していたイラク軍は応戦した。しかし、13MEU（SOC）が陽動を実施した時、クウェート沿岸部のイラク軍防御部隊は戦力を殆ど喪失していた[580]。

ウ　アラブ合同軍の攻撃

（ア）　JFC-E

2 月 25 日、JFC-E の攻撃は大きな抵抗を受けることなく順調に進んだ。JFC-E の正面で防御していたイラク軍は、MARCENT を阻止するため 2 月 24 日夜に配備を変更し、MARCENT の正面に移動していた[581]。（図 37 を参照）

イラク軍捕虜が増加するにしたがって JFC-E の攻撃速度は低下した。サウジアラビア国家警備隊第 2 自動車化歩兵旅団隷下の 1 個大隊は捕虜の輸送を実施した。オマール任務部隊とオスマン任務部隊は攻撃を継続した[582]。

---

[578] Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, p. 53; Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, p. 94.
[579] Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 185-186.
[580] Gordon, *The Generals' War*, pp. 368-369.
[581] Pollack, *Arabs at War*, p. 441.
[582] Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 276.

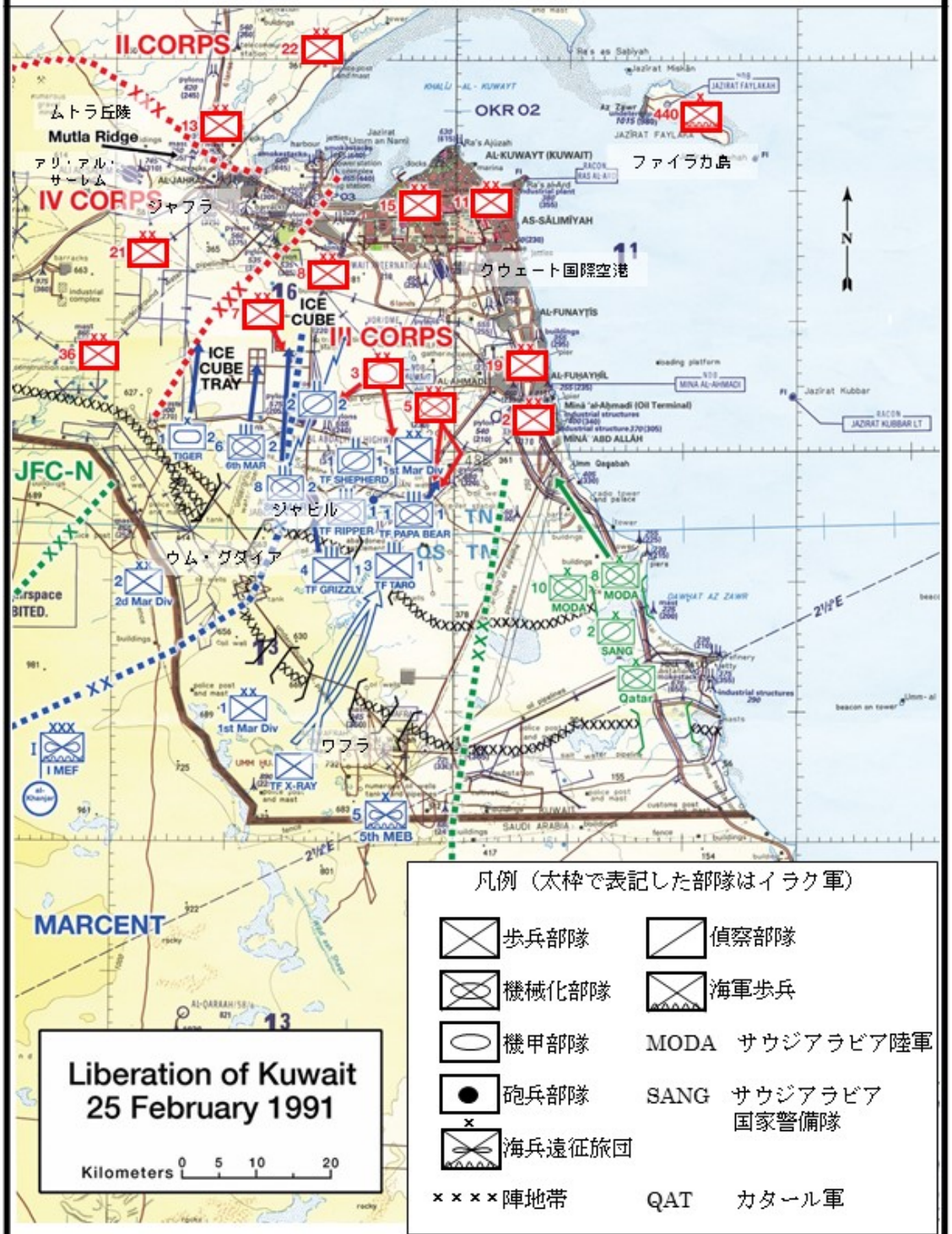
（イ） JFC-N

前日と同様、エジプト第 3 機械化師団と第 4 機甲師団の攻撃進展は遅かった。2 月 25 日朝、エジプト軍の両師団は昨夜から開始した障害帯の処理を続けていた。2 月 25 日の終わりの時点でエジプト軍の両師団は当初の攻撃目標としていたアブラクに向かって前進中だった。

この他、2 月 25 日、右翼を前進するムサンナ軍とサアド軍は攻撃目標を確保した。シリア第 9 機甲師団は JFC-N の最後尾を前進した[583]。

[583] *Ibid.*, p. 273; Pollack, *Arabs at War*, p. 442.

図37　クウェート正面での戦闘（2月25日）



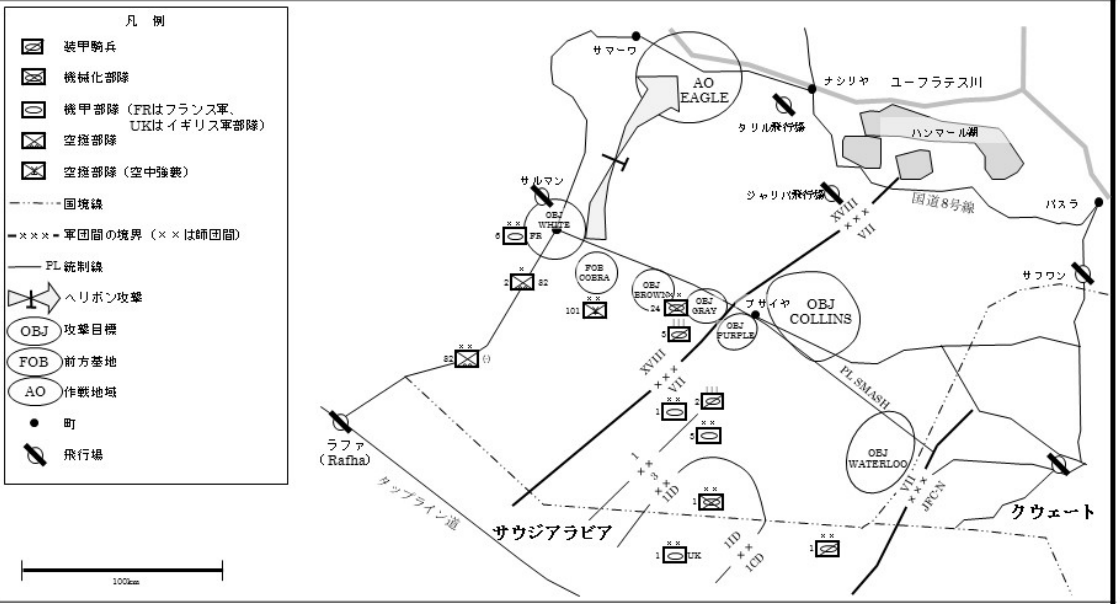

出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 179.

エ　ARCENT の攻撃

（ア）　第 7 軍団（第 2 装甲騎兵連隊、第 1 機甲師団、第 3 機甲師団、第 1 歩兵師団（機械化）、イギリス第 1 機甲師団）

2 月 25 日 0800、第 7 軍団が攻撃を一旦停止していたことを知ったシュワルツコフは激怒した。シュワルツコフは、第 7 軍団は徹夜で前進を続けていると思っていた。中央軍司令部の参謀は、作戦室で怒鳴り声をあげるシュワルツコフに対する報告を避けた[584]。（図 38 を参照）

図38　状況図（2月25日0800）




出典：　Scales Jr., *Certain Victory*, Figure 5-2; Schubert, *The Whirlwind War*, pp. 184-185.

シュワルツコフはヨソックに電話し、第 7 軍団の攻撃を急ぐように命じた[585]。第 7 軍団の攻撃は順調に進んでいると判断していたヨソックはシュワルツコフに対して、第 7 軍団の状況を説明した。しかし、シュワルツコフはヨソックの説明に耳を傾けず、フランクスの更迭を示唆した[586]。

ヨソックはフランクスに対して、シュワルツコフが急いで攻撃せよと命じたことを伝え、

584 Swain, *"Lucky War"*, pp. 238-239, 340-341. シュワルツコフは頻繁に激高して部下を怒鳴りつけた。シュワルツコフは「嵐のノーマン」と呼ばれた。パウエルは、シュワルツコフと付き合うことはピンを抜いた手榴弾を手にしているようなものだと評価した。詳細はパウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』157-159、167 頁を参照。

585 Bourque, *Jayhawk!*, p. 282; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』470-472 頁。

586 Atkinson, *Crusade*, pp. 405-406.

2 月 27 日の夕方までに RGFC を撃破するように命じた[587]。一方、ヨソックはフランクスに対して、第 7 軍団の任務を変更するという命令や今後の戦闘に関する指示を出さなかった。フランクスは、第 7 軍団の状況が正確に伝わっていないためにシュワルツコフは焦っているのであり、状況が伝わればシュワルツコフは落ち着くだろうと判断した[588]。

2 月 25 日朝、第 7 軍団は攻撃を再開した。前日と同様、フランクスは RGFC との戦いを見据えながら攻撃を続けた[589]。

2 月 25 日 0600、第 7 軍団隷下の第 2 装甲騎兵連隊は、RGFC と早期に接触することを目指して攻撃を再開した。2 月 25 日 0841、第 2 装甲騎兵連隊は、多国籍軍による西方の砂漠からの攻撃に備えるために配備を変更したイラク陸軍第 50 機甲旅団と接触した。第 50 機甲旅団は警戒陣地に部隊を配置している最中だった。第 2 装甲騎兵連隊は第 50 機甲旅団を攻撃した。航空機と攻撃ヘリコプターが第 2 装甲騎兵連隊の攻撃に協力した[590]。

2 月 25 日 0630、第 2 装甲騎兵連隊の後に続いて第 1 機甲師団が攻撃目標「パープル（Purple）」に向かって攻撃を再開した。攻撃目標「パープル」は、イラク軍の兵站基地となっていたブサイヤ（Busayyah）の近くだった。攻撃前進間、第 1 機甲師団はイラク軍の 1 個歩兵旅団と遭遇した。第 1 機甲師団長グリフィス（Ronald H. Griffith）少将は隷下の第 3 旅団でイラク軍歩兵旅団を攻撃し、第 1 機甲師団主力を引き続き攻撃目標「パープル」に向かって前進させた。第 3 旅団の攻撃を受けたイラク軍歩兵旅団は降伏した[591]。

2 月 25 日 1715、第 1 機甲師団は攻撃目標「パープル」の南側に到着した。攻撃ヘリコプターと砲兵部隊がブサイヤ一帯のイラク軍を攻撃した。夜間攻撃に伴う混乱を懸念したグリフィスはフランクスに対して、攻撃目標「パープル」に対する攻撃の開始時刻を 2 月 26 日朝に変更することが望ましいと進言した。フランクスは、第 1 機甲師団が 2 月 26 日朝から攻撃目標「パープル」に対する攻撃を開始することを認め、同時に 2 月 26 日 1000 までに攻撃目標「コリンズ」の北側まで進出するように命じた[592]。統制線「スマッシュ」の東側に位置する攻撃目標「コリンズ」は、フランクスが RGFC に対する攻撃要領を決定する結節点として位置づけていた重要地点だった[593]。

一方、第 1 歩兵師団（機械化）は、2 月 25 日 1100、統制線「ニュージャージー」を確保し、イギリス第 1 機甲師団の障害帯通過を掩護する態勢を確立した。イギリス第 1 機甲師団は 2 月 25 日 1200 から障害帯の通過を開始した。

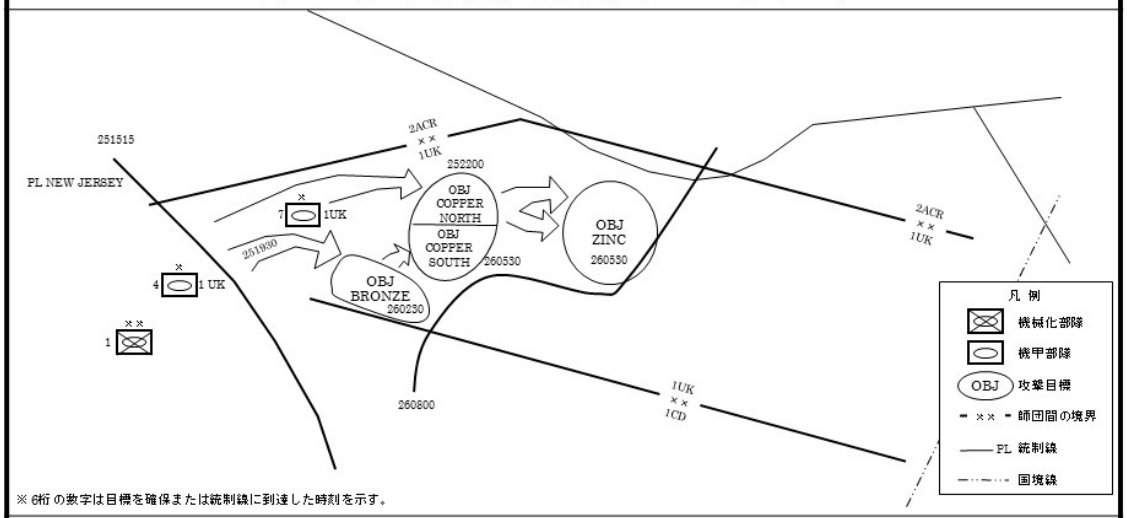
2 月 25 日 1515、イギリス第 1 機甲師団隷下の第 7 機甲旅団が統制線「ニュージャージー」を通過し、攻撃目標「カッパー（Copper）」に向かって攻撃を開始した。2 月 25 日 1930、

---

587 Gordon, *The Generals' War*, p. 386.
588 Swain, *"Lucky War"*, pp. 238-239, 248; クランシー『熱砂の進軍（下）』88-90 頁。
589 クランシー『熱砂の進軍（下）』89-90 頁。
590 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 252-254; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 237-238.
591 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 240; Swain, *"Lucky War"*, p. 245.
592 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 241-243; Bourque, *Jayhawk!*, p. 271; Gordon, *The Generals' War*, pp. 385-386.
593 クランシー『熱砂の進軍（下）』19-20 頁。

同師団隷下の第 4 機甲旅団は統制線「ニュージャージー」を通過し、攻撃目標「ブロンズ（Bronze）」に向かって攻撃を開始した。夜間も攻撃を継続したイギリス第 1 機甲師団はイラク陸軍第 48 歩兵師団及び第 52 機甲師団を撃破し、2 月 26 日夜明けまでに攻撃目標「カッパー」、「ブロンズ」及び「ジンク（Zinc）」を確保した[594]。（図 39 を参照）

図39　イギリス第1機甲師団の攻撃（2月25日1515～2月26日0800）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 246.

フランクスは戦力不足に悩んでいた。フランクスは、RGFC を殲滅するためには 3 個師団の戦力が必要だと判断していた。しかし、このまま攻撃を続けた場合、RGFC を攻撃する第 7 軍団の戦力は第 1 及び 3 機甲師団と第 2 装甲騎兵連隊だった。2 月 25 日の午後になってもシュワルツコフは第 1 騎兵師団を中央軍の予備として保持していた。

最終的にシュワルツコフが第 1 騎兵師団を手放して第 7 軍団に配属したのは翌日 2 月 26 日の 0920 だった。シュワルツコフは JFC-N、中でも特にエジプト軍が危急の事態に陥った時に備えるため第 1 騎兵師団を手放さなかった[595]。

一方、攻撃開始時刻を繰り上げる前の元々の計画においてヨソックは、第 7 軍団が RGFC と接触する時期を 2 月 26 日 1500 頃と予想しており、2 月 25 日 2100 頃までには第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属する必要があると判断していた。同様、中央軍副司令官ウォラー中将も 2 月 25 日 1600 までに第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属する必要があると判断していた。ヨソックとウォラーは、ワジ・アル・バティンの正面に展開中の第 1 騎兵師団が第 7 軍団のもとに移動し、その後、RGFC に対する攻撃の準備を完了するまでの所要時間を計算し、第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属する時期を算出していた[596]。

2 月 25 日夜、攻撃開始時刻の繰り上げにより第 7 軍団が RGFC と接触する時期が早まる

[594] Swain, *"Lucky War"*, pp. 246-247; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 262-264, 274-276.
[595] Atkinson, *Crusade*, p. 440.
[596] Swain, *"Lucky War"*, p. 232.

と判断したヨソックはシュワルツコフに対して、第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属することを要望した。しかし、シュワルツコフはこの要望を認めなかった[597]。この時、ヨソックは、機甲部隊を移動させる際に考慮しなければならない時間や距離といった要素をシュワルツコフは十分に理解していないと評価した[598]。また、『幸運な戦争』の著者スウェインは、リヤドの中央軍司令部から一歩も動かず、前線の状況を自分自身で確認することを怠った結果、シュワルツコフは悪天候と砂嵐のために隷下部隊の前進や攻撃に遅れが出ること及びイラク軍が抵抗を続けていることを理解していなかったと厳しく批判している[599]。

フランクスは、RGFC 攻撃に投入する戦力を増やすため、第 1 歩兵師団（機械化）の運用を変更した。2 月 25 日昼、フランクスは第 1 歩兵師団（機械化）長レーム少将に対して、第 1 歩兵師団（機械化）を RGFC との戦いに投入することを決心したと伝えた。第 1 歩兵師団（機械化）の新しい運用構想は次のとおりだった[600]。

① イギリス第 1 機甲師団の障害帯通過を掩護した後、第 1 歩兵師団（機械化）は北に向かって前進する。2 月 26 日午後、第 1 歩兵師団（機械化）は第 2 装甲騎兵連隊を追い越して RGFC に対する攻撃を準備する。
② 第 1 歩兵師団（機械化）隷下の 1 個大隊は現在地に残り、開設した障害帯通路を確保する。

フランクスは第 1 歩兵師団（機械化）の戦力推進を急いだ。フランクスは、開設した障害帯通路の半数を第 1 歩兵師団（機械化）に割り当てた。憲兵部隊は交通統制を行った。イギリス第 1 機甲師団は、第 1 歩兵師団（機械化）の戦力推進に協力した。イギリス第 1 機甲師団長スミス少将は、隷下の戦闘部隊に障害帯通路を通過させる一方で、隷下の兵站部隊の障害帯通過を後回しとして通路の渋滞防止に協力した[601]。

しかしながら、第 1 歩兵師団（機械化）、イギリス第 1 機甲師団及び砲兵部隊の車両により障害帯の通路は渋滞した。イギリス第 1 機甲師団の最後尾が障害帯を通過したのは 2 月 26 日 0200 だった[602]。

フランクスは RGFC の動向を注視していた。2 月 25 日 1530、フランクスは最前線の第 2 装甲騎兵連隊を訪れて最新の敵情を自分自身で確認した。フランクスと第 2 装甲騎兵連隊長ホルダー大佐は、RGFC が統制線「スマッシュ」の東約 20km の地域に展開していると判断した。フランクスはホルダーに対して、本格的な戦闘を避けながら RGFC との接触を維持するように命じた[603]。

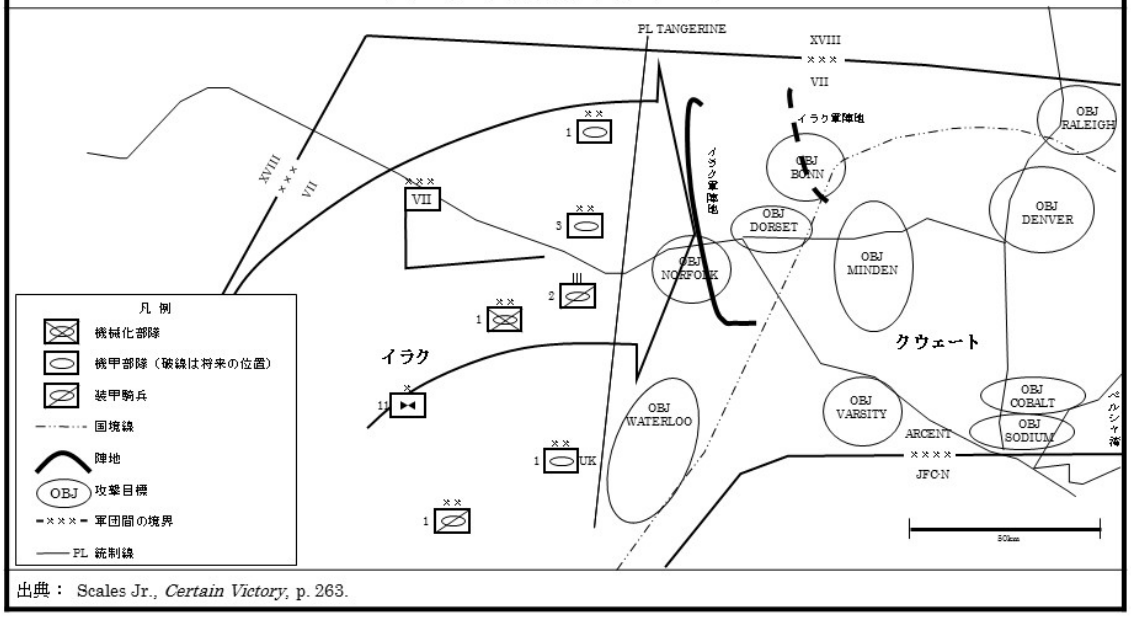
---

597 Swain, *"Lucky War"*, p. 248.
598 クランシー『熱砂の進軍（下）』178 頁。
599 Swain, *"Lucky War"*, pp. 248-250.
600 クランシー『熱砂の進軍（下）』106-108 頁。
601 Gordon, *The Generals' War*, p. 383; Pearce, *The Shield and the Sabre*, pp. 98-99.
602 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 272-273.
603 クランシー『熱砂の進軍（下）』113-115、118 頁。

2 月 25 日 2100 過ぎ、RGFC が防御する可能性が高いと判断したフランクスは、第 7 号計画（FRAGPLAN7）の実行を命じた。しかし、悪天候と通信器材の不調のため、命令の伝達が遅れた。第 2 装甲騎兵連隊が命令を受領したのは 2 月 26 日 0522 だった[604]。命令の内容は次のとおりだった[605]。（図 40 を参照）

① 第 7 軍団は北から順に第 1 機甲師団、第 3 機甲師団、第 2 装甲騎兵連隊、イギリス第 1 機甲師団を並列し、統制線「タンジェリン（Tangerine）」を攻撃開始線として RGFC を攻撃する。
② イギリス第 1 機甲師団は攻撃目標「ワーテルロー（Warerloo）」を確保し、RGFC とその南側のイラク軍を分断し、かつ南側から RGFC を包囲するための経路の入り口を確保する。
③ 第 2 装甲騎兵連隊は攻撃目標「ノーフォーク（Norfolk）」で防御中のタワカルナ機械化師団及び第 12 機甲師団と接触する。
④ 敵情を解明した後、第 1 歩兵師団（機械化）が第 2 装甲騎兵連隊を追い越して攻撃し、攻撃目標「ノーフォーク」で防御中のタワカルナ機械化師団及び第 12 機甲師団を撃破する。第 3 機甲師団は、攻撃目標「ドーセット（Dorset）」で防御中のタワカルナ機械化師団を撃破する。第 1 機甲師団は、攻撃目標「ボン（Bonn）」の周辺でメディナ機甲師団を発見して撃破する。

図40　第7軍団状況図（2月26日1600）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 263.

604 Gordon, *The Generals' War*, p. 387.
605 Bourque, *Jayhawk!*, p. 280.

2 月 25 日 2300 頃、フランクスはヨソックに対して、第 7 軍団の現状と RGFC を攻撃する要領を報告した。ヨソックは RGFC に対する攻撃の要領を承認した[606]。回顧録においてフランクスは、第 7 軍団の進撃速度をシュワルツコフが問題視しているのではないかとヨソックに質問した際、ヨソックが第 7 軍団の攻撃にシュワルツコフは満足していると回答したと主張している[607]。しかし、シュワルツコフは、2 月 25 日までの第 7 軍団の攻撃進展は遅すぎると感じていた[608]。

一方、シュワルツコフは第 7 軍団と第 18 空挺軍団の攻撃を連携させることに注意を払った。第 7 軍団の攻撃が遅れていると判断したシュワルツコフは、順調に攻撃を進めている第 18 空挺軍団隷下の第 24 歩兵師団（機械化）が単独で RGFC と接触してしまうことを避けるため、第 24 歩兵師団（機械化）の前進に制限を加えた。しかし、第 7 軍団と第 18 空挺軍団の連携要領は、本来、ARCENT 司令官ヨソック中将が決定する事項だった。

（イ） 第 18 空挺軍団（第 3 装甲騎兵連隊、第 82 空挺師団、第 101 空挺師団（空中強襲）、第 24 歩兵師団（機械化）、フランス第 6 軽機甲師団）

2 月 25 日朝、悪天候の中、第 18 空挺軍団がイラク軍の後方連絡線を遮断するためにユーフラテス川に向かって攻撃を再開した。第 18 空挺軍団の右翼では第 24 歩兵師団（機械化）が攻撃を再開した。

2 月 25 日 0300、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 197 旅団がイラク軍の補給基地となっていた攻撃目標「ブラウン」に対する攻撃を開始した。2 月 25 日 1004、第 197 旅団は攻撃目標「ブラウン」を確保した。（図 41 を参照）

2 月 25 日 1200 頃、第 7 軍団の攻撃が遅れていると判断していたシュワルツコフは、第 7 軍団が第 24 歩兵師団（機械化）に追いつくまでの間、第 24 歩兵師団（機械化）がユーフラテス川の沿岸部に向かって前進することを禁止した。統制線「ヴァイキング」は第 24 歩兵師団（機械化）の進出限界線となり、同師団はこの統制線以遠に戦力を推進することを禁止された。シュワルツコフは、第 24 歩兵師団（機械化）が単独で RGFC に向かって突き進んだ場合、RGFC の逆襲により各個撃破されてしまうと判断した[609]。

2 月 25 日 1300、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 2 旅団が攻撃目標「グレイ」に対する攻撃を開始した。2 月 25 日 1501、第 2 旅団は攻撃目標「グレイ」を確保した[610]。

2 月 25 日 1400、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 1 旅団が攻撃目標「レッド」に向かって攻撃を開始した。第 1 旅団は、攻撃目標「グレイ」を攻撃していた第 2 旅団を西側から迂回した。2 月 25 日 1800、攻撃目標「レッド」を確保した第 1 旅団は、東方からの攻撃に

606 *Ibid.*, p. 282.
607 クランシー『熱砂の進軍（下）』137-139 頁。
608 Bourque, *Jayhawk!*, p. 282.
609 Swain, *"Lucky War"*, pp. 239, 250; Atkinson, *Crusade*, pp. 426-427; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』472、477 頁。第 24 歩兵師団（機械化）の任務は本章第 4 節(2)項カ(イ)を参照。
610 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 353-354.

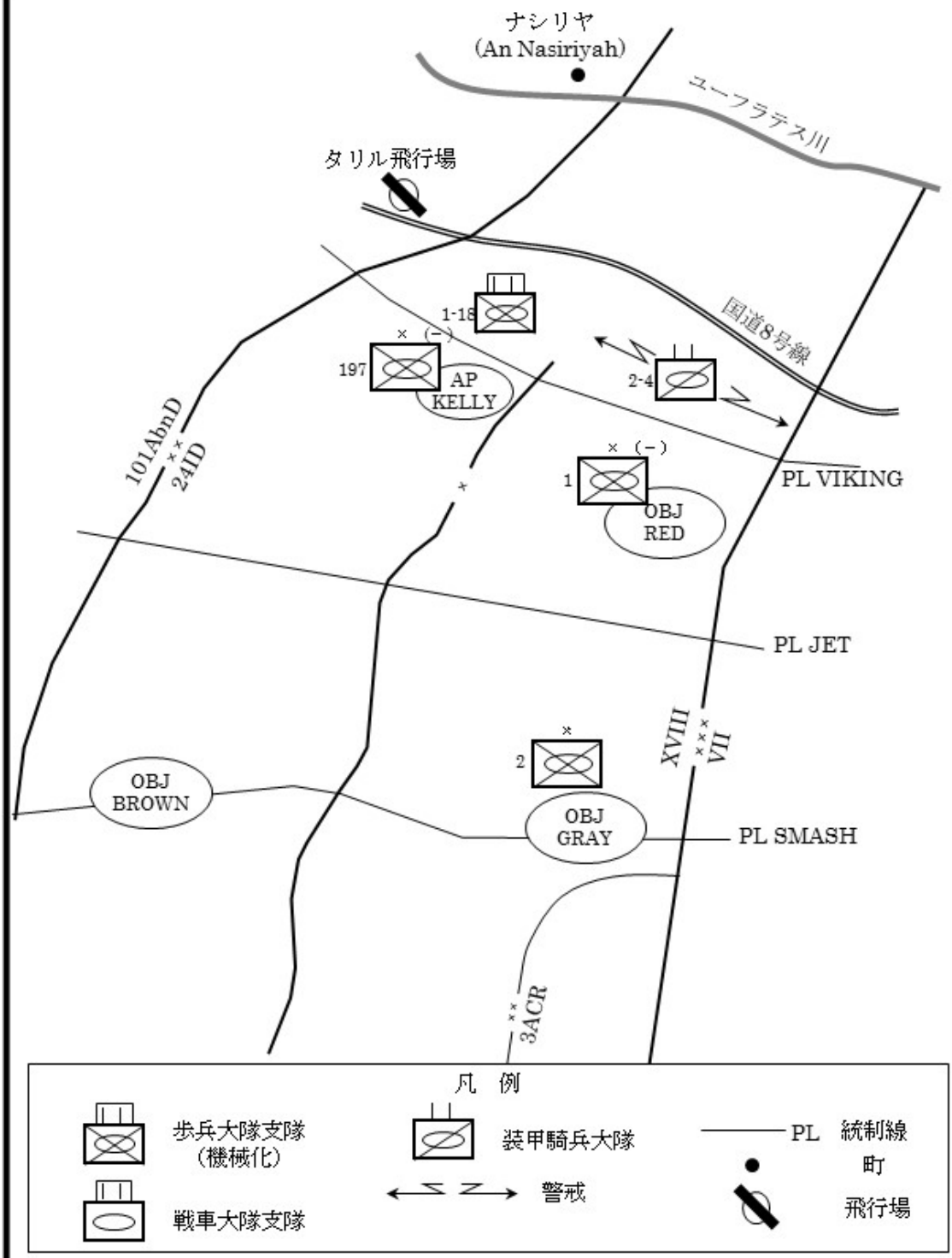
備えるため防御の態勢に移行した[611]。

2 月 25 日 1600、第 197 旅団は攻撃位置（Attack Position）「ケリー（Kelly）」に向かって攻撃を開始した。しかし、ユーフラテス川に近づけば近づくほど、第 197 旅団の前進速度は低下した。ユーフラテス川の周辺には涸れ谷（ワジ）や湿地帯が多く、重車両の通行は困難だった。あわせて砂嵐が視界を遮った。第 197 旅団のうち 2 月 25 日の終わりまでに攻撃位置「ケリー」に到着したのは 1 個大隊のみだった[612]。

2 月 25 日 2130 までに第 24 歩兵師団（機械化）は、イラク軍の抵抗を殆ど受けずにユーフラテス川までの 300km の道程の四分の三を前進した。しかし、次第に補給が困難になっていった。第 24 歩兵師団（機械化）隷下の兵站部隊は一日あたり 40 万ガロンの燃料と 2,400 トンの弾薬を輸送した。しかし、2 月 25 日の終わりの時点で、第 24 歩兵師団（機械化）が装備する戦車には燃料が殆ど残っていなかった。第 24 歩兵師団（機械化）に対する補給の問題は、フランス第 6 軽機甲師団がサルマン一帯（攻撃目標「ホワイト」）を確保し、補給幹線「テキサス」と「バージニア」が開設された後に緩和した[613]。

611 *Ibid.*, pp. 343-355.
612 *Ibid.*, pp. 352-353, 356.
613 *Ibid.*, pp. 356-357; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 255; Gordon, *The Generals' War*, pp. 401-402.

図41　第24歩兵師団（機械化）の攻撃（2月25日）




出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 355.

第 101 空挺師団（空中強襲）は、2 月 24 日に引き続きヘリボン攻撃を実施した。天候が回復した 2 月 25 日 1500、第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の第 3 旅団がサウジアラビア領内から約 250km 遠方の作戦地域「イーグル」に向かって空中機動を開始した。2 月 25 日 1610、第一派攻撃部隊の 1 個大隊がユーフラテス川沿いの地域に降着した。降着地域は泥濘化していたが、第 3 旅団は作戦地域「イーグル」内に進出した。作戦地域「イーグル」は、バスラとバグダッドを結ぶ道路と鉄道が集約する交通の要衝だった[614]。（図 42 を参照）

2 月 25 日 2200、第 3 旅団隷下の 3 個大隊が作戦地域「イーグル」内の要点を確保した。しかし、悪天候と道路の泥濘化ために降着地域「サンド（Sand）」に降着した対戦車火器を装備した部隊の作戦地域「イーグル」への進出は遅れていた。また、攻撃ヘリコプターや空軍機による攻撃は不可能だった[615]。第 101 空挺師団（空中強襲）は国道 8 号線を遮断したけれども、イラク軍機甲部隊の反撃を撃退することは殆ど不可能だった。

2 月 25 日未明、フランス第 6 軽機甲師団が攻撃を再開した。フランス第 6 軽機甲師団の正面のイラク軍はすでに退却していた。残っていたイラク軍は降伏した。2 月 25 日 1015、フランス第 6 軽機甲師団は攻撃目標「ロシャンボー」を確保した[616]。

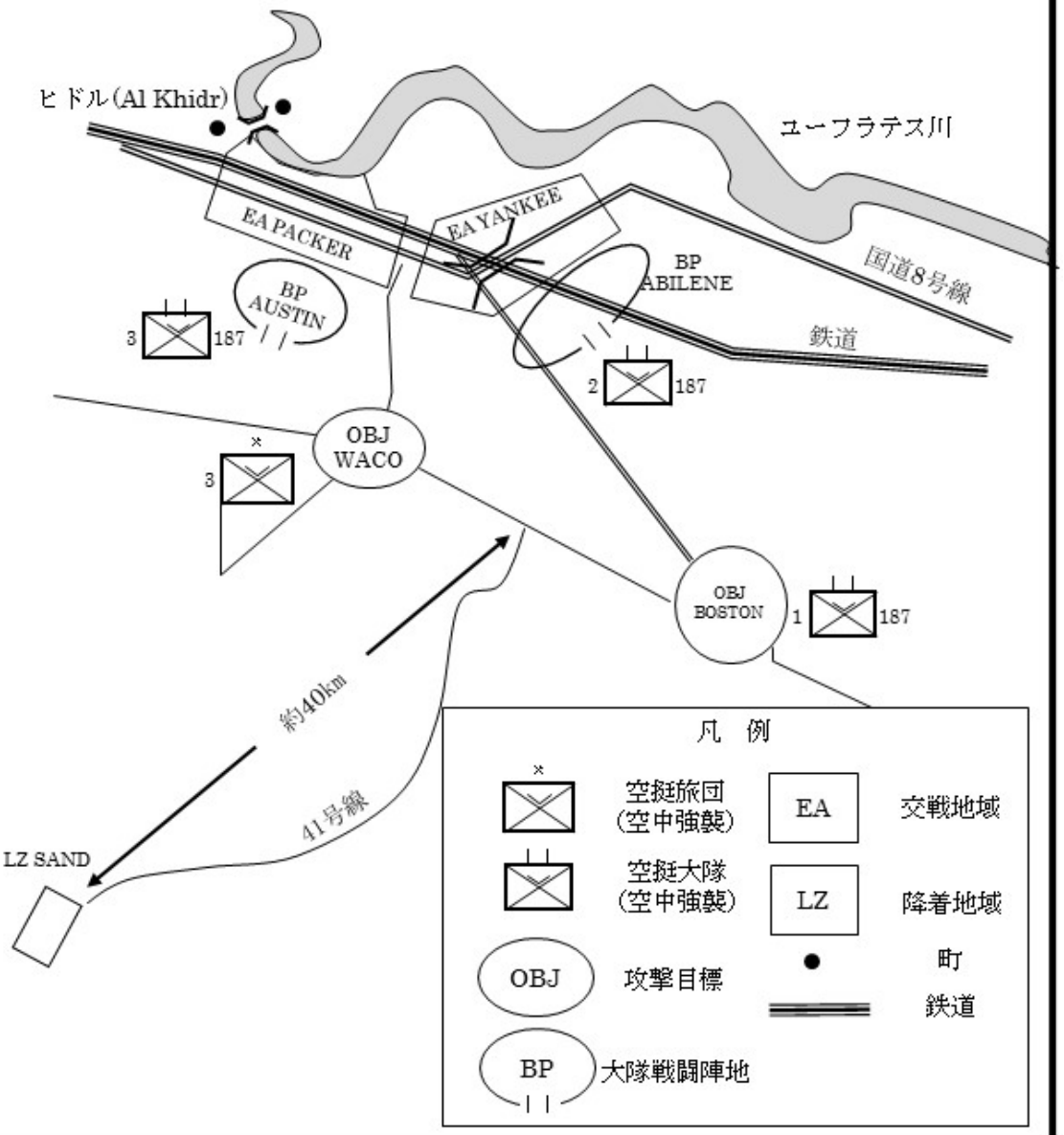
2 月 25 日 1815、フランス第 6 軽機甲師団はサルマン一帯（攻撃目標「ホワイト」）を確保し、補給幹線「テキサス」を開設した。その後、フランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の西側の側面で警戒した[617]。

この他、第 3 装甲騎兵連隊は、前日に引き続き第 7 軍団との連絡を維持した。また、攻撃が予想以上に進んだため、第 18 空挺軍団長ラック中将は、サルマンに兵站基地「オスカー」を開設する計画を見直し、さらに東側の地域に兵站基地「ロメオ」を一挙に開設することを決定した[618]。

---

614 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 357-360; Atkinson, *Crusade*, pp. 407-411.
615 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 360-361; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 220-221; Swain, *"Lucky War"*, pp. 241-243.
616 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 345-350.
617 *Ibid.*, pp. 351-352, 362.
618 *Ibid.*, pp. 362-363; Swain, *"Lucky War"*, p. 243. 第 18 空挺軍団を支援する兵站基地は本章第 3 節(4)項ア(オ)を参照。

図42　作戦地域「イーグル（EAGLE）」




出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 361.

（4）　2月26日の陸上作戦

ア　イラク軍の状況

クウェートを占領していたイラク軍は退却を続けていた。2月26日0135、イラク国営ラ

ジオがクウェートからの退却命令を放送した[619]。

イラク軍の退却は混乱した。空爆によりイラク軍の通信組織は破壊されていた。イラク軍に残っていた命令伝達の手段はラジオだけだった。しかし、ラジオ放送は電波妨害を受けた。放送を聞いた将校の中には、退却命令を多国籍軍による欺騙と見做す者が少なくなかった。軍団長級の指揮官でさえ退却命令に驚愕した。また、イラク陸軍と RGFC の指揮系統が別々だったことが整然と退却することを一層困難にした[620]。

イ　MARCENT の攻撃

（ア）　MARCENT

MARCENT 司令官ブーマー中将は夜間攻撃能力を持つ航空機を可能な限り出撃させて、クウェートから退却するイラク軍を攻撃した。CENTAF と 3MAW はクウェート市とサフワン（Safwan）を結ぶ道路上で空爆を反復し、多数のイラク軍車両を破壊した[621]。

（イ）　第 1 海兵師団

2 月 26 日 0654、第 1 海兵師団隷下のパパベア任務部隊、リッパー任務部隊及びシェパード任務部隊がクウェート国際空港に向かって攻撃を開始した。2 月 26 日 1300、3 個の任務部隊はクウェート国際空港の南側に進出し、同空港を包囲した[622]。（図 43 を参照）

2 月 26 日 2230、第 1 海兵師団長マイアット少将はシェパード任務部隊に対して、クウェート国際空港の確保を命じた。ペルシャ湾上の戦艦はクウェート国際空港に立て籠もるイラク軍に対して艦砲射撃を実施した。しかし、イラク軍の抵抗、黒煙及び捕虜対応のためにシェパード任務部隊の攻撃は難航した。マイアットは、2 月 27 日朝からクウェート国際空港に対する攻撃を再開することを決定した[623]。

2 月 26 日 1500、グリズリー任務部隊がジャービル飛行場を確保した。グリズリー任務部隊はジャービル飛行場内に残っていたイラク軍を掃討した[624]。

（ウ）　第 2 海兵師団

2 月 26 日 1200、第 2 海兵師団は、クウェートから退却するイラク軍の退路を遮断するた

619 Swain, *"Lucky War"*, p. 250.
620 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 230-233.
621 Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, p. 97.
622 Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, pp. 103-108.
623 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 196; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 211.
624 Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, p. 118.

め、ムトラ丘陵及びジャフラに対する攻撃を開始した。第 2 海兵師団は東から順に第 8 海兵連隊、第 6 海兵連隊、タイガー旅団を並列して攻撃した[625]。

2 月 26 日夜、第 2 海兵師団はムトラ丘陵からジャフラまでの地域を確保した。交通の要衝だったムトラ丘陵を確保したタイガー旅団は、クウェートから退却する多くの車両を破壊した。同時に第 2 海兵師団は、アラブ合同軍によるクウェート市解放に協力するための準備を開始した[626]。

（エ） 4MEB

イラク軍の退却を察知した NAVCENT は、ペルシャ湾沿岸に展開したイラク軍の退却を妨害するため、航空機や攻撃ヘリコプターで攻撃した。あわせて 4MEB はブビヤン島及びファイラカ島に対する陽動を実施した[627]。

ウ アラブ合同軍の攻撃

（ア） JFC-E

2 月 26 日、JFC-E の攻撃は大きな抵抗を受けることなく進んだ。カタール機械化大隊とオスマン任務部隊はクウェート市郊外の南側を確保した。JFC-E は、2 月 27 日に予定するクウェート市解放のための攻撃を準備した[628]。（図 43 を参照）

（イ） JFC-N

2 月 26 日、JFC-N の攻撃は順調に進んだ。2 月 26 日夕方までにエジプト軍は攻撃目標としていたアブラク一帯を確保した。シリア第 9 機甲師団はクウェートとサウジアラビアの国境付近で後方連絡線を確保した[629]。

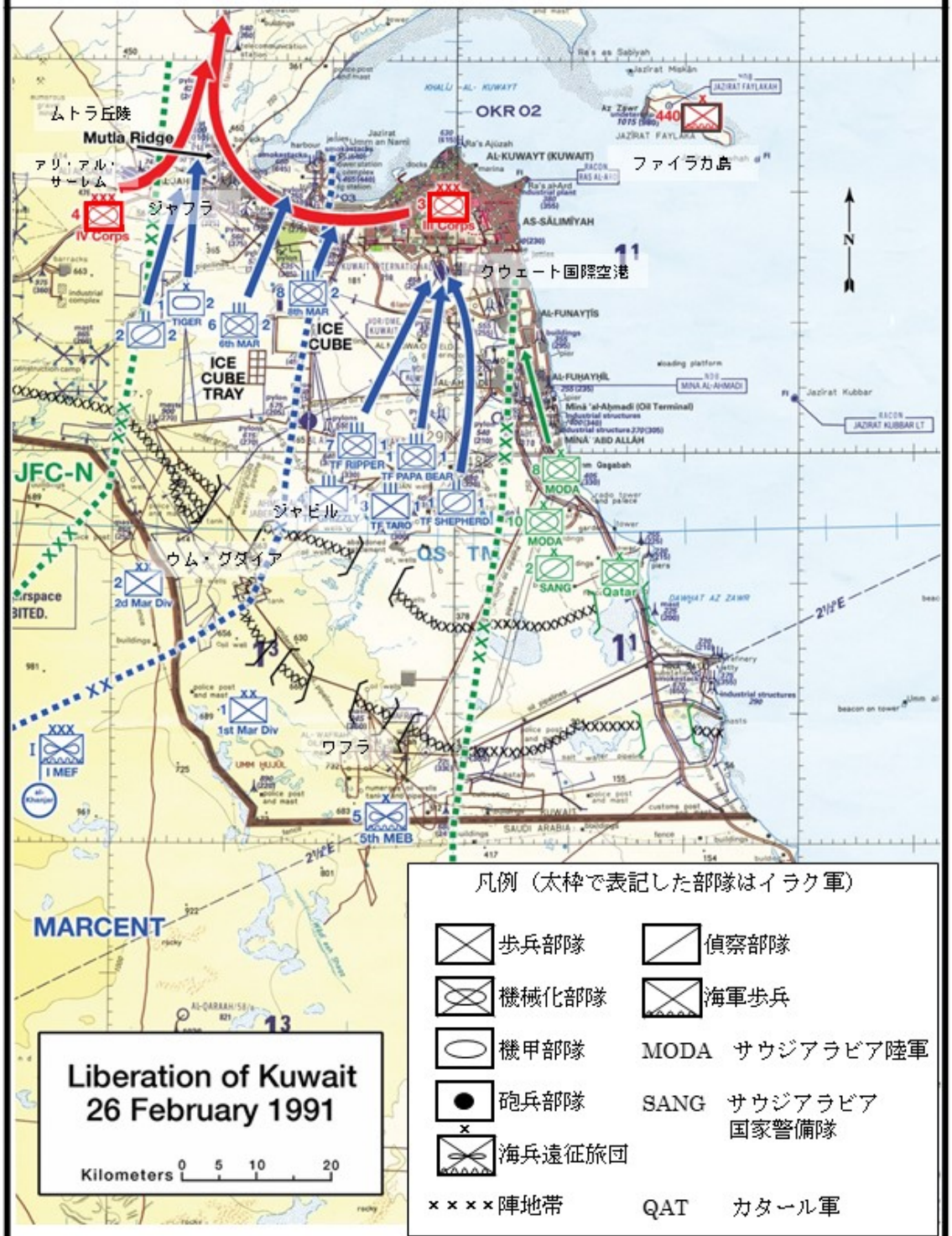
JFC-N は、JFC-E と同様、2 月 27 日に予定するクウェート解放のための攻撃を準備した。エジプト軍は 60km 東のアリ・アス・サーレム（Ali As-Salim）空港に移動し、クウェート市に対する攻撃を準備した[630]。

エジプト軍の攻撃が順調に進んだことを受けて、シュワルツコフは第 1 騎兵師団を手放した。2 月 26 日 0920、シュワルツコフは第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属した[631]。

---

625 Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 63-64.
626 *Ibid.*, pp. 64-66; Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 195-197.
627 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 220.
628 *Ibid.*, p. 283.
629 *Ibid.*, p. 282.
630 *Ibid.*
631 Atkinson, *Crusade*, p. 440.

図43　クウェート正面での戦闘（2月26日）




出典：　Westermeyer, *Liberating Kuwait*, p. 190.

エ　ARCENT の攻撃

（ア）　第 7 軍団（第 2 装甲騎兵連隊、第 1 機甲師団、第 3 機甲師団、第 1 歩兵師団（機械化）、第 1 騎兵師団、イギリス第 1 機甲師団）

イラク軍がクウェートから退却していることを知ったブッシュ大統領は、強硬な態度を崩さなかった。2 月 26 日 0630（アメリカ東部標準時 2 月 25 日 2230）、ブッシュ大統領は、フセイン大統領がクウェートに対する要求の撤回、賠償金の支払い及び人質の解放を求めた国連決議を受け入れるまで武力行使を続けるという声明を発表した[632]。

一方、シュワルツコフは、RGFC を撃破しないまま戦争が終わってしまうのではないかと懸念していた。シュワルツコフは、25 日夜から 26 日未明にかけてパウエルと電話で協議を繰り返した。パウエルはシュワルツコフに対して、ほどなく停戦になる可能性があると伝えた[633]。

シュワルツコフは RGFC に対する攻撃を急いだ。2 月 26 日 0840、シュワルツコフはヨソックに対して、第 7 軍団の攻撃を急ぐように命じた。同時にシュワルツコフは第 24 歩兵師団（機械化）の進出限界線（統制線「ヴァイキング」）を解除し、同師団がユーフラテス川の沿岸部に進出することを許可した[634]。この他、2 月 26 日 1354、シュワルツコフは JFC-N と第 7 軍団（ARCENT）の間の境界線を南に移動し、第 7 軍団の行動地帯を拡大した[635]。

2 月 26 日朝にヨソックに対して電話で状況を報告した時、フランクスは、シュワルツコフが第 7 軍団の攻撃速度について激怒し、RGFC 攻撃を急ぐことを一層強く要求していることを知った。フランクスは、シュワルツコフや中央軍司令部が戦場の状況を正しく理解しているのかを疑った。回顧録においてフランクスは、戦後に明らかになった中央軍司令部内の様子を記録した資料をもとに、それまで慎重な攻撃を第 7 軍団に要求していたシュワルツコフがパウエルとの電話協議の後に考え方を変え、多少の危険や不利を顧みずに RGFC を攻撃することを求めるようになったと主張している[636]。

一方、ヨソックはフランクスに対して、唯一、攻撃を続けることを命令した。回顧録においてフランクスは、ヨソックは ARCENT 司令官の立場で第 7 軍団の攻撃を今以上に速く進めるためにできることがないことを理解していたのだろうと指摘している[637]。

しかし、この時、ヨソックはフランクスに対して、イギリス第 1 機甲師団の攻撃に関する新たな構想を示した。新たな攻撃構想は、第 7 軍団の東側の側面を掩護しているイギリス

---

632 Swain, *"Lucky War"*, p. 250.
633 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』476-477 頁。
634 Swain, *"Lucky War"*, pp. 250-252; クランシー『熱砂の進軍（下）』177-178 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』477 頁。第 24 歩兵師団（機械化）の進出限界線は本章第 4 節(3)項エ(イ)を参照。
635 Swain, *"Lucky War"*, p. 254.
636 クランシー『熱砂の進軍（下）』175-178 頁。
637 同上、178 頁。

第 1 機甲師団の任務を変更し、同師団によりワジ・アル・バティンを北から南に向かって、すなわちワジ・アル・バティン沿いで防御しているイラク軍を背後から攻撃するという内容だった。この攻撃の目的は、ワジ・アル・バティン沿いの幹線道路を確保し、その後、この幹線道路を第 1 騎兵師団が RGFC に向かって前進する経路、もしくは第 7 軍団と第 18 空挺軍団がバスラ付近で RGFC を攻撃する際の補給幹線として利用することだった。

フランクスと同様、ヨソックは RGFC との戦いを見据えていた。ヨソックがイギリス第 1 機甲師団の任務を変更しようとした理由は、ARCENT 隷下の 2 個軍団が有利な態勢で RGFC を攻撃できるようにするためだった。フランクスはイギリス第 1 機甲師団の任務を変更することに反対した。しかし、ヨソックは譲らなかった。フランクスはイギリス第 1 機甲師団に対して、ワジ・アル・バティンに対する攻撃を命じる可能性があることを予告した[638]。

ヨソックは ARCENT 司令官の立場から隷下部隊を連携させて RGFC を攻撃することを目指していたけれども、その努力は無駄に終わった。2 月 26 日朝、ARCENT 作戦部長アーノルド准将と情報部長ステュアート准将は最前線のフランクスとラックのもとに急行していた。アーノルドとステュアートの目的は、両軍団が連携して RGFC を攻撃する要領について両軍団長と調整することだった[639]。しかし、ヨソックは移動中だったアーノルドとステュアートに対して、リヤドの ARCENT 司令部に至急戻るように命じた。シュワルツコフはヨソックに対して、第 7 軍団の攻撃が遅れている理由を説明せよと命じていた。ヨソックは、シュワルツコフに対する報告の際に主要参謀であるアーノルドとステュアートを同行させるため、二人に ARCENT 司令部への帰還を命じたのだった[640]。

フランクスは、アーノルドとステュアートが第 7 軍団と第 18 空挺軍団を訪れ、両軍団が連携して RGFC を攻撃する計画をまとめていたら戦争の結末は異なっただろうと苦々しく回顧している[641]。あわせて、回顧録においてフランクスは、シュワルツコフは RGFC を攻撃するためには第 7 軍団と第 18 空挺軍団を連携させる必要があること、クウェート戦域内のすべての戦力を総合する責任とそのための手段を自分自身が持っていること及び 2 月 26 日朝が RGFC を撃破するための決断を下す重要な時期であることを理解していなかったと指摘している[642]。

2 月 26 日 0620、前日から続く悪天候の中、第 7 軍団隷下の第 2 装甲騎兵連隊が第 7 号計画に基づき RGFC に向かって前進を開始した。2 月 26 日 0713、第 2 装甲騎兵連隊はタワカルナ機械化師団の警戒部隊と接触した。2 月 26 日 1250、第 2 装甲騎兵連隊の前線指揮所を訪れたフランクスは第 2 装甲騎兵連隊長ホルダー大佐に対して、タワカルナ機械化師団の本隊をその場に拘束し、かつ第 1 歩兵師団（機械化）の攻撃を掩護する態勢を確立する

638 同上、176 頁；Bourque, *Jayhawk!*, p. 305; Gordon, *The Generals' War*, pp. 395-396.
639 Atkinson, *Crusade*, p. 426; Gordon, *The Generals' War*, p. 376.
640 Atkinson, *Crusade*, p. 427.
641 クランシー『熱砂の進軍（下）』290-291 頁。
642 同上、178 頁。

ように命じた[643]。

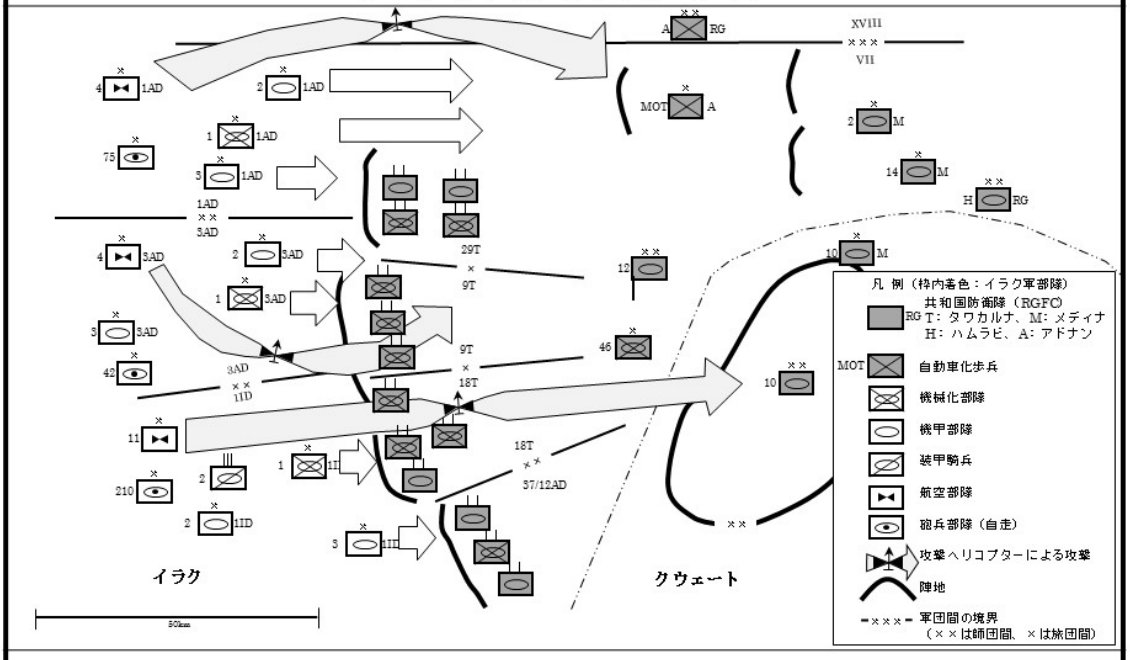
2 月 26 日 1500 頃、第 2 装甲騎兵連隊は攻撃開始線となっていた統制線「タンジェリン」を通過した。2 月 26 日 1530、第 2 装甲騎兵連隊隷下の第 2 及び第 3 騎兵大隊はタワカルナ機械化師団の防御陣地に対する攻撃を開始した。第 2 装甲騎兵連隊は、攻撃目標「ノーフォーク」で防御するタワカルナ機械化師団の左翼の 1 個大隊を撃破した。タワカルナ機械化師団は防御を準備する時間が限られていたため、地雷の埋設や陣地の強化を十分に実施できていなかった。第 2 装甲騎兵連隊は戦力を推進し、後に続く第 1 歩兵師団（機械化）の攻撃を掩護するための準備を開始した。この第 2 装甲騎兵連隊による戦いは、後に「73 イースティングの会戦（Battle of 73 Easting）」と呼ばれた[644]。

一方、第 1 歩兵師団（機械化）の前進は遅れていた。第 7 号計画において第 1 歩兵師団（機械化）は、第 2 装甲騎兵連隊を追い越して RGFC を攻撃する、第 7 軍団の主要な戦力だった。2 月 26 日 0430、第 1 歩兵師団（機械化）は前進を開始した。しかし、砂嵐のため前進の速度は遅かった。第 1 歩兵師団（機械化）が第 2 装甲騎兵連隊に追いついたのは 2 月 26 日夜だった[645]。

フランクスは、第 1 歩兵師団（機械化）が第 2 装甲騎兵連隊に追いついたら、2 月 27 日の朝を待たず速やかに同師団を RGFC 攻撃に投入することを決定した。2 月 26 日 1700、フランクスは第 1 歩兵師団（機械化）長レーム少将に対して、攻撃目標「ノーフォーク」の攻略を命じた[646]。第 1 歩兵師団（機械化）は、夜間における部隊交代の要領について第 2 装甲騎兵連隊と急いで調整した。2 月 26 日 2230、第 1 歩兵師団（機械化）はタワカルナ機械化師団と対峙中の第 2 装甲騎兵連隊を追い越して攻撃を開始した[647]。（図 44 を参照）

643 Swain, *"Lucky War"*, p. 260.
644 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 327-331.
645 クランシー『熱砂の進軍（下）』186-187 頁。
646 同上、207 頁。
647 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 331-333; Swain, *"Lucky War"*, p. 260.

図44　第7軍団の攻撃（2月26日夜～2月27日）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 266.

フランクスは、タワカルナ機械化師団が防御陣地を強化してしまう前に、新しい戦力を投入することを重視した。フランクスは、敵と対峙中の第 2 装甲騎兵連隊と後続の第 1 歩兵師団（機械化）との部隊交代を夜間に行った場合、両部隊の間で友軍相撃が発生する危険があることを理解していた。しかし、タワカルナ機械化師団は防御陣地を強化しており、フランクスは、2 月 27 日朝から第 1 歩兵師団（機械化）による攻撃を開始した場合、タワカルナ機械化師団の抵抗は一層強くなると予想した。また、第 2 装甲騎兵連隊は、イラク陸軍第 50 機甲旅団と接触した 2 月 25 日午前から約 1.5 日間もの間、攻撃を続けていた。フランクスは、第 2 装甲騎兵連隊を第 1 歩兵師団（機械化）と交代させなかった場合、第 2 装甲騎兵連隊は戦力を消尽すると判断した。フランクスは、夜間に攻撃部隊を入れ替えることに伴う危険を承知の上で第 1 歩兵師団（機械化）を投入した[648]。

第 2 装甲騎兵連隊の後に続いて前進していた第 3 機甲師団は、2 月 26 日 0918 に第 2 装甲騎兵連隊に追いつき、その後、第 2 装甲騎兵連隊の左翼に展開して前進を続けた。第 3 機甲師団長ファンク（Paul E. Funk）少将は、敵情が十分に解明できていなかったため、隷下の 2 個旅団を同師団の先頭に配置して RGFC との接触に備えながら前進した。2 月 26 日 1630、第 3 機甲師団はタワカルナ機械化師団の警戒陣地に接触した。第 3 機甲師団は、攻撃目標「ノーフォーク」で防御中のタワカルナ機械化師団に対する攻撃を開始した[649]。

タワカルナ機械化師団は、空爆を受けていたにも拘わらず、第 3 機甲師団の先頭を前進

[648] クランシー『熱砂の進軍（下）』205-207 頁。
[649] Swain, *"Lucky War"*, pp. 260-262; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 337-338.

していた第 1 旅団を防御陣地の前面で阻止した。敵を上回る火力や夜間戦闘能力を持っていたにも拘わらず、第 1 旅団が敵と接触した後の 12 時間で前進した距離は僅か 4km だった。2 月 26 日 2100、ファンクは、第 3 機甲師団の左翼で攻撃していた第 2 旅団の方向から第 3 機甲師団の主力を投入し、タワカルナ機械化師団を撃破することを決定した[650]。

第 3 機甲師団の左翼で先頭となって前進していた第 2 旅団は、2 月 26 日 1720 にタワカルナ機械化師団の警戒陣地に接触した。敵と接触後、第 2 旅団は戦闘部隊を一旦後退させて、情報収集を実施した。2 月 26 日 2200、第 2 旅団は諸兵科の戦力を調整した後に攻撃を開始した。野戦砲、MLRS 及び攻撃ヘリコプターは、タワカルナ機械化師団の防御陣地及びその後方奥深くを同時に攻撃した。友軍の火力の掩護下で攻撃した第 2 旅団は、2 月 27 日 0200 までにタワカルナ機械化師団の防御陣地を突破した。第 2 旅団は防御陣地の後方の地域に向かって攻撃する態勢を確立した[651]。

2 月 26 日 0630、第 1 機甲師団隷下の 2 個旅団が攻撃目標「パープル」に対する攻撃を再開した。多くのイラク軍兵士は降伏したが、イラク陸軍第 26 歩兵師団隷下の 1 個大隊は抵抗を続けた。前日、フランクスは第 1 機甲師団長グリフィス少将に対して、2 月 26 日 1000 までに攻撃目標「コリンズ」の北側まで進出するように命令していた。グリフィスは、隷下の 1 個大隊基幹の任務部隊をブサイヤに残し、第 1 機甲師団の主力を RGFC に向かって前進させた[652]。

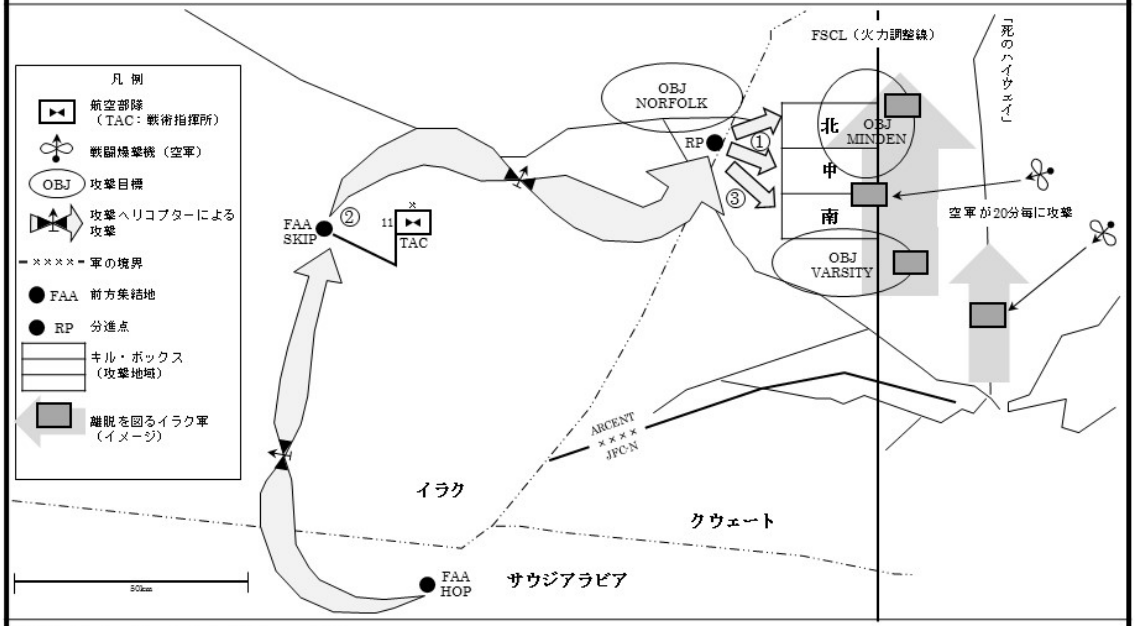
第 1 機甲師団の攻撃は順調に進んだ。統制線「タンジェリン」を通過した第 1 機甲師団は、2 月 26 日 1312 にタワカルナ機械化師団隷下の 1 個大隊を発見した。2 月 26 日 1930 に野戦砲、MLRS 及び攻撃ヘリコプターが制圧射撃を開始し、2 月 26 日 2000 に第 1 機甲師団隷下の第 3 旅団がタワカルナ機械化師団の防御陣地に対する攻撃を開始した。2 月 26 日 2300、第 3 旅団は攻撃目標「ノーフォーク」の北側に構築されていたタワカルナ機械化師団の防御陣地を確保した[653]。

フランクスは、地上部隊で攻撃目標「ノーフォーク」を攻撃すると同時に、攻撃ヘリコプターにより後方の地域に設定していた攻撃目標「ミンデン（Minden）」を攻撃した。2 月 26 日 2100 以降、第 7 軍団第 11 航空旅団隷下の AH-64 大隊は攻撃目標「ミンデン」を攻撃し、ジハード軍団隷下の第 10 機甲師団の戦闘車両を破壊した。（図 45 を参照）

---

650 Bourque, *Jayhawk!*, p. 339.
651 *Ibid.*, pp. 340-341.
652 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 243-244.
653 *Ibid.*, pp. 265, 270-272; Bourque, *Jayhawk!*, pp. 342-344, 350-352.

図45　AH-64による攻撃目標「ミンデン」に対する攻撃（2月26日～2月27日）




出典：　Scales Jr., *Certain Victory*, p. 288.

しかし、この時、AH-64 大隊は、クウェートから退却するイラク軍の車列を発見していたにも拘わらず、この車列を攻撃することができなかった。イラク軍の退却経路は空軍の責任地域内であり、空軍機が 20 分おきに退却するイラク軍の車列を攻撃していた。第 7 軍団が退却中の車列を攻撃するためには空軍との調整が必要だった。しかし、最前線で隷下部隊を指揮していたフランクスにとって 200km 離れた第 7 軍団指揮所を通じてリヤドの ARCENT 司令部や中央軍司令部と調整することや、80km 離れた第 11 航空旅団指揮所を通じて AH-64 大隊に詳細な指示を与えることは決して簡単ではなかった。また、地上部隊が空軍に対して対地攻撃を要請する場合、手続き上、72 時間前に要請することが必要だった。フランクスは、優れた夜間戦闘能力を保有する AH-64 をイラク軍の退却経路の上空に留めて攻撃することを断念した[654]。

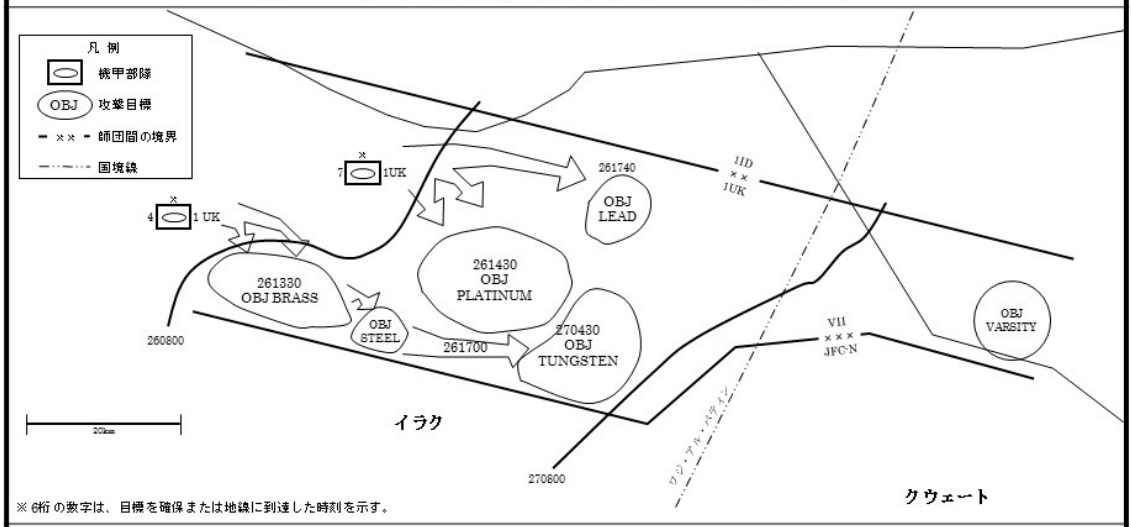
第 7 軍団の右翼では、2 月 25 日夜からイギリス第 1 機甲師団が前進を続けていた。イギリス第 1 機甲師団は北から順に第 7 機甲旅団、第 4 機甲旅団を並列して前進した。2 月 26 日 1330、第 4 機甲旅団はイラク軍の 2 個機甲旅団と機械化歩兵旅団を撃破し、攻撃目標「ブラス（Brass）」を確保した。第 7 機甲旅団は 2 月 26 日 1430 に攻撃目標「プラチナ（Platium）」を、2 月 26 日 1740 に攻撃目標「リード（Lead）」を確保した[655]。（図 46 を参照）

2 月 26 日 1700、第 4 機甲旅団が攻撃目標「タングステン（Tungsten）」に対する攻撃を開始した。第 7 機甲旅団は、2 月 27 日朝からワジ・アル・バティンを超えてクウェート

654　クランシー『熱砂の進軍（下）』241-245 頁；Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 287-291; Swain, *"Lucky War"*, p. 186.
655　Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 285-287.

領内の攻撃目標に向かって攻撃する態勢を確立した[656]。一方、2 月 26 日、イギリス第 1 機甲師団とアメリカ空軍機との間で友軍相撃が起こった[657]。

図46　イギリス第1機甲師団の攻撃（2月26日0800～2月27日0800）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 286.

2 月 26 日に第 1 騎兵師団は第 7 軍団に配属されたけれども、この日の終わりまでフランクスは第 1 騎兵師団を RGFC 攻撃に投入できなかった。2 月 26 日 0920 にシュワルツコフが第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属した時、第 1 騎兵師団はサウジアラビア領内のワジ・アル・バティン一帯に展開していた。フランクスは第 1 騎兵師団長ティレリ准将に対して、速やかに第 7 軍団主力（第 1 及び第 3 師団と第 2 装甲騎兵連隊）に追いつくように命じ、同時にタワカルナ機械化師団の北側もしくは南側から第 1 騎兵師団を投入するという攻撃構想を示した。しかし、2 月 26 日の終わりの時点で第 1 騎兵師団は第 7 軍団主力に向かって前進している最中だった[658]。

第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属する目的は、RGFC を殲滅するために第 7 軍団の戦力を増強することにあった。ヨソックは、2 月 25 日 2100 までに第 1 騎兵師団を第 7 軍団に配属する必要があると判断していた。さらに、ヨソックはフランクスに対して自身の判断を伝えていた。しかし、実際にシュワルツコフが第 1 騎兵師団を手放して第 7 軍団に配属した時刻は、ヨソックが判断していた時刻の約 12 時間後だった[659]。

2 月 26 日午後以降、シュワルツコフは第 7 軍団の攻撃を急がせることを一層強く要求した。それまでの間、シュワルツコフは指揮系統を守り、直近下位の ARCENT 司令官だったヨソックに対して第 7 軍団の攻撃を急ぐように命じていた。しかし、2 月 26 日午後以降、

656 *Ibid.*, pp. 285-287.
657 Bourque, *Jayhawk!*, p. 305; Swain, *"Lucky War"*, pp. 227-228.
658 Swain, *"Lucky War"*, pp. 254-255; クランシー『熱砂の進軍（下）』188-189 頁。
659 Swain, *"Lucky War"*, p. 232.

シュワルツコフはヨソックを飛び越えて、第 7 軍団に対して直接命令することを厭わなかった。『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、シュワルツコフが最前線の第 7 軍団指揮所に電話し、不在のフランクスに代わって状況を説明しようとした第 7 軍団作戦部長チェリー大佐を怒鳴りつけて攻撃を急げと命令した様子を描いている[660]。

シュワルツコフはパウエルから圧力を受けていた。2 月 26 日 1200 頃、ソ連が停戦を議題にした安全保障理事会の開催を要請したことを知ったパウエルはシュワルツコフに電話し、第 7 軍団を急がせることを求めた。シュワルツコフは回顧録において、この時パウエルがなぜ第 7 軍団は 30 日間も爆撃した敵を攻撃できないのか、なぜ 2 日間以上行動しながら一度も敵と接触していないのかに関してワシントンの全員が疑問を持っており、統合参謀本部議長が激怒しているという内容をヨソックに伝達せよと発言したと説明している[661]。

シュワルツコフはパウエルに対して、RGFC を撃破するためにはあと 2 日間が必要であるため、停戦の成立が早すぎた場合には中央軍が任務を達成できない可能性があると回答した。あわせてシュワルツコフは、RGFC を撃破する前に停戦が成立しないように時間稼ぎをして欲しいと依頼した。さらにシュワルツコフは、第 7 軍団を急いで攻撃させるためにフランクスを更迭する可能性があると伝えた[662]。

2 月 26 日 2000 頃、フランクスはシュワルツコフに電話し、第 7 軍団の状況と 2 月 27 日以降の攻撃構想を報告した。この時の電話についてフランクスと『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、シュワルツコフに第 7 軍団の状況が正確に伝わっていないのではないかと疑っていたフランクスが自ら第 7 軍団の状況を直接シュワルツコフに報告したと説明している[663]。一方、シュワルツコフと『聖戦（*Crusade*）』の著者アトキンソン（Rick Atkinson）は、フランクスがシュワルツコフに電話をかけた理由はヨソックから命令されたためだったと説明している[664]。

この時の電話は、陸上攻勢作戦間でフランクスとシュワルツコフが直接話し合った最初で最後の機会だった。シュワルツコフはフランクスに対して、第 7 軍団の攻撃の速度に対して不満を持っていることを伝えなかった[665]。一方、シュワルツコフの様子についてフランクスは、攻撃開始以降に第 7 軍団が実施してきたことや第 7 軍団が置かれていた状況をシュワルツコフは理解していない様子だったと回顧している[666]。

シュワルツコフはフランクスに対して、2 月 27 日以降の第 7 軍団の攻撃に関する二つの指針を示した。第一の指針は、第 7 軍団の戦力を可能な限り RGFC 攻撃に投入せよという

---

660 Gordon, *The Generals' War*, pp. 396-397.
661 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』478-479 頁。
662 Gordon, *The Generals' War*, p. 396; パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』201 頁。
663 Gordon, *The Generals' War*, p. 397; クランシー『熱砂の進軍（下）』214-218 頁。フランクスが電話した時刻は『聖戦』では 2 月 26 日 1600 となっている。詳細は Atkinson, *Crusade*, p. 440 を参照。
664 Atkinson, *Crusade*, pp. 440-441; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』479 頁。
665 Gordon, *The Generals' War*, pp. 397-398; Atkinson, *Crusade*, p. 441; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』479 頁；クランシー『熱砂の進軍（下）』214-218 頁。
666 クランシー『熱砂の進軍（下）』214 頁。

内容だった。2 月 26 日朝にヨソックがフランクスに対して示した、イギリス第 1 機甲師団によりワジ・アル・バティン沿いに北から南に向かって攻撃するという構想は放棄された。この経緯についてシュワルツコフは回顧録の中で、シュワルツコフ自身がワジ・アル・バティン沿いの攻撃を実施すると報告したフランクスを制止し、イギリス第 1 機甲師団には第 7 軍団主力〔第 1 及び第 3 機甲師団、第 2 装甲騎兵連隊〕の右側面を掩護させろ、第 7 軍団主力は RGFC を攻撃せよと命令したと説明している[667]。一方、フランクスは回顧録において、イギリス第 1 機甲師団をワジ・アル・バティン沿いの攻撃ではなく、むしろ RGFC を殲滅するための攻撃に投入するべきだと上申したところ、シュワルツコフが同意したと説明している[668]。

第二の指針は、可能な限り早期に RGFC を撃破せよという内容だった。シュワルツコフはフランクスに対して、RGFC が退却を準備していることを示す二つの情報を伝えた。この情報は、ハムラビ機甲師団が集結している地域に向かって重装備輸送車両が前進している及びメディナ機甲師団に退却命令が出たという内容だった。この情報についてフランクスは、それまでは RGFC はその場で防御すると予想していたが RGFC が退却を準備していることを知り、第 7 軍団に残された時間は少なくなってきていると判断を修正したと回顧している[669]。同様、『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、この時までフランクスは RGFC を攻撃するためには時間をかけて綿密に調整して第 7 軍団の戦力を総合する必要があると考えていたが、RGFC が退却を準備していることを知ったフランクスは夜間も攻撃を続ける必要があると判断し、AH-64 で RGFC の後方の地域を攻撃することを決意したと説明している[670]。

しかし、指揮系統は乱れた。シュワルツコフは直近下位のヨソックを飛び越えて、直接フランクスに対して第 7 軍団の攻撃に関する指針を示した。ヨソックは ARCENT 隷下のすべて地上部隊を指揮する責任を担っていた。また、ARCENT 司令官として RGFC 攻撃を見据えながらヨソックは、イギリス第 1 機甲師団によりワジ・アル・バティン沿いに北から南に向かって攻撃するという構想を作成した。しかし、この攻撃構想は、フランクスとシュワルツコフの電話の中で放棄された。『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、ARCENT 司令官の権限に対するシュワルツコフの介入は恣意的かつ無益であり、陸上攻勢作戦間の指揮関係を混乱させただけだったと批判している。あわせてゴードンらは、ヨソックがシュワルツコフに対して畏縮していたためにシュワルツコフが軍団長を直接指揮するという結果になったと指摘している[671]。

2 月 26 日夜、前線の状況を確認したフランクスは RGFC に対する攻撃要領を見直し、RGFC を殲滅するための新たな攻撃構想を作成した。新たな攻撃構想は、前線から後方の

667 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』479 頁。
668 クランシー『熱砂の進軍（下）』215 頁。
669 同上、217 頁。
670 Gordon, *The Generals' War*, p. 397.
671 *Ibid.*, pp. 430-431.

地域までの RGFC 隷下のすべての部隊を両翼から包囲するという内容だった。RGFC を包囲する部隊は第 1 騎兵師団とイギリス第 1 機甲師団だった。フランクスが示した新たな攻撃構想は次のとおりだった[672]。

① 現在、前線で防御中の RGFC（北から順にアドナン自動車化歩兵師団、メディナ機甲師団、タワルカナ機械化師団）を攻撃している第 7 軍団主力の 3 個師団（北から順に第 1 機甲師団、第 3 機甲師団、第 1 歩兵師団（機械化））は、この防御中の RGFC を引き続き攻撃する。
② 第 1 騎兵師団は第 1 機甲師団の北側（第 7 軍団主力の左翼）から、イギリス第 1 機甲師団は第 1 歩兵師団（機械化）の南側（第 7 軍団主力の右翼）からそれぞれ攻撃を開始し、防御中の RGFC の後方の地域に所在するハムラビ機甲師団を攻撃する。

この新たな攻撃構想は、事実上、第 7 軍団が単独で RGFC を可能な限り殲滅することを目指すという内容だった。元々、フランクスは RGFC を殲滅するためには第 7 軍団と第 18 空挺軍団が連携することが必要だと判断していた。しかし、この時、第 18 空挺軍団は RGFC に対する攻撃を開始できる態勢ではなく、第 7 軍団の後方のユーフラテス川周辺の地域で戦闘を続けていた。フランクスは、第 18 空挺軍団が第 7 軍団に追いついて RGFC に対する攻撃を開始できる態勢を確立するのは 24 乃至 48 時間後だと判断した。一方、第 7 軍団の正面の RGFC は態勢を立て直し始めており、防御陣地を強化していた。フランクスは、第 18 空挺軍団の到着を待たずに RGFC の殲滅を目標とした攻撃を開始することを決定した[673]。

（イ） 第 18 空挺軍団（第 3 装甲騎兵連隊、第 82 空挺師団、第 101 空挺師団（空中強襲）、第 24 歩兵師団（機械化）、フランス第 6 軽機甲師団）

2 月 26 日 0840、シュワルツコフは、RGFC に対する攻撃を早期に開始するため、第 24 歩兵師団（機械化）の進出限界線（統制線「ヴァイキング」）を解除し、同師団がユーフラテス川の沿岸部に前進することを許可した。26 日 1206、第 18 空挺軍団長ラック中将は第 24 歩兵師団（機械化）長マカフリー少将に対して、統制線「ヴァイキング」の通過及びユーフラテス川の沿岸部に設定した攻撃目標「ゴールド」に対する攻撃を命じた[674]。

しかし、第 24 歩兵師団（機械化）は 2 月 25 日夜以降、ユーフラテス川の南側に広がる湿地帯の通過に手間取っていた。第 24 歩兵師団（機械化）隷下の騎兵大隊は通行可能な経

672 *Ibid.*, p. 398; クランシー『熱砂の進軍（下）』223-229 頁。
673 クランシー『熱砂の進軍（下）』212-213 頁。
674 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 373; Swain, *"Lucky War"*, p. 250. 第 24 歩兵師団（機械化）の進出限界線の解除に関する命令は本章第 4 節(4)項ウ(ア)を参照。

路を偵察し、工兵部隊は通路を整備していた[675]。2 月 26 日 1400、第 24 歩兵師団（機械化）は統制線「ヴァイキング」を通過し、攻撃目標「ゴールド」に向かって前進を開始した。

2 月 26 日の終わりまでに第 24 歩兵師団（機械化）は攻撃目標「ゴールド」を概ね確保したけれども、しかし、同師団は第 7 軍団に追いついておらず、RGFC に対する攻撃を開始することはできなかった。第 24 歩兵師団（機械化）は、2 月 26 日午前の時点で第 7 軍団隷下の第 1 機甲師団の 30 乃至 50km 後方に位置しており、第 1 機甲師団が RGFC に対する攻撃を開始した 2 月 26 日夕方の時点になっても第 1 機甲師団の 60km 後方だった。第 24 歩兵師団（機械化）との距離が離れていたため、第 1 機甲師団は左側面の掩護がないまま RGFC に向かって前進し、その後、RGFC に対する攻撃を開始していた[676]。

RGFC に対する攻撃を急いでいたにも拘わらず、2 月 26 日午前までにヨソックあるいはシュワルツコフが第 18 空挺軍団と第 7 軍団の攻撃を連携させるために攻撃計画を修正したこと、あるいは新しい命令を出したことを示す資料は確認できない。陸上攻勢作戦の計画が完成した時、フランクスは第 18 空挺軍団が敵地域の奥深くの攻撃目標を確保しても RGFC を殲滅することには貢献できないと指摘し、両軍団の連携を問題視した[677]。しかし、フランクスが指摘し、かつ RGFC 攻撃を急いでいた状況だったにも拘わらず、第 18 空挺軍団はユーフラテス川付近で国道 8 号線を遮断した。

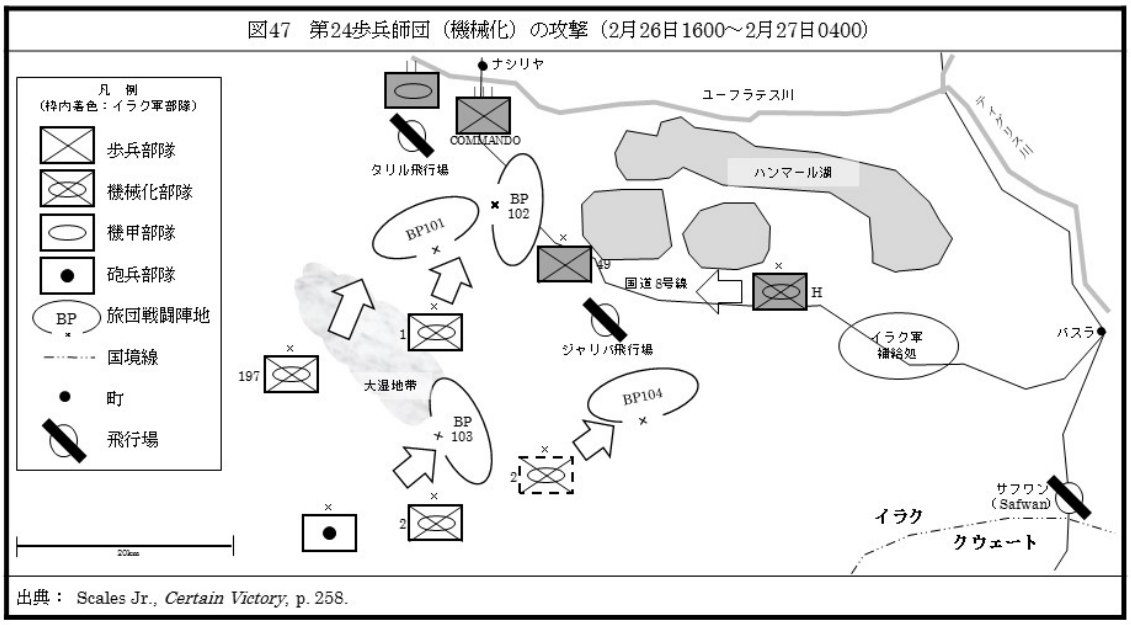
一方、第 24 歩兵師団（機械化）が攻撃目標「ゴールド」を確保したことにより、第 18 空挺軍団はイラク軍の後方連絡線となっていた国道 8 号線の遮断を確実にした。2 月 25 日夜までに第 101 空挺師団隷下の第 3 旅団は、作戦地域「イーグル」内に展開して国道 8 号線を遮断した。しかし、第 3 旅団の対戦車戦闘能力は高くなかった。国道 8 号線を確実に遮断するためには、第 24 歩兵師団（機械化）の機甲戦力が必要だった[678]。ラックから命令を受けたマカフリーは、攻撃目標「ゴールド」の内部に四つの戦闘陣地を設定した。第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 197 旅団、第 1 旅団及び第 2 旅団はそれぞれの攻撃目標となった戦闘陣地に向かって攻撃した。（図 47 を参照）

2 月 26 日 1700 以降、第 1 旅団が国道 8 号線上の戦闘陣地「102」に対する攻撃を開始した。イラク軍は粘り強く抵抗したが、第 1 旅団は 2 月 27 日 0110 に戦闘陣地「102」を確保した。イラク軍の抵抗を殆ど受けなかった第 2 旅団は、2 月 26 日 2000 に戦闘陣地「103」を確保した。湿地帯を横断した第 197 旅団の攻撃は遅れた。第 197 旅団は戦闘陣地「101」に向かって前進した。2 月 26 日 2200、第 197 旅団はイラク軍と接触した[679]。

第 24 歩兵師団（機械化）が攻撃目標「ゴールド」を最終的に確保した時刻は 2 月 27 日 0430 だった。第 2 旅団はジャリバ飛行場（攻撃目標「オレンジ（Orange）」）に対する攻撃を準備した[680]。

---

675 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 255-256.
676 クランシー『熱砂の進軍（下）』190、204-205 頁。
677 本章第 3 節(4)項ア(オ)を参照。
678 本章第 4 節(3)項エ(イ)を参照。
679 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 372-379.
680 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 260.




第 24 歩兵師団（機械化）が攻撃目標「ゴールド」を攻撃していた 2 月 26 日 1800、ヨソックは第 7 軍団と第 18 空挺軍団の間の境界線を変更した。この変更により、攻撃目標「ゴールド」とバスラを結ぶハンマール湖南側の国道 8 号線とその周辺地域が第 18 空挺軍団の行動地帯に入った[681]。境界線の変更と同時にヨソックはラックに対して、27 日以降に第 24 歩兵師団（機械化）がジャリバ飛行場を攻撃すること、あわせて、必要な場合には第 24 歩兵師団（機械化）がバスラに向かって攻撃することを許可すると伝えた[682]。（図 48 を参照）

しかし、境界線の変更は第 18 空挺軍団がバスラに向かって攻撃することを可能にした一方、第 7 軍団の行動地帯の正面幅を狭めた。ヨソックが境界線を変更した 2 月 26 日の夜、フランクスは RGFC を両翼から包囲して殲滅するための攻撃構想を作成した。この攻撃構想においてフランクスは、第 1 騎兵師団により第 7 軍団主力の北側から大きく回り込んで RGFC を包囲することを企図していた。フランクスはヨソックに対して、第 1 騎兵師団が RGFC を包囲できるようにするため第 7 軍団の行動地帯の北側を拡げてほしいと願い出た[683]。しかし、ヨソックはフランクスの要望を認めなかった。

681 第 7 軍団と第 18 空挺軍団の間の境界線の変更は図 38（変更前）と図 48（変更後）を参照。
682 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 379-380; Swain, *"Lucky War"*, pp. 252, 273; クランシー『熱砂の進軍（上）』372-373 頁。ヨソックが境界線の変更を隷下部隊に予告したのは 2 月 25 日 2100 だった。この時刻はフランクスが第 7 号計画の実施を命令した時刻とほぼ一致する。
683 クランシー『熱砂の進軍（下）』470-479 頁。

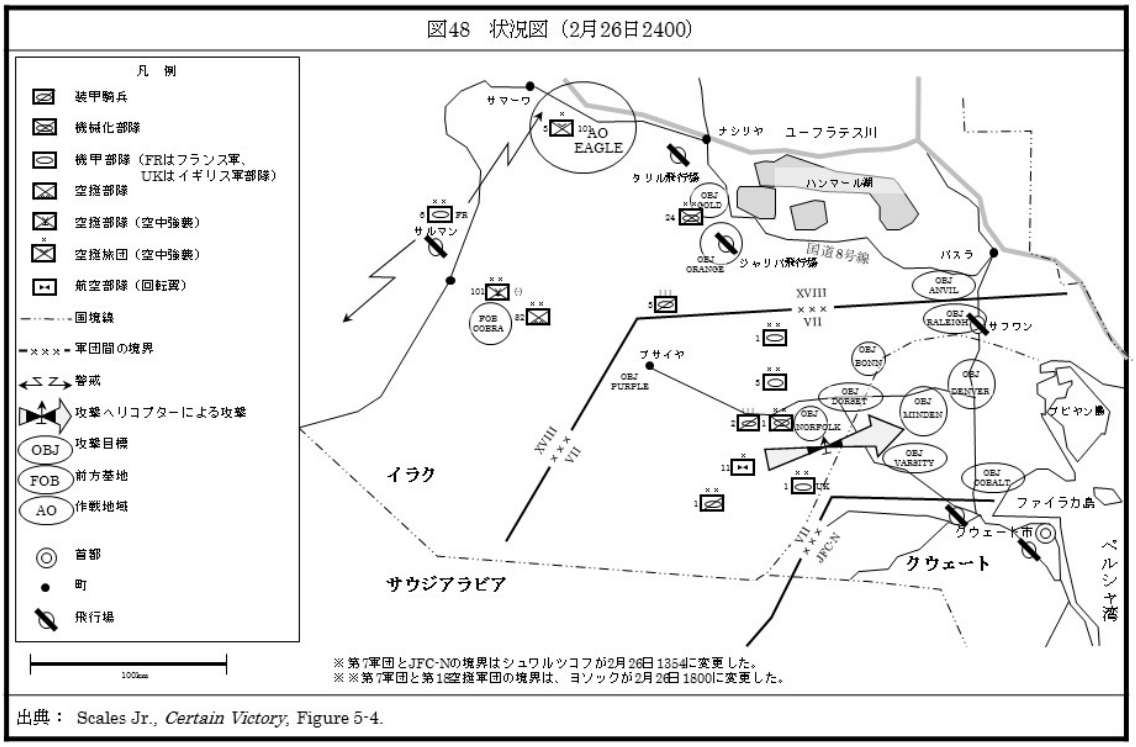



図48　状況図（2月26日2400）

出典： Scales Jr., *Certain Victory*, Figure 5-4.

2 月 26 日、フランス第 6 軽機甲師団隷下の第 3 海兵連隊はサルマンの掃討作戦を開始した。フランス第 3 海兵連隊はイラク市民の保護に特別の注意を払った[684]。2 月 26 日 0700、掃討作戦の開始に先立ち、アメリカ陸軍民事大隊はサルマン市民に対して、一か所に集まるように大型スピーカーで指示した。2 月 26 日 0845、フランス第 3 海兵連隊はサルマン市内に入った。市内に残っていたイラク軍は抵抗せずに降伏した。2 月 26 日 1500、サルマンの掃討作戦は終了した。サルマンを確保したことにより、フランス第 6 軽機甲師団は第 18 空挺軍団の西側の側面を掩護する態勢を確立した[685]。

第 82 空挺師団は第 18 空挺軍団の後方の地域において補給幹線の警戒を継続した。2 月 26 日 1200、フランス第 6 軽機甲師団に協力していた第 82 空挺師団隷下の 1 個旅団が第 82 空挺師団に復帰した[686]。

第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の第 3 旅団は、2 月 25 日夜以来、作戦地域「イーグル」を確保していた。2 月 26 日 1400、作戦地域「イーグル」に後続の部隊が到着した。第 101 空挺師団（空中強襲）はイラク軍の後方連絡線を遮断する態勢を強化した[687]。

---

684 アルジェリア戦争（1954～1962 年）においてフランス軍が平定作戦を実施した際、フランス軍による拷問や処刑が明らかになった。このため、フランスのメディアはフランス第 6 軽機甲師団のサルマン掃討作戦に注目していた。

685 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 366-368.

686 *Ibid.*, p. 368; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, pp. 277-278.

687 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 371.

（５）　2 月 27 日の陸上作戦

ア　イラク軍の状況

フセイン大統領は、退却する部隊の混乱を解消するため、2 月 27 日朝にバスラの前方司令部に対して命令を送付した。フセイン大統領は、バスラ防衛の強化及びバスラからナシリヤを経由しサマーワを結ぶ防衛線の強化を命じた[688]。

イ　アラブ合同軍の攻撃

シュワルツコフは、クウェート市解放作戦に対して細心の注意を払った。陸上攻勢作戦に関する検討を開始した頃からシュワルツコフは、クウェート市の解放はアラブ諸国の軍により達成されることが重要だと判断していた。また、シュワルツコフは、アラブ合同軍によるクウェート市解放に協力する MARCENT 司令官ブーマー中将に対して、複数の国の軍隊がクウェート市内やその周辺で作戦を行うことを考慮し、友軍相撃に特に注意するように命じた。この他、シュワルツコフは中央特殊作戦軍隷下の特殊部隊をアラブ合同軍に同行させた。シュワルツコフは特殊部隊に対して、アラブ各国の軍に対して助言を与えること及び戦争犯罪の発生を未然に防ぐことを命令した。クウェート軍はイラク軍を報復の対象と見做していた[689]。

2 月 27 日朝、JFC-E と JFC-N がクウェート市に向かって攻撃を開始した。JFC-E は、クウェート国際空港の東側に展開した第 1 海兵師団隷下のシェパード任務部隊の掩護を受けて前進した。同様、JFC-N は、アリ・アル・サーレム空軍基地に展開した第 2 海兵師団隷下のタイガー旅団の掩護を受けて前進した。

2 月 27 日 0900、JFC-E と JFC-N はクウェート市内に入った。その後、市内で合流した JFC-E と JFC-N はクウェート市を確保した。2 月 27 日 1421、ブーマーはクウェート市内のアメリカ大使館に到着した。沿道では約 7 ヶ月の占領から解放されたクウェート市民がアメリカ海兵隊を歓迎した[690]。

ウ　MARCENT の攻撃

2 月 27 日 0430 、第 1 海兵師団がクウェート国際空港に対する攻撃を再開した。2 月 27 日 0900、第 1 海兵師団は同空港を確保した[691]。

---

688 Woods, *The Mother of All Battles*, pp. 236-238.
689 Atkinson, *Crusade*, pp. 458-459; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』480-481 頁。
690 Atkinson, *Crusade*, pp. 459-461; Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, pp. 103-104; Gordon, *The Generals' War*, p. 373.
691 Westermeyer, *Liberating Kuwait*, pp. 200-201.

2 月 27 日 0600 までに第 2 海兵師団隷下のタイガー旅団はエジプト軍との連絡態勢を確立し、クウェート市に向かって攻撃するエジプト軍に協力した。その後、第 2 海兵師団は戦闘停止命令が出た 2 月 28 日の朝までムトラ丘陵一帯を確保した[692]。

3MAW はクウェートから退却するイラク軍に対する攻撃を継続した。また、第 5 連隊上陸チームはワフラ掃討作戦を実施した[693]。

エ　ARCENT の攻撃

（ア）　第 7 軍団（第 2 装甲騎兵連隊、第 1 機甲師団、第 3 機甲師団、第 1 歩兵師団（機械化）、第 1 騎兵師団、イギリス第 1 機甲師団）

2 月 26 日夜から 2 月 27 日未明にかけてフランクスは、RGFC を包囲する要領ついて再検討した。検討のポイントは次の二つだった[694]。（図 48 を参照）

① 第 7 軍団主力（第 1 及び第 3 機甲師団、第 1 歩兵師団（機械化））の右翼（南側）から RGFC を包囲する部隊を第 1 歩兵師団（機械化）とイギリス第 1 機甲師団のどちらにするか。
② 第 7 軍団主力の左翼（北側）において、どのように第 1 騎兵師団を投入し、どのようにハムラビ機甲師団を攻撃するか。

第 7 軍団主力の右翼では、2 月 26 日 2230、第 1 歩兵師団（機械化）が第 2 装甲騎兵連隊を追い越して RGFC に対する攻撃を開始した[695]。第 1 歩兵師団（機械化）は北から順に第 1 旅団と 3 旅団を並列し、タワカルナ機械化師団の防御陣地の南側と第 37 機甲旅団の防御陣地を攻撃した[696]。

イラク軍は粘り強く抵抗したが、第 1 歩兵師団（機械化）は 2 月 27 日夜明けまでに攻撃目標「ノーフォーク」を確保した。夜間戦闘において敵味方を識別するため、第 1 歩兵師団（機械化）の戦車は隊形を維持しながら 1,500m 以下の距離で射撃した。歩兵は携帯対戦車火器や手榴弾で接近戦を戦った。しかし、戦闘中に友軍相撃が発生した[697]。

フランクスは、第 1 歩兵師団（機械化）により第 7 軍団主力の右翼から RGFC を包囲することを決定した。フランクスは、順調に攻撃している第 1 歩兵師団（機械化）の勢いに期

---

692 Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, p. 68; Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 289.
693 Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, p. 104.
694 クランシー『熱砂の進軍（下）』276-277 頁。
695 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 331-333; Swain, *"Lucky War"*, p. 260.
696 クランシー『熱砂の進軍（下）』260 頁。
697 同上、260-268 頁；Bourque, *Jayhawk!*, p. 337; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 281-285; Swain, *"Lucky War"*, p. 264.

待した。2 月 27 日 0630 頃、フランクスは第 1 歩兵師団（機械化）長レーム少将に対して、攻撃目標「デンヴァー（Denver）」に向かって攻撃するように命じた。フランクスは、2 月 27 日の日没までに第 1 歩兵師団（機械化）により攻撃目標「デンヴァー」を確保し、RGFC を包囲することを狙っていた[698]。

2 月 27 日 0915、燃料を補給した第 1 歩兵師団（機械化）は 100km 遠方の攻撃目標「デンヴァー」に向かって攻撃を開始した。第 1 歩兵師団（機械化）はイラク軍の抵抗を排除しながら前進を続けた[699]。

しかし、RGFC を南側から包囲する部隊だったにも拘わらず、第 1 歩兵師団（機械化）は攻撃目標「デンヴァー」の前で停止した。第 1 歩兵師団（機械化）は北東に向かって前進しており、このまま前進した場合、北側に隣接する第 3 機甲師団の前面に出てしまう可能性があった。2 月 27 日 1846、友軍相撃を避けるためにフランクスはレームに対して、前進を一旦停止し、第 3 機甲師団との連絡態勢を確立した後に前進を再開するように命じた。しかし、フランクスの企図は正しく伝わらず、第 3 機甲師団と前進方向について調整を終えた後も、第 1 歩兵師団（機械化）は停止し続けた[700]。

イギリス第 1 機甲師団は 2 月 26 日から攻撃を続けていた。イギリス第 1 機甲師団隷下の第 4 機甲旅団は、2 月 27 日 0430 までに攻撃目標「タングステン」を確保することを目指して攻撃していた。2 月 27 日の夜明け頃、第 4 機甲旅団は攻撃目標「タングステン」を確保した。ワジ・アル・バティンの西側にあるすべての攻撃目標を確保したイギリス第 1 機甲師団は、クウェート領内に向かって攻撃する態勢を確立した[701]。（図 46 を参照）

2 月 27 日 0712、イギリス第 1 機甲師団隷下の第 7 機甲旅団がクウェート領内に設定された攻撃目標「ヴァーシティ（Varsity）」に向かって攻撃を開始した。2 月 27 日 0820、第 7 機甲旅団は国境線を越えてクウェート領内に入った。2 月 27 日 1230、第 7 機甲旅団は攻撃目標「ヴァーシティ」を確保した[702]。

フランクスは、イギリス第 1 機甲師団によりクウェート市とバスラを結ぶ幹線道路を遮断することを決定した。2 月 27 日 2030、フランクスはイギリス第 1 機甲師団長スミス少将に対して、ムトラ丘陵の北側の地域に向かって前進するように命じた[703]。

一方、第 7 軍団主力の左翼では、2 月 26 日夜から第 1 機甲師団隷下の 3 個旅団が横隊に展開して攻撃を続けていた。しかし、第 1 機甲師団は燃料を殆ど使い果たしており、燃料の補給が必要だった。2 月 24 日に攻撃を開始してから第 1 機甲師団が攻撃した距離は 220km を超えていた。2 月 27 日 0815、前進中だった第 1 機甲師団長グリフィス少将は、2 時間後にすべての車両の燃料がなくなると判断した[704]。

---

698 Bourque, *Jayhawk!*, p. 372; クランシー『熱砂の進軍（下）』285-286 頁。
699 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 372-375; クランシー『熱砂の進軍（下）』287 頁。
700 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 375-376; クランシー『熱砂の進軍（下）』327-329 頁。
701 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 287, 292.
702 Bourque, *Jayhawk!*, p. 377.
703 *Ibid.*, p. 377; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 301.
704 Gordon, *The Generals' War*, p. 393; クランシー『熱砂の進軍（下）』295-296 頁。

攻撃の勢いを維持することを重視したフランクスは、第 1 機甲師団を交代させずに攻撃を続けることを決定した。第 1 機甲師団は、南側に隣接する第 3 機甲師団から燃料の供給を受けて前進を続けた。フランクスは、燃料補給のために第 1 機甲師団を停止し、代わって第 1 騎兵師団を投入することを検討した。しかし、第 1 騎兵師団が第 1 機甲師団との交代を完了するまでの間に RGFC に対する攻撃の圧力が弱くなるという理由で、フランクスはこの案を採用しなかった[705]。

第 1 機甲師団の正面にはメディナ機甲師団が防御していた。メディナ機甲師団の任務はクウェートを占領していたイラク軍の退却を掩護すること及び退却のための時間稼ぎをすることだった。また、メディナ機甲師団は、イラク陸軍第 10、第 12 及び第 17 機甲師団の残存部隊をかき集めて戦力を増強していた。一方、メディナ機甲師団が防御準備に使用できた時間は少なかった。防御を行う地域にメディナ機甲師団が到着したのは 2 月 27 日朝だった[706]。（図 49 を参照）

2 月 27 日 1217、第 1 機甲師団隷下の第 2 旅団はメディナ機甲師団に対する攻撃を開始した。悪天候により視界が制限されていたにも拘わらず、第 2 旅団は熱線映像装置を使って敵戦車の射程内に入る前に敵を発見し、メディナ機甲師団隷下の 1 個機甲旅団を 2 月 27 日 1300 までに撃破した。この戦いは、後に「メディナ丘陵の会戦（Battle of Medina Ridge）」と呼ばれた[707]。

2 月 27 日夕方、フランクスは、2 月 27 日のうちに第 1 機甲師団の北側（第 7 軍団主力の北側）から第 1 騎兵師団を投入してハムラビ機甲師団を包囲するという攻撃構想を断念した。2 月 27 日 1700、グリフィスはフランクスに対して、隷下の第 3 旅団がメディナ機甲師団と戦闘中であり、第 1 騎兵師団を第 1 機甲師団の北側から投入するのは危険だと報告した。フランクスは、ハムラビ機甲師団を包囲するためには第 1 騎兵師団を 2 月 27 日のうちに投入することが必要だと判断していた。しかし、第 1 騎兵師団を急いで投入した場合、第 1 機甲師団との間で友軍相撃が発生する可能性があった。また、2 月 26 日 1800 にヨソックが第 7 軍団と第 18 空挺軍団の間の境界線を変更した結果、第 7 軍団の行動地帯の正面幅が狭くなっており、第 1 騎兵師団が第 7 軍団主力の北側から大きく回り込みハムラビ機甲師団を包囲することは不可能だった。フランクスはグリフィスの判断を尊重した。フランクスは第 1 騎兵師団の投入を 2 月 28 日朝に延期した[708]。

フランクスはグリフィスに対して、速やかに攻撃目標「ボン」に向かって攻撃を開始するように命じた。2 月 27 日夜、第 1 機甲師団は攻撃目標「ボン」を確保した。2 月 27 日夜、第 1 機甲師団は再編成を行い、2 月 28 日朝からの攻撃を準備した[709]。

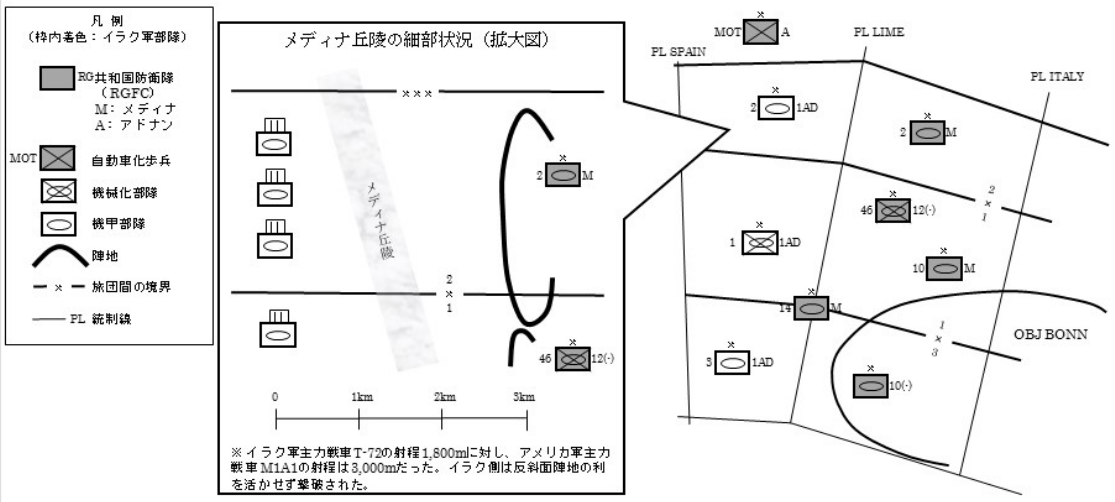
2 月 27 日 2200、第 7 軍団は第 1 機甲師団に対して 10 万ガロンの燃料を補給した。しか

---

[705] Bourque, *Jayhawk!*, p. 352; クランシー『熱砂の進軍（下）』296-297 頁。
[706] Bourque, *Jayhawk!*, p. 355.
[707] *Ibid.*, pp. 355-356.
[708] *Ibid.*, p. 369; クランシー『熱砂の進軍（下）』322-325 頁。
[709] Bourque, *Jayhawk!*, pp. 368-369; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 301-302.

し、第 1 機甲師団の 1 日当たりの燃料消費量は 50 万乃至 75 万ガロンであり、第 1 機甲師団の燃料は十分ではなかった。第 7 軍団隷下の兵站部隊は GPS を装備していなかったため、400m おきに木杭を設置して経路を表示しながら砂漠を前進し、第 1 機甲師団に燃料や弾薬を補給した[710]。

図49　メディナ丘陵における第1機甲師団の攻撃（2月27日～2月28日）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 295.

第 7 軍団主力の中央では第 3 機甲師団がタワカルナ機械化師団を撃破し、前進を続けていた。2 月 27 日 1000、タワカルナ機械化師団の防御陣地を突破した第 3 機甲師団は攻撃目標「ミンデン」に向かって攻撃を開始した[711]。2 月 27 日 1643、攻撃ヘリコプターの掩護を受けながら第 3 機甲師団は国境線を越えてクウェート領内に入った。イラク軍の兵士は次々と投降した。第 3 機甲師団の正面に展開していたイラク陸軍第 10 及び第 12 機甲師団は殆ど壊滅していた[712]。（図 50 を参照）

2 月 27 日 2130、第 3 機甲師団は、進出限界線となっていた統制線「キウィ（Kiwi）」に到達した。南側の第 1 歩兵師団（機械化）と第 3 機甲師団の間で友軍相撃が起こることを防止するため、フランクスは第 3 機甲師団が統制線「キウィ」を超えて前進することを禁止していた[713]。

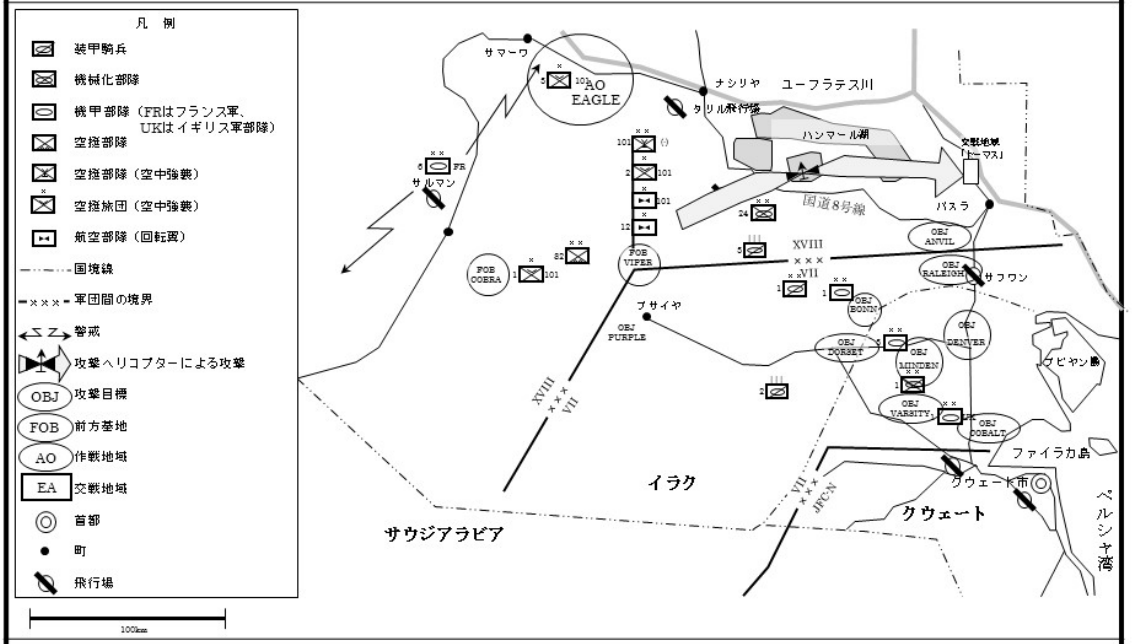
2 月 27 日 1800、フランクスはヨソックに対して、第 7 軍団の状況と今後の攻撃構想を報告した。フランクスは、第 1 及び第 3 機甲師団が RGFC を正面から攻撃し、同時に第 1 騎兵師団が北から、第 1 歩兵師団（機械化）が南から RGFC を包囲すると報告した。

この時、フランクスはヨソックに対して、RGFC を殲滅するまでにはあと 24 時間が必要

710 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 350, 368-369; クランシー『熱砂の進軍（下）』296-297 頁。
711 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 369-370.
712 *Ibid.*, pp. 369-372; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 301.
713 Bourque, *Jayhawk!*, p. 372.

だろうという自身の判断を伝えた。ヨソックはフランクスに同意した。ヨソックも同様に見積もっていた。2 月 27 日朝、ヨソックはシュワルツコフに対して、RGFC を殲滅するまでにはあと 1 日かかると報告していた[714]。

図50　状況図（2月27日2400）




出典：　Scales Jr., *Certain Victory*, Figure 5-5.

しかし、2 月 27 日深夜、RGFC の殲滅まであと 24 時間が必要だとフランクスが判断していたにも拘わらず、第 7 軍団の攻撃は勢いを喪失した。2 月 27 日 2330 頃、ヨソックはフランクスに対して、2 月 28 日の朝に戦闘停止の命令が出る可能性があることを伝えた。予想外の内容にフランクスは茫然とした。ヨソックからの指示に基づきフランクスは隷下部隊指揮官に対して、戦闘停止命令が出る可能性があることを伝達した。伝達を受けた後、第 7 軍団隷下の各部隊の攻撃の勢いは急速に低下した[715]。

2 月 27 日 2337、フランクスはヨソックから正式な命令を受領した。命令の内容は次のとおりだった[716]。

① ARCENT は一時的に攻撃を中止し、2 月 28 日 0500 までに応急防御の態勢に移行する。
② ARCENT 隷下の各部隊は戦闘を停止し、イラク軍との接触を回避せよ。あわせて

714 クランシー『熱砂の進軍（下）』325-326 頁。
715 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 385-387; クランシー『熱砂の進軍（下）』335-339 頁。
716 Bourque, *Jayhawk!*, p. 387.

各部隊は、イラク軍が所在する地域への進出及びイラク軍の後方地域での作戦を中止せよ。

③ ARCENT 隷下の各部隊は攻撃を即時再開できる態勢を維持せよ。

2 月 28 日朝の戦闘停止に向けた動きはアメリカ国内で始まった。アメリカ政府内では戦争の正当性に対する疑念が広がることに対する懸念が広がっていた。2 月 25 日夜以来、アメリカのメディアは、多国籍軍が退却するイラク軍に対する空爆を続けていることをまるで無差別殺戮であるかのように報道した[717]。また、安保理決議が容認した武力行使は、クウェート解放を目的とする武力行使であった。ブッシュ大統領もパウエルもベトナム戦争の失敗を繰り返すことは避けたいと考えていた[718]。

あわせて、軍事作戦を継続した場合、多国籍軍の結束が弱まる可能性があった。多国籍軍に参加したアラブ諸国は、イラク国内に侵攻することやフセイン政権を解体することを望んでいなかった。フランスとイギリスは戦争の長期化を避けたいと考えていた[719]。

2 月 27 日 1505（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 0705）、パウエルはシュワルツコフに電話し、今後の作戦について協議した。協議の焦点はブッシュ大統領に進言する内容、すなわち、いつ、どのような態勢で軍事力の行使を終了するかであった[720]。

シュワルツコフはパウエルに対して、RGFC を殲滅するためにはあと 1 日が必要だと伝えた。シュワルツコフは、2 月 28 日の終わりまで戦って軍事行動を停止することにより、今回の戦争を「五日間戦争」と形容することが可能だと提案した。パウエルは同意した[721]。

パウエルとの電話の後、シュワルツコフは記者会見を実施させてほしいと国防総省に願い出た。従来、記者会見を実施していたのは国防総省だった。シュワルツコフは、戦争の締め括りとなる記者会見を自身が実施することを要望した。チェイニー国防長官はシュワルツコフが記者会見を行うことを認めた[722]。

2 月 27 日 2100（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 1300）、中央軍司令部近郊のホテルにおいてシュワルツコフは記者会見を実施した。陸上攻勢作戦間にシュワルツコフが中央軍司令部の外に出たのは、すべて記者会見のためだけであった[723]。記者会見でシュワルツコフが発言した内容の要旨は次のとおりだった[724]。

---

717 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』484-485 頁。
718 パトリック・ペクストン、エレノア・ルー『大統領の戦争――イラクと対峙したブッシュの 200 日』大地舜訳（実業之日本社、1991 年）302-303 頁。
719 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』215 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』485 頁。
720 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』203-204 頁。
721 同上、204 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』484-485 頁；Gordon, *The Generals' War*, p. 404.
722 Gordon, *The Generals' War*, p. 405.
723 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』485 頁。
724 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』207 頁；コーエン『シュワルツコフ正伝 PART-2』186-187 頁。

① 中央軍（多国籍軍）は任務を達成した。
② 政策決定者が戦闘を停止すべきという判断に至るならば、私よりこれを喜ばしく感じる者はいない。
③ イラク軍を取り逃がすことはない。

記者会見でシュワルツコフが発言した内容は実際の状況と異なっていた。航空機や攻撃ヘリコプターは攻撃を続けていたが、イラク軍の退却を完全に封止してはいなかった。地上部隊は RGFC を包囲していなかった。記者会見の中で、地上部隊がイラク軍の退却を阻止しているのかと質問されたシュワルツコフは、地上部隊は配置していないが、イラク軍の戦車や火砲が退却することは不可能だと強弁した。また、シュワルツコフはイラク軍をほぼ壊滅したと主張した[725]。

一方、報道の影響を懸念していたブッシュ大統領は、2 月 28 日のうちに中央軍は勝利を収めるだろうと報告したパウエルに対して、即時の戦闘停止を提案した。パウエルはブッシュ大統領に対して、シュワルツコフと相談すると回答した。2 月 27 日 2230（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 1430）、パウエルはシュワルツコフに電話し、2 月 28 日 0500（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 2100）に戦闘を停止することに対する意見を求めた。シュワルツコフは隷下部隊指揮官に確認すると回答した[726]。

シュワルツコフからの問い合わせに対して、ヨソックは RGFC を撃破するためにはあと 24 時間が必要だと回答した。しかし、ヨソックは強く主張しなかった。ヨソックは、シュワルツコフとの間にこれ以上の軋轢が生じることを望まなかった[727]。

2 月 28 日 0157（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 1757）、ブッシュ大統領は戦闘の停止を決定した。2 月 28 日 0200（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 1800）、パウエルはシュワルツコフに電話した。パウエルが伝えた内容は次のとおりだった[728]。

① 2 月 28 日 0500（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 2100）にブッシュ大統領が声明を発表する。
② 「100 時間戦争」と形容するため、戦闘停止の時刻は 2 月 28 日 0800（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 2400）となった。

2 月 28 日朝に戦闘を停止することはアメリカ政府内で決定した。中央軍副司令官ウォラー中将はこの決定に反対した。一方、RGFC を撃破するためには 2 月 28 日の終わりまで戦うことが必要だと主張していたにも拘わらず、シュワルツコフは 2 月 28 日朝に戦闘を停止

725 Atkinson, *Crusade*, pp. 470-471.
726 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』203-206 頁；シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』485 頁。
727 Gordon, *The Generals' War*, p. 419; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』485 頁。
728 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』208-209 頁。

するという政府の決定に反対しなかった[729]。2 月 9 日のブリーフィングの時と同様、どのように陸上攻勢作戦を終わらせるのかという問題に直面したシュワルツコフは、RGFC の殲滅という目標を達成することを事実上諦め、代わりに敵兵力の破壊という目標は達成した、これ以上戦って犠牲者を出すことは無益であり即時の戦闘停止は可能だと弁明した[730]。

弁明の言葉とは正反対にシュワルツコフは、イラク軍が戦車や野戦砲などの装備を温存したままイラク国内に退却することを懸念していた。しかし、この懸念を聞いたパウエルはシュワルツコフに対して、イラク軍の一部を取り逃がし、イラク国内に退却させてしまうことはやむを得ないと回答した。アメリカ政府内にはイラク軍は壊滅した、あるいはイラクには戦争を継続する力は残っていないという見解が溢れていた。シュワルツコフは、戦闘停止の時刻まで攻撃ヘリコプターでイラク軍を攻撃することを命じた[731]。

シュワルツコフが懸念したとおり、イラク軍、中でも特に RGFC は壊滅していなかった。戦後明らかになった 2 月 27 日付のイラク軍の報告書は、RGFC 隷下のネブカドネザル歩兵師団、ハムラビ機甲師団及びアドナン自動車化歩兵師団が損害を回避し、戦闘が可能な状態を維持していることを記録している。また、同報告書は、2 月 27 日を通して第 1 機甲師団と戦ったメディナ機甲師団が 50%以上の戦力を残していることを記録している[732]。

2 月 28 日 0502（アメリカ東部標準時 27 日 2102）、ブッシュ大統領は、2 月 28 日 0800（アメリカ東部標準時 2 月 27 日 2400）に戦闘を停止すること及び 100 時間で軍事的目的を達成したことを宣言した。シュワルツコフは隷下部隊に対して、2 月 28 日 0800 に戦闘を停止するように命じた[733]。

ブッシュ大統領の声明を知ったフセイン大統領は、バグダッドで勝利を宣言した[734]。フセイン大統領は、イラク軍が粘り強く抵抗した結果、アメリカ政府は損害を恐れて侵攻を諦めたと主張した[735]。しかし、2 月 28 日、イラクのアジズ外相は安全保障理事会議長に書簡を送り、安保理決議の受け入れを表明した[736]。

（イ）　第 18 空挺軍団（第 3 装甲騎兵連隊、第 82 空挺師団、第 101 空挺師団（空中強襲）、第 24 歩兵師団（機械化）、フランス第 6 軽機甲師団）

第 18 空挺軍団の右翼では、2 月 26 日深夜から第 3 装甲騎兵連隊が攻撃目標「ティム（Tim）」（ジャリバ空港の 30km 南に位置する飛行場）に向かって攻撃を開始した。第 3

729 Gordon, *The Generals' War*, pp. 422-423.
730 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』485 頁。2 月 9 日のチェイニーに対するブリーフィングは本章第 3 節(4)項ア(オ)を参照。
731 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』486-488 頁。
732 Woods, *The Mother of All Battles*, p. 239.
733 パウエル『マイ・アメリカン・ジャーニー――統合参謀本部議長時代編』210 頁；Bourque, *Jayhawk!*, p. 387.
734 <https://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/gulf/script_b.html>（2020 年 7 月 5 日アクセス）
735 Woods, *The Mother of All Battles*, p. 240.
736 松井『湾岸戦争と国際連合』131-132 頁。

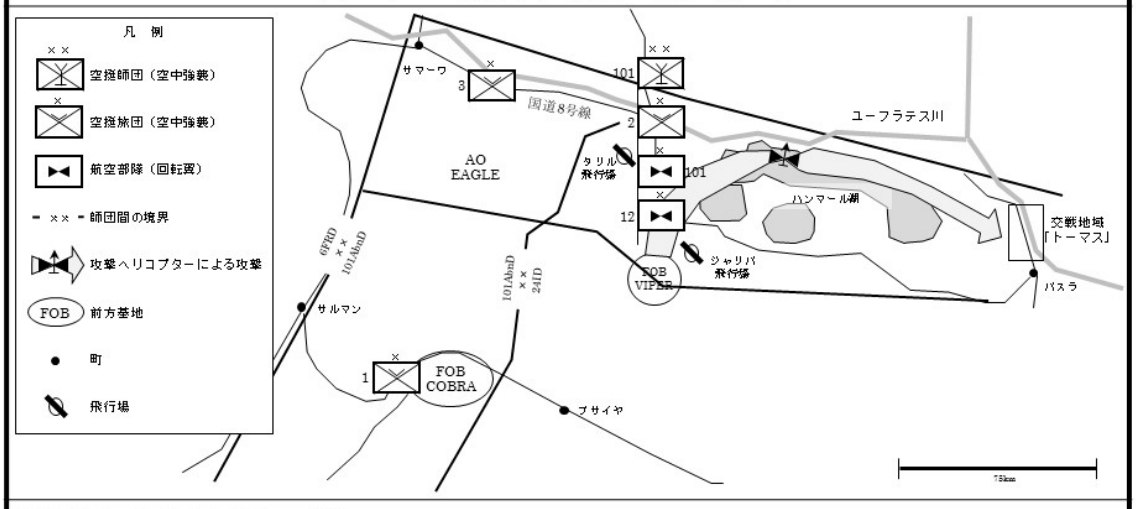
装甲騎兵連隊は、24 時間以上、東側に隣接する第 7 軍団隷下の第 1 機甲師団と連携できていなかった。第 3 装甲騎兵連隊長スタール大佐は、第 7 軍団との連絡を回復することを急いだ。一方、攻撃目標「ティム」は第 18 空挺軍団と第 7 軍団の間の境界線付近に設定されていた。

2 月 27 日早朝、第 3 装甲騎兵連隊は攻撃目標「ティム」を攻撃した。この時、第 7 軍団第 1 機甲師団隷下の工兵大隊との間で友軍相撃が起こった。友軍相撃が発生したことを受けて、第 18 空挺軍団長ラック中将と第 7 軍団長フランクス中将は、両軍団の間の境界線沿いに約 5km の幅の緩衝地帯を設けた。両軍団長は、緩衝地帯内でイラク軍を発見した場合には単独で攻撃しないことに合意した[737]。

第 3 装甲騎兵連隊が攻撃目標「ティム」を確保した後、ラックは第 101 空挺師団（空中強襲）長ピーエイ少将に対して、攻撃ヘリコプターにより敵の後方地域を攻撃し、イラク軍の退路を遮断するように命じた。第 101 空挺師団（空中強襲）は 2 月 27 日 0900 から攻撃目標「ティム」に 2 個航空旅団（4 個 AH-64 大隊）による攻撃に必要な燃料と弾薬の集積を開始し、2 月 27 日 1300 までに同地に前方基地「バイパー（Viper）」を開設した[738]。（図 51 を参照）

2 月 27 日 1430、第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の第 12 及び第 101 航空旅団が前方基地「バイパー」から出撃し、バスラの北方に設定した交戦地域「トーマス（Thomas）」を攻撃した。4 時間に及ぶ攻撃により、第 12 及び第 101 航空旅団の攻撃ヘリコプターは多数の火砲や輸送車両を破壊した。しかし、この時、イラク軍の機甲師団はバスラの南側の地域に集結中だった。交戦地域「トーマス」で AH-64 が破壊した戦車はなかった[739]。

図51　第101空挺師団（空中強襲）の攻撃（2月27日）




出典：　Scales Jr., *Certain Victory*, p.304.

737 Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 302-303; クランシー『熱砂の進軍（下）』204-205 頁。
738 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 303; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 393.
739 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 303; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 395-396.

戦後の研究の中には、この時の AH-64 による交戦地域「トーマス」に対する攻撃の際、空軍と陸軍が連携していなかったと指摘するものがある。ARCENT による戦後の分析は、地上での攻撃の進展が速かったために空軍が行う地上部隊に対する協力が困難になるという皮肉な結果を招いたと指摘している[740]。

こうした研究において議論の対象となっているのは、空軍による対地攻撃と陸軍の火力発揮を統制する FSCL である。FSCL は陸軍の部隊指揮官が地上部隊の前方に引く線であり、地上部隊から見て FSCL の向こう側の地域は、空軍が地上部隊と調整をせずに自由に対地攻撃を実施することができる地域だった。一方、FSCL の地上部隊側の地域に対して空軍が対地攻撃を実施する場合、陸軍の部隊指揮官との調整が必要だった[741]。

陸上攻勢作戦においてシュワルツコフは、アメリカ陸軍の教義上では軍団長以上の指揮官に FSCL を設定する権限が認められていたにも拘わらず、FSCL の設定や変更を厳格に管理した[742]。2 月 27 日朝、シュワルツコフは、それまでユーフラテス川の南岸に沿って引いていた FSCL をユーフラテス川の北岸に変更した。FSCL の変更により、空軍がバスラとナシリヤを結ぶ幹線道路沿いの地域に対して対地攻撃を実施するためには、陸軍の部隊指揮官との調整が必要となった。一方、第 101 空挺師団（空中強襲）隷下の 2 個航空旅団は、空軍と調整することなく交戦地域「トーマス」を攻撃できるようになった[743]。

空軍機と AH-64 を比較した場合、AH-64 による対地攻撃が効果的だったとは言えない。JSTARS により広範囲にわたってイラク軍地上部隊の位置を解明する能力を保有していた空軍に対して、陸軍はイラク軍の後方地域において敵の地上部隊を発見する能力が低かった。また、ヘリコプターの行動半径は狭かった[744]。CENTAF 司令官ホーナー中将は、AH-64 だけが交戦地域「トーマス」を攻撃していることに不満を持っていた。FSCL の変更から 8 時間後、空軍の要望により FSCL は元の位置に戻り、バスラとナシリヤを結ぶ幹線道路沿いの地域は空軍が自由に対地攻撃を実施できる地域となった。しかし、FSCL が元の位置に戻るまでの間、空軍は十分な対地攻撃能力を持っていたにも拘わらず、イラク軍の地上部隊を攻撃できなかった[745]。

FSCL に関する問題は第 7 軍団でも起こった。2 月 27 日、第 7 軍団長フランクス中将は、ペルシャ湾に向かって前進する隷下部隊が誤って FSCL を超えてしまい、空軍との間で友軍相撃が起こるのではないかと懸念していた。第 7 軍団参謀は空軍の連絡将校を通じて、FSCL をペルシャ湾の海岸線の近くに変更することを中央軍司令部に要望した。2 月 27 日 1400、シュワルツコフは第 7 軍団の要望のとおり、FSCL を海岸線に変更した。しかし、

---

740 Swain, *"Lucky War"*, p. 228.
741 Headquarters, Department of the Army, *FM 6-20-30: Tactics, Techniques, and Procedures for Fire Support for Corps and Division Operations* (Washington, D.C.: GPO, 1989), p. B-20.
742 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 367-368; クランシー『熱砂の進軍（下）』304 頁。
743 Gordon, *The Generals' War*, pp. 411-412.
744 Swain, *"Lucky War"*, p. 228.
745 Gordon, *The Generals' War*, pp. 411-412; P. Mason Carpenter, *Joint Operations in the Gulf War: An Allison Analysis* (Montgomery: Air University, 1995), p. 61.

FSCL は変更されたけれども、戦闘停止命令が出る可能性があることを知った第 7 軍団の攻撃の勢いは低下した。第 7 軍団は中央軍司令部に対して、FSCL を元の位置に戻して退却するイラク軍を空軍機で攻撃することを要望した。しかし、シュワルツコフは FSCL を元の位置に戻さなかった。2 月 27 日 1900、シュワルツコフはペルシャ湾沿いの高速道路の線に FSCL を確定した。クウェートとバスラを結ぶ道路より西側の地域は、空軍が自由に対地攻撃を行うことができない地域となった[746]。この結果、500 両以上の戦車、250 両に及ぶ装甲車及び 9 個砲兵大隊が集結していたバスラ南側の地域は、多国籍軍による空爆の空白地帯となった[747]。ハムラビ機甲師団の戦車の約 90%、装甲車の 70%及び野戦砲の 75%は、無傷でハンマール湖の北方に後退した[748]。空爆の空白地帯となったバスラ南側の地域は、後に「バスラ・ポケット（Basrah pocket）」と呼ばれた。

シュワルツコフがどのような考え方に基づいて第 7 軍団正面の FSCL を変更したのかは明らかになっていない。2 月 27 日午後以降、シュワルツコフは、戦闘停止に関するパウエルとの電話での協議や自身で行う記者会見の準備に奔走していた。『将軍たちの戦争』の著者ゴードンらは、この時、「死のハイウェイ」でイラク軍にこれ以上の攻撃を加えることは控えたほうがよいという意見が中央軍司令部内にあったと説明している[749]。『ジェイホーク』の著者ブルクは、まさに RGFC を攻撃していた時に FSCL について CENTAF 司令官ホーナー中将と調整する責任を持った地上部隊指揮官がいなかったと指摘し、婉曲的にシュワルツコフを批判している[750]。対地攻撃について空軍と調整する責任があった指揮官は、陸上構成部隊指揮官の役割を担い、かつ FSCL の設定や変更を管理していたシュワルツコフだった。戦後、シュワルツコフは FSCL を巡る議論をよく知らなかったと回顧している[751]。

2 月 27 日 0430、第 24 歩兵師団（機械化）が攻撃目標「ゴールド」を確保した[752]。その後、第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 2 旅団は 2 月 27 日 0500 にジャリバ飛行場（攻撃目標「オレンジ」）に対する攻撃準備射撃を開始し、2 月 27 日 0600 に攻撃を開始した。イラク軍の 1 個戦車大隊を撃破した第 2 旅団は、2 月 27 日 1000 にジャリバ飛行場を確保した[753]。（図 52 を参照）

第 18 空挺軍団長ラック中将はバスラを攻撃することを決定した。当初、ラックはバスラ攻撃に消極的だった。ラックは、イラク軍をさらに追い詰めた場合、イラク軍による化学兵器の使用やルメイラ油田への放火を誘発する可能性があると判断していた。一方、第 24 歩兵師団（機械化）長マカフリー少将はバスラ攻撃が必要だと主張した。最終的にラックはマ

---

746 Gordon, *The Generals' War*, pp. 412-413; Bourque, *Jayhawk!*, p. 368; Carpenter, *Joint Operations in the Gulf War*, pp. 61-62.
747 河津『湾岸戦争大戦車戦（下）』314-328 頁。
748 Bourque, *Jayhawk!*, p. 368.
749 Gordon, *The Generals' War*, p. 412.
750 Bourque, *Jayhawk!*, p. 397.
751 Gordon, *The Generals' War*, p. 413.
752 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 379.
753 *Ibid.*, p. 389; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 305-306.

カフリーの意見を採用した[754]。

ラックはマカフリーに対してバスラ攻撃を命じた。バスラ攻撃のため、ラックは第 24 歩兵師団（機械化）に第 3 装甲騎兵連隊を配属し、あわせて 1 個砲兵旅団と 1 個 AH-64 大隊に対して第 24 歩兵師団（機械化）に協力するように命じた。2 月 27 日 1300、第 24 歩兵師団（機械化）はバスラに向かって攻撃を開始した。第 24 歩兵師団（機械化）は北から順に第 1 旅団、2 旅団、第 3 装甲騎兵連隊を並列して攻撃した。マカフリーは、2 月 28 日 0500 からバスラに対する攻撃を開始することを目指し、イラク軍の抵抗を排除しながら前進した[755]。

2 月 27 日 1700、第 24 歩兵師団（機械化）はハンマール湖の南側に設定した統制線「アクス（Axe）」を通過した。前進間、マカフリーは攻撃の勢いを維持することを重視した。国道 8 号線沿いには RGFC の一部が展開していたけれども、第 24 歩兵師団（機械化）の前衛大隊はイラク軍の防御陣地や障害を可能な限り迂回しながらバスラに向かって前進を続けた[756]。

マカフリーは、第 24 歩兵師団（機械化）の後方連絡線を脅かす可能性があるイラク軍を排除するため、隷下の第 197 旅団によりタリル飛行場で抵抗を続けていたイラク軍を攻撃した。2 月 27 日 1415、197 旅団はタリル飛行場を確保した[757]。

第 18 空挺軍団の左翼では、フランス第 6 軽機甲師団がサルマンを確保した。西方のナジャフ（Najaf）に集結中のイラク陸軍第 54 師団を警戒するため、フランス第 6 軽機甲師団長ジャンビエ准将はサルマン北西に位置するシャバカ（Shabakah）を攻撃し、2 月 27 日 1430 に同地を確保した[758]。

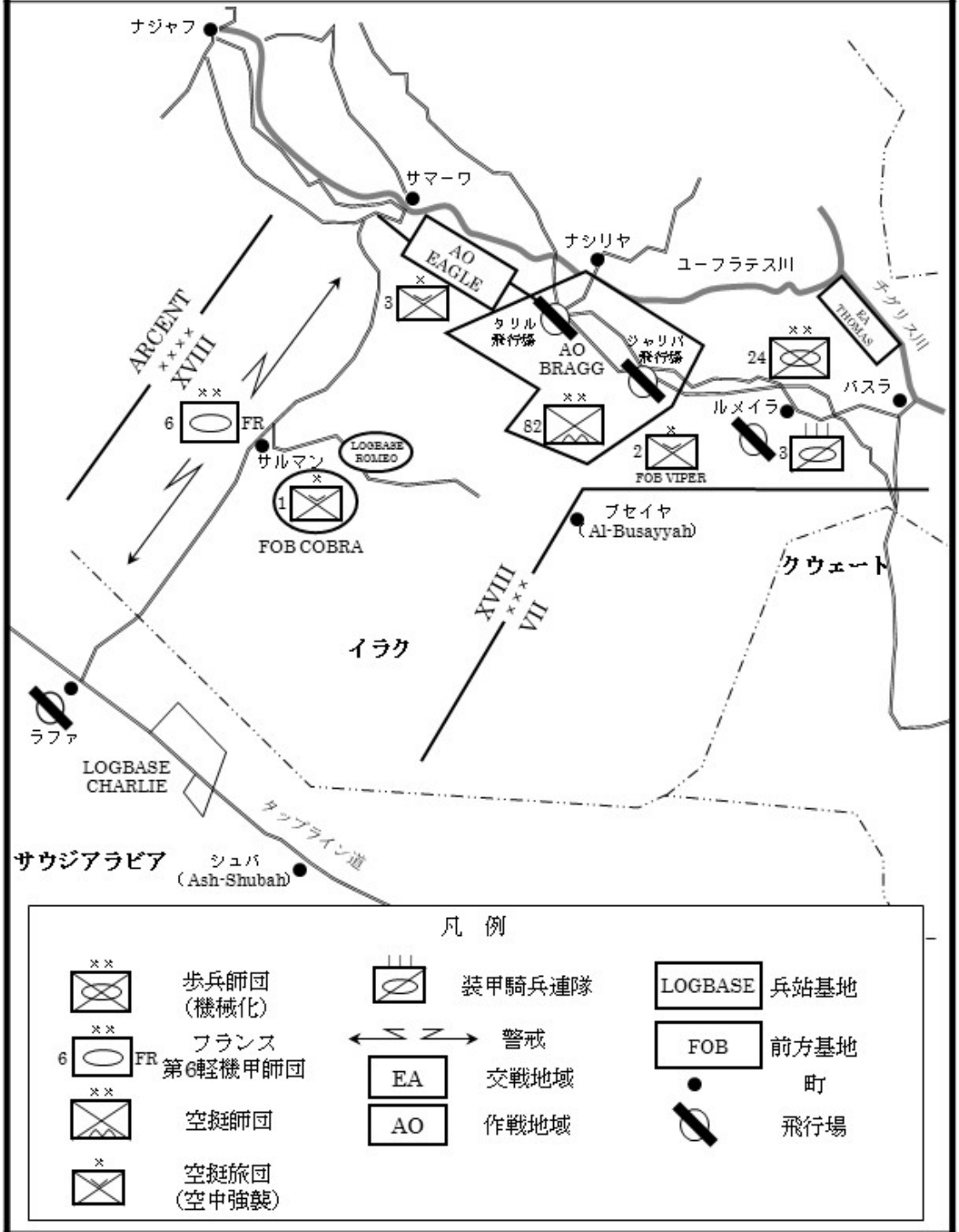
第 82 空挺師団は、ジャリバ飛行場とタリル飛行場の周辺地域においてイラク軍が遺棄した兵器を破壊するための準備を開始した。シュワルツコフは、戦後二度とイラクが近隣諸国に侵攻することがないようにするため、2 月 28 日 1000 以降イラク軍が遺棄した兵器を破壊するように命じた[759]。

2 月 28 日 0145、ヨソックはラックに対して、2 月 28 日に攻撃停止命令が出る可能性があることを伝えた。連絡を受けた時、第 18 空挺軍団は 2 月 28 日朝からの攻撃を準備している最中だった[760]。

---

754 Gordon, *The Generals' War*, pp. 405-406.
755 *Ibid.*, p. 406; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 308.
756 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 306; Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 390-391.
757 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, pp. 391-392.
758 *Ibid.*, p. 397.
759 *Ibid.*, pp. 396-397.
760 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 308.

図52　第18空挺軍団の攻撃（2月28日）




出典：　Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 403.

（6） 2月28日の陸上作戦から3月3日の停戦合意まで

ア MARCENTの攻撃

ブッシュ大統領による勝利宣言の後、MARCENT司令官ブーマー中将が出した命令の要旨は次のとおりだった[761]。

① MARCENTは2月28日0800に攻撃を停止する。
② MARCENT隷下の各部隊はそれぞれの現在地において防御に移行せよ。あわせてMARCENT隷下の各部隊は攻撃の再開に備えよ。

2月28日0647、第1海兵師団長マイアット少将は隷下部隊に対して攻撃の停止を命じた。第1海兵師団はクウェート国際空港一帯を確保した。3月1日、第1海兵師団はサウジアラビアへの兵力の引き揚げを開始した[762]。

第2海兵師団は、イラク軍防御陣地の掃討及びイラク軍が遺棄した兵器の破壊を実施した。第1海兵師団がサウジアラビアに移動した後、第2海兵師団隷下の第2軽装甲歩兵大隊はクウェート国際空港を確保した。3月中旬、第2海兵師団はサウジアラビアへの兵力の引き揚げを開始した[763]。

イ アラブ合同軍の攻撃

戦闘停止命令の後、JFC-Eはクウェート市を確保し、周辺地域の掃討を実施した。サウジアラビア軍特殊部隊は同国大使館を確保した。

JFC-Nは戦闘を停止し、それぞれの地域で防御の態勢に移行した。エジプト軍レンジャー連隊は同国大使館を確保した。エジプト第4機甲師団はクウェート市西部を掃討した。エジプト第3機械化師団はアブラクにおいて北方のイラク軍に対する警戒を継続した[764]。

ウ ARCENTの攻撃

（ア） 第7軍団（第2装甲騎兵連隊、第1機甲師団、第3機甲師団、第1歩兵師団（機械化）、第1騎兵師団、イギリス第1機甲師団）

761 Quilter II, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the I Marine Expeditionary Force*, pp. 104-106.
762 Cureton, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 1st Marine Division*, pp. 120-121.
763 Mroczkowski, *U.S. Marines in the Persian Gulf, 1990-1991: With the 2nd Marine Division*, pp. 69-70.
764 Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 292.

2 月 28 日 0315、ヨソックはフランクスに対して、2 月 28 日 0500 を予定していた戦闘停止時刻が 2 月 28 日 0800 に変更されたことを伝達した。あわせてヨソックは口頭で、フランクスに対して新たな命令を出した。命令の内容は次のとおりだった[765]。(図 53 を参照)

① ARCENT は攻撃を継続し、クウェート戦域内に所在するイラク軍の戦闘車両を可能な限り撃破する。
② 第 7 軍団は空軍の協力を受けながら、責任地域内において攻撃ヘリコプターによる攻撃を実施してイラク軍の戦闘車両を破壊せよ。
③ 第 7 軍団はサフワン交差点を確保してイラク軍の後退を阻止せよ。

2 月 27 日深夜、戦闘停止命令が出る可能性があることを知った第 7 軍団隷下の各部隊は攻撃の勢いを喪失した。しかし、戦闘停止時刻が 2 月 28 日 0500 から 2 月 28 日 0800 に変更されたため、フランクスは第 7 軍団を再始動させなければならなかった。『ジェイホーク』の著者ブルクは、リヤドの司令部から動かなかったシュワルツコフとヨソックは実戦感覚を喪失しており、それまで 4 日間も攻撃を続けて疲弊した部隊がさらに 5 日目の攻撃を実施した場合、その攻撃がどのようになるかを理解できなかったと批判している。また、ブルクは、シュワルツコフとヨソックは軍隊指揮における基本的な手順を無視し、計画作成のための時間を隷下部隊に与えなかったと批判している[766]。

この時、シュワルツコフは、戦闘停止前に地上部隊でサフワン交差点を封鎖することを重視していた。サフワン交差点は、クウェートから退却するイラク軍にとって交通の要衝だった。また、サフワン交差点の周辺にはスカッド・ミサイルの発射に適した地域が多く存在した。イラク軍は、サフワン交差点付近からサウジアラビアのダーランに対して繰り返しミサイルを発射していた。戦後二度とイラク軍がアラブ諸国に脅威を与えることがないようにするため、シュワルツコフは地上部隊でサフワン交差点を封鎖し、イラク軍の兵器を一網打尽にすることを目指していた[767]。

しかし、シュワルツコフが地上部隊でサフワン交差点を封鎖することを重視していたにも拘わらず、その企図は指揮系統を通じてフランクスに伝わらなかった。回顧録でシュワルツコフは、地上部隊でサフワン交差点を封鎖することを提案し、かつ第 7 軍団隷下の第 1 歩兵師団（機械化）であれば戦闘停止前までにサフワン交差点を確保できるだろうと報告したのはヨソックだったと主張している[768]。また、『ジェイホーク』の著者ブルクは、ヨソックはフランクスに対してサフワン交差点を封鎖する任務が重要であることを伝達せず、戦闘停止時刻の変更だけを強調したと指摘している[769]。一方、回顧録においてフランクスは、サ

[765] Bourque, *Jayhawk!*, pp. 389-390; クランシー『熱砂の進軍（下）』344-346 頁。
[766] Bourque, *Jayhawk!*, p. 388.
[767] *Ibid.*, pp. 387-389; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』487-488 頁。
[768] シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』487-488 頁。
[769] Bourque, *Jayhawk!*, pp. 389-390.

フワン交差点を確保しなければならないことを見落としていたと述べ、自身の過失を認めている[770]。

2 月 28 日 0400、フランクスは隷下部隊指揮官に対して攻撃の再開を命じた。命令の要旨は次のとおりだった[771]。

① 隷下各部隊は攻撃を再開せよ。
② 2 月 28 日 0800 までにイラク軍の兵器を可能な限り破壊せよ。
③ 第 1 歩兵師団（機械化）は、攻撃ヘリコプターによりイラク軍のサフワン交差点通過を阻止せよ。

燃料の補給のため、第 1 歩兵師団（機械化）が攻撃を再開した時刻は 2 月 28 日 0600 になった。2 月 28 日 0645、第 1 歩兵師団（機械化）隷下の AH-64 中隊がサフワン交差点上空に到着した。しかし、AH-64 中隊はイラク軍を発見できなかった。2 月 28 日 0700、第 1 歩兵師団（機械化）は攻撃目標「デンヴァー」を確保した[772]。

サフワン交差点は攻撃目標「デンヴァー」の 15km 北側に位置していた。しかし、第 1 歩兵師団（機械化）は地上部隊でサフワン交差点を確保しなかった。戦後、第 1 歩兵師団（機械化）長レーム少将は、サフワン交差点を地上部隊で確保せよという命令は受けていないと主張している[773]。

第 7 軍団隷下の各部隊は、2 月 28 日 0758 にフランクスが戦闘停止を命じるまで攻撃を続けた。2 月 28 日 0700、第 7 軍団隷下の第 1 及び第 3 機甲師団が攻撃を再開した。第 1 機甲師団は、イラク軍の抵抗を殆ど受けずに統制線「キウィ」に到達した。一方、行動地帯の正面幅が狭かったため、第 3 機甲師団の攻撃は渋滞した。第 3 機甲師団は殆ど前進できなかった[774]。

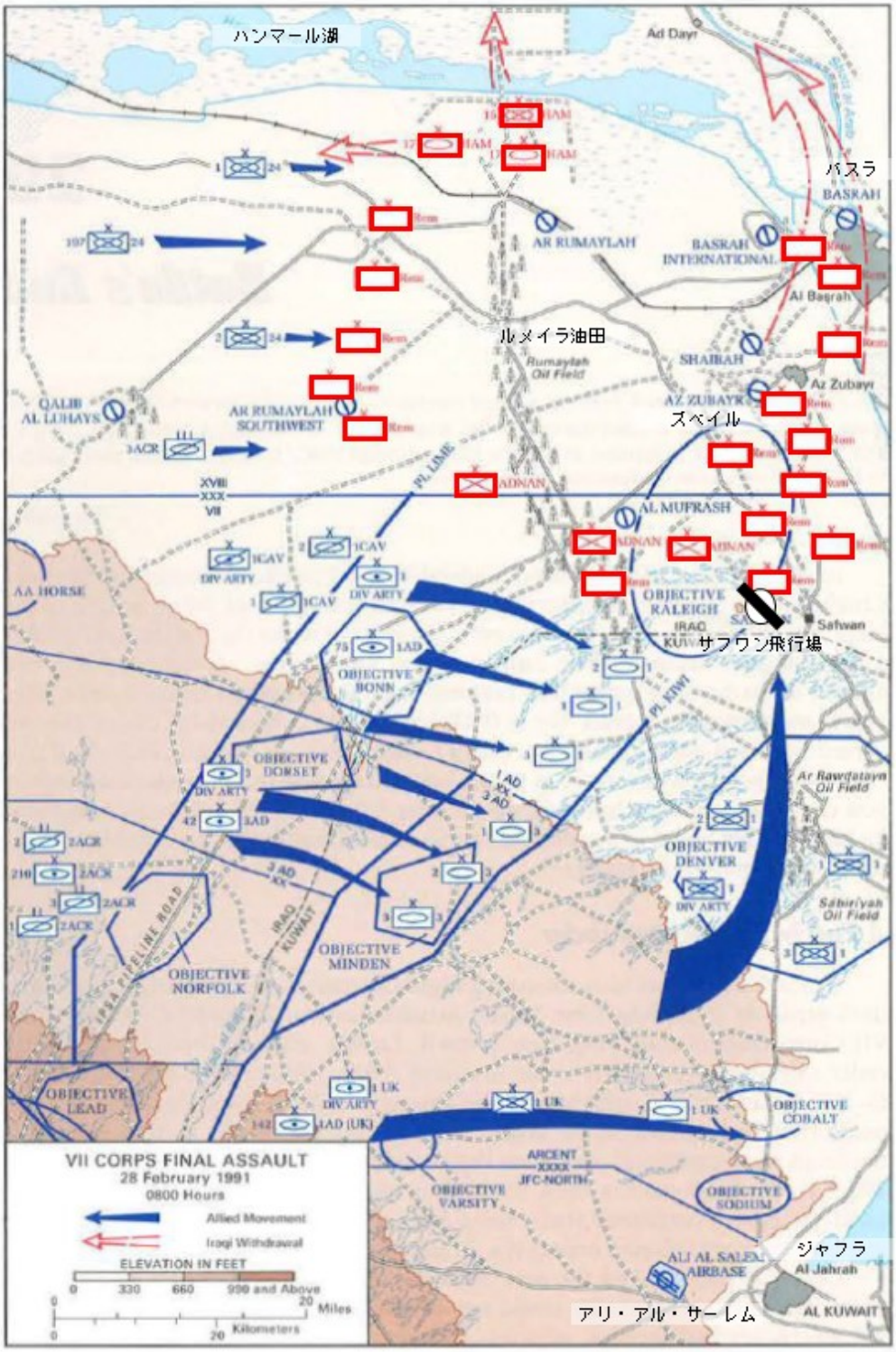
第 1 騎兵師団は第 1 機甲師団の後方で攻撃を開始できる態勢を確立していた。第 1 騎兵師団を投入するためには、第 1 機甲師団との調整が必要だった。一方、戦闘停止時刻までに残っている時間は僅かだった。フランクスは第 1 騎兵師団を投入しなかった[775]。

2 月 28 日 0630、前日昼に攻撃目標「ヴァーシティ」を確保したイギリス第 1 機甲師団が攻撃を再開した。2 月 28 日 0725、イギリス第 1 機甲師団隷下の第 7 機甲旅団が攻撃目標「コバルト（Cobalt）」を確保した。イギリス第 1 機甲師団はクウェートとバスラを結ぶ国道を封鎖した[776]。

---

770 クランシー『熱砂の進軍（下）』345-349、373 頁。
771 同上、345-349、373 頁 ; Scales Jr., *Certain Victory*, pp. 308-310; Bourque, *Jayhawk!*, p. 390.
772 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 395-396.
773 *Ibid.*, p. 392.
774 *Ibid.*, p. 395; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 310.
775 Bourque, *Jayhawk!*, p. 395.
776 *Ibid.*, p. 395.

図53　第7軍団の攻撃（2月28日）




出典： Bourque, *Jayhawk!*, p. 386.

一方、シュワルツコフの関心は、どのように停戦交渉を行うかという問題に移っていた。シュワルツコフは、最終的にサフワン飛行場で停戦交渉を行うことを決定した。シュワルツコフの狙いは、クウェートとイラクの国境線からイラク領内に入った地点であり、かつイラク軍の航空機や戦闘車両の残骸が溢れるサフワン飛行場で停戦交渉を実施することにより、多国籍軍が勝利したことを世界中に印象づけることにあった。シュワルツコフはパウエルに対して、サフワン飛行場を停戦交渉の場所に選定したことを報告した[777]。

当初、シュワルツコフは、1945 年 9 月に日本が降伏文書に調印した戦艦「ミズーリ」で停戦交渉を行うつもりだった。しかし、準備期間が不足したため、ジャリバ飛行場が第二の候補地となった。ところが 2 月 28 日夜、第 18 空挺軍団長ラック中将がヨソックに対して、ジャリバ飛行場内には不発弾が散乱しており、停戦交渉を行う場所として適さないと報告した。ヨソックはシュワルツコフに対してジャリバ飛行場の状況を報告した。しばらく地図を眺めた後、シュワルツコフは代替地としてサフワン交差点の 6km 西側に位置するサフワン飛行場を選定した[778]。

しかし、この時、サフワン飛行場にはイラク軍が集結していた。シュワルツコフはサフワン交差点の確保を命じたけれども、サフワン飛行場の確保を命じていなかった。また、サフワン飛行場を停戦交渉の場所として選定した際、シュワルツコフは部隊の状況についてヨソックや中央軍の参謀に確認しなかった。また、シュワルツコフは停戦交渉の場所の候補地について意見を求めることをしなかった。一方、ヨソックや中央軍の参謀はシュワルツコフに対して、ジャリバ飛行場の代替地について助言しなかった[779]。

第 7 軍団がサフワン飛行場を確保していないことを知ったシュワルツコフは激怒した。シュワルツコフは、第 7 軍団がサフワン飛行場を確保していると誤認していた。『幸運な戦争』の著者スウェインは、ARCENT 司令部もしくは第 7 軍団司令部が中央軍司令部に対して、地上部隊がサフワン飛行場に対する攻撃を開始したという誤った報告を実施した可能性を指摘している[780]。

第 7 軍団がサフワン飛行場を確保していないことを命令違反と見做したシュワルツコフはヨソックに対して、命令に違反した理由及びサフワン交差点を確保したという誤った報告を実施した理由を文書で報告せよと命令した。あわせてシュワルツコフはヨソックに対して、サフワン飛行場の確保を命じた[781]。

この時、シュワルツコフのフランクスに対する不信は頂点に達していた。命令を出す際、シュワルツコフはヨソックに対して、フランクスが任務を理解したか確認せよ、フランクスには任務を理解する能力が乏しい、フランクスを飛び越えて第 1 歩兵師団（機械化）長レーム少将に直接指示を出せと指示した[782]。

---

[777] *Ibid.*, p. 399.
[778] *Ibid.*; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』488-490 頁。
[779] Bourque, *Jayhawk!*, p. 399.
[780] Swain, *"Lucky War"*, p. 289.
[781] Bourque, *Jayhawk!*, pp. 400-402; シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』490-491 頁。
[782] Gordon, *The Generals' War*, p. 441.

サフワン飛行場を確保する際、フランクスはイラク軍との本格的な戦闘に陥らないこと及び自軍に損害を出さないことの二つに注意を払った。サフワン飛行場一帯の偵察をレームに命じた時、フランクスは、偵察の目的はイラク軍を撃破することではなく、サフワン飛行場が停戦交渉で使用できるかどうかを確認することだと強調した[783]。

3 月 1 日 0615、第 1 歩兵師団（機械化）隷下の騎兵大隊がサフワン飛行場に向かって前進を開始した。3 月 1 日 0700、騎兵大隊はサフワン飛行場の北側でイラク軍の 1 個機甲旅団の防御陣地を発見した。サフワン飛行場の東側の交差点にはバスラへ向かうイラク軍の車両が溢れていた。騎兵大隊が発見した防御陣地は「バスラ・ポケット」の南端の防御陣地だった[784]。

騎兵大隊長はイラク軍の大佐に対して、サフワン飛行場を明け渡すことを要求した。しかし、イラク軍の大佐は要求を拒否した。騎兵大隊長は上空の AH-64 に攻撃態勢をとるように命じた。3 月 1 日 1200 頃、イラク軍はサフワン飛行場を明け渡した[785]。

3 月 1 日 1500、シュワルツコフから圧力を受けていたヨソックは指揮系統上の直近下位の指揮官であるフランクスを飛び越えて、直接レームに対して指示を与えた。レームはイラク軍と交渉していた第 2 旅団長を通じて、3 月 1 日 1600 までにサフワン交差点一帯を明け渡さなければ攻撃するとイラク軍に伝達した。第 2 旅団長は隷下の 4 個大隊でイラク軍を取り囲んだ。3 月 1 日 1630、イラク軍はサフワン交差点一帯を明け渡した[786]。

（イ）　第 18 空挺軍団（第 3 装甲騎兵連隊、第 82 空挺師団、第 101 空挺師団（空中強襲）、第 24 歩兵師団（機械化）、フランス第 6 軽機甲師団）

戦闘停止命令が出る可能性があることを知った第 18 空挺軍団長ラック中将は驚愕した。2 月 28 日 0200、ラックは戦闘停止に関する正式な命令を受領した。ラックから 2 月 28 日 0500 をもって戦闘を停止せよという命令を受領した第 24 歩兵師団（機械化）長マカフリー少将は、バスラに対する攻撃を開始する直前になって戦闘停止命令が出たことに対する不満を隠さなかった。マカフリーは 2 月 28 日 0400 からバスラに対する攻撃を開始する予定だった[787]。

ラックは隷下部隊指揮官に対して、攻撃を中止して防御の態勢に移行するように命じた。しかし、第 18 空挺軍団と対峙していたイラク軍は後退の気配を見せなかった。このため、ラックは強制的にイラク軍を後退させることを決意した。第 18 空挺軍団隷下の各部隊は戦闘時と同じ隊形でイラク軍に接近した。また、ラックは航空機や攻撃ヘリコプターを多用した。イラク軍の多くはアメリカ軍の勧告に従った。しかし、RGFC が勧告に従わないことは

783 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 400-402; クランシー『熱砂の進軍（下）』374-376 頁。
784 Bourque, *Jayhawk!*, pp. 402-403.
785 *Ibid.*, p. 403.
786 *Ibid.*, p. 405; クランシー『熱砂の進軍（下）』376 頁。
787 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 400.

少なくなかった[788]。

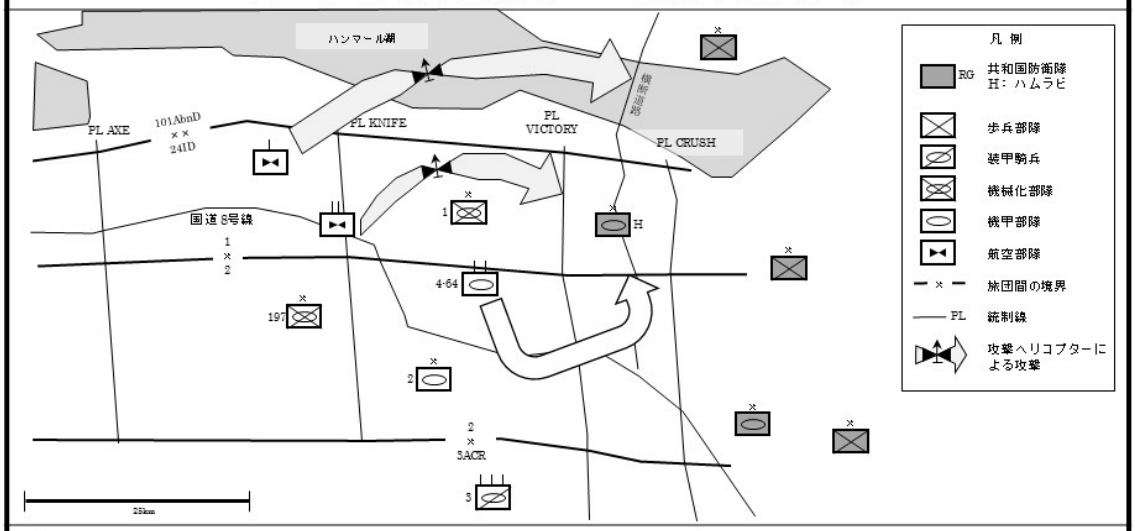
2 月 28 日の終わりまでに第 24 歩兵師団（機械化）隷下の第 1 旅団は統制線「ビクトリー（Victory）」まで戦力を推進し、防御の態勢に移行した。第 1 旅団はハンマール湖を横断する道路を封鎖した。ハムラビ機甲師団にとってハンマール湖横断道路はバクダッドに帰還するための最短経路だった[789]。（図 54 を参照）

3 月 2 日 0200、第 1 旅団はハンマール湖横断道路に向かって移動しているハムラビ機甲師団の車列を発見した。3 月 2 日 0430 にも第 1 旅団はハムラビ機甲師団の車列を発見した。3 月 2 日 0807 頃、ハムラビ機甲師団の戦車が第 1 旅団を砲撃した[790]。

第 1 旅団長はハムラビ機甲師団を攻撃することを決定した。ハムラビ機甲師団が封鎖線の突破を企図していると判断したマカフリーは、第 1 旅団長に対して攻撃の許可を与えた。第 1 旅団は攻撃ヘリコプターで車列の先頭を撃破し、ハンマール湖横断道路を塞いだ。同時に第 24 歩兵師団（機械化）の砲兵部隊は車両が密集していた地域を制圧した[791]。

3 月 2 日 1500、第 1 旅団はハムラビ機甲師団に対する攻撃を終了した。第 1 旅団は約 30 両の戦車、約 80 両の装甲車、約 70 門の火砲及び約 500 両の輸送車両を破壊した。しかし、この時、ハムラビ機甲師団は第 24 歩兵師団（機械化）を迂回し、200 両の戦闘車両をハンマール湖の東側からユーフラテス川の北岸に退却させていた。この戦いは、後に「ルメイラの会戦（Battle of Rumaylah）」と呼ばれた[792]。

図54　第24歩兵師団（機械化）とハムラビ機甲師団の戦闘（3月2日）




出典： Scales Jr., *Certain Victory*, p. 313.

788 Scales Jr., *Certain Victory*, p. 310.
789 *Ibid.*, p. 310.
790 Toomey, *XVIII Airborne Corps in Desert Storm*, p. 408.
791 *Ibid.*, p. 409.
792 *Ibid.*, p. 410; Scales Jr., *Certain Victory*, p. 312.

エ　停戦合意

1991 年 3 月 2 日、湾岸地域における戦闘停止の条件を定めた安保理決議 686 が採択された。この決議によりイラクには 1990 年に採択された 12 の安保理決議すべてを受け入れることに加えて、次のことが要求された[793]。

① クウェート併合に関する主張とこれに伴う行動の即時撤回
② クウェート侵攻及び占領により生じた損失、損害または傷害に対する責任を受け入れること
③ 没収したクウェートの財産の即時返還
④ 軍による敵対的または挑発的行為の停止
⑤ 戦争捕虜の即時解放及び遺品の返還
⑥ 地雷、機雷、ブービートラップ、その他の爆発物、化学兵器、生物兵器及びこれらの兵器に関する物質を特定するための情報及び協力の提供

3 月 3 日 0930、シュワルツコフがクウェート国際空港に到着した。フランクスはシュワルツコフを出迎えた。二人はヘリコプターでサフワンに移動した。サフワンに向かう道中、フランクスはシュワルツコフに第 7 軍団の戦果を説明した。シュワルツコフは、第 7 軍団がサフワン飛行場を確保していなかったことに触れなかった[794]。

シュワルツコフは停戦交渉を演出した。シュワルツコフは第 1 歩兵師団（機械化）長レーム少将に対して、アメリカ軍が保有する最新装備を手入れが行き届いた状態にして、サフワン飛行場内に配列するように命じた。アメリカ軍の装備はサフワン飛行場とサフワン交差点を結ぶ道路沿い及びサフワン飛行場内に配列された。アメリカ軍の装備が並ぶ道路を通ってイラク側の代表団はサフワン飛行場に移動した[795]。

3 月 3 日 1100、停戦交渉が始まった。イラク側の代表は国防省参謀次長アハマド中将と第 3 軍団長マフムード少将だった。多国籍軍からはシュワルツコフとハリド中将が出席した[796]。

捕虜の問題が議題に上がった。イラク側は捕虜の即時返還に応じる用意があることを表明した。イラク側の代表団は、多国籍軍が収容したイラク軍捕虜の人数について質問した。集計中とした上でシュワルツコフは 6 万人以上と答えた。アハマド中将は驚愕した[797]。

また、イラク側の代表団は停戦ラインに対する懸念を表明した。多国籍軍側が提案した停

---

793 Marolda, *Shield and Sword*, pp. 310-311; 松井『湾岸戦争と国際連合』132-136 頁。
794 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』497 頁；クランシー『熱砂の進軍（下）』387-389 頁。
795 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』493 頁；Bourque, *Jayhawk!*, p. 406.
796 シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』499 頁。
797 同上、500-501、503-504 頁。戦後にアメリカ国防総省が作成した議会報告書では最終的なイラク軍捕虜の総数は約 8.6 万人となっている。詳細は Department of Defense, *Conduct of the Persian Gulf War*, p. 294 を参照。

戦ラインはイラク領内に引かれていたため、イラク側の代表団は停戦ラインと国境線との関係について質問した。あわせてイラク側の代表団は、多国籍軍がイラク領内に恒久的に駐留することを拒絶した。シュワルツコフは、停戦ラインは偶発的な軍事衝突の発生を防止するための措置であり、国境線とは無関係であると回答した。また、シュワルツコフは、正式な停戦協定の成立後に多国籍軍がイラク領内に留まることはないと説明した[798]。

両陣営は停戦に合意した。イラク側は、安保理決議 686 が要求した事項及び多国籍軍側の代表団が要求した事項の全て受け入れた。停戦交渉を終えたシュワルツコフはフランクスを慰労した[799]。

正式な停戦協定の成立まで各国の軍の帰還に関する事務、停戦協定の発効までの占領地行政、民生支援や復旧活動などの戦後処理は続いた[800]。4 月 6 日、イラクは安保理決議 687 を受諾した。4 月 11 日、停戦協定が正式に成立した。

---

798 同上、501-502 頁。

799 同上、504-505 頁。しかし、シュワルツコフとフランクスの確執は戦後も続いた。シュワルツコフは、フランクスの大将昇進と TRADOC 司令官就任に反対した。フランクスは回顧録でシュワルツコフを批判した。詳細は Gordon, *The Generals' War*, p. 464; クランシー『熱砂の進軍（下）』470-479 頁を参照。

800 松井『湾岸戦争と国際連合』147-150 頁。